續國譯漢文大成

文學部　六十九

309
65

帙入

始

續國譯漢文大成

文學部第六十九册（第十八帙の一）

陶淵明集

吉岡[illegible]郎氏 寄贈本

309
65

陶淵明集目次

緒言……一—七

卷一　詩四言

停雲四章并序……一
時運四章并序……六
榮木四章并序……一一
贈長沙公四章并序……一五
酬丁柴桑二章……二〇
答龐參軍六章并序……二一
勸農六章……二七
命子十章……三三
歸鳥四章……四〇

卷二　詩五言

形影神三首幷序……四五
形贈影……四五
影答形……四八
神釋……五〇
九日閒居幷序……五三
歸田園居六首……五六
問來使……六五
遊斜川幷序……六六
示周續之祖企謝景夷三郞……七〇
乞食……七二
諸人共游周家墓柏下……七四
怨詩楚調示龐主簿鄧治中……七五
答龐參軍幷序……七八
五月旦作和戴主簿……八一
連雨獨飮……八三
移居二首……八五
和劉柴桑……八七
酬劉柴桑……九〇
和郭主簿二首……九一
於王撫軍座送客……九四
與殷晉安別幷序……九五
贈羊長史幷序……九八
歲暮和張常侍……一〇一
和胡西曹示顧賊曹……一〇四
悲從弟仲德……一〇五

卷三 詩五言

始作鎭軍參軍經曲阿作……一一二
庚子歲五月中從都還阻風於規林……一一四
辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗中……一一八
癸卯歲始春懷古田舍二首……一二〇
癸卯歲十二月中作與從弟敬遠……一二五
乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪……一二七
還舊居……一二九
戊申歲六月中遇火……一三一
乙酉歲九月九日……一三四

卷四 詩五言

庚戌歲九月中於西田穫早稻……一三五
丙辰歲八月中於下潠田舍穫……一三八
飮酒二十首幷序……一四〇
止酒……一六八
述酒……一七〇
責子……一七四
有會而作幷序……一七五
蜡日……一七六
四時……一七九

擬古九首……一八一
雜詩十二首……一九五
詠貧士七首……二一〇
詠二疏……二二一
詠三良……二二三
詠荊軻……二二六
讀山海經十三首……二二八
挽歌詩……二四一
聯句……二四六

卷五

感士不遇賦幷序……二四九
閑情賦幷序……二六二
歸去來兮辭幷序……二七六

卷六

桃花源詩幷記……二八七
晉故西征大將軍長史孟府君傳……二九三
五柳先生傳……三〇一
讀史述九章……三〇三
夷齊……三〇三
箕子……三〇五
管鮑……三〇六
程杵……三〇七
七十二弟子……三〇九
屈賈……三一〇
韓非……三一二
魯二儒……三一三
張長公……三一四

卷七

扇上畫贊……三一七
尚長禽慶贊……三二三
五孝傳贊……三二三
天子孝傳贊……三二三
諸侯孝傳贊……三二七
卿大夫孝傳贊……三三一
士孝傳贊……三三五
庶人孝傳贊……三三九

卷八

與子儼等疏……三四五
祭程氏妹文……三五一
祭從弟敬遠文……三五五
自祭文……三六一

陶淵明集

釋清潭注解

緒言

陶淵明とは如何なる人ぞ、其の誤り傳ふる人は謂ふ、粗慢放逹の人と、詩酒逸遊の人と、崇敬の念を以て之に對せざる者もある、明治十年頃天台座主と爲りし光映師が著はせる『棘樹燕語』と題する本を讀む、其の中に於て淵明を罵倒して完膚無きに至る、其の意は、淵明は眞の憂國の士にあらず、清談者流一輩人と同一なりと斷ず、淵明が彭澤令と爲り乍らツマラン奴とは言へ兎に角上官が巡視に來れば迎へに出る位は禮式として普通と爲す、然るに淵明は傲慢にも、小兒輩に頭を屈するなどは、吾が出來得べき事にあらずと信じ、忽ち其の令尹を辭したるは眞に憂國の念も無く、又斯民を治めんと欲する念も無く、所謂一身の爲め自由を喜び、放逹を娯む者と同一人物と異ならず、是れ我が淵明を喜ばざる理由と論斷す、余を以て之を觀れば、光師は「折レ腰向ニ郷里小兒ニ」と言へる古來傳説のままの語を直信したる結果の議論にして、淵明が一代を通じての批評にあらずと信ず、

折腰すべき者には折腰し、上官たる者には叩頭す、淵明何ぞ此の禮を知らざらんや、而かも事此に出でざるは、折腰するに勝へざる郷里の小兒がキザの態度を以て此に臨みしなればなり、是に於てか令尹の椅子を舍て、歸去來を歌うて去る、淵明の淵明たる性格此に在るなり、五斗米の爲めには本心でない追從輕薄の卑言を吐くのが、俗吏陋夫の狀態であるなり、此の卑言を吐くの勝へ難きに因つて令尹を罷め去る、是れ公明の道なり、公明の道を覆うて以て五斗米に嚙り附くは俗吏陋夫の事なり、淵明の事にはあらざるなり、『棘樹燕語』の論の如き、半文の價値を有せず、淵明集を通覽するに、官遊の時代も、田園の時代も、而して壯年、而して老年、其の志は終始一貫、劉逵榮義に誤られざることを知る、嘗試に淵明其人一代を通じての德を揚げて見ん、慈親の爲と云ふ念の離れざること、曰く故舊に同情篤かりしこと、曰く道を學んで寸陰を惜みしこと、曰く讀書を好めること、曰く自然を愛すること、曰く出處進退の頗る公明正大なること、細かに名目を設くれば尙多多あるべけれども、大略右の六條で其人の尊崇すべき德を具して居ることが知れる、晉室の亡びたるは恭帝の元熙二年、淵明正に五十六、是れより後七年、劉宋の元嘉四年、六十三を以て卒去す、淵明が本自然を貴ぶと云ふ所へ氣が付かなかつた人ならば、余は五十六の時、自刃した事と思ふ、其の人忠義の志は甚だ厚かりしも、自然に背き、天然に違ふ事を爲すを嫌ふ、例へば熱の如き苦痛も、水を以て之を消滅することに勉む、是の故に其の所懐を吐く詩に於て其の志は明白と爲す、

妙語自然、渾然元化のもの多く、慷慨悲憤、露膽張目のものは全く無し、祭酒と爲り、鎭軍參軍と爲り、令尹と爲りたる人、慨して以て慷し、缺壺口を擊つことを知らざる道理なし、然るに其の憂憤の態度を露はさずして恬澹閒靜の生涯を終り、隴畝の民と稱したることなぞは、儒を以て骨とし、莊老を善學して肉とせられしことに由る、余は意ふ、淵明に倘し此の學問無かりせば、其の人憂憤の中に自ら身を傷め、天然を全うせざりしものと、晉宋の間、彼の淸談の徒を見ると、表面は淸談にして、側面は濁慾の人なり、內外表裏透徹して眞に是れ崇高なるは淵明其人を除き他に其人無し、唯六朝間第一の人物なるのみならず、洵に千古に通じての潔士と謂ふ可し、余は既に其人を崇敬すると同時に、其詩に對しても亦一種言ふべからざる崇敬の念を以て讀むものなり、彼に於て淵明が詩を追慕する者の多きは論勿し、我に於て近時豐後の廣瀨淡窗は非常に淵明を崇敬して一祖の名を之に贈りし位なり、淡窗の前後に在つて誰か之を崇敬せしやは余の寡聞未だ之を知らざるなり、由來我邦の詩人は品格の高卑を問ふよりは、物體の巧拙を論ずるの癖あり、極めて惡癖と謂ふ可し、大詩人の出でざるは是に職由するなり、然るに淡窗先生は著眼を巧拙に用ゐずして、高卑に用ゐられたるは其人良に偉と謂ふべし、『遠思樓詩鈔』を善讀する者は必ず余が言の妄ならざるを知るべし、淵明の人と爲り業已に辨了す、是より淵明の詩に就て古今名家の批評頗る多し、其の批評に批評を加へて、初學者の爲め一助と爲さんと欲す、宋の蘇東坡、左の言あり、

吾於二詩人一無レ所レ好、獨好二淵明詩一、淵明作レ詩不レ多、然質而實綺、癯而實腴、自二曹劉鮑謝李杜諸人一、皆莫レ及也、

東坡居士と言へば李太白以來の才人、且大識見を有し、且大學力を有したる人なり、他人に於て容易に之を許す人にあらず、而かも是の如き言あり、抑も人の性情は箇箇別別にして、彼は好むも此は好まず、彼の好む所を以て此に强ふべからず、此の好む所を以て亦彼に强ふべからず、菽を啜り藿を茹ふも、鼈と膾羔を炰にするも、各の其の好む所に從ふのみ、誰か此の間に取捨するを得ん、然りと雖も詩文の道に就ての所好は飲食の所好とは大に異る、其の好むと言ふに至るまでは容易のことにあらず、理想も卑く、學問も薄く、識見も無き人は、洵にツマラヌ物を好む、之に反し、學問も博く、識見も大に、理想も高き人は、其の好む所千萬世に渉りて略同一の門に歸宿するが如し、乃ち謂ふ、自分の性情と云ふ先天的のものも、達人の性情を見習うて行けば、自然と高潔なる性情と化するなり、習が性と變ずることは、聖人の敎を待たずして明白に之を知るなり、是の故に東坡の如き達人が好む所の淵明其の人の詩は、佛徒が經典を崇敬する如く思はざるべからず、以下東坡の語に就て批評すべし、作詩不多は、淵明集に詩の少なきことを言ふ、淵明集は古來數本あり、梁の昭明太子編する所は七卷、北齊の陽休之編する所は十卷、『隋書經籍志』は九卷、『唐書藝文志』は五卷、而して下りて李公煥本十卷、何孟春本四卷、汲古閣本四卷、焦竑本四卷、張溥漢魏百三名家本一卷、張爾公本四卷、毛晉綠君亭本詩一卷、文一卷、雜一卷、陶文毅本十卷、近來上海本には硃批本四卷、蘇東坡自寫刻本三本、要するに卷數は異同あるも、詩文に於ては諸本大差なし、全卷にて二百五十首位とすれば、之を千篇以上の作家に比するときは決して多作と言ふべからず、質而實綺、質は文飾せず、又塗澤せず、所謂性情の儘のこと、此の性情の儘を敍べるときは、大抵の人は詩としての形を爲さず、日常の挨拶と爲る、日常の挨拶とすれば、目に丁字無き舍丁馬夫と何ぞ擇ばん、鬼神を感動するは以ての外に屬す、然るに淵明の質のまま吐き出して實に綺、蠶が吐き出す糸、悉く綺ならざるは莫きに譬ふ、癯而實腴、癯は枯瘦して極めて味の無きもの、其の味の無き枯瘦せるものが、淵明の手から出づれば、實に腴で、即ち膏肥「ウルホヒ」の物と成る、自曹劉鮑謝李杜諸人、曹は魏の曹子建、劉は東晉の劉琨、鮑は宋の鮑照、謝は宋の謝靈運、李は太白、杜は子美、是の六子は三國より唐に至る間の支那文學史を飾る有數の大家なり、而かも東坡を以て之を觀れば、質にして實に綺、癯にして實に腴の評を下すこと能はず、皆莫及也、此の四字は如何にも大膽の如くなるが、此は是れ東坡が本心より出づるなり、質の勝る者は由來綺ならず、綺の勝る者は由來質ならず、癯なる者は腴ならず、腴なる者は癯ならず、曹劉鮑謝の四子は即ち是れなり、李杜の二子は千古の詩聖、其の特種の技倆は淵明と比すべきにあらざるも、癯而實腴の四字は淵明に讓らざるを得ず、東坡は又左の言あり、

所レ貴レ於二枯澹一者、謂二外枯而中膏、似レ澹而實美一、淵明子厚之流是也、若中邊皆枯、亦何足レ道、
佛言譬如レ食レ蜜、中邊皆甜、人食二五味一、知二其甘苦一皆是能、分二別其中邊一者、百無レ一也、
此の淵明に對する評語も、前評と文字に相違は有ると雖も、其の意味は全く同一なり、外枯而中膏、似澹而實美、是れ何ぞ質而實綺、癯而實腴と異ならん、枯澹と云ふも、枯木竹石の如き血の無きものは詩にあらざるなり、枯に過ぎ、澹に過ぎるからなり、之に反し、膏中の膏、美中の美は人をして飽き易からしむるもの、所謂文字其の物が調和せざればなり、此の枯中に膏を求め、澹中に美を求めて、能く得らるるものは、淵明實に千古の一人なり、唐の柳子厚は、淵明を學んで稍や其の道に近づきし人なり、淵明子厚と竝稱したるは、師弟を同列に置きしなり、佛言譬如食蜜、中邊皆甜、佛言とは『四十二章經』に說ける言なり、所謂調和法を說きしもの、蜜は中も邊も共に甜し、人食五味、知其甘苦皆是能、五味の甘であるか、苦であるかは、誰人も能く分判するが、分列中邊者、百無一也、此の中邊は食物の方へ係けずして、詩の方へ係けて見よ、澹中の澹、枯中の枯は、誰人も知ると雖も、枯中の膏、澹中の腴を知るは、百人中一人も之を知る者は無し、東坡先生が自から百人を超絕して居ることを示すものなり、自から和陶詩を作りて以て追慕の意を致す、後人何ぞ思を此に致さざるを得んや、倚宋元明清四朝の間諸大家の批評は多多あり、其の觀察の方面も種種に渉ると雖も、茲に一一揭ぐるの煩に堪へず、之を要するに淵明の詩は左に記する二字の評語にて足る、

平澹　天眞　自然　蕭散　深粹　高古　閒逸　精密　忠愛　道氣　野意

六朝間の詩人、大抵は剪紅摘翠、東塗西抹の徒のみ、然るに淵明一人は其の文字塗澤の非なるを知つて、之を眞性情より發し、而して取る所の材は『毛詩』『論語』『尙書』等の正經に據つて、傍門邪徑は全く入らず、洵に卓絕の才、特異の人と謂ふ可し、余は是より直ちに其の詩の講に及ばん、但し一言述べて置くことは、注本に就てなり、余の寡聞なる、淵明集に就て淸朝已前に注本ありしを見ず、黃文煥の『陶詩析義』吳瞻泰の『陶詩彙注』は多く流行せず、公が後裔と稱する淸の道光年に陶澍文毅公が『靖節先生集』十卷は多く流行すと雖も、文字の同異、作詩の年次のみに力を勞し、本源の詩注に於ては全く暗黑なり、今時石城顧皥が『陶集發微』、是より先き嘉慶年溫謙山が『陶詩彙評』、是の二書も陶文毅と難兄難弟の間に在り、要するに專門の學者が參攷に供するのみ、初學者に於ては何等の功も無きもの多し、考證學の弊が詩に及びしもの惜むべしと雖も、時代思潮亦止むを得ずと知る可し、

陶淵明集　巻一

詩四言

停雲　四章　幷序

停雲思親友也。罇湛新醪。園列初榮。願言不從。歎息彌襟。

停雲は親友を思ふなり、罇に新醪を湛し、園に初榮を列ね、願うて言に從はずんば、歎息彌襟、

停雲　四章　幷に序

靄靄停雲。濛濛時雨。　靄靄たる停雲、濛濛たる時雨、

八表同昏。平路伊阻。　八表同じく昏く、平路伊れ阻し、

靜寄東軒。春醪獨撫。　靜かに東軒に寄りて、春醪獨撫す、

良朋悠邈。搔首延佇。　良朋は悠邈、首を搔いて延佇す、

【注解】四言は詩の根本なり、毛詩一部三百五篇大抵四言なり、魏の曹操其の子子建などは四言に於て頗る巧妙と爲す、趙宋の劉後村は、淵明の「停雲」「榮木」等の四言は殆んど建安（漢の年號なれども詩家は泛稱して曹操時代を指す）を突過すと評し、淸の沈

許顗は、四言詩は甚だ造り難し、三百篇と太肖も不可、太離も不可、「停雲」「時運」等の篇は、清腴簡遠、別に一格を成す、と評せり、曹操が赤壁詩の如きは、氣格は淵明の無き所、而かも簡遠は曹操の無き所、梟雄と高士の異る點、一目瞭然たるなり、停雲の題意は、周詩六義（風、賦、比、興、雅、頌）の中で賦と興との兼義なり、直ちに親友を思ふことを賦して、興を新醪や飛鳥に託るなり、何孟春は停の字を解して「凝つて散ぜざるの意」と、即ち雲の飛散せずに定住して居る貌を云ふ、罇は酒を盛る器、缶は巳に酒を盛る器、尊も酒を盛る器、二字を結合して一字と爲す、然れども一字獨用するも亦可、後世、尊に木扁を付け樽と云ふ、湛は李公煥云ふ「湛讀んで沈と曰ふ」「タン」の音卽ち「タタフ」の和訓でなく「ヒタス」の訓を取る、『毛詩』には和樂且湛と讀ましむ、新醪は字書に汁滓酒とあれば卽ち「カスザケ」なり、園列は園中に林列するなり、初榮は新醪と對字を爲す、初春の榮木なり、願言は詩經の文字、不從は是の園中に酒を酌み從遊しようではないかと云ふ意味、歎息は嘆息と同義、彌襟は余は獨斷なれども二字にて「ナガシ」と訓む、彌の字は拘泥する必要は無い、久之と大底同意義、彌は長と久と大と徧と甚と竟と滿との七義を有す、以上停雲詩の序引とす、靄靄は雲の盛なる形容、濛濛は雨の微なる形容、豪雨の反對、『詩經』に零雨其濛とある、時雨『書經注』に應時之雨、使㆓草木發生㆒也とある、八表は四方と四維、天地も同じ、同昏、天地皆昏く明處は無し、昏は唐の太宗の名を避けて以來の字、從ふ可らず、民と日の結合なり、平路は平平たる坦路、伊阻は『毛詩』の字面、伊は維も之も同義、阻は險阻、又阻隔と通用して、步行の難義を云ふ、『毛詩』國風に自詒㆓伊阻㆒とあり、以上四句十六字を清の査初白は「平世に當る者は、此の語の悲を知らず」と評せり、晉の社稷は、十一主恭帝に至り、元熙二年を以て劉裕の宋と爲る、淵明が忠義の志も施すに所無く、之を文字に發し、其の鬱を消したるものなり、元の劉履曰く、此の篇は東晉の朝に仕へし淵明の親友が、宋に再事する者あり、乃ち淵明、此の詩を贈り、之を規諷したるなり、靜寄、淵明自身が、靜寂として東軒に寄倚する、春醪は卽ち新醪、獨撫は面白き成語なり、醪は飲むべき物、撫すべき物にあらず、閒字に當てる爲め愛撫の意を以て用ふ、良朋は志の合ふ友人、悠邈は悠悠邈邈、面語するを得ず、搔首は『毛詩』の字面、仰望の貌と注して、良朋の處は悠邈である、面會は不可能ながら、セメテ其の方角を望むの願意を爲す、延佇は躊躇と同じく、行いて進まざる貌と注す、『毛詩』國風に靜女其姝、俟㆓我於城隅㆒、愛而不㆑見、搔㆑首踟躕とある、淵明が此の詩の粉本なり、『毛詩』北風の章は天下の危亂を憫して作る、北風は卽ち惡風、靜女は卽ち淫女、此の間に於て、困に處するは忠臣、亂を去るは智士なり、今此の詩、靄靄濛濛等の字面を用つて、天下の危亂を詠み、良朋等の文字を用つて、毛詩の靜女に當て、其の人の道を守らざること、淫奔の程度を巧妙に諷喩したるものなり、二讀三讀、味の益す深きを覺ゆ、仄韻上聲、六語と七麌とは通韻とす、

停雲靄靄。時雨濛濛。　停雲靄靄たり、時雨濛濛たり、

八表同昏。平陸成㆑江。　八表同じく昏く、平陸江と成る、

有㆑酒有㆑酒。閒飲㆓東窻㆒。　酒あり酒あり、閒に東窻に飲む、

願言懷㆑人。舟車靡㆑從。　願うて言に人を懷ふ、舟車從ふ靡し、

【注解】一二の句は前首を倒用したるのみ、平陸成江、時雨の爲め平平たる坦陸も江と變成する、世態の變じ易きを言ふ、有酒有酒は、『毛詩』の有瞽有瞽、又は有客有客、又は有駜有駜の句法、同語を層用するは意味を强くする、閒飲は俗に「クツロイデノム」の意義、東窻は春窻と同じ、願言は「オモウテココニ」と讀む、懷人は所謂親友を懷ふ、『毛詩』邶風篇に願言則懷とある、舟車、江の舟も、陸の車も、靡從は余は「ヨシナシ」と訓む、「シタガフナシ」と訓まぬ、從は由と同義、唯懷ふのみにして行くに由なし、靡は元來散と滅との義を帶ぶ、滅の意義より强ひて無と訓ましたるなり、劉履は、舟車靡從は卽ち路阻の意なりと言ふ、今韻一東二冬三江は古詩は通韻なり、

東園之樹。枝條再榮。
競用新好。以招余情。
人亦有言。日月于征。
安得促席。說彼平生。

東園の樹、枝條再榮し、
競うて新好を用ひ、以て余が情を招く、
人亦言へるあり、日月于に征く、
安んぞ席を促し、彼の平生を說くを得ん、

【注解】東園之樹は表面字の如し、裏面は東晉之人と云ふことなり、卽ち六義の中の比體なり、枝條、表面は枝條なり、裏面は門地又は官位なり、再榮は載榮に作る本あり、再榮を可とす、東晉の天下も其の相國劉裕が爲めに奪はれて、已に晉の天下にあらず、劉宋の天下なり、晉の安帝恭帝共に名君にあらざりしを以て、遂に其の臣桓玄や寄奴の爲め窘められ、恭帝の如きは劉裕の爲めに弑せられ、桓玄之時、晉氏巳無と自書せる悲慘なる天子でありしなり、晉の元熙の年號も遂に亡び、宋の永初の年號が生る、此の舊年號の恩を擲りし者が、新年號の下に蝟集して生活する事と爲つた、此の事を再榮と稱したるなり、淵明其の人の高潔の心事より、俊傑鼫鼠（鼠の異名）輩を見れば慷慨深かりしならん、競用は鼫鼠輩の一にして足らざるを示す、新好は舊面目を捨うて新面目を好しとする、正面は新らしき奇麗なる花を好愛すと云ふにあれど、側面は競事新朝と云ふ事を云ふ、大義名分を知る者は悲歌慷慨せざるべけんや、以招は鼫鼠輩が淵明の心事を知らずして、早く來つて樹の新好を見よ、速に來つて國の新朝に仕へよと招くなり、余情は「余ヲ招ク」で足りてゐるが、情の顚倒あるが爲め一層委致を存す、招を一本、怡に作る、招を以て可とす、人亦有言は『毛詩』大雅蕩之什篇の句なり、淵明は『毛詩』を其の儘用ふる語多し、日月于征、歲月の堂堂と征き去るを云ふ、『毛詩』に人亦有言、靡哲不愚を擧んで、人も亦云ふ、日月の征くは速かなり、有言の二字は下句へ係ける、安得は何得と同義、「イヅクンゾエン」で俗語の「ドウシテデキヨウ」と否定する意義なり、淵明自身が云ふなり、促席は左思が蜀都賦に合樽促席とあるに本づく、一席に會同しての意、說彼平生は、『毛詩』の酌彼金罍の句法、其の意味は種種の解釋が就くが、余は、淵明が意に、此の如く時運が移り、新朝に赴く人共とは、到底思想が一致せざるを以て、與に語る能はず、且縱令ひ話した所で、晉室の恢復は到底出來得べくもあらず、其れよりは默して居るが可なりとなり、蓋し此の事は親友なるを以て「詩以テ子ニ示ス」となり、平生の文字は知己間より外用ひざるなり、此の詩は今韻八庚とす、

翩翩飛鳥。息我庭柯。
斂翮閒止。好聲相和。
豈無他人。念子實多。
願言不獲。抱恨如何。

翩翩たる飛鳥、我が庭柯に息ふ、
翮を斂めて閒に止る、好聲相和す、
豈他人無けん、子を念ふ實に多し、
願うて言に獲ず、恨を抱く如何、

【注解】翩翩は鳥の飛ぶ貌、『毛詩』に翩翩者鵻と、庭は中庭、柯は柯、樹は落葉樹、喬木にして暖地に產す、斂は「ヲサム」と訓む、斂の字とは違ふ、翮は字音「カク」、字訓は「ハネ」又は「ツバサ」なり、閒止は鳥が何樹に息止なり、好聲相和、二羽以上互に好聲を發して相和するなり、豈無他人は、『毛詩』國風狡童章に、子不我思、豈無他人の語を用ふ、人の我と和する者無きにはあらず、而かも念子實多、子卽ち親友を念ふこと切なるは實に多きなり、『毛詩』に忘我實多の句法とす、不獲は不可能の意味、抱恨は鳥は好聲相和す、和樂此に存す、我は親友と相和する能はず、恨を抱きて但如何、「ドウショウゾ」と思ふのみなり、興を以て主とし、賦を賓と爲したる詩とす、今回五歌の韻、以上停雲四首終る、

【題義】停雲は靖節自ら謂ふ「思親友」と、乃ち雲を當面に賦して、而して內面に友と云ふものに興するなり。

【大意】停雲の文字は淵明の獨創に係る、故に自から其の意を解して思親友と云ふ、春雲の靄靄として四方より集まり來り、一處に停まる其の親しき狀を看れば、宛かも志を同じうする親友が團欒して相樂む樣と彷彿たり、乃ち雲を賦して以て我が興を遣るなり、而かも獨り雲のみ春を表するならんや、雨も亦春、樹も亦春、鳥も亦春、非情も欣欣、有情も欣欣、人豈欣欣たらざるを得ん、而かも我は其の親友と、此に團欒の樂みを同じうする能はず、唯同じうする能はざるのみならず、外出して遊ぶことも能はず、東軒の下、聊か春醪を飲み、時に雲を看、雨を看、樹に對して鳥を聞き、以て自から慰むるのみ、

時運　四章　并序

時運　四章并に序

時運游暮春也。春服既成。景物斯和。偶景獨遊。欣慨交心。

時運、暮春に游ぶなり、春服既に成り、景物斯れ和す、景を偶べて獨遊し、欣慨心に交はる、

邁邁時運。穆穆良朝。

邁邁たる時運、穆穆たる良朝、

襲我春服。薄言東郊。

我が春服を襲け、薄く言に東郊、

山滌餘靄。宇曖微霄。

山は餘靄を滌ひ、宇は微霄曖たり、

有風自南。翼彼新苗。

風あり南よりし、彼の新苗を翼く、

【注解】時運は詩題、游暮春以下二十字は小序、時運は其の意游暮春なりと淵明自から注す、春服既成は『論語』(先進篇)に暮春者春服既成とあり、春の衣服が整頓する、景物斯和、好期なれば天地間の有情非情盡な和適する、偶景、偶は竝なり、景は影なり、獨遊に伴ふ者は影のみ、欣慨は欣喜と感慨、交心、欣喜と感慨が交代に起る、邁邁は不顧なりと注す、『毛詩』小雅都人士什に覩レ我邁邁とあり、時運は人事に關せず、顧みずして逝くとなり、穆穆は美と厚と和と淸との義を含む、此の良朝卽ち朝の景色は和美なり、襲は著るなり、我春服は單給の衣服、薄言は「餘事ハ舍テ假キ、マアシバラク」の氣味、『毛詩』周南に薄言有之の句法、東郊は「ハルノチカ」、邑外を郊と曰ふ、東郊に閑遊する、山滌、山色を晩天に見ると山は自然に洗滌せる美觀を呈す、餘靄は雲の集まる貌、宇は「ソラ」、曖は「クモル」、微は「スコシ」、霄は「ソラ」、一字づつ別別に解すれば意味徹底せず、焦竑本には餘靄微霄に作る、是を可とす、陶澍曰く、餘靄微霄に作るときは、山滌の句に重複す、故に不可なりと、余謂ふ文字重複しても、意味は重複せず、焦竑に從ふべし、有風自南、南風は初夏の風、『毛詩』邶風篇に凱風自レ南、吹ニ彼棘心一の句法、翼は王棠曰く新苗、風に因つて舞ひ、羽翼の狀の若し、肖物に工なり、今韻下平聲二蕭、

洋洋平津。乃漱乃濯。

洋洋たる平津、乃ち漱ぎ乃ち濯ふ、

邈邈遐景。載欣載矚。

邈邈たる遐景、載ち欣び載ち矚る、

人亦有言。稱心易足。

人亦言へるあり、心に稱へば足り易し、

揮茲一觴。陶然自樂。　茲の一觴を揮ひ、陶然自ら樂む、

【注解】洋洋は平津の廣闊なる形容、乃漱は水澄むが故に口を漱ぐ、乃濯は水清きが故に體を濯ふ、邈邈は『說文』に遠邈とあり、『正韻』に渺とあり、際限無く何處までもの氣味、遐景は、眼界に映ずる遠望の景色、載欣は心の悅、載矚は目の樂、矚は『類篇』に視之甚也とあり、熟視するなり、人亦有言は既に掲ぜり、稱心は我が心に稱ふ、易足は滿足なり、揮茲一觴、觴は酒卮の總名、酒を少量に飮んで其の滿足の心を遣る、陶然は和樂の貌、『楊子方言』に陶養也暢也と、ノビノビする形容、自樂は必ずしも朋を求めず、所謂自序の偶景獨遊、欣慨交心を云ふ、今韻入聲三覺、

延目中流。悠想清沂。　目を中流に延め、清沂を悠想す、

童冠齊業。閒詠以歸。　童冠齊業、閒詠以て歸る、

我愛其靜。寤寐交揮。　我其の靜かなるを愛す、寤寐に交揮ふ、

但恨殊世。邈不可追。　但恨む世を殊にし、邈として追ふ可らざるを、

【注解】延目は兩目にて進め見る、中流は前の平津と文字を對す、悠想は「ハルカニオモフ」なり、淵明時代より孔子時代を想へばなり、悠悠に作る本は不可、清沂は沂水、泰山より出でて、西流して曲阜を經、泗水と合して洞水に入る、童冠は童子と冠者、『論語先進篇』に冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸とあり、齊業は童も冠も齊しく浴し、同じく詠ずるを以て其の業を齊しくするを云ふ、閒咏以歸、沂水に浴し以て詠歸する、(『地志』に沂に温泉あるなり、)我は淵明、愛其靜、閒詠する童冠の態度の安靜、道に得る所あるが如きを愛すとなり、宋の湯文清曰く、靜之爲言、謂其無外慕也、亦庶乎知浴沂者之心矣と、大に當る、寤寐、寤は覺、寐は臥なり、寐ても寤きても他の善事を見れば、我が心は揮はざるを得ないとなり、交の字は二物の中間に用ふる文字、但恨殊世、浴沂の事は追慕に堪へずと雖も、周と晉とは世代を殊隔する、乃ち恨む所以、邈不可追、周青輪評して曰く、動處に靜を得るは、天に全きなりと、今韻四支と五微を通用す、

斯晨斯夕。言息其廬。　斯晨斯夕、言に其の廬に息ふ、

花藥分列。林竹翳如。　花藥分列し、林竹翳如たり、

清琴橫牀。濁酒半壺。　清琴牀に橫へ、濁酒半壺、

黃唐莫逮。慨獨在余。　黃唐逮ぶ莫し、慨獨余に在り、

【注解】晨と夕は語主、斯の字は語助、言は『詩毛傳』に我也と注し、朱子は辭也と注す、是の辭即ち「ココニ」と訓んで、「ワレ」と訓む者少し、古詩としての使用法、近體には多く用ひず、唐絕には稀に見る、言息は「ココニイコフ」、乃ち淵明先生悠然として自身の廬屋に安息する、花は花欄、藥は藥欄、園中に整頓分列する、樹林や竹叢も、一隅に翳如として繁茂する、翳は蔽又は蓋なり、清琴橫牀、屋內の耳を樂む具、濁酒半壺、口を樂む具、清と濁と字の對を取る、黃唐は黃帝と堯帝なり、黃帝は有熊氏、堯帝は陶唐氏、昭代の天子として、廣土人の理想を離れざる帝王なり、莫逮は無及と同じ、希望するも不能の意、慨獨は、上世は慕ふも何の詮無し、然りと雖も欲望としては上代の如き治世に處したいと思うて、獨自慷慨する、在余は他人の理想ではない、我の理想であると斷ずるなり、明の陳祚明評して曰く、欣在春華、慨因代變、黃農之想、皆寄西山、命意獨深、非僅閒適と、平凡の評、淵明知

るあらば大笑すべし、非常閑適の詩にあらざることは、字面の上で顯然たり、自序の欣慨交心の四字を一貫す、今題六魚、

【題義】時運は四時、初運を謂ふ、游暮春の題にて可きを、時運と題する所以は、『詩經』に時邁の語あれば、それに倣ふものなり、四言詩は『詩經』に近きを求むればなり、

【大意】時運の文字は淵明の獨創にはあらず、東漢の班彪が「賦」に諒時運之所爲兮とあるの文字を借りて以て暮春卽ち三月の狀を賦す、元來時運の意味は哀傷に屬して、懽樂に屬するものにあらず、是を以て春日は良に遊ぶべきものなりと雖も、國家卽ち晉の天下は今や傾覆に逼る、四時の運數として冬去つて春來る、此れ欣懽すべし、而かも國家の運數としては、晉衰へて宋將に興らんとす、此れ感慨すべし、一心にして欣と慨と交起る、豈堪ふ可けんや、是に於て既に成る所の春服を襲け、或は東郊に、或は平津に、優游して以て其の鬱を散せんと欲す、南風は拂拂として新苗を吹き、碧水は洋洋として平津に流れ、目は樂むべく、衣は濯ふべく、但世は孔子を去ること悠邈、浴沂の古の如くならざるを恨む、乃ち游を畢つて家に還り、我廬に於て晨夕の樂を求むれば、花藥欄も、樹竹林も、青青葱葱として、自然の時運を表現して居り、床には淸琴あり、壺には濁酒あり、黃唐は追ふも詮無し、唯我と我と欣慨すべきのみ、

榮木　四章　幷序

榮木　四章　幷に序

榮木念將老也。日月推遷。已復九夏。總角聞道。白首無成。

榮木は將に老いんとするを念ふなり、日月推し遷り、已に復九夏、總角に道を聞き、白首に成る無し、

采采榮木。結根于茲。　采采たる榮木、根を茲に結ぶ、

晨耀其華。夕已喪之。　晨に其の華を耀かすも、夕に已に之を喪ふ、

人生若寄。顦顇有時。　人生は寄するが若し、顦顇時あり、

靜言孔念。中心悵而。　靜かに言に孔念し、中心悵而たり、

【注解】榮木に寄託して道を學ぶこと能はざるを嘆息しての作、九夏は四月十六日より七月十五日に至る間を云ふ、九十日間なればなり、春秋冬皆同じ、蓋し此の詩は仲夏の作ならんと想ふ、總角は十五六位までの者、頭髮を束ねて角の如き狀を爲すに由る、道を聞くは早けれど、道を成すは遲きを云ふ『論語』の遺意、采采は『毛詩』周南章に采采芣苢とある、但し「トリトル」なれば動詞とす、今の詩は榮木を形容して、其の新葉の美なるを云ふ、故に形容詞、動詞にあらず、結根于茲、榮木が根を此地に結ぶ、他處にあらざるを謂ふ、晨耀は晨煇が正なり、夕已喪之、晨朝に色を煇かしたる榮木も夕陽には已に色を喪ふ、人生若寄は、久しからざる寓

昧、老萊子が言なり、天地の間に暫時客寓するのみ、顦顇は憔悴と同じ、『玉篇』に憂ふる貌とある、『正韻』に瘦する也とあり、所謂白首老衰を憂ふる貌なり、靜言は他念を生ぜざるの意、孔念は『毛詩』の語、「ハナハダオモフ」の義、中心は心中、悵而「イタム」悵は悼と同義、『毛詩』に中心是悼とあり、今韻四支、

采采榮木、于茲托根。　采采たる榮木、茲に根を托す、

繁華朝起、慨暮不存。　繁華朝起り、慨暮存せず、

貞脆由人、禍福無門。　貞脆人に由る、禍福は門無し、

匪道曷依、匪善奚敦。　道に匪ずんば曷ぞ依らん、善に匪ずんば奚ぞ敦からん、

【注解】一二の句は前首を倒用したるのみ、『毛詩』の句法を巧妙に運用したるもの、繁華の二句は曇華の二句と同義、貞脆は貞と脆との二種、貞は正、即ち斷じ易からざる者、脆は弱、即ち斷じ易き者、由人、木樹の貞脆は本來の質、如何とも爲す能はず、人の貞脆は、道を學ぶと學ばざるとに因つて變ずるなり、貞人の門は福門、脆人の門は禍門、匪道曷依、道は正道、吾之に依る、匪善奚敦、善は正善、吾之を行ふ、湯東磵は此の詩を許して『楚辭』を引く、然りと雖も淵明が此の詩は必ずしも楚辭の語を學びしものにあらざるなり、今韻十三元、

嗟予小子、稟茲固陋。　嗟予小子、茲の固陋を稟く、

徂年既流、業不增舊。　徂年既に流る、業舊に增さず、

志彼不舍、安此日富。　彼に志して舍てずんば、此に安んじて日に富む、

我之懷矣、怛焉內疚。　我の懷ひ、怛焉として內に疚む、

【注解】嗟予は『毛詩』の於乎小子を學ぶ、小子は卑下する辭、淵明自分を指す、稟茲固陋は、ヤクザの性質を以て生れ來たとなり、固陋は『論語』に出づ、頑固寡陋と連續して、自分の愚態を强ひて保護し、學者の言に從はざる無知の徒を指す、徂年既流、年華流水、徂いて匆匆たるを云ふ、業不增舊、學業は年華と反對、遲遲として進まざるを云ふ、志彼不舍、彼は學其のものを指す、學業に志を寄せて舍てざるに於てはの意、『荀子』の功在不舍の語より案出せる句、安此日富『老子』の知足富也の意、『毛詩』に一醉日富の語あれども、此には適切にあらず、湯東磵の說に、志彼二句八字は、自ら其の廢學して飲を樂むを咎むと、蔣薰の說に、淵明決して廢學を咎めしにはあらず、富有は大業、日新は盛德、我が懷は茲にあるも、內に疚しき無きにあらず、此れ固陋を嘆ずる所以と、陶澍曰く、淵明の心、道を窒めども未だ見ず、咎を沈酣に歸す、剋實の心、固より當に是の如くなるべしと、今謂ふ、湯と陶とは淵明の意を得、蔣薰は淵明の意を得ず、我之懷矣は、自分の中情を云ふ、怛焉は悲嘆、內疚は中心自から懼れ、自から驚く貌、『論語』に司馬牛問君子、子曰、君子不憂不懼、曰不憂不懼、斯謂之君子乎、子曰、內省不疚、夫何憂何懼と、小子固陋と卑下して出で、最後に內疚と結ぶ、句法字法見るべし、去聲二十六宥の韻、

先師遺訓、余豈云墜。　先師の遺訓、余豈云に墜さんや、

四十無聞、斯不足畏。　四十聞ゆる無きは、斯れ畏るるに足らず、

脂我名車、策我名驥。　我が名車に脂さし、我が名驥に策たん、

千里雖レ遙。孰敢不レ至。　千里遙なりと雖も、孰か敢て至らざらん、

【注解】先師は孔子、遺訓は『論語』を指す、余豈云墜は、淵明自身が儒道を持して、卓然たることを示す、四十無聞は、英雄でも學者でも、四十に及んで猶ほ人に知られざる者は、斯不足畏、丈夫として言ふに足らず、『論語子罕篇』に、子曰、後生可レ畏、焉知ニ來者之不一レ如レ今也、四十五十而無レ聞焉、斯亦不レ足レ畏也已、朱子曰く、孔子の言は、後生年富み力彊く、以て學を積み而して待つあるに足る、其の勢畏る可きなりと、晉の安帝は、卽ち晉最後の王とす、其の元興三年に、淵明は恰かも年四十、種種國の爲め憂慮したるなり、而かも安帝は幼少の時、寒暑饑飽も辨ぜざる位の人、到當晉室は亡ぶに至る、明の楊升菴は、饑飽炎寒郡自知、登揚倪備任ニ提攜一と咏じて居る、脂我名車、裏面は我が精神に脂さしての意、策我名驥、車は「アブラ」、驥は「ムチ」、共に是れ奔走する力のあるもの、千里雖遙、孰敢不至、我に於て志の堅固なる者は、千里も萬里も到達すべし、金城も鐵壁も破壞すべし、淵明此の年軍事に參すと雖も、良圖就らず、是に於て明年歸休す、去摩四實、

【題義】榮木は靖節自ら謂ふ、念レ將レ老也と、榮の反は衰なり、榮の樂むべきを知り、亦衰の慨すべきを念ふ、晉室の榮、已に衰に就くを痛むなり、

【大意】榮木は、南風夏日に向つて其の葉青青とするに反し、我は漸く衰老、日に白髮蓬蓬たるに至らんとする、其の反對なる物を提げ來りて以て我が想を遣るなり、采采たる榮木は、正に南風の薰に逢うて得意に其の美を誇るものの如し、而かも晨朝に其の華を耀かすと雖も、夕日には已に其の美を喪ふに至る、人の少壯時代は、榮木の其の華を耀かす時代なり、已にして衰老、是れ榮木の凋喪する時代なり、而かも艸木は年年一度其の榮を表して其の壽や久し、之に反し、人生は殆んど寄寓と異ならずい榮華は短く頽頽は速かなり、是の故に、其の少壯時代に、學業に志し、道德を修するを要す、我の如きは、少壯より學に志すと雖も、天分固陋にして、業は容易に進まず、進まずと雖も、先師卽ち孔夫子の四十にして聞ゆること無き者は畏るるに足らずと述べられたる遺訓は、造次にも忘れず、是の故に、名車に脂を增し、名驥に策を加へて、決して怠懈せざる可し、聖人と我と千里を隔つるの遠しと雖も、遂には其の蹤に逐ひ造らんとなり、

贈ニ長沙公一　四章并序　　長沙公に贈る　四章并に序

長沙公。於ニ余爲レ族。祖同出ニ大司馬。昭穆既遠已爲ニ路人。經ニ過潯陽。臨レ別贈レ此。

長沙公は、余に於て族と爲す、祖は同じく大司馬より出で、昭穆既に遠く、已に路人と爲る、潯陽を經過し、別れに臨んで此を贈る、

同レ源分レ流。人易世疎。　源を同じうするも流を分つ、人易り世疎なり、

慨然寤歎。念ニ茲厥初一。　慨然寤めて歎ず、茲の厥の初を念ふ、

禮服遂悠。歲月眇徂。　禮服遂に悠たり、歲月眇徂、
感彼行路。眷然躊躇。　彼の行路、眷然として躊躇するを感ず、

【注解】長沙公に於て異說あり、そは序を「於余爲族、祖同出大司馬」と讀む人と、「於余爲族、祖同出大司馬」と讀むに於て、議論に異同を生ず、而して大司馬を漢の高祖の時の陶舍と爲す說と、晉の陶侃と爲す說との相違も起る、陶舍を否認する陶澍の說は曰く、漢の高祖の世、右司馬の官は有る、大司馬の官は無し、大司馬は武帝の元狩四年始めて置きしものなり、淸の史家閻若璩曰ふ、先生（淵明）は愍侯を祖とす、而して祖公に出づるにあらず、此の詩の大司馬は右司馬の誤りならんと、愍侯は陶舍、祖公は陶侃なり、されど淵明が「命子」に天集有漢、眷予愍侯とある語に依つて之を案ずれば、此の陶舍は確かに其の族祖たること疑ひ無し、故に漢代に於ては陶舍、晉代に於ては陶侃、是にて分明ならずや、但此の題に同出大司馬を中晉の陶侃と見るか、漢の陶舍と見るかとの二說の是非如何、歷史が分明に陶舍は右司馬にて、大司馬にあらずとせば、閻若璩の如く大は右の誤謬と見るが或は當らんか、況んや淵明集の文字異同あること甚しきに於てをや、陶澍の陶侃是認說は、淵明と時代が接近して、昭穆旣遠の語が頗る動かず、余の閻說を取る所以、昭穆旣遠は『禮記』の語、夫祭有昭穆、昭穆者、所以別父子遠近、長幼親疏之序而無亂也と、又三昭、三穆、二昭、二穆の說あり、今は要無し、要するに祖先とは世が遠く、今日では一方卽ち長沙公は高位の人、我は布衣の人と相隔てて來たとなり、已爲路人、路人は他人、親戚では無く、全くの他人と爲る、潯陽は現今江西省九江府、卽ち晉の潯陽郡、此の潯陽郡の柴桑里は淵明が生地とす、長沙公は今此の地を經過せられたるに因つて、淵明が此の詩を贈る、同源分流、水の本源と支流との例を以て人の本家と分家とに譬ふ、人易世疎、易は變なり、疎は遠なり、慨然寤歎、寤は覺なり、寤卽ち「ネゴト」の反對、『毛詩』曹風章に愾我寤嘆とあり、念玆厥初、今は分流ではあるが、厥初は同源であると云ふことを念ふ、禮服遂悠、昭穆巳に遠ければ、祖先の祭祀も十分に出來ないと云ふ意味、歲月眇徂、眇は本來の字義は微なり、一日小、卽ち和訓の「スガメ」は字の形體より來りし後世の俗說、此の詩は盡の意、徂は征、感彼行路、感ずる者は淵明、彼行路は長沙公、眷然躊躇、眷然は俗語に後髮を引かるる樣な感、長沙公が淵明と別れて行くを惜む樣、躊躇は躊躇なり、宋人の評に、字少意多、尤可諷詠とあり、宋人でも元人でも明人でも、淵明の詩は一讀の間には意味解せず、自他の區別も分明ならず、此の結句は、「彼の行路眷然躊躇するを感ず」と、二句一讀の法とす、今韻六魚、

於穆令族。允構斯堂。　於穆たり令族、允に斯堂を構ふ、
諧氣冬暄。映懷圭璋。　氣に諧ふ冬暄、懷に映る圭璋、
爰采春華。載警秋霜。　爰に春華を采る、載ち秋霜を警めよ、
我曰欽哉。實宗之光。　我曰く欽するかな、實に宗の光、

【注解】令族は長族、允は信、至誠なり、構斯堂、長沙公が潯陽を經過して、其の祖先祖公の祠堂を構造したるなり、諧は和、冬日の溫和、長沙公の人品に譬ふ、映懷圭璋も、長沙公の人品高潔を圭璋に譬ふ、春華は芹藻蘋蘩の類、卽ち祭祀に用ふる具、文字に泥んで春の華と見ては不可、載警秋霜、祀祭の嚴肅なるを云ふ、所謂秋霜悽愴の思ひに勝へざるを云ふ、我曰欽哉、我は淵明、欽は普通に敬又は欽の意とするが、嘆歎の義も含む、實宗之光、宗は宗族、陶一家の光榮であるとの意、今韻七陽、

伊余云遘。在長忘同。　伊余云に遘ふ、長に在つて同を忘る、
笑言未久。逝焉西東。　笑言未だ久しからず、逝焉西東す、

遙遙三湘、滔滔九江。山川阻遠、行李時通。

遙遙たり三湘、滔滔たり九江、山川阻遠なるも、行李時に通ず、

【注解】伊は惟、云は「ココニ」と訓む、遇は遇、在長忘同、長久の間に在つて其の同族たるを忘れ居りし意、予曾て淵明は年長に在つて、陶侃より出でて同族たるを忘ると解したるは誤る、笑言未久、云に遇うて以て笑談するも直ぐ又別るる意、逝は往、焉は語助、一は西、一は東と爲る、遙遙は遠くなる貌、三湘は湖南の湘潭、湘陰、湘鄉、滔滔は流るる貌、九江は異說あるも、潯陽より大江分れて九と爲るの說を取る、江西省に屬す、山川阻遠、離別後は西東と阻遠する、行李は現今の郵便配達人を云ふ、行李と云ふ道具の名になりしは六朝以後なり、今韻の一東三江は古、通韻なり、

何以寫心。貽此話言。進簣雖微。終焉爲山。敬哉離人。臨路悽然。款襟或遼。音問其先。

何を以てか心を寫さん、此の話言を貽る、進簣微なりと雖も、終焉山と爲る、敬せんや離人、路に臨んで悽然たり、款襟或は遼なるも、音問其れ先んず、

【注解】何以寫心、淵明が自分の誠心を寫して、長沙公に呈するには如何がして可い、貽は音「イ」訓は「オクル」遺なり、此話言、外に呈する物は無し、此の話言、即ち善言を貽り以て誠心を表す、無形物は有形物に勝る大利あり、進簣雖微、今、淵明が進貽する一言は、恂に簣即ち土籠の如き微物ではあるが、終焉爲山、山は山として別に大なる物が有るにあらず、一簣を積んで以て山と成る、『論語』に譬如爲山、未成一簣とあるが、此の句の典故であるなり、敬哉は俗語の御大事に遊ばせと云ふ意、離人は長沙公を云ふ、臨路悽然、別路に臨み、吾意悽然たり、款襟或遼、此處で別れ、相互に遼遠となる、款襟即ち衷心を披開する能はず、遼は遼遠なり、音問其先は、二義あり、此處で分手しては暫らく逢ふこと能はざる故に、餘計の事まで言うて置く、（一義）相互に別れるも音問は必ず絶たず、吾より先に爲す、（二義）其の取るべきを取るべし、十三元と十五刪と一先とを通韻として作る、以上四首、敦厚の旨を盡くす、

【題義】贈は贈寄と贈呈とあり、遠方の人に贈るは寄なり、當面して贈るは呈なり、今は則ち贈呈なり、

【大意】陶家は、漢の大司馬陶舍より出で、晉の今日に至る五百餘年、其の間分流支派分明なるもあり、不分明なるもあり、獨長沙公のみは、陶家としての聲望を墜さず、穆穆として祖先の爲め之を祀る新堂を構へ、冬祭も春祭も、怠らず盛んに之を行ふ、此の如きは實に是れ陶家の光榮として、欣幸せざるを得ず、我即ち淵明は、接近して談笑するの長からんことを願へども、一は三湘の地、一は九江の地と、山川阻遠するの巳むを得ざるに至るべし、合と離とは人世の常なり、憂ふと雖も、亦如何ともする無し、唯我が敬恭の念は變ずること無し、時に音問を爲すを以て、幸に此の生を善養し玉へとなり、

酬丁柴桑　二章　　丁柴桑に酬ゆ　二章

有客有客。爰來爰止。　客あり客あり、爰に來り爰に止る、
秉直司聽。于惠百里。　直を秉り聽を司る、于に百里を惠す、
飡勝如歸。聆善若始。　飡勝歸るが如し、善を聆いて始めての若し、

【注解】丁は姓、柴桑は潯陽故里、丁と云ふ柴桑の縣令に酬ゆる詩なり、有客有客は『毛詩』の語、『毛詩孔疏』に客止一人、而直言之、是丁寧殊異、以尊大之也と、丁縣令が淵明を訪問せしなり、爰來爰止、四字にて「ココニキタ」と云ふ意、『毛詩』大雅に爰始爰謀とあり、秉直司聽、嚴正に政治を施し、良官吏の範を示す、于惠百里、百里は一縣を云ふ、一縣即ち柴桑に惠澤を霑れるなり、飡勝は覽勝と同じ、如歸、勝れたることは躊躇せず直ちに之を行ふと云ふ意、聆は音「レイ」訓「キク」聞なり、善事を聆くときは、二度も三度も聞き熟れるも、始めて聞く若く厭はないことなり、『詩經』と『論語』に精通する者は、此の詩の妙を知るを得、上擧四韻の韻、六句、

匪惟也諧。屢有良游。　惟也諧ふにあらず、屢良游あり、
載言載眺。以寫我憂。　載ち言ひ載ち眺め、以て我が憂を寫す、
放歡一遇。既醉還休。　放歡一たび遇ひ、既に醉ひ還休ふ、
實欣心期。方從我遊。　實に心期を欣び、方に我に從つて遊ぶ、

【注解】匪惟也諧は、或は匪惟諧也に作る、孰れにしても讀み難し、余は我流に「獨リ諧フニアラズ」と讀む、惟は思と謀と有と爲との字義あるが、余は獨の義に見る、諧は合と調と偶と詥との字義あるが、今は和の義に見る、獨善を守らず、衆と倶にする意、屢有良游、此の游は一本由に作る、結句の遊と同字ゆゑ避けたものと思ふ、古詩なれば重韻を許し、游で可きなり、良友と良游を屢するなり、載言載眺は、『毛詩』の載飛載揚の句法、笑言したり、眺眺したり、以寫我憂、是れ情懷を筆に寫し出すを云ふ、憂の字輕く見て、想又は懷の意に見て可し、放歡一遇、丁柴桑と一遇するに依つて、歡を自由（放）にするを云ふ、既醉還休、『毛詩』の既醉既飽の句法より來る、實欣心期、君と我と互に心期を欣べば、方從我遊、丁に淵明が勤める言なり、君子は君子の朋、小人は小人の朋、淵明の如き君子人と遊ぶ丁も亦君子人と謂ふ可し、今韻十一尤、温謙山曰く、偶然の酬答、而かも神味淵永、規す可しと、東坡此の二首を和せざるは何ぞ、

【題義】酬は「返事スル」と云ふことなれば、丁柴桑が贈詩に對し、此の返事の詩を以てせしなり、

【大意】今の世の人多くは詐を懷き憎を暴す徒のみ、我が良友として同游するに足らず、但丁柴桑は至誠正直の淸吏にして、一郡に良政を行うて、其の作爲善ならざるは無し、是の人と共に酒を飲み、倶に遊ぶ、遂に我が憂も散ずとなり、

答龐參軍　六章幷序　　龐參軍に答ふ　六章幷に序

龐爲衞軍參軍。從江陵使上都。過潯陽見贈。
龐、衞軍の參軍と爲り、江陵より上都に使し、潯陽を過ぎて贈らる、

衡門之下。有琴有書。　衡門の下、琴あり書あり、

載彈載詠。爰得我娛。　載ち彈じ載ち詠じ、爰に我が娛を得、

豈無他好。樂是幽居。　豈他好無からん、是の幽居を樂しむ、

朝爲灌園。夕偃蓬廬。　朝に灌園を爲し、夕に蓬廬に偃す、

【注解】龐は龐通之ならん、衞軍は大將、參軍は副將、江陵は縣の名、春秋時代には楚の渚宮の地、現今は湖北荊南道、上都は京都、卽ち陜西省長安なり、尋陽は其の中間に當る鎭、衡門は唯木を横にして以て門と爲したる者、『毛詩』の語なり、造作無き門、貧士の門、琴書、菲と螢を除くのみ、彈は琴、詠は書、爰得我娛、彈琴に倦めば書、書に倦めば琴、淸娛は此の間に得、豈の字前句を一轉して非常に力あり、琴書の外にも好む物あり、そは何ぞ、樂是幽居、淵明が幽居は我輩寒士の幽居と異る、紫柱彤軒にあらざるべきも、必ずや環堵蕭然にはあらず、樂と爲す所以、朝爲灌園、朝早く起き、香園を掃除し、以て淨水を灌ぐ、快言ふ可らず、夕偃蓬廬、偃は偃臥なり、蓬廬は貧家の通稱、起句の衡門と照應する、句として此の如く用ふるのみ、淵明の實際は貧士にあらず、龐參軍に比較しての言と知るべし、今韻六魚、

人之所寶。尙或未珍。　人の寶とする所、尙或は未だ珍とせず、

不有同好。云胡以親。　同好有らずんば、云胡ぞ以て親まん、

我求良友。實覯懷人。　我良友を求め、實に懷人を覯る、

惟心孔洽。棟宇惟鄰。　惟心孔だ洽ひ、棟宇惟鄰る、

【注解】人之所寶、何焯曰く、陸機云ふ、世之所貴、未爲非寶、主之所珍、不必適治と、淵明が此の句は陸機が言に本づく、人の寶とする所のものは、我も寶と爲さざるにはあらず、尙或未珍、世の寶は寶に相違無きも、深く珍と爲すには足らず、不有同好、是れ同じく道を好む人を指す、云胡以親、云胡は云何と同じ、以親は同好の者を指す、我求良友、共に道を語る友、卽ち是れ良友、龐參軍を云ふ、實覯懷人、友を求めて龐の如き良友を得、覯は『毛詩』に我覯之子とあり、懷人は懷はるる人であるから良友なり、惟心孔洽、孔は甚と同義、洽は和と合と霑との三義を含む、棟宇惟鄰、淵明が栗里に新居を構ふ、時に龐も其の近鄰に居を占め、詩を淵明に贈る、淵明乃ち答ふる所以、今韻十一眞、

伊余懷人。欣德孜孜。　伊余が懷人、欣德孜孜たり、

我有旨酒。與汝樂之。　我に旨酒あり、汝と之を樂しまん、

乃陳好言。乃著新詩。　乃ち好言を陳し、乃ち新詩を著はす、

一日不見。如何不思。　一日見ずんば、如何ぞ思はざらん、

【注解】懷人は龐を指す、欣は淵明の方から、德は龐の德、孜孜は勉强の貌を云ふが普通、今は德を欣慕して措かぬと云ふ意味、我有旨酒、『毛詩小雅鹿鳴章』の成語、旨は美と同義、與汝樂之、酒は兩人對酌を以て天下の至樂とす、獨飮獨酌は至樂にあらず、乃陳好言、乃は「ココニ」又「スナハチ」と訓む、詐らざるの言は卽ち好言なり、著は賦詠の意、一日不見、如何不思、一日見ずんば

千秋の如しの意、今韻四支、

嘉游未斁、誓將離分。　嘉游未だ斁はず、將を誓つて離分せんとす、

送爾于路、銜觴無欣。　爾を路に送る、觴を銜むも欣び無し、

依依舊楚、邈邈西雲。　依依たる舊楚、邈邈たる西雲、

之子之遠、良話曷聞。　之子遠きに之く、良話曷ぞ聞かん、

【注解】嘉游は樂き遊び、斁は音「エキ」訓「イトフ」厭なり、『書經』に服永王之休無斁とあり、「アカズ」と訓むも可、誓將離分、誓は約束なり、將は將來なり、將來を約束して暫らく離分するなり、送爾于路、爾汝の友を路傍まで送る、路傍の中途まで送るは親友に對する禮なり、銜觴は飲酒なり、酒を飲むも平常とは異る、即ち無欣なり、依依は種種の義がある、『毛詩』に楊柳依依とあり、柳の柔弱なる意、『韓詩外傳』に其民依依とあり、民を親愛する意、『楚辭』に戀戀兮依依とあり、舍つるに忍びざる貌、今は『楚辭』に據つて舍つるに忍びざる意を云ふ、龐の赴く地は建康即ち古の楚地なり、邈邈は遠き貌、『楚辭』に神高馳之邈邈とあり、『晉書』に揮如高雁高飛邈邈とあり、乃ち親れども見えざる意味、之子之遠、良話曷聞、今日、離分後は良話を聞く能はずと爲ふ、今韻十二文、

昔我云別、倉庚載鳴。　昔我云に別る、倉庚載ち鳴く、

今也遇之、霰雪飄零。　今也之に遇ふ、霰雪飄零す、

大藩有命、作使上京。　大藩命あり、使を上京に作さしむ、

豈忘晏安、王事靡寧。　豈晏安を忘れん、王事寧きこと靡し、

【注解】云別は、『毛詩』に皇事云莫の云で、此地とは異ることと知る可し、倉庚は、『毛詩』に出て居る鳥、黄鳥、黄鶯、商庚、鵹黃、楚雀、摶黍の異名多し、漢人は其の啼聲を形容して、睍睆、恰恰、綿蠻、關關と云ふ、日本の黄鶯とは全く別なり、法華經を唱ふるウグヒスは漢土に無し、今也遇之、今日も昔日別れた時期、即ち倉庚の鳴く節に遇うたとなり、霰雪は暴雪即ち大雪なり、「アラレ」と「ユキ」の二種にはあらず、邦人は一種と二種と混ずる誤多し、注意を要す、大藩は即ち大國、有命は『毛詩』の文字、下句の王事と連環する、作使上京、京は天子の住する地、上の字を冠らす所以、京は『毛詩』に乃覯于京とあり、京は丘なり、丘は高絶なるを以て、大の意味を加へ、遂に天子の居所に轉用したるなり、豈忘晏安、王事靡寧、此の二句は『毛詩』小雅の豈不懐歸、王事靡盬の意を學ぶ、是の故に晏安の二字は懐歸の意味なり、普通に解釋するときは、晏安は君子の爲さざる所、忘るるを以て可とす、然るに豈忘れんやと言ふに於ては、頗る不合理の事となる、是を以て是を懐歸の意と爲せば極めて合理のものとなる、『毛詩』の意、乃ち孝子が家に歸り、父母妻子と共に安らかに生活せんとて、歸を懐ふ、但し王事は私事と異る、臣と爲つて君の爲めに奔走するは臣の道なり、故に私事は輕く、王事は重し、其の重きものの爲めには、父母を歸寧することも舍てて置かればならぬ、蓋し其の事は忘るるにはあらず、如何せん王事の重大責任あるに於てをや、靡盬を靡寧と改めたるは韻脚の爲めなり、盬は「モロイ」乃ち堅固の反對、寧は「ヤスシ」乃ち盬と殆んど同義、退いて晏安の可きを忘るるにはあらざるも、王事は益す以て疏略に出來すとなり、今韻八庚と九青は古通韻なり、

慘慘寒日。肅肅其風。　慘慘たる寒日、肅肅たる其風、
翩彼方舟。容與沖沖。　翩たる彼の方舟、容與として沖沖、
勗哉征人。在始思終。　勗めよや征人、始に在つて終を思へ、
敬茲良辰。以保爾躬。　茲の良辰を敬し、以て爾躬を保て、

【注解】慘慘は憂恨悴悴の貌、悲痛恨毒の意義、元來は人事に關し、天事に關せず、轉用して寒日に付與したるなり、肅肅は本義敬也、而して嚴、疾、𨻶等の意義を有す、鳥飛貌の義もあり、乃ち慘日嚴風の冬期に當つて參軍が行くなり、翩は汎と同じ、ウカミ流ルル貌、方舟は一片舟なり、『毛詩』に汎彼柏舟の句法、容與は『楚辭』の語、閑適を意味する、我が先儒は「オモムロ」と讀ましむ、沖沖は元來虛也、「ムナシ」が本義、轉じて「ウゴク」、方舟の搖動する貌を云ふ、前句の慘慘、肅肅を承ける字面としては不調和なる感が無きにしもあらず、紀曉嵐や屈悔翁なりせば一筆勾斷するならん、容裔江中に作る本あり、或は可ならん、勗哉征人、參軍の氣をハゲマスなり、在始思終、讀んで字の如く、君子は始終志の變らざるを云ふ、敬茲良辰、慘慘たる寒日、肅肅たる冬期、決して良辰と言ふべからず、前後不調和極まる、淵明でもなければ、痛棒を喫せしむる所なり、以保爾躬、『毛詩』に天保定爾の句法、身體を大事にし玉へと注意しての語、今顧一東、答參軍六首、大抵『毛詩』を學びしもの、毛詩を讀むと少しも異ならざるなり、沈歸愚曰く、綿遠良厚、於三百篇、太離不得、太肖不得、太離則失其源、太肖祇襲其貌と、淵明は其れ善く毛詩を學びし者か、

【題義】答も酬と大異無し、龐參軍が贈詩に對し、此の詩を以て返答せられしなり、

【大意】琴あり之を彈じ、書あり之を讀み、倦み來れば園卉に水を灌ぎ、以て獨り自から娯しむ、而かも我には猶ほ良友ありて、居も亦遠からず、日日往來して美酒を酬盃し、且好言を陳述して毫も隔意無し、一日見ざるときは、起居如何と心思に勝へず、何ぞ料らん此の良友が役人と爲りて上都に使するに至る、之を送りて途中に至り、離別の酒燕を開くも、平生欣欣として飲むが如きにあらず、況んや霰雪は飛び、寒日は慘、北風は肅、送者の情、征者の心、是に於て如何ぞや、而かも王事は私事にあらずして重し、征かざる可らず、幸に其の躬を保護して誤ち無からしめよとなり、

勸農　六章

農を勸む　六章

悠悠上古。厥初生民。　悠悠たる上古、厥の初めて民を生ずる、
傲然自足。抱樸含眞。　傲然として自ら足り、樸を抱き眞を含む、
智巧既萌。資待靡因。　智巧既に萌し、資待因靡し、
誰其贍之。實賴哲人。　誰か其れ之を贍はす、實に哲人に賴る、

【注解】梁の昭明太子は、淵明を讚して、不以躬耕爲恥と言へり、淵明は恥と爲ぬのみならず、農耕を大に勸奬したるなり、此の點に於て、孔子の君子謀道不謀食の語は、淵明の喜ばざる所、學也祿在其中には、農民の喜ばざる所、淵明が生活の道に於て安全を謀りしことは、良に明白のものなり、勸農は乃ち生活安定の爲め作りしもの、悠悠上古は、神農氏時代を指す、厥初生民は、『毛詩』大雅の語、支那の傳説には耜も耨も神農氏の造られしものなりと、傲は樂なり、神農氏時代の百姓は、互に我田引水を爲さざる故、各自に耒耜を執つて樂しみ以て滿足したるなり、抱樸含眞、純樸純眞の質、爭鬪は爲さず、智巧既萌、中古以來は純樸純眞

の實變じて、邪智邪巧と爲る、段段我田引水を互に遣るに至る、賚待は多く見ざる成語、余は謂ふ各自の身を保つ事と、靡因は「ヨルコトナシ」と思ふ、賚は「タスク」、上下相賚の道が壞れ、父が子の田を奪ひ、子が父の田を奪ふに至る、周末より此の如き事あり、然らば爭奪盡きず、各自に安堵する能はず、誰其贍之、之を安堵せしめ、以て民の氣を贍はす者は誰ぞ、實頼哲人、邪智の農民を救へ、無辜の農民を救ふものは、哲人より外に無し、其の哲人は果して是れ誰ぞや、今韻十一眞、

哲人伊何、時爲后稷、　哲人は伊何、時に后稷と爲す、

贍之伊何、實曰播殖、　之を贍す伊何、實に播殖と曰ふ、

舜既躬畊、禹亦稼穡、　舜既に躬畊し、禹も亦稼穡す、

遠若周典、八政始食、　遠く周典の若し、八政食より始まる、

【注解】此の詩は前首を注解せるの意あり、伊何は如何と同じ、時爲后稷、『爾雅翼』に、稷五穀之長、故陶唐之世、名農官爲后稷と、『毛詩』に是生后稷、降之百福とあり、后稷は卽ち哲人たるなり、實曰播殖、播殖は農の發達なり、之を贍はす所以は播殖給足にあるなり、舜既躬畊、傳說には舜は親を養ふ爲め躬畊したとある、禹亦稼穡、種を稼、斂を穡と曰ふ、禹は舜に繼ぎて農事に精勵せし天子とす、遠若周典、夏や殷は整頓して見るべき政治無し、整頓し來るは周以來に屬す、八政始食、『書經』に出づ、一食、二貨、三祀、四司空、五司徒、六司寇、七賓、八師、是を八政と曰ふ、漢は日本と同じく農國、歷代の天子、意を此に用ひしは當然なり、今韻入聲、十三職、

熙熙令德、猗猗原陸、　熙熙たる令德、猗猗たる原陸、

卉木繁榮、和風清穆、　卉木繁榮し、和風清穆なり、

紛紛士女、趨時競逐、　紛紛たる士女、時に趨り競ひ逐ふ、

桑婦宵興、農夫野宿、　桑婦宵に興き、農夫野に宿る、

【注解】熙熙は德の外面に表はれたるを形容する語、『毛詩』の注に光也とあり、躬畊したる舜德と天地の德とを含んで稱したる語、『毛詩』に緝熙令德とあり、令は善と同じ、猗猗は、美盛の形容と、長の形容と二義あり、今卽ち原陸の廣大美盛を讃稱しての語なり、卉木繁榮、土地が肥沃なれば、卉木の繁榮するは當然、和風、人の身體に適する風、卽ち三月四月の風、清穆は風にも通じ、亦人にも通ず、其人清穆なぞは人の德を稱する形容、紛紛は亂れて條理なきを云ふ、士女、タマラヌ凡士愚女なり、趨時競逐、中流以上に生活する者は、天地の德を私して、時好を逐ひ、驕奢を競ふ、桑婦は養蠶する農家の婦、宵興は夜の未だ明ならざるに興る、前者は娛樂、後者は辛苦、淵明は此の辛苦者に同情する、農夫野宿、古代の農民は正直に動く、眞に同情の價値あり、今韻入聲一屋、

氣節易邁、和澤難久、　氣節邁ぎ易く、和澤久うし難し、

冀缺攜儷、沮溺結耦、　冀缺儷を攜へ、沮溺耦を結ぶ、

相彼賢達、猶勤壟畝、　彼の賢達を相るに、猶ほ壟畝に勤む、

矧茲衆庶、曳裾拱手、　矧んや茲の衆庶、曳裾拱手せん、

【注解】氣節は時節と同じ、易過は易過と同じ、百年二百年も須臾なり、春夏秋冬は實に轉瞬の間のみ、和澤は二義あり、大舜の世の樣な時代はイツも無し、或は佳き氣節は一年の中イツも無し、緜久、乃ち須臾に過ぎ去る、冀は國の名、缺は人の名、儷は儷偶、二人相攜ふること、冀國の缺と云ふ人は夫妻して共に畊作するなり、『左傳』僖三十三年の條下を見よ、此の細君が夫君を助けしことを記す、沮溺は長沮と桀溺と二人なり、『論語』微子十八に詳かなり、二人耦畊して孔子を嘆ぜしめしなり、相は「ミル」と訓む、彼賢達は冀缺と長沮と桀溺とを指す、隴は丘隴、田中の高處を云ふ、畝は畝の正字、矧は況と同義、茲兼庶、普通人を指す、前句の賢達と相應する、曳裾拱手は、爲すこと無く、ブラブラ遊ぶこと、人間は活動する爲め出世する、ブラブラ無意義に生活する徒輩は、禽獸以下と言ふ可し、此の篇詩として別に佳處もあらざるが、農事を奬勵する爲めに全力を盡くして作りしものとす、晉末眞面目に働く人少なく、大抵は他人の領土でも掠奪する考を持つて居る者多かりしなり、淵明が『論語』に反對してまで、此の豪語を吐きしなり、上聲二十五有の韻、

民生在レ勤。勤則不レ匱。　民生は勤むるに在り、勤むるときは匱しからず、

宴安自逸。歲暮奚冀。　宴安自逸ならば、歲暮奚ぞ冀はん、

儋石不レ儲。飢寒交至。　儋石儲へず、飢寒交至る、

顧爾儔列。能不レ懷レ愧。　顧ふ爾儔列、能く愧を懷かざらんや、

【注解】在勤、勉勵すべきが民生の第一義とす、不匱、勉勵の結果は必ず富む、匱は匱乏なり、宴安自逸、活動せず坐して以て天下の物を坐食する徒を指す、歲暮は字の如く、歲の暮と限るにはあらず、要するに結果の意味、但し農事を奬勵するが本意なるを以て、米の倉庫に滿つるは歲暮の字面が的確たるなり、奚冀、遊惰の人間が歲入の多きを冀うた所で、何の詮も無し、儋石は一儋と一石、齊人は甖卽ち瓦瓶を名けて儋石と云ふ、一斛を受ける道具、儋石は良に言ふに足らぬ具なり、然るに此の儋石すら儲ふるを得ざるが、惰民や惰農の常態なり、飢寒交至、飢は寒となる、寒は飢となる、交至、以て知るべし、顧爾は諸子弟を顧みて戒むるなり、儔列は儕輩と同義、能不懷愧、此の語は勤勞者には不必要なり、宴安自逸の徒には必要なり、去聲四寘、

孔耽二道德一。樊須是鄙。　孔は道德に耽り、樊須是れ鄙しむ、

董樂二琴書一。田園不レ履。　董は琴書を樂しみ、田園履れず、

若能超然。投二迹高軌一。　若し能く超然たらば、迹を高軌に投じ、

敢不二斂一衽。敬讚二德美一。　敢へて衽を斂め、敬しく德の美を讚せざらん、

【注解】孔耽、耽は耽溺と成語して、樂を十二分に取る場合に用ふ、『毛詩』に士之耽兮樂也とある、所謂樂を過ぎての樂、君子は取らず、然るに淵明は此の惡字を以て孔子に與ふ、誤字あり、說字あり、何ぞ耽と曰ふを用ひん、孔子云、君子謀レ道不レ謀レ食、耕也餒在二其中一矣、學也祿在二其中一矣、君子憂レ道不レ憂レ貧、總て物質を抑へて、精神を揚げし言句なり、物質は人慾の私、孔子が敎を待たずして人人皆知る、是を以て聖人は精神を重んずることを說き、時代を救うたものなり、然るに淵明は田園の荒蕪を憂ふるが故に、孔子の說をまで批難するに至りしなり、樊須は、孔子に道を問はずして、農を問ふ、孔子は道が肯く所より、樊須を鄙しめし者なり、『論語』子路篇に、樊須請レ學レ稼、子曰、吾不レ如二老農一、請レ學レ爲レ圃、吾不レ如二老圃一、樊遲出、子曰、小人哉樊須也、孔子も呆れて小人哉と鄙しめしものなり、董は漢の董仲舒、此の人大學問あり、琴書を樂しんで、以て物質慾を强求せず、田園不履、孔子と董仲舒とは農事を輕視したとの意、又此の二人は田園の味を知らぬとの意、若能超然、孔と董との如く、普通人間以外に超然たる人は

格別であるがつ意、投迹高軌、迹は身跡、高軌は田園の反對、斂不斂衽、敬讃德美、二句一讀法なり、衽は衣襟、斂は正しうする、孔子と董仲舒の如きは、縱令ひ田園に足を入れなくとも、德の美は別に存するを以て、貴む可きは貴むがとの意に歸宿する、他人が農事を鄙しめしとは同一に見ずとなり、上擧四韻の讀、

【題義】漢土は農を以て國本と爲す、上古の堯も舜も禹も皆稼穡の道を奬勵せり、而かも後世往往之を卑しみ、或は懈怠するに至る、勸農の詩、以て此の懈怠を戒むるにあり、

【大意】有史以前の生民は、其の質幹朴眞にして、彼此相爭ふこと無し、上古より以來、各の智巧を生ずるに依つて、生活も安不安の別あるに至る、是に於てか哲人卽ち后稷の如き人出でて農畊を敎へ、而して舜、而して禹、皆稼穡を躬らす、然るに後世に及び、農畊の時節は極めて快適なるを以て、多くの士女は唯游樂を是事とし、桑婦や農夫が田畝に在つて日夜苦辛するを知らず、此等の徒は良に以て悲しむべし、試に冀缺や沮溺の如き賢人を看よ、共に農事に精勵したる人にあらずや、國家の平治する基は農事の爲めに民生が能く勤勉するに在り、勤勉する者は富を致し、怠懈なる者は匱しきを致す、匱しきときは飢寒直ちに至る、爾等は能く之を勉めよや、孔子は道德を說き、董仲舒は琴書を樂しみ、農事を輕視するが如きも、德は是れ聖賢、美德は別に存するなり、但吾人は宜しく農事に精勵すべし、

命子　十章

悠悠我祖。爰自陶唐。　悠悠たる我祖、爰に陶唐よりす、

邈焉虞賓。歷世重光。　邈焉たる虞賓、歷世光を重ぬ、

御龍勤夏。豕韋翼商。　御龍夏に勤め、豕韋商を翼く、

穆穆司徒。厥族以昌。　穆穆たる司徒、厥族以て昌、

【注解】我が子を戒命する詩、我祖は陶舍を謂ふにあらず、陶の字より其の祖宗を說き出すなり、日本人が譜牒の別無く、我が祖は神武より出づと云ふの類、陶唐は堯帝を指す、堯初め唐侯と爲り、後、天子と爲つて陶に都す、故に陶唐氏と曰ふ、邈焉は遼悠の貌、虞は堯に繼ぎて天子と爲りし舜を謂ふ、有虞氏、賓は賓客なり、堯の子が舜の朝に賓客として、待遇せられしをいふ、歷世重光は、堯の子孫、世世、美德ありしをいふ、御龍、夏の禹王の後、夏に孔甲なる王あり、劉累なる者之に事ふ、此の人龍を擾すを學ぶ、孔甲之に姓を賜うて御龍氏と曰ふ、龍の一雌死す、潛かに醢にして以て孔甲に食はしむ、復之を求む、累懼れて遷る、御龍氏逃れて魯山に居る、殷の後、豕韋に封ぜられ、商の武丁之を滅し、以て劉累の胄を封す、翼商、翼は輔翼、商は卽ち殷なり、以上、堯と舜と禹と成湯の五世を擧ぐる、司徒は少昊の時の官名、唐虞以後之に因る、周時、六卿の一、漢時、三公の一、陶氏の族の由來する所を曰ふ、昌は昌盛なり、今顯七陽、

紛紛戰國。漠漠衰周。　紛紛たる戰國、漠漠たる衰周、

鳳隱於林。幽人在丘。　鳳林に隱れ、幽人丘に在り、

逸虬遶雲。奔鯨駭流。　逸虬雲を遶り、奔鯨流を駭かす、

天集有漢。眷予愍侯。　天有漢に集まる、予が愍侯を眷る、

【注解】紛紛は秩序の紊亂を云ふ、暖睡は周の平王以後を指す、漠漠は晴晴と同じ、平王、犬戎に逼られ、西都より東都に徙る、周室の衰微、復振はず、鳳隱於林、明時には鳳凰出でて舞ふ、亂世には鳳凰去つて出でず、幽人在丘、丘は塵俗を離れたる處、幽人即ち賢人は逃れ去る、逸虬、角の無き龍を虬と曰ふ、遶雲、駭流、虬は天上を惑亂し、奔鯨は海中を狂暴す、以て海內盜賊縱横し、衆庶安んずる能はざるを喩ふ、天は天の德、集は集來、周秦、德を失うて以て漢に集まるを云ふ、國に有の字を付す、有周有秦の類、眷予愍侯、李公煥曰く、高帝（漢）功臣表、開封愍侯陶舍、左司馬を以て漢に從ひ、代を破り侯に封ぜらる、今韻十一尤、

於赫愍侯。運當攀龍。　於赫たる愍侯、運攀龍に當り、

撫劍夙邁。顯茲武功。　劍を撫して夙邁、茲の武功を顯す、

書誓山河。啓土開封。　書山河に誓ひ、土を開封に啓く、

亹亹丞相。允迪前蹤。　亹亹たる丞相、允に前蹤に迪ふ、

【注解】赫は武の光、愍侯は陶舍、運は時運天運、攀龍は時運の乘膽すべきに當りてなり、撫劍、武を以て起つ、夙邁は非凡を曰ふ、書誓山河、漢の高祖、功臣と盟うて云ふ、黃河、帶の如く、泰山、礪の如くなりとも、國以て永く存し、爰に苗裔に及ばんと、此の盟を謂ふ、啓土開封、漢の景帝の三年八月、陶青、丞相と爲り、開封侯と爲る、啓土は侯と爲りし事を云ふ、亹亹は勉强の貌、『毛詩』に亹亹文王とあり、迪は順ふなり、前蹤は前賢者の蹤跡を指す、此の詩は、陶舍と陶青と二祖先の德を頌するが主意なり、功は今韻一東、古は二冬と通韻なり、

渾渾長源。蔚蔚洪柯。　渾渾たる長源、蔚蔚たる洪柯、

羣川載導。衆條載羅。　羣川載ち導き、衆條載ち羅す、

時有語默。運因隆窊。　時語默あり、運隆窊に因る、

在我中晉。業融長沙。　我が中晉に在り、業長沙に融す、

【注解】渾渾は數義あり、今は滾滾と同じく、大水流るる貌を取る、長源なれば水盡きず、蔚蔚は鬱鬱と同じ、草木の盛なる貌、洪柯は大木、長源なるが故に羣川載導し、洪柯なるが故に衆條載羅す、交股の句法知る可し、此の二句は陶家が種種に分派したるを喩ふ、時有語默、語は盛を喩へ、默は衰を喩ふ、隆は盛、窊は衰、窊は凹なり、李公煥曰く、二句陶青の後、顯者有らざるを言ふ、在我中晉、西晉東晉合して十五代一百五十六年、中晉は乃ち東晉の初を指す、東漢を中漢と言ふの類なり、陶侃字は士行、晉に仕へ軍に在ること四十一載、位八州都督、長沙郡公に封ぜらる、成帝（東晉第三主）の咸和九年に薨す、大司馬を追贈し、謚して桓と曰ふ、陶侃は廣州の刺史（西晉愍帝の時）と爲り、郡に在り、輒ち朝に百甓を齋外に運び、暮に齋內に運ぶ、人其の故を問ふ、曰く、吾方に力を中原に致さんとす、過爾優逸す、恐らくは事に堪へざらん、故に自ら勞するのみ、今韻下平聲六麻、

桓桓長沙、伊勳伊德。　桓桓たる長沙、伊勳伊德、

天子疇我、專征南國。　天子我に疇い、專ら南國を征せしむ、

功遂辭歸、臨寵不忒。　功遂げ辭して歸る、寵に臨んで忒はず、

孰謂斯心、而近可得。　孰か謂ふ斯心、而近して得べしと、

【注解】桓桓は武の貌、『毛詩』周頌に桓桓武王とあり、疇は音「チウ」訓「ウネ」麻田を謂ふ、轉じて種種の義を爲す、今の句は官位勳等、其の家に世襲せしむるを謂ふ、故に疇の意を以てす、我は陶侃を指す、專征南國、功遂辭歸、蔣丹崖曰く、侃、前史多く其の純臣にあらざるを議す、而して此の心問ふ可からざる者あるは、陶翁蓋し祖の爲めに諱むなり、温謙山曰く、晉成帝の時、蘇峻反逆す、宮闕墟と爲る、侃、身皆耕たり、手強兵を擁る、卽ち當に沸泣師に誓ひ、畢力賊を討ずべし、乃ち始め顧命に與からざるを以て辭と爲す、纔ざて儁登を遣り、復兵を追ひ偏に還らんと欲す、君臣の大節に於て、未だ盡さざる所あり、君子之を惜む、幸にして温嶠再三邀へ說き、卒に能く感悟し、役服して舟に登り、峻を誅して功を成し、以て其の過を補ふ、論者謂ふ、長沙の心、識ず可き無からず、長沙の績、寔に沒すべからず、心跡固相掩はず、讀者其の輕重の間を權衡て可なり、寵は恩寵、又君寵、忒は音「トク」訓、疑也、差也、陶侃が君寵は驕奢と異ならざるなり、孰謂斯心、而近可得、長沙公が心期の高遠は凡人の得べき所にあらずと斷するなり、入聲十三職の韻、

肅矣我祖、愼終如始。　肅たり我が祖、終を愼む始の如し、

直方二臺、惠和千里。　直方二臺、惠和千里、

於皇仁考、澹焉虛止。　於皇仁考、澹焉虛止、

寄迹風雲、冥茲慍喜。　迹を風雲に寄せ、冥たり茲の慍喜、

【注解】愼終如始、『易』に原始要終とあり、『大學』に事有終始と、君子は終始一貫の志を要す、直方二臺、惠和千里、直方は正直を持すること、二臺は未詳、諸注曰く、陶茂、武昌の太守と爲つて恩威を垂る、所謂千里に恩惠を施すを云ふ、於は歎辭、皇は父なり、仁考の人なり、其の人の性澹懷虛心、焉と止は語助、寄迹風雲、泰平の世に身を托せざりしを云ふ、冥は實に作る本あり、慍は「イキドホル」なり、喜は「ヨロコブ」なり、天下の爲め慍り、又天下の爲め喜ぶ、此の慍喜を冥合すとなり、上聲四紙、

嗟余寡陋、瞻望不及。　嗟余寡陋、瞻望及ばず、

顧慚華髮、負影隻立。　顧みて華髮を慚ぢ、影を負うて隻立す、

三千之罪、無後爲急。　三千の罪、後無きを急と爲す、

我誠念哉、呱聞爾泣。　我誠に念ふかな、呱として爾が泣くを聞く、

【注解】寡陋は寡聞固陋と成語す、智識無く陋しき人間、瞻望は有形にも無形にも通ず、古人を瞻望するも不及、遠山を瞻望するも不及、今は古人なり、華髮は白髮、自分を顧みて徒らに老大と爲るを慚づ、隻立は孤立と同じ、三千之罪は種種の罪なり、三千を以て數の極度とす、三千の美人、三千の禮義皆同じ、孝經に、五刑之屬三千、而罪莫大於不孝とあり、無後爲急、種種の罪の中、子無きを以て第一と爲す、孟子に、不孝有三、無後爲大とあり、我誠念哉、我は其の事を至誠に念ふ、遂に呱呱として爾が泣啼す

るを聞く、入聲十四緝の韻、

卜云嘉日。占亦良時。　卜も云に嘉日、占も亦良時、

名汝曰儼。字汝求思。　汝を名けて儼と曰ふ、汝を字して求思といふ、

温恭朝夕。念茲在茲。　温恭朝夕、茲を念うて茲に在り、

尙想孔伋。庶其企而。　尙想ふ孔伋、庶其くは企而せん、

【注解】龜甲を灼りて以て兆を取るが卜、兆を觀て以て吉凶を知るが占、卜も占も共に嘉日なり、良時なり、儼は儼然、儼恪、恭敬と爲す『禮』に儼若思とあり、名字共に『禮』より來る、温にして恭、夙にして朝夕、長く言へば一生涯、行住坐臥、念を玆に在くなり、孔伋は孔子の孫、名は子思、長じて以て子思の如くなれかしと求思の字を以てす、此の企は及ばざるを知ると雖も、而かも宜ふ所の理想は此に在るなり、今韻四支、

厲夜生子。遽而求火。　厲夜子を生む、遽にして火を求む、

凡百有心。奚特於我。　凡そ百心あり、奚ぞ特に我に於てのみならん、

既見其生。實欲其可。　既に其の生を見る、實に其の可きを欲す、

人亦有言。斯情無假。　人も亦言へるあり、斯情假無し、

【注解】厲は醜惡なり、『莊子』の天地篇に、厲の人、夜半に子を生み、遽かに火を取つて之を觀る、其の己に似るを恐る、凡百有心、誰も彼も心ある者は人情として然るなり、奚特於我、我獨り其の癩腫を爲すにあらず、厲の人も、美の人も大抵然るなり、既に生れたる以上は、其可卽ち萬事其の子の可からんことを欲す、人亦有言、斯情無假、假は眞の反對、子に對する親の情は眞にして假にあらざるなり、上聲二十哿の韻、

日居月諸。漸免於孩。　日や月や、漸く孩を免る、

福不虛至。禍亦易來。　福虛しく至らず、禍も亦來り易し、

夙興夜寐。願爾斯才。　夙に興き夜に寐ね、願ふ爾が斯才を、

爾之不才。亦已焉哉。　爾が不才なるも、亦已焉哉、

【注解】日居月諸は『毛詩』の語なり、孩は襁孩乳兒なり、日月を閲すれば、孩が幼と爲る、福不虛至、福は至るやうにせずんば至らず、禍亦易來、禍は來らぬやうにしても來る、願爾、才と不才は天分なれど願ふ所は才卽ちハタラキある人と成れかし、而かも不才も亦如何ともするなし、漢の鄭康成、子を誡めて曰く、若し忽忘不識なるも、亦已焉哉と、淵明が本づく所、袁緬曰く、先生高蹈獨善、宅志超曠、世事を視る、一も其の中に芥すべき無し、獨、諸子に於て、拳拳訓飭し、命子の詩あり、責子の詩あり、晉鑑等の疏あり、先生既に厚く躬に積み、薄く世に取る、其の後宜しく興る者あるべし、而して六代の際、迄に聞ゆる所無し、此亦先生所謂天道幽且遠く、鬼神茫昧然たる者なりと、上平聲十灰の韻、

【題義】靖節が子に命戒するに、陶家の祖先が歴代國の爲め族の爲め努力せられ、其の功德が今日に及びしなれば、汝等も之を忘るる勿れ、而して親として我は已に前途は久しからず、汝等を思ふの情は古の厲夜生子の人よりも甚し、哀しい哉汝等は不肖なり、不肖なりと雖も、是亦天命なり、已焉哉と嘆ずる外無しとなり、

【大意】命子十首、首首盡く祖先の功業を敍して、陶家の子孫たる者は、其の功業を繼承して之を墜さざらしめんことを説示したるに在り、其の意は注解に於て明かなれば屋上架屋の無用なるを覺ゆ、蓋し前六首は祖先の功業を敍し、後四首は兒輩を戒しめしものなり、儒の敎としては後嗣無きものは重き罪ありとす、幸にして我は爾等を生むを得たり、而して爾等の命名にも心痛したり、伶俐不伶俐の事にも心痛したり、而かも運命は如何ともするなし、但勤むると勤めざるとに由つて、禍福の相違を來たす、是の故に爾等は克く勉めよや、

歸鳥　四章

翼翼歸鳥。晨去於林。
遠之八表。近憩雲岑。

歸鳥　四章

翼翼たる歸鳥、晨に林を去り、
遠く八表に之き、近く雲岑に憩ふ、

和風不洽。翻翮求心。
顧儔相鳴。景庇清陰。

和風洽からず、翮を翻して心を求む、
儔を顧みて相鳴く、景清陰を庇ふ、

【注解】翼翼は翅を垂るる貌、夕に歸る鳥、晨には林を出で去つて食を四方に求む、八表は四方と四維、岑は岑嶺、和風不洽、調處皆可なれば和風洽なるも、或は和風の吹く處もあり、或は和風の無き處もあり、翻翮、歸るに如かずと翮を翻へす、求心、此の二字眼目なり、鳥に托して以て我が放心を求むるを云ふ、顧儔相鳴、儔侶無くんば已みなん、有らば必ず相喚び相鳴く、景は影なり、庇は庇護、清陰、棲息する亦所を擇ぶ、下平聲十二侵の韻、

翼翼歸鳥。載翔載飛。
雖不懷游。見林情依。
遇雲頡頏。相鳴而歸。
遐路誠悠。性愛無遺。

翼翼たる歸鳥、載ち翔り載ち飛ぶ、
游を懷はずと雖も、林を見て情依る、
雲に遇うて頡頏し、相鳴いて歸る、
遐路誠に悠なり、性愛遺るる無し、

【注解】載翔載飛は『毛詩』の字面、雖不懷游、見林情依、此の八字は解釋に據つては種種の義に取れるも、要は霜游にあらざるも、林中の好を見れば、又露游の情起らざるを得ずとなり、頡頏は相上下すること、遐路は遠き路、性愛無遺、林を見て情の依る、卽ち性愛の致す所、此の林中の性を遺忘すること無し、歸路の悠なる、何ぞ亦問ふの要あらん、陳情父曰く、飛ぶに倦むも還るを知るの意、之を言ふ悠然と、今韻五微、

翼翼歸鳥、馴林徘徊。　翼翼たる歸鳥、林に馴れて徘徊す、
豈思天路、欣及舊棲。　豈天路を思はん、舊棲に及ぶを欣ぶ、
雖無昔侶、衆聲每諧。　昔侶無しと雖も、衆聲每に諧ふ、
日夕氣淸、悠然其懷。　日夕氣淸し、悠然として其れ懷ふ、

【注解】馴林、一本相林に作る、馴が面白し、馴れたる者は佳なり、故に徘徊する、天路は高し、高處を思はざるにはあらず、而かも舊棲の佳きには及ばざるなり、及の字は返るの意味に見よ、舊棲に返り、昔侶は已に無し、而かも衆聲每諧、新知の人人、我と諧和し、會て隔意無し、乃ち日夕氣淸、悠然として其れ懷を遣るべきなり、沈歸愚曰く、亦衆聲に諧ふ、自から眞懷あり、此は是れ何等の品格ぞと、何義門曰く、鄰曲の宴擧、中朝の舊侶の多才たるに如かずと雖も、然れども眞懇則ち相入るなり、今類八齊九佳十灰は古通韻なり、

翼翼歸鳥、戢羽寒條。　翼翼たる歸鳥、羽を寒條に戢む、
遊不曠林、宿則森標。　遊ぶに曠林ならず、宿するときは森標あり、
晨風淸興、好音時交。　晨風には淸興す、好音時に交はる、
矰繳奚施、已卷安勞。　矰繳奚ぞ施せん、已に卷んで安勞す、

【注解】戢は音「シフ」訓「チサメル」斂なり、寒は寒木、條は枝條、寒木の枝條に憩ふとなり、遊ぶ何ぞ必ず曠林ならん、宿則森標、森は叢木、標は樹末なり、弋人之を物色するも得ず、晨風淸興、好音時交、此の淸き心地は同好以外は誰も知る能はず、矰繳は「イグルミ」弋して射る矢なり、矢と綱と繫りし道具、専ら鳥のみ捕ふるなり、奚施、森標中此の「イグルミ」の施しようも無し、已卷、卷は倦なり、倦めば歸宿して勞を安んず、已卷安勞を一本に且暮逍遙に作る、已卷の方を可とす、明の鍾伯敬曰く、全篇語言の妙、往往累言、説き出ださざる處、數字、回翔略盡く、一種淸和婉約の氣、筆墨の外に在る有り、人をして心平らかに累消せしむと、沈歸愚曰く、他人、三百篇を學ぶ、癡にして重し、風雅と日に遠し、此れ三百篇を學ばず、淸にして腴、風雅と日に近しと、溫謙山曰く、愚案するに、淵明、當時に在りて、寔に儔侶罕なり、興を歸鳥に托す、寓意微なり、沃氏謂ふ、四章空に懸つて義を起し、海市蜃樓の如し、比體を以て賦體と爲す、當世託す可き無きを見るにあらざるは無し、鳥の飛ぶに倦んで還るを知るに如かず、其の計甚だ得たりと爲す、末句心事畢く見はると、

【題義】歸鳥、人は出づるを知つて、歸るを忘るる者多し、出でては功を爲す、功遂ぐれば退かざるべからず、鳥は晨出でて、晩に歸る、歸るを謬ること無し、幸に人は鳥の如く歸るを謬る無かれと、其の意を歸鳥の題に託して歌ふものなり、

【大意】四章共に歸鳥に託して、我が興を寓したるものなり、彼の歸鳥を看るに、或は八表に飛び去り、或は倦んで雲岑に憩ひ、或は侶を求めて鳴き、雲邊に相頡頏するも、其の離れんことを恐れて、互に鳴き以て互に其の安否を知らしむ、而かも其の雲路の遠きに游ぶも、豈に其の歸宿の處を忘れんや、夕には乃ち羽を戢めて林に歸り、此に於て勞を安んず、此中矰繳に捕らるる憂も無し、亦捕へんと欲する者も術無し、是れ正面の解釋なり、内面より之を言へば、鳥は鳥にあらずして淵明其の人な

り、林は林にあらずして其の安居の舍なり、鳥にして林に歸るを忘るれば、矰繳に罹るの憂無しとせず、人にして舍に歸るを誤れば、讒害に會ふの恨無しとせず、幸にして鳥は林に歸り、人は舍に歸り、羽を戢め、心を收む、游ぶに舊友無しと雖も、憩ふに淸陰の在る有り、自然は我と背かず、悠然として其の懷を遣るに足る。

陶淵明集卷一終

陶淵明集卷二

詩五言

形影神　三首幷序

形影神　三首幷に序

貴賤賢愚、莫レ不ニ營營以惜一レ生。斯甚惑焉。故極陳ニ形影之苦一、言ニ神辨自然一以釋レ之。好事君子。共取ニ其心一焉。

貴賤賢愚、營營以て生を惜まざるは莫し、斯甚だ惑ふ、故に極めて形影の苦を陳し、神辨自然を言ひて以て之を釋く、好事の君子、共に其の心を取れ、

形贈レ影

形影に贈る

天地長不レ滅。山川無ニ改時一。

天地長く滅せず、山川改時無し、

草木得ニ常理一。霜露榮ニ悴之一。

草木常理を得、霜露之を榮悴す、

謂人最靈智。獨復不レ如レ茲。　謂ふ人は最も靈智、獨復茲の如くならず、

適見レ在二世中一。奄去靡二歸期一。　適ま世中に在るを見るに、奄去して歸期靡し、

奚覺無二一人一。親識相追思。　奚ぞ覺らん一人、親識相追思する無きを、

但餘二平生物一。擧目情悽洏。　但平生の物を餘し、擧目情悽洏、

我無二騰化術一。必爾不二復疑一。　我に騰化の術無し、必爾復疑はず、

願君取二吾言一。得レ酒莫二苟辭一。　願はくは君吾が言を取り、酒を得ば苟辭する莫れ、

【注解】形と影と神との三に就いて其の長短得失、各の別に理あるを叙す、而して形と影とは言ふに足らず、但其の神の第一義たるを彼べたるなり、形贈影、形より影に示す、天地山川は悠久なり、遼遠なり、或は滅あり、或は改まることあるも、そは萬年億年に屬す、百年千年は不滅無改を以て定義とす、然るに草木は期節に因つて或は榮え、或は悴ふ、是を常理とす、此の間に在りて、人は其れ如何、天地の間に最靈智と稱せらる、其の最靈智たる人間は、天地に似たるや、山川に似たるや、或は草木の如くなるや、殆んど茲の草木の如きものなり、十年二十年三十年長くして七十年八十年は在世するも、其の七十八十も矢の如く過ぎ去る、奄忽に去つて哀しい哉復歸期靡し、奚覺無一人、親識相追思、二句一讀法なり、百年には大底同一黃泉に歸す、一人として殘りて以て追思する者は無し、相追思は一本に豈相思に作る、但餘平生物、生前愛する所の物、或は琴棊、或は衣帶、皆後人の涙の種ならざるは無し、擧目、目に入る物總てなり、洏は涕の流るる形容、騰化術は死せずして以て仙人の類と化する術、我には此の術無し、必爾は必然と同義、此の如きの常理は不復疑、必ず之を信ずるなり、願ふ者は形、君は影、取吾言、上に言ふ所の吾言を好取せよ、得酒、酒以て憂哀の事を忘る、一瞬も之を忘るるを可とす、苟辭、カリソメにも辭し玉ふこと莫く、三杯四杯重ね玉へとなり、淸の何義門曰く、此篇言ふ、百年倏ち過行し、草木と同じく腐つ、此形必ず恃む可らず、當に時に及んで行樂すべし、下篇は其の意に反し、言ふ眷を立つるに如かずと、上平聲四支一韻、

【題義】總て人間は形と影と神との三を離れず、而して物欲の爲めには、形と影とが日日に營營とせざるべからず、而かも神より之を言へば、時に閒閒たらざるべからず、然りと雖も、形から之を言へば、營營せざるべからざるを以て營營するなり、影も亦形に和して、其れに贊成する、神として此の兩者を判斷して見れば、汝等の營營たるは、多く惡事にして、善事にあらず、且汝等は消滅する時あるを知らずや、形の爲め死にも生にも乃至禍福にも皆心を役す、役せらるる心は命せらるる儘に動くと雖も、心の君主たる所の神より之を見れば、自然に背くこと甚し、形を忘れ、影を忘れて以て始めて自然に返る、自然に返る處、是物欲の隨つて生ずる無し、神が形影の主張する說を破却して以て神の神たる所以を釋明するなり、

【大意】高くして人類、卑くして物類、凡そ生ある者は、皆是の生を愛惜せざるは無し、營營として勞し、汲汲として役す、皆是の生の爲ならざる無し、何の爲めに許の如く營營汲汲たらざる可からざるか、我に於て其の理を發見するに甚だ惑ふ、自から惑ふを以て、又自から之を解かんと欲す、其の解くに神辨自然を以て之を釋く、好事の君子は、語句の末節に拘泥せずして、釋者の精神卽ち心を掬み取れよ、凡そ生物は形影神の三より成る、而して形は象なり、容色なり、外に形はるるものなり、

是の故に三者の中營營たる者の第一位を占む、乃ち形は主、影は客なり、主以て客に贈る、天地も山川も草木も人類も皆形象あるに於ては同一なり、然るに天地の形は不滅なり、山川の象は無改なり、草木は榮悴ありと雖も、人類に比較すれば其の形を保つこと長し、然るに人は生物の最靈智と稱謂せらるる身を以て天地山川草木の長きに如かず、世に在る五十年六十年を以て奄ち此の世を去つて遂に歸期なし、一人として百年も二百年も殘り、以て前人を追思する者あらんや、我より唯一年二年遲れる者が、前人の遺物なぞを見て、流涕するに止まるのみ、況んや我に仙人と化する術も無し、其の形の滅するは必爾にして、疑ふべき餘地無し、我滅すれば君（影）も共に滅せざるを得ず、幸に形の有る間に於て酒を飲み以て興を遣らん、君も請ふ飲酒を辭すること莫れ。

影答形

影形に答ふ

存生不可言。衞生每苦拙。
存生言ふ可からず、衞生每に拙に苦しむ、

誠願游崑華。邈然茲道絕。
誠に崑華に游ばんと願ふも、邈然として茲道絕ゆ、

與子相遇來。未嘗異悲悅。
子と相遇來、未だ嘗て悲悅を異にせず、

憩蔭若暫乖。止日終不別。
蔭に憩うて暫く乖くが若きも、止日終に別れず、

此同既難常。黯爾俱時滅。
此同じきも既に常なり難く、黯爾時と俱に滅す、

身沒名亦盡。念之五情熱。
身沒して名亦盡く、之を念うて五情熱す、

立善有遺愛。胡爲不自竭。
善を立つれば遺愛あり、胡爲ぞ自から竭さざる、

酒云能銷憂。方此誠不劣。
酒云に能く憂を銷す、方に此誠に劣ならず、

【注解】存生不可言、何の爲めに生きるや、ソンナ道理は言論するの要なし、而かも衞生に就いては意を注がざるを得ず、如何せん我は斯の道に拙なり、願ふ所は崑崙と華嶽とに遊び、以て仙に變化の術を問はんと、而かも邈然として茲道は斷絕し、問ふ可き由なし、與子、影が形を指して子と曰ふ、相遇來、未嘗異悲悅、子と遇うて以來、今日に至るまで、子悲めば我も悲み、子悅べば我も悅び、嘗て反することと無し、憩蔭、子が樹の蔭や物の蔭に休憩するときは、暫時乖くが若きも、止日終不別、子が日下に止立するときは必ず相伴ふ、此同、形あるときは必ず影あり、故に同と曰ふ、而かも此の同が永劫に常とは言ひ難し、形常住ならず、影も亦常住ならず、黯爾は色を失ふ貌、クラクなるなり、俱時滅、形滅すれば影も亦滅す、身沒名亦盡、身後の名あるは、百に一人のみ、多くは身と名と俱に盡く、念之、此の死沒の事を念へば、五情は五性ならん、肝と心と脾と肺と腎となり、喜と怒と哀と樂と惡とにはあらざるべし、熱、耐へられざるが故に熱す、立善有遺愛、善行を立つるときは後世をして遺愛あらしむ、胡爲は俗語の「ドウイフワケデ」に當る、不自竭、ナゼ努力せざるや、酒云能銷憂、前章に酒は辭する莫れと云ふ、此に酒は銷憂と云ふ、眞酒にあらざるも、酒にあらずんば憂を銷する具は無きなり、方此誠不劣、此の如くにして酒を飲む、決して鄙劣ならざるなり、陳倩父曰く、正論を以て相格す、與子の四句、形影相依を寫して致ありと、溫謙山曰く、上篇の長不滅、無改時は、卽ち所謂存生なり、邀崑華は變化の句に答へ、立善は卽ち立德、立功、立言なり、聖賢の實際此に在り、故に之を以て形を責む、末二語は得酒の句に答ふ、入犀九層一韻、

【大意】客たる影、主たる形に答ふ、曰く、人の生を保存するの理、言語を以て之を說明するは難し、

試に看よ君（形）が其の生を衞る道に於て極めて拙劣なることを、君が平生の志願は崑崙や華嶽の仙境に游ばんと欲するに在るが、其の志願は水泡に歸し、空しく茲の道斷絶したるにあらずや、而して君悲めば我も悲み、君悦べば我も亦悦び、君が樹陰に在るときは暫時離るるも、君が日下に止まるときは必ず伴ふ、此の如く厚く交はる、尋常の交りと言ふべからず、然りと雖も君が沒するに於ては、我も亦沒せざるべからず、其の沒滅の事を念へば、五情熱し、昂奮せざる能はず、而かも滅沒は已むを得ず、冀はくは善事を立てて貞名を世に遺さん、精精努力し玉へ、憂は幸にして酒あり以て之を消す、飲んで以て亂に及ばず、何ぞ飲むことを卑まんや、

神釋

大鈞無私力、萬形自森著。
人爲三才中、豈不以我故。
與君雖異物、生而相依附。
結托善惡同、安得不相與。
三皇大聖人、今復在何處。

神釋す

大鈞無私の力、萬形自から森著、
人は三才の中と爲す、豈我を以ての故ならずや、
君と物を異にすと雖も、生れながらに相依附す、
結托善惡同じ、安んぞ相與にせざるを得ん、
三皇は大聖人なり、今復何の處に在る、

彭祖愛永年、欲留不得住。
老少同一死、賢愚無復數。
日醉或能忘、將非促齡具。
立善常所欣、誰當爲汝譽。
甚念傷吾生、正宜委運去。
縱浪大化中、不喜亦不懼。
應盡便須盡、無復獨多慮。

彭祖永年を愛す、留まらんと欲して住まるを得ず、
老少同一死、賢愚復數ふる無し、
日に醉うて或は能く忘る、將齡を促す具にあらず、
善を立つるは常に欣する所、誰か當に汝が爲に譽むべき、
甚だ念ふ吾が生を傷るを、正に宜しく運に委せ去るべし、
大化の中に縱浪し、喜ばず亦懼れず、
應に盡すべきは便ち須らく盡すべし、復獨り多慮無し、

【注解】神釋、形と影の問答を神が之を解釋する、大鈞は洪鈞なり、造化轉運を謂ふ、無私力、一個の物に私せず、萬形自森著、形の字或は理に作り、或は物に作る、三字皆通ず、文字の佳を取るべし、森然として顯著なり、天地人之を三才と謂ふ、人は中間を占む、豈不以我故、我は神が自ら謂ふ、人は神あり、木偶にあらず、神は靈なり、是の故に三才の中を占む、與君、形と影を指して君と云ふ、雖異物、形影は共に有形、神は無形、物體同じからず、物體同じからざるも生而相依附、神と形と影との三は生より死に至るまで依附して離れず、結托善惡同、神が善なれば形影も亦善、神が惡なれば形影も亦惡、安得不相與、此の密著の關係、分離の仕方は無し、三皇は太昊伏羲氏と炎帝神農氏と黄帝軒轅氏となり、大聖人、一は木德、一は火德、一は土德を以て萬世の聖人と仰がる、今復在何處、太古に此の如き聖人出世せしことは聞く、而かも今何處に在るやを知らず、彭祖愛永年、三皇より後、堯帝出づ、此時に籛鏗なる人あり、顓頊（五帝の一）の玄孫と稱す、雉の羹を堯に進む、堯之を彭城に封ず、夏を歴、殷を經、周に至る、年八百歳と謂ふ、欲留不得住、八百九百千萬と長きが如きも、遂には留まるを得ず、老少同一死、不良も善良も、老年も少年も、死は公

平なり、賢人も愚人も皆同じ、日醉は日日酒に醉うて、憂患の事を忘れ、將は晉人發語の詞、非促齡具、酒は決して促齡卽ち年を促縮する具にあらず、立善常所欣、善は前章の如く德と功と言となり、誰當爲汝譽、汝は形と影を指して云ふ、甚念は痛念と同じ、痛念するときは反つて吾生卽ち我が身體を損する、是の故に正宜委運去、天運に委せてクヨクヨすること勿れ、縱浪は放浪と同じ、大化中、大鈞造化の中に放浪して、不喜亦不懼、喜の爲め心を動かされ、懼の爲め亦動かされず、應盡便須盡、此の句は二義に解釋するを得、形影が盡くべき時來らば盡く、(一義) 義務の盡くすべきは盡くすべし、(二義) 淵明が平生の志より言へば第二義が確當ならんし、題目の上から列すれば、第一義を取るべきか、無復獨多慮、溫謙山曰く形影は盡くる時あり、惟神は則ち不滅と、溫の意亦第一義に依る、去聲六御一韻、張爾公曰く、淵明、世人擾擾、擧世營營を事とせざるを悲む、故に神釋に托して以て之を警むと、葉夢得曰く、死生禍福を以て其の心を動かさず、泰然として順に委す、乃ち神の自然を得、此れ釋氏謂はゆる斷常の見なり、此の公、天姿超邁、眞に能く生に達して世を遺ると、葉が評極めて善、但し釋氏所謂斷常見と曰ふは大に誤る、佛敎を學ばざる失、斷常見は極めて惡意味に用ふ、然るを善意味に取りたるは笑ふ可し、

【大意】 形と影との問答を、精神之が審判を爲すなり、造化は固無私なり、無私なるが故に其の力は普遍なり、萬物盡く形影は森著たり、而して人は天地の中を占む、其の中を占めて生を保つ所以の者は、我卽ち此の神あるを以ての故ならずや、我と形影とは物異る、我は形無し、見るべからず、君は形あり、見るべし、然れども生れると同時に神と形と影とは依附して離れず、形影善なれば神も亦善、形影惡なれば神も亦惡なり、其の關係や極めて深大なり、唯形影は早晚滅沒せざるべからず、三皇も彭祖も、聖人も凡人も、賢者も愚者も、留まらんと欲するも能はず、是に於てか我は形影に勸告する、前敍の如く三皇も彭祖も、遂には滅沒する、然らば生前に憂を忘るる爲に、酒を飮み、人間の總てを天運に委せ置き、唯我が善と思ふことを作し、以て身後の芳譽を遺せ、其の身後の芳譽を遺すに至るの力は、我卽ち精神である、精神は大化の中に縱浪して不滅なり、其の不滅こそ形影をして徒生せしめざりし功なり、故に盡くすべきを盡くして、無用なる憂苦を爲す莫れ。

九日閑居　幷序

九日閑居　幷に序

余閑居。愛重九之名。秋菊盈園。而持醪靡由。空服其華。寄懷於言。

余閑居、重九の名を愛す、秋菊園に盈ち、而して持醪由靡し、空しく其華を服して、懷を言に寄す、

世短意常多。斯人樂久生。　世短くして意常に多し、斯人久生を樂ふ、

日月依辰至。擧俗愛其名。　日月辰に依つて至る、擧俗其の名を愛む、

露凄暄風息。氣澈天象明。　露凄として暄風息み、氣澈して天象明か、

往燕無遺影。來雁有餘聲。　往燕遺影無く、來雁餘聲あり、

酒能祛百慮。菊爲制頽齡。　酒能く百慮を祛け、菊は爲頽齡を制す、

如何蓬廬士。空視二時運傾一。　如何ぞ蓬廬の士、空しく時運の傾くを視る、

塵爵恥二虛罍一。寒華徒自榮。　塵爵虛罍を恥ぢ、寒華徒に自ら榮ゆ、

斂レ襟獨閑謠。緬焉起二深情一。　襟を斂めて獨り閑謠し、緬焉深情起る、

棲遲固多娛。淹留豈無レ成。　棲遲固に多娛、淹留豈成ること無からん、

【注解】九日は九月九日、日月皆陽の數に値ふ、因つて以て節の名とす、俗其の名を嘉し、以て長久に宜しと爲し、讌酒興懷す、後漢より行はる、重九は三月三日を重三と言ふが如し、重陽とも茱萸節とも吹花節とも曰ふ、後漢の桓景、費長房に隨つて遊學す、長房謂つて曰く、九月九日、汝が家に厄あり、急に家人をして各の絳囊を作り、茱萸を盛り、臂に繫け高きに登り、菊花酒を飲ましめよ、此の禍消す可し、景、其の言の如くす、家に還れば、雞犬倶に暴死す、醪は濁酒なり、服は餐服、酒不幸にして今は無し、但し菊の華のみを服ふ、是の故に感懷を言辭に寄す、世短意常多、漢詩に、人生不レ滿レ百、常懷二千歲憂一、此の十字を淵明は五字にて言表す、斯人は多くの人を指す、樂久生、久生を樂ふ爲めには全力を傾注して、藥を飲み過ぎて死んだ天子が澤山あり、淵明は聊か之を嘲ける、日月依辰至、日月の會を辰と曰ふ、倶に九の數に會す、舉俗、普通一般の多くの俗人、愛其名、重九の音が長久の音に通ずるを以て愛するなり、支那人も日本人も西洋人も、一般の俗は、古今同一なり、露凄、洋暦の九月は猶ほ炎暑なれど、古暦の九月は最早秒秋なり、露氣降りて凄其、暄風卽ち暖風息んで、冷風と代る、氣澈天象明、秋氣は清澈なれば、天象極めて澄明なり、往燕無遺影、燕は春晩に來りて、秋日には已に去る、來雁有餘聲、雁は秋に來りて冬に去る、今正に其の來時、餘聲ある所以、祛は攘ふなり搖ふなり、卻くるなり散らすなり、菊花を水に插して飲めば、能く疾を瘳し壽を延ばす、制頹齡なる所以、爲を「コレ」と訓む、大典節の發明に由る、蓬廬士は淵明自身を云ふ、時運傾、晉室の運傾き去るを觀るに忍びざるなり、爵は酒杯、罍は音「ライ」訓「モタヒ」酒樽の別名なり、爵は塵に汚れ、罍は虛し、飮まんと欲するも由なし、寒華は菊花、徒自榮、酒を飲んで賞する人なし、花も亦徒らに榮ゆるのみ、斂襟は衣襟を正斂する、閑謠、閑も亦徒なり、聲を發して詩を謠ふ、緬焉は一義は義遠の貌、二義は思慕の貌、今は此の兩義を含む、起深情、公の爲めの情、私の爲めの情にあらず、棲遲は偃息なり、固多娛、憂中の娛、強ひて此の語を發するなり、淹留豈無成、淹は久しなり、留るなり、他郷に居りて淹留するも、何事か成る所あらんとなり、下平聲八庚一韻、韻は九青なれども、古韻通用す、沈歸愚曰く、起句、古詩の人生不滿百の二句に比すれば、錬り得て更に簡、更に盡なりと、

【題義】九日は九月に限る、故に九月の字を付せず、是の日は重陽、宜しく酒を斟み、菊を餐し、佳節を賞すべきなり、然るに菊花は我が園に發けども、誰一人酒を持來る者なし、是に於てか唯空しく九華を服し、其の凄情を歌ふのみ、

【大意】人世は信に短し、而かも何事か作さんと欲する意多し、是の故に久生卽ち長生を希望する、而かも日月は駸駸として進み、春も過ぎ、夏も去り、遂に秋九月九日に至る、九日の名や舉俗一齊に愛す、炎風は息み、露氣は凄、天象は明かにして、天氣は清澈なり、燕は影無しと雖も、雁は餘聲あり、是の日に當りてや、所謂佳節、酒を飲んで百慮を袪くべし、菊英を餐して以て長生を計るべし、舉俗皆此の如くなるに、蓬廬の士、獨空しく時運の傾くを視るは抑も如何ぞや、我豈是の佳節を喜ばざらんや、如何せん爵は塵れて、罍には酒無し、唯中庭の菊花のみ開きて榮あるものの如し、聊か之に對し閑謠し、國家の爲め深情を起し、此の如くにして固より娛多し、亦何ぞ酒の有無を言はん、淹留の間には何物か得ることもあらう、何事か成ることもあらう。

歸田園居　六首

田園の居に歸る　六首

少無適俗韻。性本愛邱山。　少うして俗韻に適する無し、性本邱山を愛す、

誤落塵網中。一去三十年。　誤つて塵網の中に落ち、一去三十年、

羈鳥戀舊林。池魚思故淵。　羈鳥舊林を戀ひ、池魚故淵を思ふ、

開荒南野際。守拙歸園田。　荒を南野の際に開き、拙を守りて園田に歸る、

方宅十餘畝。草屋八九間。　方宅十餘畝、草屋八九間、

楡柳蔭後簷。桃李羅堂前。　楡柳後簷を蔭ふ、桃李堂前に羅す、

曖曖遠人邨。依依墟里煙。　曖曖たり遠人の邨、依依たり墟里の煙、

狗吠深巷中。雞鳴桑樹巓。　狗は吠ゆ深巷の中、雞は鳴く桑樹の巓、

戶庭無塵雜。虛室有餘閒。　戶庭塵雜無く、墟室餘閒あり、

久在樊籠裏。復得返自然。　久しく樊籠の裏に在り、復自然に返るを得たり、

【注解】少は少年、少年の時より俗韻とは適せざる性質なり、邱山は俗人の愛するものにあらず、自分は到底俗人と和する者にあらず、然らば塵網卽ち官途に奔走せしは如何と難ずる者あるときは、是れ誤つてなりと言ふべきのみ、一去三十年、三は論の誤字ならんと劉履言へり、或は謂ふ十三年の誤と、或は謂ふ巳の誤と、太元十八年起つて州祭酒と爲る、時に年二十九、而して彭澤の令と爲りて歸る、纔かに一星霜、是を以て知る三十年の誤は明白なることを、巳十年か、踰二十年か、十三年か、此の三者の中ならん、羈は旅なり、羇に作るは誤る、羈鳥戀舊林、鳥すら本を忘れず、況んや人に於てをや、陸士衡の句に、羈鳥戀舊林とあり、淵を以て泉に代ふ、味あり、剽竊にはあらず、池魚思故淵は張景陽の句に、行雲思故山とあり、行雲を改めて池魚と爲す、亦味あり、剽竊にはあらず、開荒南野際、南野が荒蕪せるを開拓し、以て肥沃なる園田と爲さん、人は拙と笑はん、我は拙を守らん、此の園田こそ我に於て舊林なり故淵であるなり、方宅も草屋も非常に異ならず、十餘畝の建物と八九間の建物とがある、楡は「ニレ」なり、楡と柳と桃と李と一方は深蔭を爲し、一方は羅列す、春光正に爛漫たり、曖曖は昧の貌、『楚辭』に時曖曖其將罷とあり、遠人邨、遠ければ曖昧なり、依依は舍るに忍びざるの貌、墟は種種の義ある、高貴貨物輻輳の處を墟と云ふ、然れども墟里は墟落と同義、部落を曰ふなり、狗吠深巷中、雞鳴桑樹巓、古詩に、雞鳴高樹顚、狗吠深宮中とあり、宮を巷と爲し、高を桑と爲すのみ、而して其の差千里、塵雜無ければ餘閒ある所以、虛室は室に長物無きなり、久在は十年間を云ふ、樊籠は人の塵網に縛せらるるは猶ほ鳥の樊籠に繫がるると同じ、返自然、自然は本性の好む所、今此に歸す、其の愉快何ぞや、十五刪と一先は古通韻なり、曖曖以下二十字は、自然の儘を自然に敍して、奇趣言ふ可からざるものあり、蔡絛公曰く、老死して返るを知らざる者多し、淵明が此の詩を讀み、能く愴然たらずやと、

【題義】城市は不自然の事多し、園田は自然の味多し、而かも自分は役人と爲つて久しく此の自然に背き居りしは、今其の誤りなりしを知る、是に於てか十三年前の自然に歸り、其の生を遂げんとなり。

【大意】我は少年の時より通俗と適せず、性質は邱山の靜趣を愛して、通俗の榮達を好まず、一旦誤つて俗界の塵網中に落ち、其の塵網中に起臥すること十有餘年、フト本性に反りて之を省れば、羈鳥は飛ぶに倦んで舊林を戀ひ、池魚は泳ぐに倦んで故淵を思ふ、鳥魚すら此の如し、人豈然らざらん

や、是に於て乎、田園に歸畊して、荒蕪を開拓し、異拙を固守せん、十餘畝の宅、八九間の屋、而かも楡柳あり、桃李あり、前後高低皆好し、郁里の氣分、曖曖たり、依依たり、狗吠ゆるも盜兒の爲にはあらず、鷄鳴くは時正に午を報ずるなり、彼も自然、此も自然、一として不自然のもの無し、我は久しい間、不自然の生を送りしが、今日よりは復自然に返るを得たりとなり、

野外罕人事。窮巷寡輪鞅。　野外人事罕に、窮巷輪鞅寡し、

白日掩荆扉。虚室絶塵想。　白日荆扉を掩ひ、虚室塵想を絶つ、

時復墟曲中。披草共來往。　時に復墟曲の中、草を披きて共に來往す、

相見無雜言。但道桑麻長。　相見て雜言無く、但道ふ桑麻長ずと、

桑麻日已長。我土日已廣。　桑麻日に已に長じ、我が土日に已に廣し、

常恐霜霰至。零落同草莽。　常に恐る霜霰の至るを、零落草莽に同じ、

【注解】輪鞅は他に多く見ざる成語、鞅は元來頸靼なりと注して、牛馬の頸に繫ける「チカラガハ」とす、輪は車輪なること勿論、然らば、窮巷には貴人搢紳の馬車の頻寡しと解すべし、猶後賢の考を待つ、塵想は、諫山は「圓覺經」を引いて注す、淵明何ぞ必ず經に據らん、虚室本無塵なり、無塵なればこそ思想も亦塵を著けずとなり、墟曲は墟里と同じ、披草共來往、田夫野老と往來する、桑麻の日日生長する談話以外、更に塵談には及ばず、耕作に努力するが故に我土も日已廣、田畝が廣大となる、然らば恐るる者は猶霰のみ、折角努力して生長せしめたる桑麻も霜霰に會うては、零落して見る影も無く、全く草莽と同じく何の用も爲さざるに至る、南楚の俗、草を稱して莽と曰ふ、劉履曰く、是の時朝廷將に傾危の禍あらんとす、故に是の喩あり、靖節田野に處すと雖も、國を憂ふるを忘れざる、此に于て亦見るべし、上擧二十二葉の僞、

【大意】歸田後の事を敍す、野外は城中と異りて、人間の俗事あること罕に、窮巷は盛都と異りて、貴人の車馬來ること寡し、主人は白晝に門扉を啓かず、虚室に端坐して以て塵想を起さず、來往する者は、田夫野老のみ、相見て談笑するは、但桑麻が生長する事のみ、而かも努力の結果、我が所有地は日に廣大となる、常に恐るる所は霜霰なり、折角生長せる桑麻も之が爲め零落して、草莽と同じく無用のものとなればなり、

種豆南山下。草盛豆苗稀。　豆を種う南山の下、草盛にして豆苗稀なり、

晨興理荒穢。帶月荷鋤歸。　晨に興きて荒穢を理し、月を帶び鋤を荷うて歸る、

道狹草木長。夕露沾我衣。　道狹くして草木長せず、夕露我が衣を沾す、

衣沾不足惜。但使願無違。　衣の沾ふは惜むに足らず、但願をして違ふこと無から使ん。

【注解】種豆南山下、草盛豆苗稀、李公煥曰く、漢書（卷六十六）楊惲傳に、田二彼南山一、蕪穢不レ治、種二一頃豆一、落而爲レ萁と、詩意本づく所とす、勞して功無きことを言ふ、晨興理荒穢、勞して功得きを知るも、猶は早晨に興きて以て荒田の蕪穢を整理する、而し

て黄昏に月を帶びて歸る、山道なれば狹し、草も長ずと言ふ可からざるも、夕露は降りて我衣を沾すに至る、衣なぞの沾は貪着せず、但我が願ふ所の違はざらんことを、豆の長大となるを願ふのみ、東坡曰く、夕露衣を沾す故を以て、其の願ふ所に違ふ者多きなりと、温陵山曰く、帶月の句、眞にして警、詩中に畫ありと謂ふ可しと、平聲五微の韻、

【大意】南山の下に於て豆を種殖したり、而かも豆は長せずして、但艸のみ長ず、而かも努力を辭せず、早朝に起き往きて以て荒穢を整理す、終日努力して黄昏に月光を帶びて歸家す、山道なるが故に狹くして艸未だ長せず、艸上の露氣は頻りに我が衣の裳を沾す、若し努力の功が空しからず、豆が長するに至らば、衣裳の沾ふなど何ぞ惜むに足らんや、而かも晉と稱する豆は遂に長せず、淵明の功は空しかりしなり、

久去山澤游。浪莽林野娛。　久しく山澤の游を去てて、浪莽林野に娛む、

試攜子姪輩。披榛步荒墟。　試みに子姪輩を攜へて、榛を披いて荒墟に步す、

徘徊邱隴間。依依昔人居。　徘徊す邱隴の間、依依たり昔人の居、

井竈有遺處。桑竹殘朽株。　井竈遺處あり、桑竹朽株殘る、

借問採薪者。此人皆焉如。　借問す薪を採るの者、此の人皆焉如、

薪者向我言。死沒無復餘。　薪者我に向つて言ふ、死沒復餘無し、

一世異朝市。此語眞不虛。　一世朝市に異ならん、此の語眞に虛ならず、

人生似幻化。終當歸空無。　人生幻化に似たり、終に當に空無に歸すべし、

【注解】去は舍て去るなり、山澤游は、君子獨遊を意味するならん、林野娛は、野人牧童と共に遊ぶを意味するならん、然らずんば山澤と林野と區別する必要は無し、浪は放、莽は粗率、榛は荊榛、荒墟は荒涼たる邱墟を云ふ、隴は『説文』に大坂なり、昔人の居住せし事を聞いては依依の情を遣り、井竈、人の棲息する處は井と竈とは闕く可からず、今は人無くとも石井石竈のみ空しく遺處を保存する、而して桑樹や竹林は唯根株を殘す、薪は桑や竹を括して言ふ、採薪者、當時薪を採るの者、此人は採薪者を指す、焉如は何如と同じ「ドウシタ」と問ふ、薪者は今生活する人、死沒無復餘、昔採薪者の多くは死沒して餘す所の人は少しと答ふ、一世は人間の一代、異朝市、人間の一代は、朝日の互市と異ならんや、五十年、六十年、忽忽に過ぎ去るを云ふ、此語は一世異朝市の五字を指す、眞不虛、事實として信ずべし、人生似幻化、終當歸空無『列子』に知幻化之不異生死也とあり、猶ほ變化と言ふが如し、乍ち發、乍ち隱るるが幻、終には絕滅して見る能はざるに至る、卽ち空無なり、査初白曰く、先生、釋（佛教）理に精し、但社（白蓮社）に入らざるのみと、蓋し此の幻化は『列子』より來る、淵明決して釋理に據つて言ふにはあらず、六魚と七虞は古通韻なり、

【大意】山澤は隱遁者の遊びなり、林野は樵農者の遊びなり、隱遁者とは久しく遊ばず、樵農者とのみ近來往復する、時に子姪輩を攜帶して或は荒榛を拔きて荒墟に步し、或は丘壠の間に徘徊して情を遣る、時に突然感に入りたることあり、何ぞや、昔人の舊居是れなり、舊居は卽ち廢居、屋內には井竈が頹危の儘存し、屋前には桑竹が朽株を横たふ、凄其の情禁ずる能はず、就いて問ふ薪を採る者に、

此の家に在りし人人は今は皆焉に如きしぞ、同業者の採薪者は答ふ、其の多くの人は大抵死沒して、餘る所の人は幾人も無しと、此を聞いて淵明は思ふ、人の一生一代は朝日の互市に異ならず、忽ちにして有り、忽ちにして無し、決して古人は吾を欺かざるなり、乃ち思ふ人生は幻化と異ならざることを、貴人も賤人も、薪者も樵者も、終には皆空無に歸すべきなりと、宜しく生前に於て林野の娯を求むべきなり、

悵恨獨策還。崎嶇歷榛曲。　悵恨獨策して還る、崎嶇榛曲を歷、

澗水淸且淺。可以濯吾足。　澗水淸且淺、以て吾が足を濯ふ可し、

漉我新熟酒。隻雞招近屬。　我が新熟酒を漉し、隻雞近屬を招く、

日入室中闇。荊薪代明燭。　日入つて室中闇く、荊薪明燭に代ふ、

歡來苦夕短。已復至天旭。　歡來つて夕短に苦しむ、巳に復天旭に至る、

【注解】悵恨は「イタミウラム」なり、策は杖なり、崎嶇は山路の平ならざる貌、山は榛樹多ければ榛曲と云ふ、水淸淺、濯吾足、意味は『漁父辭』より來るも、彼は水の濁るを言ひ、此は水の淸むを言ふ、漉は音「ロク」訓「コス」なり、『說文』に浚なり、浚は浚淘、米を淅すなり、新酒を漉ぎ濾るなり、隻雞は字の如く一匹の雞、『魏志注』に祀故太尉橋公文云、承從容約誓之言、路有經由、不以斗酒隻雞、過相沃酹、車過三步、腹痛勿怪、雖臨時戲笑之言、非至親之篤好、胡肯爲此辭耶、淵明が據る所なり、近屬は近親なり、日入室中闇、荊薪代明燭、荊薪を焼きて以て燭に代ふ、田家の常態とす、歡來苦夕短、巳復至天旭、歡談の樂、天の曉に達するを知らざるは、亦人間の常事とす、入摩二泆の讀、陸佃父曰く、荊薪代燭、眞致質然、

【大意】乙地甲地を徘徊して、屢ば崎嶇たる榛曲を歷て家に歸る、家は南山の下に在りて、澗水は極めて淸淺なり、此に於て吾足を濯ひ、而して後、我が新熟酒を漉し、酒の肴としては一匹の雞あり、以て近親の人を招燕するに足る、夜飲して室中闇ければ、荊薪を焼いて以て蠟燭の明に代用す、既にして懽談興の盡くるを知らず、夜の短きを苦しむ、乃ち翌朝の天旭を見るに至る、

種苗在東皐。苗生滿阡陌。　苗を種ゑて東皐に在り、苗生じて阡陌に滿つ、

雖有荷鋤倦。濁酒聊自適。　荷鋤の倦むありと雖も、濁酒聊か自から適す、

日暮巾柴車。路暗光已夕。　日暮柴車を巾ひ、路暗くして光巳に夕、

歸人望煙火。稚子候簷隙。　歸人煙火を望む、稚子簷隙に候す、

問君亦何爲。百年會有役。　君に問ふ亦何をか爲ん、百年會ず役あり、

但願桑麻成。蠶月得紡績。　但願ふ桑麻成り、蠶月紡績を得んことを、

素心正如此。開徑望三益。　素心正に此の如し、徑を開きて三益を望む、

【注解】皐は皋の正字とす、『詩經』に鶴鳴于九皐とあり、澤と同じ、東皋に種ゑし苗が成長して以て東阡南陌に彌るに至る、田間の小路を通稱して阡陌と曰ふ、畊作の勞に倦めば、之を慰するに濁酒あり、巾は名詞の場合「キン」なり、動詞の時「オホフ」讀となる、衣を以て車を飾るなり、乃ち柴車を覆ふなり、煙火、黃昏より夜に及べば燈火を點めて以て我が家に歸る、稚子は父の歸るを簷隙に於て候す、問君、誰を君と指すにあらず、所謂自問自答の辭、何爲、農事に勤勞して結果は何爲ぞと、百年、唯役役として過ぎるのみならずや、但願桑麻成、勞に酬ゆるものは卽ち桑麻が立派に成る、蠶月は飼蠶の時を謂ふ、『毛詩』に「蠶月條桑」とあり、清の謝振淵曰く、吳興（地名）四月を以て蠶月と爲すと、紡績、蠶より絹絲を取り、乃ち紡績を得、素心は平生の心、三益は『論語』に益者三友の語あり、此の種苗詩一首は、或は江淹の作と爲し、或は淵明の作と爲し、多少の議論あり、韓子蒼曰く、田園六首、末篇乃ち行役を敍し、前五首と類せず、今俗本乃ち江淹が種苗詩を取つて末篇と爲す、東坡亦其の誤に因つて之を和す、陳述の古本止五首あり、予（子蒼）以爲へらく、皆非なり、當に晏相國本の如く題して雜詠六首と爲すべし、江淹雜擬詩亦頗之に似たり、但、開徑望三益の一句、類せずと、湯諫山曰く、案ずるに此の詩通體陶に類せず、雖有荷鋤倦の句尤も類せず、後人の贋擬たる疑ひ無し、之を細按するに、亦江淹が作にもあらず、韓子蒼が題目を改むるが如きは亦牽强附會のみと、今清譚案ずるに、陶が作と爲すものも、贋作と爲すものも、共に證左無し、此の句類せず、彼の句類せずとして贋と斷ずる者は、陶公は終身同一語を疊み、同一意を敍するのみと心得る失なり、或る時は此の如し、亦或る時は此の如し、同一事、同一意を繰返すものならんや、余は之を淵明が作と信ずるものなり、入聲十一陌の韻、

【大意】苗を東皋に種殖すれば、苗は成長して阡陌に滿つ、鋤畊に倦むときは、濁酒の以て我を慰安するあり、日暮には柴車を巾うて暗路を家に歸る、家人や稚子は其の歸るを簷隙に仕候するあり、人あり何爲れぞ此の如くなるやと問はば、卽ち答ふ、努力の結果、桑麻も成長して、紡績と爲るの時は來る、此が爲めに努力する素心曾て變せざるなり、而して我は直を友とし、諒を友とし、多聞を友とし、是の三益を希望するなり、

問來使

來使に問ふ

爾從山中來。早晚發天目。　爾山中より來る、早晚天目を發するや、
我屋南窗下。今生幾叢菊。　我が屋南窗の下、今幾叢の菊を生ずるや、
薔薇葉已抽。秋蘭氣當馥。　薔薇葉已に抽づ、秋蘭氣當に馥しかるべし、
歸去來山中。山中酒應熟。　歸去來山中、山中酒應に熟すべし、

【注解】使者が天目山中より來るなり、天目山は浙江省臨安縣の西北五十里、於潛縣と安吉縣との界に在り、我屋は淵明が我屋の狀態を使者に問ふ、菊は幾叢開くや、薔薇は如何、秋蘭は如何と、一は花、一は葉、一は香と各の別に問ふ、使者の答に因つて、早歸去來を想ふ、亦酒も新酒が芳正に熟する期なるを知ればなり、此の詩は明白に淵明が作にあらず、淵明が家は天目山下にあらず、柴桑と同一に見たる者の僞作とす、東磵曰く、晚唐の人、太白が感秋詩に因つて之を僞作すと、郎瑛曰く、此の篇乃ち蘇子美（宋人）が作る所と、嚴滄浪（宋人）曰く、此の篇、體製氣象、陶と類せず、太白が逸詩なるやも知れず、後人謾に取つて陶集に入れたるのみと、黃勒白（清人）曰く、此の旨、東坡、和を缺く、以爲へらく陶作にあらずと、然れども太白の詩に云ふ、陶令歸去來、山中酒

處し熟、正しく此の篇の結句を用ふ、疑ふ可き無しと、謙山（詩人）曰く、此の篇、陶の真實無し、後人の作たる疑ひ無し、

【大意】偽作と斷ずるものに於て、大意を說くは無用に似たれども、詩其の物は脈絡貫通するが故に、決して舍つべきものにあらず、使者に問ふ、爾は山中より來りしなるが、其の天目を發せしは早晩でありしぞ、又我が家には曾て菊を培養して居りしが、今日では幾叢の菊が開きしぞ、又薔薇は如何である、秋蘭は如何である、我が心では今や皆其れ好からんと思ふなり、一度好からんと思ふ念が起れば、一刻も早く歸去來を歌うて此の處を去らんと思ふ、況んや山中の酒も今正に豐熟の期なるに於てをや、

遊斜川　并序

斜川に遊ぶ　并に序

辛丑正月五日。天氣澄和。風物閒美。與二三鄰曲同游斜川。臨長流。望層城。魴鯉躍鱗於將夕。水鷗乘和以翻飛。彼南阜者。名實舊矣。不復乃爲嗟歎。若夫層城。傍無依接。獨秀中皐。遙想靈山。有愛嘉名。欣對不足。率爾賦詩。悲日月之遂往。悼吾年之不留。各疏年紀鄉里。以記其時日。

辛丑正月五日、天氣澄和、風物閒美なり、二三の鄰曲と、同じく斜川に游ぶ、長流に臨み、層城を望む、魴鯉鱗を將に夕ならんとするに躍らし、水鷗和に乘じて以て翻飛す、彼の南阜は、名實に舊し、復乃ち嗟歎を爲さず、若し夫れ層城、傍に依接無く、獨り中皐に秀づ、遙かに靈山を想ひ、嘉名を愛するあり、欣對足らず、率爾詩を賦す、日月の遂に往くを悲み、吾が年の留まらざるを悼む、各の年紀鄉里を疏し、以て其の時日を記す、

【注解】辛丑は東晉の安帝が隆安五年なり、淵明、年正に三十七、正月五日は人日前二日とす、別に祝日にはあらず、鄰曲は鄰人なり、斜川は地理未詳、或は曰く今の江西南康府なりと、駱庭芝が「斜川辨」に栗里と遠からざる處なるべしと、層城は駱曰く後の落星寺是れなりと、南阜は駱曰く卽ち廬山なり、山に南北あり、故に南阜と稱すと、名實舊、此の語に據れば駱が說、誤らずと思はるるなり、何故に嗟歎せざるやと問はば、廬山の名の變ぜざるを以てなり、世が新と爲ることを側面に於て嗟歎すればなり、層城は大澤中に獨立するもの故に依擒なし、靈山は南阜卽ち廬山なり、我が邦人が富士山の名を愛する如く、淵明は廬山なる嘉名を愛惜したるなり、欣對不足、單に賞するのみにては不足の觀あり、乃ち率爾に筆を執り此の一章を賦す、唯日月は匆匆、此の諧游も過ぎ易し、是に於て各の年紀と其の鄉里とを書し、後來の記念となす、然るに年紀鄉里の記は今日傳はらざるなり、

開歲倏五日。吾生行歸休。
念之動中懷。及辰爲茲遊。
氣和天唯澄。班坐依遠流。

開歲倏ち五日、吾が生行くゆく歸休せん、
之を念へば中懷動く、辰に及んで茲遊を爲す、
氣和して天唯澄む、坐を班して遠流に依る、

弱湍馳文魴。閒谷矯鳴鷗。　弱湍文魴馳せ、閒谷鳴鷗矯たり、

迥澤散游目。緬然睇層邱。　迥澤游目を散じ、緬然層邱を睇る、

雖微九重秀。顧瞻無匹儔。　九重の秀微しと雖も、顧瞻匹儔無し、

提壺接賓侶。引滿更獻酬。　壺を提げて賓侶に接し、滿を引いて更に獻酬す、

未知從今去。當復如此不。　未だ知らず今より去り、當に復此の如くなるべきや不やを、

中觴縱遙情。忘彼千載憂。　中觴遙情を縱にし、彼の千載の憂を忘れん、

且極今朝樂。明日非所求。　且く今朝の樂みを極めん、明日は求むる所にあらず、

【注解】開歲、正月なれば開歲、五日を五十に作る本あり、誤謬知り易し、歸休は官を罷め家に歸り休息するを云ふ、三十七にして此の語を發するは早しと思へども、淵明としては三十七已に此の念ありしは事實なり、念之、此の歸休の事を念へば、中懷豈振動せざるを得ん、せめて此の鬱を遣るには茲遊を爲し以て慰安を求めん、幸に天氣調和して清澄なり、班は「ワカツ」分なり、鄰曲の人と各の舟中に坐を分次して遠淺に及ぶなり、弱湍は急瀨の淺弱き處、此の急瀨を文魴卽ち和名の「ナヨシ」細鱗にして甚だ美、此のナヨシが騰するを見る、而して一方の閒谷には鷗「カモメ」が鳴いて而かも矯、卽ち元氣好し、迥澤は遠澤、散游目、遠方を望むを云ふ、緬然も遠方を云ふ、睇は眄なり、顧視なり、層邱は層城、雖微九重秀、微は無の意、天を衝くの秀色は無きも、顧瞻無匹儔、瞻れば何となく他に匹儔の無き形を呈露す、壺は酒壺、賓侶を接待する、引滿は充分に酒を盛るなり、今後も此の如き時會あるや不やは知る能はざる所、中觴は、謙山曰く、酒中を言ふなりと、縱は自由にすること、遙情は遙懷の情、忘彼千載憂、「古詩」に、人生不滿百、常懷千載憂、小人は一時の憂あるも、千載の憂は無し、君子は千載の憂を懷くも、一時の憂は無し、今は暫く其の憂を忘れ、今日此の遊の樂を極むべし、明日非所求、剎那の樂にて足る、何ぞ明日を云爲せんや、下平聲十一尤一韻、層城に就いて更に温謙山の說を擧げん、曰く、序中謂ふ所の層城は、名勝志に據れば、層城山卽ち烏石山、星子縣の西五里に在り、落星寺有り、此に據れば則ち層城是れ山名なり、寺名にあらず、蓋し是の山、落星寺有るのみと、謙山又曰く、鶴矯の二字、奇にして錬、後幅凄然、絕えんと欲す、感慨之に係ると、

【題義】正月五日は別に祝日にはあらず、但し正月なり、天氣澄和なり、家に居らん與は出て遊ぶに可し、斜川の水は美なり、層城の望は佳なり、日月の迅速に過ぐるは悲しむべく、吾年の留まらざるは悼むべきも、今日の樂しむべきは則ち樂しむべし、明日の如何は亦求むる所にあらずとなり、

【大意】正月五日、天氣は好し、風物は美なり、是に於てか鄰人を誘うて斜川に遊ぶ、下を瞰れば長流あり、上を望めば層城あり、高山あり、魴鯉も水鷗も、各の其の性を娛しむ、南阜は我に於て、嗟嘆せざるにもあらず、而かも最も我が平生より愛する所のものは彼の靈山であるなり、今之に對觀して、欣喜を表するに何を以てせん、唯詩を賦するの善きに如かず、既にして思ふ、日月は匆匆、吾が生は限あり、是の游も記せずんば、後遺忘なからず、乃ち其の年紀を記し、序及び詩を作る』夫れ吾が身は行くゆく歸休すべし、是の歸休の事を念へば、種種の感懷動きて止ます、幸に今日は天氣清朗なり、斜川の游を爲して、聊かなりとも憂慼を散せん、物皆自然を娛む、湍を馳する文魴、谷に嬌たる鳴鷗、聳ゆる層邱も、重なる山嶺も、自然ならざるは無し、之に對し、充分に飲み、充分に賞

し、賓も侶も、共に懽談すべし、今日樂しまずんば、明日亦期すべからず、況んや今後此の如きの游有るや無きやを知らざるに於てをや、

示周續之祖企謝景夷三郎　周續之、祖企、謝景夷、三郎に示す

負痾頽簷下。終日無一欣。　痾を負ふ頽簷の下、終日一欣無し、
藥石有時閒。念我意中人。　藥石時有りて閒、念ふ我が意中の人、
相去不尋常。道路邈何因。　相去る尋常ならず、道路邈として何に因る、
周生述孔業。祖謝響然臻。　周生孔業を述ぶ、祖謝響然として臻る、
道喪向千載。今朝復斯聞。　道喪びて千載に向なんとす、今朝復斯に聞く、
馬隊非講肆。校書亦已勤。　馬隊講肆にあらず、校書亦已に勤む、
老夫有所愛。思與爾爲鄰。　老夫所愛あり、爾と鄰を爲さんと思ふ、
願言誨諸子。從我潁水濱。　願うて言に諸子に誨へん、我に潁水の濱に從へ、

【注解】周續之、字は道祖、雁門廣武の人、劉遺民、陶淵明と共に潯陽三隱と謂ふ、祖企、謝景夷の二人は未詳、後擧たるは明白なり、負痾は發病と同じ、病臥の身、一欣無きは普通なり、藥石有時閒、今日は服藥せぬも可いと云ふ日もあるなり、意中人は氣を能く知り合うた人を云ふ、相去不尋常は、我居と彼居と道路相隔たる意なり、邈は道の遼遠を云ふ、何因、焉に因らんか、事に因らんか、周生述孔業、續之は孔子の儒業を述作するに勤勞す、祖と謝とは周生の業を助く可く、響然として臻る、要するに皆同志の士と云ふことなり、道喪向千載、何孟春曰く『莊子』に、世、道を喪ふ、道、世を喪ふ、世、道と交々相喪ふなり、今朝復斯聞、喜ぶべきことは、其の喪へりと謂ふ道を復斯に聞くを得たるなりと、馬隊は、案ずるに凡そ分列羣を成す者皆隊と曰ふ『宋史儀衞志』に、行幸儀衞、宋初三駕、皆以待禮事、車駕近出、止用常從、以行其舊儀、殿前司隨駕馬隊、昭明太子序に曰く、刺史檀韶、苦請續之出州、與學士祖企、謝景夷三人、共在城北講禮、加以讎校、所住公廨、近於馬隊、是故淵明示詩云云、以て知るべし、講肄の肄徒にあらざるを、肄は肆と同じ、講習を稱して肄業と曰ふ、禮を講じ、書を校するは良に尙ぶべきが、其の所を得ずと、一揚一抑、以て三人を諷喩するなり、老夫は淵明自分を謂ふ、愛は愛惜なり、爲鄰は我と接近せよの意なり、我は諸子を敎誨せん、諸子は自から悟る所あらん、潁水は河南登封縣西境の潁谷より出で、東南に流れ、禹縣臨潁西華商水を經て沙河と合して東流する、許由は堯が位を禪らんとするを逃れて、箕山の下、潁水の陽に去る、巢の岡生は肯て起つて漢高に從はず、皆潁水の邊に隱る、十一眞と十二文は古通韻なり、

【題義】周と祖と謝との三人が靖節と居を近うして棲む、而かも是の三人皆學問を好むの人、靖節は時に病に臥すことあり、慰問して吳れる者は無し、幸に君等三人は、近處なるを以て會談するの便あり、我は近日潁水に游ばんことを欲す、君等三人は僕と一所に同行し玉へとの意にて、此の詩を作り、以て示せしものとす。

【大意】我身に痾あり、每日鬱鬱として欣び無きも、時には氣分の好き日もあり、其の氣分の好き日

には、同氣の人を念うて、以て我が鬱を忘る、而かも其の人三人、我と棲居差や遠し、日夕晤語するを得ず、其の人の業は、所謂孔子の道を講じて、已に喪びたりと言はるる道を千載の下に復た回復せんとするにあれば、老夫も其の人を愛せざるべからず、但惜むらくは、其の講經の場處が宜しきを得ざるに在り、若し道を講ずとすれば、願はくは我と鄰曲を結んで以て潁水の邊に來るがよい、

乞食

飢來驅我去　不知竟何之
行行至斯里　叩門拙言辭
主人解余意　遺贈副虛期
談話終日夕　觴至輒傾巵
情欣新知歡　言詠遂賦詩
感子漂母惠　媿我韓才非
銜戢知何謝　冥報以相貽

乞食

飢來りて我を驅り去る、知らず竟に何くに之く、
行行斯里に至る、門を叩き言辭拙なり、
主人余が意を解し、遺贈虛期に副ふ、
談話日夕を終へ、觴至れば輒ち巵を傾く、
情欣び新知歡び、言詠遂に詩を賦す、
感ず子が漂母の惠に、媿づ我が韓才にあらざるを、
戢を銜んで知る何ぞ謝せん、冥報以て相貽いん、

【注解】乞食は、貧士が常態を詠ず、何ぞ必ずしも淵明が實事と言はん、飢を饑に作る本あり、飢饉の成語、饑餓の成語は自から判然、飢餓に迫れば死せざるを得ず、食を乞はざる可からず、何之、何處と定むる無し、東行し南行し、遂に斯里に至る、叩門拙言辭、無心な人に食べる經當しき事は天下に二つと無し、言辭に拙は淵明一人のみならんや、乞食職業の者以外は天下皆拙なるべし、然るに主人は敏くも已に余が何の爲め來るやの意を解くなり、遺贈は金貨か銀貨か紙幣か與れたるなり、副虛期の三字を豈虛來に作る本あり、顧み甲斐の有りしことを言ふ、而かも直ちに辭去せず、談話終日夕、與ふる所の主人と、與へられたる乞者と終日談話する、而かも其の上猶ほ馳走して與れる、觴も巵も共に和訓「サカヅキ」なり、形狀が異るのみ、是の如く優待して與れれば、我が情も欣喜し、主人の新知も歡悅する、言詠遂賦詩、五言の此詩成る、感子、子は主人を指す、漂母は漢の韓信が貧時食を惠みし人、主人は漂母の如き情あるも、我は韓信の如き才を有せざるを媿づとなり、銜戢、謙山曰く、銜は感なり、戢は斂なり、感荷の意、冥報以相貽、竇文煥曰く、時代將に易らんとす、英雄無聊、淮陰（韓信）能く漢を輔け楚を滅す、乃ち漂母に報ゆ、然らずんば亦何に由つて報いんや、板蕩陸沈の歎、此に寄託す、生きて志を世上に伸ぶること能はず、乃ち死して志を地下に伸べんと欲す、尙得べきか、果して何物を貽るべきや、東坡曰く、淵明、一食を得、以て主人に冥謝せんと欲するに至る、哀い哉、哀い哉、大に叩者の口頰に類す、獨余之を哀むのみならず、舉世之を哀まざるは莫し、飢寒常に身前に在り、功名常に身後に在り、二者相待たず、此れ士の窮する所以なりと、今謂ばく、淵明、二姓に事へず、皆に報ゆるに死を以てせんとする志、是に於て顯然、哀い哉、哀い哉、上平聲四支の韻、

【題義】靖節が家に米無き時、出でて他に食を乞ひしもの、然れども其の乞ふの言辭を如何に開いて可きやを知らず、幸に主人は其の意を察し與れ、食は勿論、酒まで馳走して與れ、靖節は欣喜の餘り、漢の韓信が漂母に一飯惠まれし事を想像して、必ず其の志に酬ゆるを期すとなり、

【大意】肉體が饑うれば精神は饑ゑざるも、肉體の爲には驅られて食を他に求めて去る、食を與ふる家は此處であると定めて有る家は、天下に曾て無し、乞ふ者が目的としたる處に向はざるべからず、

是に於て或る里に至る、而して之を乞ふ所以を敍するに言辭は頗る拙なり、其の態度を察して、主人は相當に之に贈る所の物あり、且酒肴まで備へて之を待遇す、遂に乞者と被乞者と共鳴して、互に詩を賦し以て言詠す、乞者は昔し漂母が韓信に一飯を惠みしことを想像し、而かも我は不才、到底韓信に及ぶべきにあらず、韓信は厚く漂母に報いしも、我は此の恩を報するの期あるなしと嗟嘆するなり、

諸人共游周家墓柏下　諸人共に周家墓柏の下に游ぶ

今日天氣佳。清吹與鳴彈。　今日天氣佳し、淸吹と鳴彈と、
感彼柏下人。安得不爲懽。　感ず彼の柏下の人、安んぞ懽を爲さざるを得ん、
清歌散新聲。綠酒開芳顏。　淸歌新聲を散じ、綠酒芳顏開く、
未知明日事。余襟良已殫。　未だ知らず明日の事、余が襟良に已に殫す、

【注解】周家とは周訪の一家を言ふ、晉書（五十八）周訪傳あり、陶侃が微時（家に餘裕の無き時）親に丁り（死者ありしなり）、將に葬らんとす、家中、忽ち牛を失す、一老父に遇ふ、謂つて曰く、前岡に一牛の山汙中に眠るを見る、其の地若し葬らば、位人臣を極めんと、又一山を指して云ふ、此亦其の次なり、當に世〻二千石を出すべしと、言ひ訖つて見えず、侃、牛を尋ねて之を得たり、因つて其の處に葬る、指す所の別山を以て訪に與ふ、訪が父死して焉に葬る、果して刺史と爲る、訪より以下三世、益州と爲る、四十一年、其の言ふ所の如しと云ふ、周家と陶家と世〻姻すと、然らば親戚關係なるなり、淸吹は淸嘯、風の樹木に當りて淸く聞ゆる音を云ふ、鳴彈、鳴は「ナク」彈は「ヒク」淸吹の音を云ふ、柏下人は墓中の人、墓上に松や柏を種うるを常とす、安得不爲懽、墓に對して哀言を發せず、懽言を發するは頗る奇とすべし、淸歌散新聲、墓下の靑士に對して以て淸歌を作り、而して新聲を發す、陳腐の歌は吟ぜざるなり、酒を飲み、明日の事は一切忘れ去る、余が襟懷、良とに已に十分に殫くす、上平聲十五刪の韻、齊丹厓曰く、通首、游樂を言ふ、只第三句、一點周墓、何等の活動簡慣ぞ、若し俗手ならば許多感慨の語を下さんと、陳倩父曰く、達旨觸言、千秋感ずべしと、譚山曰く、陶集中、此の種最も高脫、後人未だ步を學び易からずと、

【題義】親戚なる諸人と、陶家の祖陶侃が未だ富貴ならざる時、恩を受けし周訪が一家の墓を訪うて賦せしなり、

【大意】陶家と周家とは姻戚關係あり、偶ま晴天に乘じて是の周家が墓柏の下に諸人と共に游ぶ、墓邊の淸吹は鳴彈の如く聞ゆ、是れ柏に當る風の音なり、是の音を聞くに連れて、是の柏下に眠る人の淸きを感ず、死して是の好墓田あり、周家の爲め歡ばざるを得ず、是に於て淸歌し、是に於て飮酒す、人間は總て今日あるを知つて、明日あるを知らず、聊か此の刹那を樂しむべし、襟懷も充分に殫すべきなり、

怨詩楚調。示龐主簿遵鄧治中　怨詩楚調、龐主簿遵鄧治中に示す

天道幽且遠。鬼神茫昧然。　天道幽且遠、鬼神茫昧然、
結髮念善事。僶俛六九年。　結髮善事を念ふ、僶俛六九年、

弱冠逢世阻。始室喪其偏。　弱冠世阻に逢ひ、始室其の偏を喪ふ、
炎火屢焚如。螟蜮恣中田。　炎火屢焚如、螟蜮中田を恣にす、
風雨縱横至。收斂不盈廛。　風雨縱横至り、收斂廛に盈たず、
夏日長抱飢。寒夜無被眠。　夏日長く飢を抱き、寒夜被無くして眠る、
造夕思雞鳴。及晨願烏遷。　夕に造れば雞鳴を思ひ、晨に及べば烏遷を願ふ、
在己何怨天。離憂悽目前。　己に在り何ぞ天を怨みん、離憂目前に悽たり、
吁嗟身後名。於我若浮煙。　吁嗟身後の名、我に於て浮煙の若し、
慷慨獨悲歌。鍾期信爲賢。　慷慨獨り悲歌す、鍾期信に賢と爲す、

【注解】 怨詩、怨を主として作る詩、楚調は屈原が楚辭の調子と言ふが如し、漢代已に此の題あり、房中樂とす、（婦人に關することを詠ず） 天道幽遠、鬼神茫昧、此の意は孔子の教を祖述する者は孟子でも荀子でも、其の論ずる所一なり、今何の書に據ると云ふの要なし、結髮は年少の時、念善事、年少の時より善事を爲すの念を持す、而して僶俛即ち勉强努力すること、六九年、即ち五十四年なり、一本に五十年に作る、弱冠は中年即ち壯年、逢世阻、國の爭亂、家の難苦に逢ふ、始室、年二十、偶ま妻君を喪ふ、繼ぎて翟氏を娶る、炎火屢焚如、其の家屢火災に遇うて燒失したるなり、其の上更に中田を螟蜮の爲め荒らされたるなり、螟は「イナムシ」苗の心を食ふ蟲、蜮は「イサゴムシ」沙を含んで人を射る、害を爲すこと狐の如し、苗を害する蟲にあらず、恐らくは蟘の誤ならんかと、其の害の上更に風雨の害と爲る、收斂即ち秋の收穫は廛に盈つるに至らず、一夫の居を廛と曰ふ、極めて小小なるを言ふ、夏日は飢餓の憂あり、寒夜は布團なきの憂あり、是の故に昏夕に造れば早く夜が明ければ可いと思ひ、鳴晨に及べば早く日が暮れれば可いと思ふ、在己、此の不幸に逢ふは己が運命と知る、天の致す所にあらず、盈まざる所以、而かも離憂が目前に悽たるを如何せんや、吁嗟身後名、死して後までも名の稱せらるるが君子の願ふ所、虛名にあらざればなり、名無くして沒するは孔子の鄙人なり、身後の名は大切な事に屬す、而かも我に於ては浮煙の若く思ふ、知命安分の士も非常の災害に遇へば此の言を發するに至る、淵明としては素心にはあらず、慷慨獨悲歌、鍾期信爲賢、鍾子期の子を除く、春秋楚の人、伯牙琴を鼓く、志は高山流水に在れば、子期聽いて之を知る、子期死して伯牙、鼓琴、絃を絕つ、子期死して復世に賞音の者無ければなり、薛易簡の『正音集』に云ふ、琴の操弄、約五百餘人、多く古人幽憤志を得ざるに緣りて作るなり、今子期知音の事を引いて、而して篇に命じて、怨詩楚調と曰ふ、庸つて度調、辭を爲し、絃歌に被らしめんと欲するにあらずやと、下平聲一先の韻、

【題意】 靖節が一家の不幸、連續して起るを嘆き、怨詩楚調なる漢代の意を借りて來り、賦して以て龐と鄧との二人に示せしものなり、

【大意】 天道は幽遠なり、其の理測知すべからず、鬼神は昧然なり、其の影捕捉すべからず、故に我は虛談空論を避け、結髮して以來、唯善事と思ふことを是れ修め、努力すること五十餘年、中年より世の艱苦に逢ひ、始めて娶りし妻を喪ひ、其の上に家は失火の厄に會ひ、所有の田地は凶作の爲め收穫は甚だ少く、夏日食はざる日もあり、冬夜布團無くして眠り、布團無くして眠れば、雞鳴の一刻も早きを願ひ、食はざるの日は、一刻も早く夜に入るを願ふ、人としての不運、悲しまざるを得ざるも、是は己が運命、何ぞ天道を怨まん、天道を怨まずと雖も、目前に離憂の逼るを如何せん、身後の名は信

に大切の事なれど、目前の苦の爲めにはソンナ事はドウでも可いと云ふ意が起る、俗の捨鉢になる所から、浮煙の若しと放言する、乃ち慷慨悲歌し、古の鍾子期の如き賢者には我は到底及ばずとなり、

答龐參軍　幷序
龐參軍に答ふ　幷に序

三復來貺。欲罷不能。自爾鄰曲。冬春再交。款然良對。忽成舊游。俗諺云。數面成親。況情過此者乎。人事好乖。便當語離。楊公所歎。豈惟常悲。吾抱疾多年。不復爲文。本既不豐。復老病繼之。輒依周孔往復之義。且爲別後相思之賚。

來貺を三復し、罷めんと欲して能はず、爾より鄰曲、冬春再交、款然良對、忽ち舊游と成る、俗諺に云ふ、數面親と成ると、況や情此に過ぐる者をや、人事好乖、便ち當に離を語るべし、楊公歎する所、豈惟常に悲まん、吾疾を抱く多年、復た文を爲らず、本既に豐ならず、復た老病之に繼ぐ、輒ち周孔往復の義に依り、且く別後相思の賚と爲す、

相知何必舊。傾蓋定前言。　相知何んぞ必ずしも舊きのみならん、傾蓋前言を定む、

有客賞我趣。每每顧林園。　客あり我が趣を賞し、每每林園を顧みる、

談諧無俗韻。所說聖人篇。　談諧俗韻無く、說く所は聖人の篇、

或有數斗酒。閒飮自懽然。　或は數斗の酒あり、閒飮自から懽然

我實幽居士。無復東西緣。　我は實に幽居士、復東西の緣無し、

物新人惟舊。弱毫多所宜。　物新にして人惟舊し、弱毫宜ぶる所多し、

情通萬里外。形跡滯江山。　情は通ず萬里の外、形跡江山に滯る、

君其愛體素。來會在何年。　君其れ體素を愛せよ、來會何年に在る、

【注解】三復は三度讀む、來貺、貺は「タマフ」賜なり、龐が贈られし詩に酬ゆ、欲罷不能は、情に勝へざればなり、爾は龐、其の鄰曲の人と共に親熟の間となりて交を結び、款は誠なり、親むなり、成舊遊、新知が舊知の如く成るを言ふ、俗諺、「コトワザ」俗の俾言、何の據も無く言ふこと、數面は「サクメン、」度度面會する人は親みを增すとの意、況や親むべき道を知つて親む情に於てをや、而かも人事は好乖くこと多し、分離するは常事とす、楊公は楊永又楊朱と、共に未詳、豈惟常悲、分離を悲むにも種種の情あるべし、吾は淵明、本既不豐、本質が丈夫壯健ならざるを謂ふ、其の上老病の患あり、是に於てか周孔往復の義に依つて、此の詩を作り以て別後相思の賚と爲すとなり、周孔は周禮に作る本あり、其の義を詳かにせず、何必舊、知己は新知の人にもある、傾蓋は道を行き相遇ふ、車を並べて對語し、兩蓋相切つて下傾くなり、『家語』に、孔子、郯に行く、程子と途に遭ふ、傾蓋して語る、終日甚だ相親む、定前言は解釋に種種區分することを得と雖も、新知も舊知も道を以て交はる者は親むべしとの前言を定むとなり、客は龐も

其の他の人も合せて云ふ、每每は度度なり、淵明が林園の態を賞して訪ひ來りしことを云ふ、談諧は談話と同じ、無俗調、俗なる損するの話は無し、所説は聖人篇、『毛詩』は勿論、『論語』なぞ皆聖人篇なり、酒あり對酌して懽然、我は淵明自身、幽居士は猶ほ處士と言ふがごとし、『禮』に居士錦帶とあり、唐宋以來、奉佛の人、多く之を自稱とす、無復東西緣、官の爲め東西に奔走する緣は今は無しとなり、物は時物が新なるを言ふ、弱毫は謙遜して言ふ、多所宜、五言の詩を賦し、其の意を敘宣す、情通萬里外、詩は心肝、其の敘する情は虛誕にあらず、形跡滯江山、詩を寄呈するは容易、身親しく訪問する能はず、君は龐參軍を指す、愛體素は身體を大事にし玉へとなり、曹子建の詩、王其愛＝玉體＝の句あり、來會在何年、字の如し、十三元（園）と十五刪（山）と一先とは古通韻なり、溫謙山曰く、陶公の小序、雅合誦す可き多し、序中起數語、何等の纏綿ぞ、人をして神往かしむ、

【題義】 龐が靖節に贈りし詩に對して、此の答詩を作る、

【大意】 參軍が貺られし書を三復するに、深情掬すべきものあり、是に於て、我よりも復するの念罷ます、抑も爾と鄰曲と爲り、交游せしは近來の事なれども、舊友も及ばざる親みあり、而かも人事は離合集散が常、爾と乃ち別を語らざるを得ず、吾は持病の爲め惱むこと多年、平日、文を爲らず、本性壯健にあらざる上、老病之に加ふ、感慨生せざる能はず、周孔往復の義に依つて、此の詩を爲り以て相思の資と爲す、知友は何ぞ必ずしも舊きを喜ばん、新知にも舊知に勝る者あり、參軍の如きは我と同調の者なり、是の故に我が林園を訪ふこと一再ならず、而して談話の材料は、聊かも俗事に涉らず、談ずる所多くは聖人の道のみ、乃ち共に飲酒し、共に興懷を遣る、但我は幽しき一居士のみ、東西奔走の緣なし、物候の新なるに遇ふも、我は一舊人のみ、弱毫を以て物候を頌する詩を作る、詩を作るが故に情は萬里の外に通ずるを知る、我が形跡江山に滯るを恨みず、君は請ふ自愛して、身を傷る勿れ、悲しむらくは來會の何年なるやを知らずとなり、

五月旦作和戴主簿

五月旦作、戴主簿に和す

虛舟縱逸棹、回復遂無窮。　虛舟逸棹を縱ち、回復遂に窮り無し、
發歲始俛仰、星紀奄將中。　發歲始めて俛仰し、星紀奄ち將に中せんとす、
明兩萃時物、北林榮且豐。　明兩時物を萃め、北林榮且豐、
神淵寫時雨、晨色奏景風。　神淵時雨を寫ぎ、晨色景風を奏す、
既來孰不去、人理固有終。　既に來つて孰か去らざらん、人理固に終有り、
居常待其盡、曲肱豈傷沖。　居常其の盡くるを待つ、曲肱豈沖を傷まん、
遷化或夷險、肆志無窊隆。　遷化或は夷險、肆志窊隆無し、
卽事如已高、何必升華嵩。　卽事已に高きが如し、何ぞ必ずしも華嵩に升らん、

【注解】 且は一日なり、主簿は官名、各官衙に主簿一人或は二人、以て簿書を整理する、我邦の屬官位の役とす、蓋し高士偉人は此等の官に居る人多し、虛舟、吳瞻泰曰く、『莊子』に、方舟、河を濟る、虛船（人の居らざる舟）來つて舟に觸るるあり、褊心の人

ありと雖も怒らずと、無心にして觸るるなれば怒る必要無きなり、詩の意は無心にして逸棹を縱恣にす、西も東も本定め無きなり、然らば囘復卽ち此の處へ繫ぎ留めんと欲するも、其の事は到底不可能なりとなり、俛仰は干支の變代せし時を云ふ、始俛仰、何孟春曰く、『莊子』に其疾也俛仰之間と、俛仰の出處は莊子なるも、詩意は何を言ふ、始字、一本、若に作る、一本、止に作る、始にしても、若にしても、止にしても意義の解釋頗る難し、要するに從來は逸棹縱恣取り止めも無く過ぎしが、今歲の正月よりは大に氣を緊張したりと云ふの意義なり、然るに烏兎匆匆、忽ち今年も五月の響を聞くに至る、明兩萃時物は、一本に、南窗罕時物に作る、李䲡祚曰く、明兩の句は夏火の候を云ふ、北林榮且豐、林樹の鬱茂するを云ふ、神淵は、一本、淵先に作る、寫時雨、謙山曰く、案するに七啓、游龍を神淵に觀る、寫は傾くるなり、神淵に時雨が寫ぐなり、晨色奏景風、景風は南風なり、『淮南子』に、淸明風（三月の末の風）至りて四十五日にして景風吹くと、旣來孰不去、來る者は必ず去る（正面）生者は必ず死す（側面）人理固有終、始めあり必ず終あるの意、居常は平生と同義、待其盡、來者の去り、生者の死するは皆盡きるなり、待たざるも亦自然に盡きるなり、曲肱は睡眠のこと、豈傷冲、冲は虛『莊子』に、道冲にして之を用ふ、淵乎萬物の宗の若し、曲肱の中亦自から道に背かざるを云ふ、遷化は遷り代るなり、佛徒の所謂遷化にあらず、夷險は平夷と險阻、窊隆は、窪窊と高隆、窪窊は「マガリクボム」なり、高隆は「タカクサカン」なり、世路は夷と險とあるも、我が肆志は全く動かず、窊隆無き所以なり、卽事如巳高、卽事は日常平易の事、其の日常君子の一動一擧總て高尙なり、何必升華嵩、華山や嵩山に升らざるも可し、上平聲一東の韻、陳倩父曰く、旣來の二句、達識の語、又復た自然、沖の字頗る亮かざるを嫌ふ、細詠するに固より妨げ無しと、陳評、確當を覺ゆ、

【題義】五月一日に戴主簿が贈られし詩に和答して、我が志を敍せしものなり、

【大意】三老の無き舟、何處の岸に著する期無し、我が身跡は、彼の虛舟と同じかりしが、今歲に至りて繫ぐ可き處に繫ぐの必要を知る、而かも時は匆匆、今年も早や夏の節、北林の陰鬱茂するに至る、雨も夏の雨、風も夏の風なり、而かも夏は秋と爲り易く、來者は必ず去る、始あれば終あり、生あれば死あり、人は到底其の生の盡くるを待たざるべからず、兎角、考へるより曲肱して眠るに如かず、眠中道あり、冲を傷らず、世の遷移變化、平夷險阻、我と何ぞ關せん、日常に此の如く觀察す、已に高志と思ふなり、華岳や嵩山に上りて以て始めて高しと稱せんや、

連雨獨飮

運生會歸レ盡。終古謂二之然一。
世間有二松喬一。於レ今定何聞。
故老贈二余酒一。乃言飮得レ仙。
試酌百情遠。重觴忽忘レ天。
天豈去レ此哉。任レ眞無レ所レ先。
雲鶴有二奇翼一。八表須臾還。
顧我抱二玆獨一。僶俛四十年。
形骸久已化。心在復何言。

連雨獨飮む

運生會ず盡くるに歸す、終古之を然りと謂ふ、
世間松喬あり、今に於て定んで何を聞く、
故老余に酒を贈る、乃ち言ふ飮めば仙を得と、
試に酌めば百情遠く、重觴すれば忽ち天を忘る、
天豈此を去らんや、眞に任せて先んずる所無し、
雲鶴奇翼あり、八表須臾に還る、
顧ふに我玆獨を抱きしより、僶俛四十年、
形骸久しく已に化す、心在るも復何をか言はん、

【注解】連雨は日日雨天なり、運生、謙山曰く、大運の中、凡そ生ある者、之を運生と謂ふと、會は「タマタマ」と訓し、又「カ

ナラズ」と訓す、必然の辭として用ふる場合多し、盡は必然なり、終古は古今を通じて「常」と云ふ意味、過去現在未來を通じて久遠を謂ふ、謂之然、羣生の盡くると言ふ者は古今に一人も之を否定する者は無し、然るに世間に松喬子あり、聞く、松喬子は仙道を得て不老長生の人と、而かも今日は其の何處に在るや聞かざるなり、漢の高帝の世の赤松と獻帝の世の王喬との二人なり、故老贈余酒、乃言飮得仙、故老の言に依つて、上の仙人の句に照應せしむ、試酌百情遠、重觴忽忘天、酒中の眞味、誰か能く之を解するや、重觴山曰く、重觴は累飮なり、謂ふ初酌の時、百情交も集り、重觴の後、天機渾べて忘るゝなり、天豈去此哉、任眞無所先、天を忘るゝからには、我と天と一體なり、天何くに在る、我何くに在る、已に先も無し、後も無し、雲鶴有奇翼、八表須臾還、正面は雲鶴の自由に雲表に遊ぶを言ふ、側面は我が自由にして、恰かも雲鶴と同樣、自由自在なるを言ふ、顧我抱茲獨、茲獨は依賴する者無く、又眞に語る者無きの謂ひなり、而して世に於て僶俛すること四十年、形骸久已化、肉體の憔悴して、少壯の如くならざるを謂ふ、心在復何言、心は精神なり、精神は健在なりと雖も、形骸已に此の如し、何を言ふも詮無しとなり、十二文（聞）と十三元（言）と一先は古通韻なり、李公煥曰く、趙泉山云ふ、晉書を案ずるに、靖節未だ嘗て喜慍の色あらず、唯酒に遇へば則ち飮む、試酌百情遠、此れ酒中實際の理地なり、豈任嗾咨嗟の語ならんと、詩は隱囂と成語して、俗語の酒亂なり、

【題義】 日日雨降り、鬱陶に堪へず、獨飮して以て興を遣るなり、

【大意】 每日の雨天、無聊を慰する爲め獨飮して此の詩を作る、「生ある者必ず死す、古今皆同じ、赤松子と王喬の二人は仙化して壽命は頗る長しと聞きしが、今日は何處に在るやを知らず、偶ま故老が酒を贈られ、且曰く酒を飮めば仙を得ると、乃ち一酌二酌三酌、世を忘れ、天を忘れ、但天眞に一任するのみ、天眞に一任すに於ては自由自在、雲鶴の八表を自由に飛還すると同じ、我が天眞を得る爲めに僶俛すること四十年、形骸は久しく已に仙人化したるも、精神は依然として健、國の爲めに在り、復た何ぞ仙人の事を言はんや、

移居　二首

昔欲居南邨。非爲卜其宅。
聞多素心人。樂與數晨夕。
懷此頗有年。今日從茲役。
敝廬何必廣。取足蔽床席。
鄰曲時時來。抗言談在昔。
奇文共欣賞。疑義相與析。

移居　二首

昔南邨に居らんと欲す、其の宅を卜する爲にあらず、
聞く素心の人多しと、樂み與に晨夕を數す、
此を懷ふ頗く年あり、今日茲の役に從ふ、
敝廬何ぞ必ずしも廣からん、牀席を蔽ふに足るを取る、
鄰曲時時來り、抗言在昔を談す、
奇文共に欣賞し、疑義相與に析す、

【注解】 移居、自家か借家かは今日知る可らず、家を移せしことは事實なり、南邨、李公煥曰く、卽ち栗里なりと、楊愼曰く、柴桑の南邨と、本、山南の上に居る、後、火に遇うて此に徙る、非爲卜其宅、卜うて徙るは此の處に限るの意あり、此の處に限るとてにはあらず、然らば何の理由ぞ、聞多素心人、心地潔白の人を稱して素心人と曰ふ、南邨には其の人多ければなり、樂與は素心人と相與に往來屢して樂むなり、數は昔「サク」相見るの頻なるを言ふ、頗は「ヨク」なり、有年は多年なり、從茲役は移居の事役に從ふ、敝廬は蠱造の家、何必廣、取足蔽床席、雨露を防げば足ると同義、床席も蔽ふ能はざる家では琴書を置く處なし、幸に琴書を置くに足る床席あれば可なり、鄰曲時時來、鄰曲は皆素心の人、卽ち顏延年や、殷景仁や、龐通之の類、相往來する、抗言は談言の反

對、剛直不屈の言なり、談在昔、昔事を談論する、奇文共欣賞、凡文は欣賞するに足らず、奇は怪と異なる、人をして測る能はざらしむるを言ふなり、『毛詩』『論語』皆奇文なり、『莊子』『老子』愈よ奇文なり、疑義相與析、奇文に於て疑義あれば、素心の人と相與に剖析して分明ならしむ、蔣薰曰く、淵明、解を求めざるにあらず、但甚解を求め以て穿鑿せざるのみと、入聲十一陌の韻、

春秋多佳日。登高賦新詩。　春秋佳日多し、高きに登りて新詩を賦す、

過門更相呼。有酒斟酌之。　門を過ぎて更に相呼ぶ、酒あり之を斟酌す、

農務各自歸。閒暇輒相思。　農務各自に歸り、閒暇輒ち相思ふ、

相思則披衣。言笑無厭時。　相思うて則ち衣を披く、言笑厭ふ時無し、

此理將不勝。無爲忽去茲。　此の理將に勝へず、無爲なり忽ち茲を去るは、

衣食當須紀。力畊不吾欺。　衣食當に須らく紀すべし、力畊吾を欺かず、

【注解】 賦新詩は鄰曲素心の人と與にするなり、若し家に酒あるときは必ず素心の人を呼んで、之と與に之を斟酌す、然れども勞とする所は各自に勞作するも、閒暇あれば相互に相思を寄す、相思すれば、各自に其の門を叩かざる可からず、衣を披きて去る所以、赤裸では人を訪ふ禮にあらず、衣裳を整披するなり、面晤すれば必ず言笑し、午時も夕晡も厭ふ時無し、此理將不勝、理の字甚や解し難きも、理由卽ち俗の「ワケ」と見れば明白なり、日本語にすれば此の樂は何とも言ひ樣が無いとの意、無爲は「アヰナリ」と訓むも「アヂキナシ」と訓むも二者共に可し、忽去茲、今去るにはあらず、此の如き處には永住せんと、其の裏を言ふ、衣食當須紀、紀字より此の句を見るべし、紀は絲縷を別理し、亂れざらしむるを謂ふ、紀律なり、紀基なり、衣食の道は必ず紀律あるべきなり、乃ち力畊自活の道、他に依賴せざる生活なり、不吾欺は『孟子』の語、力畊以て世務を完全に爲すもの、是れ皆素心の人なり、嗚乎此の如きの志、清談者流、放蕩人の知る所にあらず、上平聲四支の韻、

【大意】 南邨に住居せん志あるや久し、何の故ぞと言はば、南邨には素心の人多しと聞けばなり、是の素心の人と晨夕往來せば可からんと、之を念ふこと多年なり、今日其の志を遂ぐるを得て、欣喜言ふ可らず、敝廬は廣きを要せず、膝も容るるに足れば可し、素心の人、時時來往して、在昔を談ずるのみならず、奇文を共に欣賞し、其の疑義を剖析す、又、春秋の佳日には、登高の興あり、詩を賦し以て佳節に報ゆ、偶ま門を叩くの人あれば、是れ素心の人、酒を齎らし至るなり、農務には相互に勵畊し、閒暇には相互に相思す、相思すれば之を訪ふ、訪へば必ず言笑して厭く時無し、此の厭く時無き理由は他人は知らず、我は其の樂に勝へざるなり、實に安心立命の地、復た此の地を去るべからず、此の地に於て宜しく衣食の道を計り、精耘力畊すべし、古人は吾を欺かざるなり、

和劉柴桑　劉柴桑に和す

山澤久見招。胡事乃躊躇。　山澤久しく招かる、胡事ぞ乃ち躊躇する、

直爲親舊故。未忍言索居。　直に親舊の爲めの故に、未だ索居を言ふに忍びず、

良辰入奇懷。挈杖還西廬。　良辰奇懷に入り、杖を挈げて西廬に還る、
荒塗無歸人。時時見廢墟。　荒塗歸人無く、時時廢墟を見る、
茅茨已就治。新疇復應畬。　茅茨已に治に就く、新疇復た應に畬なるべし、
谷風轉凄薄。春醪解飢劬。　谷風轉た凄薄、春醪飢劬を解く、
弱女雖非男。慰情良勝無。　弱女男に非ずと雖も、情を慰むる良に無きに勝る、
棲棲世中事。歲月共相疎。　棲棲世中の事、歲月共に相疎なり、
畊織稱其用。過此奚所須。　畊織其の用に稱ふ、此を過ぎ奚の須つ所ぞ、
去去百年外。身名同翳如。　去去百年の外、身名同じく翳如、

【注解】山澤は高士の遊ぶ處、乃ち劉遺民が柴桑令と作りて屢ば淵明を招待するなり、劉程之、字は仲思、彭城の人、漢の楚元王の後、少にして孤、母に事へて至孝、謝安、劉裕、其の賢を嘉し、之を薦む、皆力辭す、裕、其の屈せざるを以て乃ち其の門に旌して遺民と曰ふ、胡事は何事と同じ、躊躇は斷行の反對、ナセ招きに應ぜざるや、直は他義なき意、爲親舊故、自身の勝手のみならず、親舊の關係上、招に應ぜざるなり、未忍言索居、『禮』に離羣而索居とあり、朋友と離散せるを索居と曰ふ、獨り索寞として居る、其の事を言ふに忍びずとなり、良辰は「ヨキトキ」なり、入奇懷、李公煥曰く、時に遺民、靖節と約して山に隱れ、白蓮社を結ぶ、靖節雅其の社に預かるを欲せず、但時に復廬阜の間に往還す、惠遠法師等と遺民が此の結社ある、靖節預からずと雖も、又決して疏らざるなり、此の如き社の起るを總じて良辰奇懷に入ると言ふ、挈杖還西廬、西廬は上京の舊居を指す、上京は種種の寇亂を經て、荒蕪偏る多し、住民は他に移住し、廢墟の處處に存在するを見るのみ、茅茨は茅を以て屋を蓋ふなり、已就治は淵明が家屋を整理するを云ふ、新疇復應畬、新疇は二歲、畬は三歲、田地も徐徐に整理して將に收穫あらんとするなり、谷風は東風なり、凄薄は猶は寒意なるを云ふ、春醪解飢劬、飢餓と劬勞、一杯の酒、飢餓を忘れ、劬勞を忘る、弱女雖非男、慰情良勝無、趙泉山曰く、谷風以下二十字、一時の諧謔に出づと雖も、亦窮に處するに巧なりと謂ふ可し、弱女は酒の醨薄、醨薄の酒も、飲めば以て枯腸を潤す、強烈の酒に及ばずと雖も、猶は無きには勝る、男は强烈の酒を言ふ、遠公の白蓮社は禁酒の結社、淵明が入らざるは、其の不風流を嫌へばなり、棲棲は不安の貌、『毛詩』に六月棲棲とあり、世中の事總て不安なり、共相疎、何焯曰く、我、世を棄て、世も亦我を棄つ、畊織稱其用、或は畊、或は織、我は唯我が用を爲すのみ、過此、此の畊織以外の事は、奚所須、我に於て須つ所無し、去去は遠に去らしむるの詞、百年外、百年誰か長しと言ふや、迅速に過ぎ去る、身名同翳如、翳は蓋なり、又樹木の自から死するを翳と爲す、百年の後、身も名も共に存するを得ず、況や外物をや、然らば則ち飲讌は何ぞ必ずしも曠からん、衣食は當に須らく紀すべし、畊織其の用に稱うて可なり、平聲七虞の韻、

【大意】劉柴桑が屢ば招くも、淵明は一身の都合のみならず、親舊に對する種種の事情よりして、容易に應諾せず、偶ま良辰に遇うて、我が懷も好奇に入る、乃ち杖を挈げて西廬に還る、其の還る途は荒れて歸人に遇ふ無し、處處に唯廢墟を見るのみ、幸に我が廬の整理は稍就りて、收穫も亦相當にあらん、東風猶ほ凄薄なるも、一杯の酒、寒を防ぎ、懷を遣るに足る、弱女即ち醨薄の酒なれども、無きには勝ること萬萬とす、反つて世中の事を想へば、我は世人と疎縁なり、世人と疎なれば、此の自然を樂んで畊織の道を努力すれば足る、此の外に於て何ぞ意を勞せん、到底人世は百年にして、誰も彼も、身も名も、共に消し、倶に滅するに至る、

酬劉柴桑

劉柴桑に酬ゆ

窮居寡人用。時忘四運周。
櫚庭多落葉。慨然知已秋。
新葵鬱北牖。嘉穟養南疇。
今我不爲樂。知有來歲不。
命室攜童弱。良日發遠遊。

窮居人の用寡し、時に四運周を忘る、
櫚庭落葉多し、慨然已に秋なるを知る、
新葵北牖に鬱たり、嘉穟南疇に養ふ、
今我樂を爲さずんば、來歲あるを知るや不や、
室に命じて童弱を攜へ、良日發して遠遊せん、

【注解】劉の贈言に對して之に酬ゆ、寡人用、人間の用事罕なるなり、春夏秋冬四運の交代するも忘る、櫚庭は一本空庭に作る、空庭可きに似たり、空庭は唯落葉のみ、落葉の蕭條たるは、始めて以て秋意なりと知る、慨然たらざるを得んや、新葵は蜀葵花なり、牖は「マド」、壁を穿ち、木を以て交窗と爲すなり、『論語』に、自牖執其手とあり、葵花は北牖の外に鬱茂し、而して嘉穟は南疇に發穎する、此の際宜しく遊樂を爲すべし、來歲の生死は未だ知るべからず、室は細君、細君に命令して童弱をして遠遊せしむ、下平聲十一尤の韻、陳倩父曰く、鬱字、養字、是れ晉人の用字、三唐人に勝る處と、

【大意】窮居なるが故に、人間の用事寡し、人間の用事寡きが故に、窮居なり、人間は春夏秋冬の四運に乘じ、種種の用事多し、我は超人間の境界、特に四季を知る必要なし、偶ま落葉の多きを見て、期已に秋なるを知る、秋の蜀葵は開き、秋の嘉穟は登る、是に於て游樂の時なるを知る、乃ち細君や童弱を攜へて遠近を散策す、近狀を劉が問に對して答ふる詩なり、

和郭主簿　二首

郭主簿に和す　二首

藹藹堂前林。中夏貯清陰。
凱風因時來。回飈開我襟。
息交游閒業。臥起弄書琴。
園蔬有餘滋。舊穀猶儲今。
營己良有極。過足非所欽。
舂秫作美酒。酒熟吾自斟。
弱子戲我側。學語未成音。
此事眞復樂。聊用忘華簪。
遙遙望白雲。懷古一何深。

藹藹たる堂前の林、中夏清陰を貯ふ、
凱風時に因つて來り、回飈我が襟を開く、
交を息めて閒業に游び、臥起書琴を弄す、
園蔬餘滋あり、舊穀猶ほ今に儲ふ、
己を營む良に極あり、過足欽する所にあらず、
舂秫美酒を作り、酒熟して吾自から斟む、
弱子我が側に戲れ、語を學んで未だ音を成さず、
此の事眞に復樂し、聊か用て華簪を忘る、
遙遙白雲を望む、懷古一に何ぞ深き、

【注解】藹藹は樹木繁茂の貌、中夏は五月、凱風は南風、凱は愷と同義、和と善と樂の三義を含む、草木盡く南風を得て各の其の得意に繁茂するを以てなり、回飈はグルグル回る風、開は吹き開くなり、息交、人と交遊を休息す、游閒業、急務にあらざる業、詩賦の類、書琴の類、盡是れ閒業なり、園蔬は園中の菜蔬、有餘滋、食ふだけの菜蔬は取れるなり、菜蔬は新なり、其の上猶ほ去年の舊穀も貯蓄してあり、營己、一家の經營は、良有極は十分の義、過足は十二分を言ふ、十二分は欽ぶ所にあらず、舂は「ウスヅク」秫は「モ

ナキビ」、是れ以て美酒を醸造する、其の熟するに及んで獨斟する、息交の人、友無ければなり、弱子は三歳前後の子、學語未成音、完全の語を發する能はず、此の知き事、良に眞樂とす、聊用、用は以と同義、華簪は貴顯の冠飾なり、官吏の身たるを忘るとなり、遙遙は遠遠と同義、懷古は古人を懷ふ、其の情深しとなり、下平聲十二侵の韻、何義門曰く、富貴は吾が願にあらず、帝鄕は期す可からず、所謂雲を望み古を懷ふ、蓋し西方の思なりと、沈歸愚曰く、知足要言、一結悠然不盡と、

【大意】節正に中夏、清陰滿地、回風は我襟を吹いて、爽氣言ふ可らず、是の時、交を息めて我が好む所の業を修む、室中に於ては書琴を弄し、庭中に於ては蔬菜を掬み、一家の經營は、去年の舊穀尙ほ保存するを以て十分に足る、酒も自家用として造りしもの、自から以て斟むに足る、弱子は我が前に戲る、其の言ふことや聞くに興味あり、人生の樂事、此の中聊か以て傾ず、願ふ所は古人と歸を同じうせんとなり、

和澤周三春。清涼素秋節。　和澤三春に周し、清涼素秋の節、
露凝無游氛。天高肅景澈。　露凝りて游氛無く、天高くして肅景澈す、
陵岑聳逸峯。遙瞻皆奇絕。　陵岑逸峯聳ゆ、遙に瞻る皆奇絕、
芳菊開林耀。青松冠巖列。　芳菊林に開いて耀き、靑松巖に冠して列る、
懷此貞秀姿。卓爲霜下傑。　此の貞秀の姿を懷ひ、卓として霜下の傑と爲る、
銜觴念幽人。千載撫爾訣。　觴を銜んで幽人を念ふ、千歲爾訣を撫す、
檢素不獲展。厭厭竟良月。　檢素展ぶるを獲ず、厭厭良月を竟ふ、

【注解】和澤は三春に周遍し、淸涼は素秋の時節となる、素秋は、『梁元帝纂要』に、秋曰素商、亦曰素秋とあり、露凝、露氣が凝結する、無游氛、凶氣を氛と曰ふ、遊廢の氣氛が無きなり、天高は秋は澄めば高く見えるなり、肅景澈、秋氣は肅殺するを以て常とす、風景に作る本は不可、陵は大阜、岑は小にして高きもの、聳逸峯、聳秀なるものは逸峯とす、遙瞻、遠方より觀れば、陵も岑も皆奇絕なり、貞秀姿は靑松を言ふ、霜下傑は芳菊を言ふ、人は松を以て骨と爲し、菊を以て肉と爲さざるべからず、念幽人、郭主簿を指して幽人と曰ふ、爾訣は松菊の訣要を曰ふ、辭訣の訣にはあらず、爾は松と菊とを指す、撫は撫愛、撫愛すれば其の慕ふこと勿論なり、檢素、檢は書署、素は尺素、松菊を敬慕すと雖も、其の意を十分に檢素に展ぶるを獲ずとなり、檢素の心にはあらざるべし、厭厭は『毛詩』に厭厭夜飮とあり、安逸なり、良月は十月の異名なり、秋晩冬初とす、入聲六月の韻、蔣丹厓曰く、二詩、前首は閒樂の樂を自述し、後首は人を懷ひ、銜觴の思を動かす、和言獨り酬酢せず、亦次第ありと、

【大意】三春が和澤なりしを以て、秋も亦其の節が順調なりしなり、地に露氣は凝り、天に肅景は澈し、岑も峯も、秀色奇絕、皆賞すべし、而して芳菊は林に開き、其の光耀き、靑松は巖に冠し、蒼として列を爲す、松は貞秀の姿なり、菊は霜下の傑なり、是の松と菊とに對して觴を銜み、以て幽人を念ふ、千載の下、松貞と菊傑との訣を撫し、種種に檢素し、十分に意志を展ぶるを得ず、安逸にして良月を竟ふとなり、

於王撫軍座送客

王撫軍の座に於て客を送る

秋日淒且厲。百卉具已腓。　秋日淒且厲なり、百卉具に已に腓む、

爰以履霜節。登高餞將歸。　爰に履霜の節を以て、高きに登つて將歸を餞す、

寒氣冒山澤。游雲倏無依。　寒氣山澤を冒し、游雲倏ち依る無し、

洲渚思緬邈。風水互乖違。　洲渚思ひ緬邈、風水互に乖違す、

瞻夕欣良讌。離言聿云悲。　瞻夕良讌を欣ぶ、離言聿に云に悲し、

晨鳥莫來還。懸車斂餘暉。　晨鳥莫に來り還る、懸車餘暉を斂む、

逝止判殊路。旋駕悵遲遲。　逝止殊路を判す、旋駕悵として遲遲たり、

目送回舟遠。情隨萬化遺。　目送す回舟遠し、情萬化に隨つて遺る、

【注解】王撫軍、王宏、字は元休、撫軍將軍江州刺史と爲る、庾登之、貴州太守と爲る、將に郡に赴かんとす、王宏送つて潯陽の徵浦に至る、三人此に於て詩を賦し別を敍す、客は卽ち庾登之なり、秋日、可し『發微』と『集評』の二本冬日に作る、不可なり、淒氣淩厲なり、年譜に、此の詩、宋の武帝永和二年辛酉秋作とあり、百卉は百艸、腓は病なり、色變じて黃なるを言ふ『毛詩』に、百卉具腓とあり、爰以履霜節、正に是れ秋暮冬初の節、登高、王が庾の爲め送別の主人公と爲つて、燕を高樓に張る、餞將歸、將は名詞、將軍が歸るを餞別する、寒氣冒山澤、冒は入るなり、覆ふなり、游雲倏無依、正面は字の如く、雲の依る所無きを言ふ、側面は庾が去つて此に留まること無きを言ふ、洲は渚の大なるもの、渚は洲の小なるもの、思緬邈、分れ去つては千洲百渚を隔つ、思の緬邈たらざるを得ず、風水互乖違、正面は風と水となり、側面は我と彼となり、東西に乖違するを恨む、瞻夕、此の夕の良讌は欣暢するも、離筵なれば聿云悲なり、聿は發語の辭、遂にと同じ、『書經』に、聿求元聖とあり、又、聿にも通ず、晨鳥は早晨に林を出でし鳥、莫は暮と同じ、來還、夕莫には必ず歸來する、懸車は、『淮南子』に、日至悲泉、是謂懸車と、落日の形車輪を懸けたる如きを云ふ、斂餘暉、將に昏ならんとする樣、逝止判殊路、彼は逝卽ち往き、我は止卽ち留まる、其の殊路判然たり、旋駕、愈よ彼は駕し去らんとす、而かも悵然として其の行くや遲遲たり、目送は目の見えるまで送る、情隨萬化遺、千變萬化が世の常、常とは言ひながら萬化に隨つて種種と成る、上平聲五微の韻、

【大意】王撫軍が主人と爲り、二人の客を送る燕を開く、秋日凄氣、百卉皆腓む、是の履霜の節に當り、高きに登りて、以て人の歸るを餞す、今より寒氣は方に逼る、人と游雲と依る所無きを思ふ、彼と我と愈よ隔たり、洲と渚と益す緬か、今日此の良燕に侍するも、東西に乖違するを思へば、何ぞ悲みを生せざらんや、而かも人は赴かざる可らず、情に勝へずして旋駕の遲遲たるあり、我は其の影の見えざるに至るまで目送す、目送中、種種の情を生ずるに至る、

與殷晉安別　幷序

殷晉安と別る　幷に序

殷先作晉安南府長史掾。因居潯陽。後作太尉參軍。移家東下。作此以贈。

殷先に晉安南府長史掾と作る、因つて潯陽に居る、後太尉（劉裕）の參軍と作る、家を移して

東下す、此を作り以て贈る、

遊好非少長。一遇盡殷勤。
信宿酬清話。益復知爲親。
去歲家南里。薄作少時鄰。
負杖肆游從。淹留忘宵晨。
語默自殊勢。亦知當乖分。
未謂事已及。興言在茲春。
飄飄西來風。悠悠東去雲。
山川千里外。言笑難爲因。
良才不隱世。江湖多賤貧。
脫有經過便。念來存故人。

遊好少長にあらず、一遇殷勤を盡す、
信宿淸話に酬ゆ、益す復た親を爲すを知る、
去歲南里に家す、薄つて少時の鄰を作す、
杖を負うて肆に游從す、淹留宵晨を忘る、
語默自から勢を殊にす、亦知る當に乖分すべきを、
未だ謂はず事已に及ぶを、興言茲春に在り、
飄飄西來の風、悠悠東去の雲、
山川千里の外、言笑因を爲し難し、
良才世に隱れず、江湖賤貧多し、
脫し經過の便有らば、念來故人を存す、

【注解】 殷は姓、晉安は官名、名は鐵、字は景仁、晉安府の長官より、太尉劉裕が參軍と作つて、全家東下する、乃ち此を贈る、少長の意、陶澍曰く、吾と子と少時長時の遊從にはあらず、但今一たび相遇うて、以て定交するのみ、久長に作るも意亦通ず、信宿は二泊以上を言ふ、淸話、人は新知なるも談話相合致するときは、十年の知己も同樣なり、益す親を爲すの眞なるを知る、家南里、陶家と殷家と共に南里に住せし時、薄は迫「セマル」なり、少時は「シバラク」なり、少時其の鄰を作せしなり、負杖肆游從、手を携へて同遊せるを云ふ、或は淹留して宵も晨も忘るるの親を爲す、語默、殷は盛んに語り、陶は默す、自殊勢、勢は勢力、饒舌者と、饒舌せざる者とは勢力が違うて來る、亦知當乖分、勢力を得し者と、得ざる者とは萬事乖く、茲に分離して東西すべきは當然なり、未謂事已及、分離すべきは知つて居りしも、今日の如く早く此に及ぶとは謂はざりきとなり、興言、興に乘じて笑言せしは、茲春の頃でありし、飄飄西來風、悠悠東去雲、各の身分の定めなきを言ふ、今より子と我と山川千里外と隔つ、言笑難爲因、因は緣めて纏き意、談を交ふること能はずと云ふ位の義なり、良才、殷を指す、不隱世、世に出でて以て有用に供せらる、江湖多賤貧、是れ陶自身を指す、脫は多義あり、今は或然の辭「モシ」と訓す、經過便、此の地へ經過する便の有りし時は、念來存故人、此の處に故人即ち友人の淵明が在住するなれば門を叩かんとの念を持ちて居て吳れ玉へとなり、十二文（勤、分、雲）と十一眞とは古通韻なり、陳祚明曰く、何義門曰く、出處と曰はずして語默と曰ふ、公が遜詞なりと、沈歸愚曰く、參軍已に宋の臣と爲る、題仍ほ前朝の官を以て之に名く、題目便ち苟且せずと、溫謙山曰く、抑揚吞吐、調、之を出すに忠厚に似たり、意實に暗に諷刺を寓す、殷當日此の詩を得て、未だ必ずしも愧無からず、陶詩を讀む者、當に知るべし其の藹然親むべき處、即ち凛然犯すべからざる處あるなと、

【大意】 殷晉安と我とは永年の知己にはあらず、然りと雖も一たび遇うて永年の知己にも勝るの殷勤を致す、是の故に殷を我が家に二三宿せしめて種種の淸話を交換す、淸話を交換すれば益す其の親しむべきを知る、一旦殷と陶と南里に住せし際、薄卽ち強ひて少時でも鄰に居を卜し、乃ち日夕相共に杖を負うて山水の游を爲し、淹留して夜も晨も頓著せざるに至る、多言の人と、寡言の人と、性格の殊異なるは、卽ち勢を得るの相違を來す、乃ち一は時勢に乘じて出世し、一は時勢に乖きて隱遯す、

是に於てか東西分離の已むを得ざるに至る、而かも平日分離の事を言はざりしに、今や遽かに山川千里を隔つ、復た相遇うて言笑するの因無からんと思ふ、良才は久しく無用の地に置くべきものにあらず、出世して國家の爲め重要の地に據る、固とに其れ當然なり、賤貧なればこそ江湖の間に流浪して出世せざるなり、君が家を移して東下し、堂堂たる大官と爲り、脱し是の潯陽を經過する機會もあらば、是の潯陽には陶淵明と云ふ故人が存在するを忘れずに記憶して吳れよ、

贈羊長史　幷序

羊長史に贈る　幷に序

左軍羊長史。銜使秦川。作此與之。

左軍羊長史、使を秦川に銜む、此を作り之に與ふ、

愚生三季後。慨然念黃虞。
愚三季の後に生れ、慨然黃虞を念ふ、

得知千載外。正賴古人書。
千載の外を知るを得るは、正に古人の書に賴る、

賢聖留餘迹。事事在中都。
賢聖餘迹を留め、事事中都に在り、

豈忘游心目。關河不可踰。
豈心目を游ばすを忘れん、關河踰ゆべからず、

九域甫已一。逝將理舟輿。
九域甫めて已に一、逝いて將に舟輿を理せんとす、

聞君當先邁。負痾不獲俱。
聞く君先邁に當り、痾を負うて俱にするを獲ず、

路若經商山。爲我少躊躇。
路若し商山を經ば、我が爲めに少躊躇せよ、

多謝綺與甪。精爽今何如。
多謝す綺と甪と、精爽今何如、

紫芝誰復采。深谷久應蕪。
紫芝誰か復た采らん、深谷久しく應に蕪すべし、

駟馬無貰患。貧賤有交娛。
駟馬貰患無けん、貧賤交娛あり、

淸謠結心曲。人乖運見疎。
淸謠心曲を結ぶ、人は乖き運疎んぜらる、

擁懷累代下。言盡意不舒。
懷を擁す累代の下、言盡きて意舒びず、

【注解】羊は姓、長史は官名、名は松齡、銜使は奉命と同じ、秦川は關中、東、函關より、西、隴關に至る、二關の間、之を關中と謂ふ、今日の陝西省なり、劉履曰く、義熙十三年、太尉劉裕、秦を伐つて長安を破る、秦主姚泓、建康（晉の都）に詣り、誅を受く、時に左將軍朱齡石、長史羊松齡を遣り、賀を稱せしむ、此の詩、此の時の作とす、愚は淵明自ら謂ふ、三季後は、『國語』に曰ふ、史蘇曰く、今晉寡德にして安んず、俘女亦其の寵を增す、三季の王に當ると雖も、亦可ならずや、又『漢書敍傳』に三季之後、厥事放紛とあり、佛敎で言ふ末劫と同義、澆季なり、黃虞は黃帝と舜帝となり、舜は有虞氏なり、千載外、自分が慕ふ所の黃虞は千載上の人なり、其の人の慕ふべきを知り得たるは是れ古人書に賴るにあらずや、餘迹、中都、西晉の都は河南の洛陽、東晉の都は江蘇の建康、洛陽は周の故城、河南の鄴、陝西は古の長安、乃ち秦漢の故都、賢人や聖人の遺跡尤も多しとす、『論語』に、孔子爲中都宰の中都は春秋の魯邑、今日の山東汶上縣なれば、淵明の所謂中都にはあらず、豈忘游心目、中都は賢聖の遺跡多し、心目共に此の地を忘るること無し、如何せん關河不可踰、百二の關河、何ぞ能く踰ゆるを得ん、九域は四海九州と言ふ語と同義、天下の異稱なり、甫已一は、

劉裕が晉の恭帝を弑せざる前、桓玄を誅し、南燕王を斬り、秦王を戮し、以て江左を定めたる事を言ふ、逝は征なり、將理舟輿、劉が軍將に武裝して以て出でんと欲するなり、而して此の征行、羊松齡が先遣卽ち先陣に當るなり、負痾は淵明が病むなり、不獲俱、猶ほ晉室の爲めなり、壯健なれば我も從征せんと欲するも病軀亦如何ともする無し、君が征行の路若し商山の下を經ば、商山は陝西商縣の東に在り、卽ち南山の脈、七盤十二靜あり、亦商嶺商坂と名く、四皓が秦の亂を避け此に隱る、我が爲めに少時、馬を此處に止めて吳れ玉へ、而して我が傳言を依賴す、綺里公と、甪里先生との二人（園公、綺里、夏侯、甪里、是を四皓と曰ふ）に多謝し玉へ、精爽今何如、今の世は秦末と同じ、賢聖隱れて凶徒跋扈する時代なり、然るに先生等は猶ほ壯健なるや、如何に此の亂世を觀察するや、紫芝誰復采、深谷久應蕪、四皓に「紫芝歌」あり、莫莫たる高山、深谷逶迤たり、奕奕たる紫芝、以て飢を療すべし、唐虞世遠し、吾將に安くに歸せん、駟馬高蓋、其の憂甚だ大、富貴の人を畏るるは、貧賤の肆志に如かず、紫芝を采るは高人のことなり、今は深谷に高人の入る無く、其の荒蕪想ふべし、駟馬無貰患、貰は貸なり、『周禮』に民無ㇾ貸則險貰而予ㇾ之とあり、陶澍曰く、無貰患は其の患貸る可からざるを言ふなり、紫芝歌の駟馬高蓋、其憂甚大の意と、貧賤有交娛は、貧賤不ㇾ如ニ肆志一の意、淸謠は紫芝歌を稱して曰ふ、結心曲、曲は歌曲を云ふ、眞の心を結ぶ歌曲の意、人乖運見疎、人が運に乖けば運に疎んぜらるるの意、擁は擁抱なり、累代下は千載下と同じ、言盡意不舒、意は猶ほ多けれど、言は已に盡くとなり、路若より以下十二句皆傳言を依託するなり、上平聲六魚の韻、胡仔曰く、淵明の高風峻節、固に已に四皓に愧づるなし、然して猶ほ仰慕して置かず、其の好賢尙友の心を見るに足る、陳祚明曰く、得知の二句、語率にして健、路若以下、一氣に下る、低昂淋漓にして、辭調近からずと、又曰く、此れ宋武（劉裕）關中を平定する時の作、武功を鋪張せず、三傑（張良、陳平、韓信）に寄思せず、獨り懷を商山先生に寄す、隱遁の志、早く已に決すと、

【大意】羊長史を送るに就いて、我が平常の思懷を敍ぶ、我は澆末の世に生れ、而かも心は常に黃虞時代の正眞を念ふ、其の黃虞時代の好きを知るを得るは、是れ歷史の賜ふ所に由る、賢人や聖人の遺跡、多くは是れ中都に在り、賢聖を慕ふからには必ず是の中都を訪はざるべからず、心目共に游ばんと欲する念は忘るること無し、但關河の踰えがたきを如何にせん、今や九域方に一ならんとし、將軍の舟輿將に出でんとす、而して聞く君之が先陣なりと、我は不幸病痾の爲め、是の行を倶にするを得ず、君若し征途を商山の下に取らば、我が爲めに特に躊躇して吳れ玉へ、而して傳言して吳れ玉へ、綺公は如何、甪公は如何、無事なりや、精爽なりや、依然として紫芝を采りて居るや、恐らくは、綺甪二公以外に、之を采る者は或は無からん、深谷の荒蕪、其の久しきは想像に餘りあり、駟馬卽ち富貴の人、患無からんや、貧賤の自由に自然を娛しむに及かず、貧賤なればこそ淸謠して以て心曲を結ぶの樂あり、人が運に乖き、運乃ち人を疎んず、千載の上と千載の下を思ふ、淚の興る所以、晉の衰ふる所以、暗に慨を此の中に含む、言はんと欲する所の者盡きたるが如きも、意は充分に舒びざるなり。

歲暮和張常侍

市朝悽舊人。驟驥感悲泉。
明旦非今日。歲暮余何言。
素顏斂光潤。白髮一已繁。
闊哉秦穆談。旅力豈未愆。

歲暮張常侍に和す

市朝舊人悽たり、驟驥悲泉に感ず、
明旦今日にあらず、歲暮余何をか言はん、
素顏光潤を斂め、白髮一に已に繁し、
闊れる哉秦穆の談、旅力豈未だ愆たざらん、

向夕長風起、寒雲沒西山、
洌洌氣遂嚴、紛紛飛鳥還、
民生鮮長在、矧伊愁苦纏、
屢闕淸酤至、無以樂當年、
窮通靡攸慮、顦顇由化遷、
撫己有深懷、履運增慨然、

夕に向つて長風起り、寒雲西山に沒す、
洌洌氣遂に嚴、紛紛飛鳥還る、
民生長在鮮し、矧んや伊れ愁苦纏ふをや、
屢ば淸酤の至るを闕く、以て當年を樂む無し、
窮通慮る攸靡し、顦顇化に由つて遷る、
己を撫し深懷あり、運を履んで慨然を增す、

【注解】張は姓、常侍は官名、名は野、字は萊民、南陽の人、柴桑に居り、淵明と婚姻の契あり、徵して散騎常侍に拜す、就かず、義熙十四年を以て卒す、姻、和と云ふべからず、詩意を詳味するに、哀輓の辭に似たり、和は當に挽に作るべし、又、野の族子張詮、亦常侍に徵す、或は張詮、野を輓むの作あり、而して公、之に和するか、(以上陶澍の說)今謂ふ、陶澍の說、一理あり、然りと雖も、詩意全く哭詩とも思はれず、句句悲慨たるは明白なるも、是は淵明が家法、ただ此の詩のみにはあらず、而して又張詮の輓詩を和したるならんかと、輓詩を和するなぞ古人の無き所、穿鑿も亦甚し、故に余は謂ふ張が悲慨の詩ありて之を和するのみ、市朝悽舊人、「古北門行」市朝易人、千載墓平とあり、驟驥感悲泉、白駒の隙を過ぐるを言ふ、今日は歲暮、明旦は新歲、感慨の極、何の言も無し、素顏は少年の美面、白髮、昨日の少年已に老人と爲る、闊哉、『毛詩』に于嗟闊兮とあり、疎なり、遠なり、迂なり、「秦誓」に、番番良臣、旅力既愆、我尙有之とあり、秦穆は秦の穆公、旅力は大勢の力、軍の五百人を一旅と爲す、豈未愆、此れ秦誓と反す、秦穆の言太だ壯語なるも、老いては爲す能はざるを言ふ、向夕、沒西山、今日も將盡の駃、長風と寒雲、歲暮に起る景、洌洌は寒氣の厳、紛紛は歸鳥の多、民生は僅かに五十年六十年を以て歿す、而かも其の間、愁苦纏ふを如何せん、我に於ては屢闕淸酤至、人の酒を賫す無し、『毛詩』に「旣載淸酤」とあり、無以樂當年、當年は十年前も指すことあり、百年も千年も指すことあり、此は今日は無しと云ふなり、窮通は已に遥なり、別に思慮する攸靡し、顦顇「ヤセオトロヘル」は變化に由りて遷るのみ、撫己有深懷、履運增慨然、劉履曰く、義熙十四年十二月、宋公劉裕、安帝を東堂に弑し、恭帝を立つ、靖節、歲暮の詩を和す、蓋し其の時に適當を以て此の意を寄す、首に市朝の變、歲月の逝くを言ひ、中に風雲氣候の厲、人物糾紛の苦を言ひ、末篇自から窮通顦顇、如何ともすべきなきの勢を言ふ、撫己履運、其の憤激に勝へざる者あり、十三元(言、繁)十五刪(還、山)と十一眞とは古通韻なり、湯東磵曰く、陶公が異代に事へざるの節、子房が五世韓に相たるの義と同じ、旣に狙擊震動の擧を爲さず、又時に漢祖の如く託して以て其の志を行ふ可きなし、所謂撫己有深懷、履運增慨然、之を讀む、亦以て深く其の志を悲むべきかな、

【大意】張常侍が示されし歲暮の作に和せしなり、「市朝は變じ易きなり、其の變じ易き地に久しく住する者は、種種の意味に於て悽情多し、其の尤も感ずるは、驟驥即ち日月の匆匆として走るに在り、今日は已に昨日と爲り、今年は已に去年と爲る、少年の素顏に光潤あるも、是れ忽ち白髮が頭上に繁き人と爲る、平常豪語する秦の穆公も、大勢の軍を恃み、我こそは旅力十分なりと自ら許せども、遂に迂闊たるを免れず、朝日は忽ち夕日と爲り、東方に出でし堂堂たる日影も西山に沈沒するに至る、既にして秋、既にして冬、紛紛として飛鳥は還る、如何なる民生も百年以上は保つべからず、矧して其の短き世に樂は少く苦は多し、我の如きは廚に酒を闕くこと每每なり、當年即ち盛時の樂を今復味ふこと無し、而かも窮も通も運命なるを知れば、痛く思慮を勞すること無きも、顦顇の次第に遷るを如何せん、然りと雖も己が身を撫すれば深懷言ひ難きものあり、其の深懷は即ち晉室の傾危したる

事にあり、慨然たらざるを得んや、

和胡西曹示顧賊曹

胡西曹に和して顧賊曹に示す

蕤賓五月中、清朝起南颸、　蕤賓五月の中、清朝南颸起る、
不駛亦不遲、飄飄吹我衣、　駛ならず亦遲ならず、飄飄我が衣を吹く、
重雲蔽白日、閒雨紛微微、　重雲白日を蔽ふ、閒雨紛として微微、
流目視西園、曄曄榮紫葵、　流目西園を視る、曄曄紫葵榮ゆ、
於今甚可愛、奈何當復衰、　今に於て甚だ愛す可し、奈何せん當に復た衰ふべし、
感物願及時、每恨靡所揮、　物に感じて時に及ぶを願ふ、每に恨む揮ふ所靡きを、
悠悠待秋稼、寥落將賒遲、　悠悠秋稼を待ち、寥落將に賒さんとする遲し、
逸想不可掩、猖狂獨長悲、　逸想掩ふべからず、猖狂獨り長悲す、

【注解】胡氏と顧氏、西曹と賊曹は官名、共に未詳、蕤賓は『禮』に、仲夏之月、律中蕤賓とあり、乃ち十二律の一、五月中は自から注する者の如し、清朝起南颸、颸は涼風なり、不駛不遲、風の吹くや、人の身體に適する程度に吹く、重雲は層雲、蔽白日、雲が蔽ふ爲めに、幸に赫赫たる炎威を免かる、閒雨は靜雨と同じならん、紛微微、少か降る雨、流目は目を西園の方へ移して視るなり、曄曄は紫葵の光あり色あり盛なる形容、於今甚可愛、紫葵を賞するには今が好期なり、奈何は「イクバクモナク」の意に見よ、當復衰、好期を逸すれば、再得すべからず、感物願及時、物は萬物、時に紫葵、花を賞し、事を成す、皆是れ時あるなり、每恨靡所揮、及時の事を知らざるにあらず、而かも發揮する所無くして過ぎ去るを恨む、悠悠待秋稼、遙に悠悠として、夏日を空過して秋稼に至る、寥落將賒遲、賒は「アマス」、「アマス」は其の日に成るにあらず、昨日に於てし、昨冬に於てし、其の結果を後來に納め・・り、逸想は放逸の閒想、不可掩、放逸に過ぎ去る者は、其の所得なきこと掩ふ可らざる事實なり、猖狂は『莊子』に、猖狂不知所往とあり、妄行にして拵制すべからざるを謂ふ、上平聲四支の韻、溫謙山曰く、此篇集中に在つて、平淡の作と爲す、諸選本亦此に及ぶ罕なり、

【大意】盛夏五月に當り、早晨に起きて涼風の南より起るを見る、其の涼風や爽爽として人に可なり、而かも雲の爲め赫日は蔽はる、時時雨が降る、西園に流目して見れば、紫葵は曄曄として盛んなり、盛んなりと雖も其の衰ふる早ければ、速かに之を賞するに及かず、而かも每に恨む、何等の發揮する所無く、悠悠として秋穫の期に至る、此の如くなれば寥落して好結果を後來に納むる能はず、放逸の閒想たるは事實にして、其れは到底掩ふ可らず、自から是れ猖狂なるを知る、知ると雖も改むる能はず、獨り長悲する所以なり、

悲從弟仲德

從弟仲德を悲しむ

銜哀過舊宅、悲淚應心零、　哀を銜んで舊宅を過ぐ、悲淚心に應じて零つ、

借問爲誰悲、懷人在九冥。　借問す誰が爲めに悲む、懷人は九冥に在り、

禮服名羣從、恩愛若同生。　禮服羣從と名け、恩愛同性の若し、

門前執手時、何意爾先傾。　門前手を執る時、何ぞ意はん爾先づ傾かんとは、

在數竟未免、爲山不及成。　數に在つて竟に未だ免れず、山を爲す成るに及ばず、

慈母沈哀疚、二胤纔數齡。　慈母哀疚に沈み、二胤纔に數齡、

雙位委空館、朝夕無哭聲。　雙位空館に委ね、朝夕哭聲無し、

流塵集虛坐、宿帷依前庭。　流塵虛坐に集り、宿帷前庭に依る、

階除曠遊迹、園林獨餘情。　階除遊迹曠しく、園林獨り情を餘す、

翳然乘化去、終天不復形。　翳然化に乘じて去り、終天復た形れず、

遲遲將回步、惻惻悲襟盈。　遲遲回步を將て、惻惻悲襟に盈つ、

【注解】從弟は「イトコ」、仲德は傳を闕く、銜哀過舊宅、之を弔する爲め從弟の舊宅を過ぐ、悲淚應心零、心に感が起れば從つて悲淚が零つ、懷人、我が懷ふ人卽ち從弟は已に九冥に在り、九冥は黃泉の下を云ふ、禮服名羣從恩愛若同生、喪を服することは從兄弟の間柄ではあるが、眞の兄弟の感がするなり、門前執手時、死する前に此の事ありしならん、何意は思はざりきなり、爾先傾、爾が我より先きに死せんとは、在數、それも命數なりとせば免るる能はざるなり、爲山未及成は、種種に解釋を下すを得るも、余は事業未だ大成せざるの意と解釋する、慈母沈哀疚、仲德が母は猶ほ存在するもの、二胤は二人の子、纔數齡、幼年なるなり、雙位委空館は未詳、朝夕無哭聲は其の人を弔する者を闕くを云ふ、流塵集虛坐、生前靜坐の處、已に人無し、虛坐なる所以、虛坐は流塵堆積する所以、宿帷は隔年の帷、『禮記』に、朋友之墓、有宿帷而不哭焉とあり、依前庭、帷が依託するのみ、階除、舊宅の階除、堂に登る堦を階除と云ふ、曠は字義廣し、今「ムナシ」虛の義を取る、遊迹、已に主人無し、虛曠なる所以、而かも園林は鬱茂して、獨餘情を引くのみ、終天は「イツマデモ」の意、不復形、此の形は灰と爲り、再び復すべからず、故に形を以て「アラハレ」と訓す、此の人の形は再見する能はず、是を以て弔訪して回步も自から遲遲たり、步が遲遲たるは、其の心の惻惻として傷む爲めなり、八庚と九靑は通韻なり、陳祚明曰く、其の情頗る眞切、特弱句多し、悲淚、何意、園林等の類皆健ならず、公が詩眞率、每に體弱を餘ふ、是の時諸家皆矜琢を務む、琢すれば自然自成に遠し、其の古率なるときは、自然に近し、然れども每に弱に流ると、

【大意】從弟の舊宅を過ぎ、哀を銜んで、悲淚を零す、我が懷ふ所の人は九冥の遠きに在り、況や從兄弟なれども、生前親しきこと骨肉の兄弟と異ならず、曾て相遇うて相別れし時、從弟が我より先きに死せんとは思はざりしに、天數の盡きたるや、從弟は遂に死を免れざりし、事業も未だ大成せず、慈母は哀疚に沈み、二子は猶ほ幼なり、從弟は館中の人と爲る、其の人を弔する者は、慈母を除きて哭する者無し、生前の居室は掃ふ者も無ければ塵埃が山積する、而して中庭は草の生ずるに任す、主人の死せし跡、以て知り易し、餘情を引く所のものは、唯鬱茂せる園林のみ、其の人再び見るべからず、去らんと欲して進まず遲遲する所以なり、

陶淵明集卷二終

陶淵明集 卷三

詩五言

思悅曰く、文選五臣注に云ふ、淵明が詩、晉に作る所の者、皆年號を題す、宋に入つて作る所、但甲子を題するのみ、意は二姓に事ふるを恥ぢ、故に以て之を異にす、嘗て淵明が詩を攷ふるに、甲子を題する者あり、庚子に始まり、丙辰に距る、凡そ十七年間、只九首のみ、（或は十一首、或は十二首に作る）皆晉の安帝の時作る所なり、淵明、乙巳の秋を以て彭澤令と爲り、在官八十餘日、卽ち印綬を解き、歸去來辭を賦す、後一十六年庚申、晉、宋に禪る、恭帝元熙二年なり、豈、晉未だ宋に禪らざる前二十年、輙ち二姓に事ふるを恥ぢ、作る所の詩、但甲子を題し、以て自から異を取るべけんや、矧んや詩中又晉の年號を標する者無し、其の題する所の甲子、蓋し、偶ま一時の事を記するのみ、後人類して之を次す、亦、淵明が本意にあらずと、秦少游（宋人）嘗て云ふ、宋初めて命を受く、（卽位を云ふ）陶潛、自から祖侃、晉世の宰輔なるを以て、復た身を屈するを恥づ、投劾して歸り、潯陽に卧す、其の著はす所の書、義熙より以前、晉の年號を題し、永初以後、但甲子を題するのみ、黃魯直（山谷）の

詩、甲子不數義熙年の句あり、然らば則ち少遊・魯直、且尙ほ五臣の說に惑ふ、他は知るべきのみと、

曾季貍(宋人)曰く、淵明の詩、晉の義熙より以後、皆甲子を題す、此の說、五臣に始まる、後世遂に其の說に仍る、治平中、虎邱寺の僧思悅あり、淵明集を編し、獨り其の然らざることを辨す、謂ふ豈宋未だ禪を受けざる前二十年、二姓に事ふるを恥ぢ、甲子を題するの理あらんやと、思悅の言、信にして證ありと、

謝疊山(宋人)曰く、淵明の詩に就いて、思悅は云云論じ、韞齋詩話(曾季貍)も亦思悅を信ず、余を以て之を攷ふるに、元興二年、桓玄、位を簒ひ、晉氏斷えざること綫の如し、劉裕を得て始めて平かにして、義熙と改元す、此より天下の大權、盡く劉裕に歸す、淵明が「歸去來辭」を賦するは、實に義熙元年なり、十四年に至りて、劉公、相國と爲る、恭帝卽位し、元熙と改元す、二年庚申に至りて宋に禪る、恭帝の言を觀るに、曰く、桓玄の時、晉氏已に亡べり、天下は重ねて劉公が延く所と爲り、將に二十載ならんとす、今日の事、本、甘心する所と、詳かに此の言を味ふに、劉氏、庚子に政を得しより、庚申革命に至る、凡そ二十年、淵明、庚子より以後、甲子を題する者、蓋し逆め末流の此に至るを知る、忠の至、義の盡くるなり、思悅・裘父の二人、殆ど以て之を知るに足らずと、

蔣丹厓曰く、按ずるに、今集、但甲子ありて年號なし、少遊・魯直が言の如き、或は別に別本有るや、未だ知る可からざるなりと、

溫謙山曰く、靖節二姓に事ふるを恥づ、千載共に其の心を諒とす、唯其れ復た肯て仕へず、自から迹を田間に寄せ、詩酒放懷せざるを得ず、然れども豈靖節の志ならんや、予謂ふ、靖節の詩、多く偶爾言與にして作り、形迹に拘らず、其の心其の志、須らく象外に於て之を得べし、區區甲子年號に於て、以て其の出處を審かにせんとするは抑も末なりと、

以上諸家、論する所此の如し、『陶淵集注』に王應麟、吳師道、宋濂、郞瑛の說を擧げて詳密を盡くせり、大同小異、今一一載せざるなり、而して余の左袒する所は謙山の說に在るなり、

始作鎭軍參軍經曲阿作

始めて鎭軍參軍と作り曲阿を經て作る

弱齡寄事外。委懷在琴書。
弱齡事外に寄り、懷を委ねて琴書に在り、

被褐欣自得。屢空常晏如。
褐を被て自得を欣し、屢ば空しきも常に晏如、

時來苟冥會。婉孌憩通衢。
時來らば苟も冥會、婉孌通衢に憩ふ、

投策命晨旅。暫與園田疎。
策を投じて晨旅を命じ、暫く園田と疎なり、

眇眇孤舟遠。緜緜歸思紆。　眇眇孤舟遠く、緜緜歸思紆なり、

我行豈不遙。登陟千里餘。　我が行豈遙かならずや、登陟千里餘、

目倦川塗異。心念山澤居。　目は川塗の異なるに倦み、心は山澤の居を念ふ、

望雲慙高鳥。臨水愧游魚。　雲を望んで高鳥に慙ぢ、水に臨んで游魚に愧づ

眞想初在襟。誰謂形蹟拘。　眞想初め襟に在り、誰か謂ふ形蹟に拘すと、

聊且憑化遷。終返班生廬。　聊か且化に憑つて遷る、終に班生の廬に返らん、

【注解】鎭軍は大將、參軍は今日の參謀なり、鎭軍は果して誰たる、温謙山曰く、晉書に、宋の武帝、鎭軍と爲る、靖節、其の參軍と爲ると、陶澍曰く、鎭軍は未だ何人たるを詳かにせずと、今謂ふ武帝が晉の臣たりし時、鎭軍と作り、而して淵明之が參軍と作る、晉宋革命後にあらざるを以て、聊かも疑ふ所無し、年夾を攷ふるに、陶澍の如きは史家の說に迷ふ者、曲阿は縣の名、梁に蘭陵と稱し、隋に復た曲阿と爲し、唐に丹陽と改む、今日の江蘇省丹陽縣治なり、弱齡は幼年も少年も用ふる稱、二十歲までを言ふ、事外は物外と同じ、世事の外に心志を寄するなり、世事の外は何の用ぞ、彈琴と讀書とに此の懷を委託する、被褐、貧者の服を褐と曰ふ、毛布なり、被は「キル」と動詞に訓む、『毛詩』に「無衣無褐」とあり、貧乏しても琴書の樂あり、以て自得と爲す、屢空は『論語』の語、晏如、食を闕き、酒を空しうするも晏然憺如たり、時は時節、冥會は求めずして自から至るの意、婉孌は少く好き貌、『毛詩』に「婉兮孌兮」とあり、更に又親愛の意もあり、憩通衢、仕路に喩ふ、（謙山說）通衢は街頭なり、投策は策杖を舍投なり、命晨旅、命を參軍に奉じ廬を出で、以て其の旅裝を早晨に整理する、暫與園田疎、田園生活と暫時疎遠となる、眇眇は渺渺なり、微遠の貌、『管子』に、渺渺乎如窮無極とあり、孤舟逝、一人、廬を出で去るに喩ふ、緜緜は微思なり、長く絕えざる貌、『毛詩』に緜緜葛藟とあり、紆は屈曲縈繞の狀を云ふ、孤舟の如く今去つて遠くは逝くものの、歸思は已に浮んで心頭にあり、其の情は紆曲、一本調子に行かずとなり、不遙は遠からうかと云ふ意味、卽ち千里餘も登陟せざるべからず、其の中途の川も塗も異なりと雖も、倦むは必然なり、心は山澤に尙ほ存するを以て、念、念此に在るなり、慙鳥、愧魚、鳥は雲邊を自由に翱翔し、魚は水中を自在に浮游す、皆其の所を得、而して我が念は山澤に在るも、身を山澤に置く能はず、鳥にも慙ぢ、魚にも愧づる所以、眞想初在襟、襟は胸襟なり、塵澤せず、外飾せざるが、我が眞想なり、誰謂形蹟拘、身を田園に託するも、參軍たるに託するも、ソンナ事は忘却するが可い、形蹟に拘拘たるは君子の取らざる所、所謂狹量の論あらん、聊且憑化遷、時と俱に化し、世と共に遷るが孔子の道なり、イヤ田園の、イヤ市朝のと徒りに形蹟に拘はる者は孔子の徒にあらず、幸に時世の化に憑つて移らんのみ、而かも終には班生の廬に返らんなり、班生は後漢の班固を曰ふ、班固が「幽通賦」に、求幽貞之所廬とあり、幽貞は淵明一生を通じての主義なり、出づるは本意にはあらざるも、又恐る形蹟に拘拘たるの論あるを、是の故に出づるは出づると雖も、終には田園に歸去來、幽貞の道を修めんとなり、孫月峯曰く、淵明の詩、只是れ本色に就いて錬り得て細に入ると、謙山曰く、出入の志、孔明に同じ、孔明は返らず、淵明は終に返る、時勢同じからず、遭ふ所異なるのみと、又曰く、結語、沖澹、微に入る、淵明にあらずんば亦道ふ能はずと、

【題義】鎭軍が何人なるや諸說一定せず、或は曰ふ劉裕、或は曰ふ劉牢之と、陶澍の說に據れば隆安三年己亥靖節年三十五の時ならんと、姑らく是の說に從ふ、參軍は今日所謂參謀官なり、參謀官と作つて赴任の途上、曲阿に於て賦する所の詩なり、

【大意】宋の武帝が劉裕と稱して晉の臣たりし時、鎭軍と爲る、淵明乃ち之が參軍と爲り、曲阿を經過せし時作る、自分の志を敍せしもの、弱齡卽ち少年時代に功名に志は無く、唯琴書卽ち文藝にのみ專心し、貧乏ながら自から以て適意を欣び、金や酒に屢ば闕乏するも曾て頓著する無し、偶ま

時運と冥會して、意氣身體共に盛んなるとき仕路卽ち通衢に憩ふを得、策の如き閒具を投じて晨旅に就くの命を蒙る、是に於てか暫時田園生活と離れる、眇眇として孤舟の遠くなる如く、我が一身は一家と分れる、從つて歸思は緜緜として紆曲する、而して我が行跡は遙遙なり、山河を登陟する千里餘、川塗の異なるを見るは目倦まざるが常なるに、目倦むは何ぞ、我が心は榮達を樂まずして、常に山澤の居を念へばなり、乃ち上に雲を望んで高鳥の還るに慚ぢ、下水に臨んで游魚の其の所を樂むに愧づ、我が眞想は塗澤も外飾も爲さず、自然の儘の胸襟を披くにあり、參軍の田園のと形蹟に拘拘せざるに在り、遂に悟る參軍と爲るも自然、田園に還るも自然、世と共に化せんのみ、而かも結局は班生が示したる所の幽貞の廬、卽ち田園に歸臥せん、

庚子歲五月中從都還阻風於規林

庚子の歲、五月中、都より還り、風に規林に阻せらる

行行循歸路。計日望舊居。
行行歸路に循ふ、計日舊居を望む、

一欣侍溫顏。再喜見友于。
一たび欣ぶ溫顏に侍するを、再び喜ぶ友于を見るを、

鼓棹路崎曲。指景限西隅。
棹を鼓して崎曲に路し、景を指して西隅に限る、

江山豈不險。歸子念前塗。
江山豈險ならざらん、歸子前塗を念ふ、

凱風負我心。戢枻守窮湖。
凱風我が心に負く、枻を戢めて窮湖を守る、

高莽眇無界。夏木獨森疎。
高莽眇として界無く、夏木獨り森疎、

誰言客舟遠。近瞻百里餘。
誰か言ふ客舟遠しと、近く瞻る百里餘、

延目識南嶺。空歎將焉如。
目を延べて南嶺を識る、空しく歎ず將焉如、

【注解】庚子は安帝の隆安四年、淵明年三十六、五月中、十五日なり、京都より還り、風の爲め規林に停るなり、規林は今明かならざるも、揚子江の沿岸なるは疑ひ無し、侍溫顏は父と云ふ說と母と云ふ說とあり、母の孟夫人を以て信となすべし、友于は兄弟を云ふ、『書經』に惟孝友于兄弟とあり、兄弟相愛するを謂ふ、魏の曹植の文、今之否隔、友于同憂とあり、此の如き語を、歇後の語と曰ふ、路崎曲、陸行に依らず、水行に依ること多し、西隅、舊居は方角を西方に取つて行く、潘安仁の「賦」に、獨指景而西邁とあり、江山豈不險、歸子念前塗、父在し母又在す時は、子其の身を大切にす、故に江山の險阻なぞ避けて以て坦途を取るが道なり、今も其の事を思はざるにあらず、前塗、卽ち歸路を急ぐを以て險を避くるに遑あらずとなり、凱風負我心、凱風は『毛詩』の一篇目なり、衞國に寡婦あり、子七人あり、然るに母氏は七人の子を舍てて他に嫁せんとす、七人の子、己が孝の足らざるを責めて、母の淫亂なるを責めず、其の子の詩、凱風自南、吹彼棘心、棘心夭夭、母氏劬勞と、是を以て凱風の二字を孝道の意義に解すべきなり、今淵明が他邦に出でて孝道に背き去る、母の劬勞に對して忍びずとの意、蓋し衞の寡婦と同じく、淫亂の母と解すべからず、我心は孝道に負かずと期するも、其の負くこと多きを憂ふ、戢枻は要するに活動を止めての意、守窮湖、窮湖は九湖ならんか、九泉を窮泉と書する例もあり、潯陽郡の故里乃ち窮湖なり、高莽は廣大にして際涯なき形容、眇無界、如何にして此の無界の廣大を處理せん、余が解上の如し、或は規林に今棹を戢めて、風の止むを俟たんかと、此の說は余の取らざる所、夏木獨森疎、獨は止なり、森疎は參

義、又高低と同義、誰言客舟遠、近瞻百里餘、日本里程の二十餘里に當る、遠しとせず、延目、兩目を延屬すれば、南嶺即ち平生慕ふ所の廬阜は依然として高秀なり、將焉如、焉は何と同じ、焉如と訓すべきなり、焉如と訓するは今取らず、空歎するは將た何如の意ぞとなり、譚山曰く、少陵の詩中の字法、多く此に脫胎すと、上平聲六魚の韻、

【題義】庚子五月、都より還る途次、强風の爲め歩行自由ならず、遂に規林に休息し、其の情景を歌ふ、靖節年三十六の時なり、

【大意】庚子の五月、都城より鄉里に還る途中、風の爲め舟を規林に繫ぎ、此に宿泊して作るなり、此の舟の前途は歸路を指す、舊居に歸著するは何日頃ならんと計る、又早く還りて慈母の溫顏に侍することなぞを欣び、又兄弟と談話を交換することなぞも喜びの一つに數ふ、而して此の行陸より水行に遇る、而して日景を指して舊居の方角を思ふ、江山の險思はざるにあらず、險處に遇れば歸路は早く、安處に遇れば歸路は遲る、孝子は險處を避くべきの道なるを知る、而かも其の遲れるを憂ふ、險處を通過するの已むを得ず、我を省みれば凱風即ち孝道に於て不本意の事多し、是に於て故里に返り鷄湖を守らん、高莽は眇として界無し、夏木は獨り森疎なり、主人は留守なるも中庭の夏木は其の影森疎ならん、客舟遠しと言ふ者はあらんか、已に百里餘にして我が故里は遠からざるなり、目を延いて瞻れば、南嶺即ち廬山の高秀なるあり、此の規林に阻して空しく嘆ずるは焉如ぞや、嘆ずるに及ばざるなり、

自古歎行役。我今始知之。
古より行役を歎ず、我今始めて之を知る、

山川一何曠。巽坎難與期。
山川一に何ぞ曠き、巽坎與に期し難し、

崩浪聒天響。長風無息時。
崩浪天に聒しく響き、長風息む時無し、

久游戀所生。如何淹在茲。
久游して所生を戀ふ、如何ぞ淹として茲に在る、

靜念園林好。人間良可辭。
靜かに園林の好きを念ひ、人間良に辭すべし、

當年詎有幾。縱心復何疑。
當年詎ぞ幾ある、縱心復何ぞ疑はん、

【注解】自古歎行役、『周禮』に、若國作民、而師田行役之事、則帥而致之、『注疏』に、行謂二巡狩一、役謂二役作一、乃ち公事の爲め辛勞するが故に、歎嗟するなり、後世個人としての旅行を行役と謂ふが如きは、世歎嗟するに足らん、始知、淵明が其の辛苦の狀を體驗せしなり、山川一何曠、此の山、此の川、行役難を唱ふる所以、巽は卦の名、卑順なり、坎は又卦の名、陷なり險なり、又巽は風なり、坎は水なり、道路行役の艱難を言ふ、崩浪聒天響、浪の崩るる響、其の音耳を破るが如し、長風は山上を吹き、又木上を吹くの風、障へるもの無き處を吹く風なり、久游は可し、冬遊は不可、戀所生は故鄕を慕ふなり、淹は淹留、淹留して茲の地に在るは何ぞや、園林好は故鄕の園林の好きを念ふなり、人間は世間、當年詎有幾、當は恐らくは餘の誤ならん、餘年幾何も無しにて通ずるなり、縱心復何疑、趙泉山曰く、二詩皆直に歸省の意を敍すと、何孟春曰く、朱子嘗て此の詩を書し、一士子に與へて云ふ、能く此の一詩を參得して透過せば、今日所謂擧業、他日所謂功名富貴なる者、皆心を經ずして可なり、上聲四支、

【大意】公人と爲つて千里に役す、古來より痛嘆する所、其の聞く所を今日我は實行する人なり、巽に其の苦を體驗す、我が門を一歩出づれば天地山川頗る廣大なり、是の故に得も失も與に期し難し、

舟を繋ぐの此の處、風浪極めて激しく、響息むとき無し、久しく他鄉に在りしもの、所生卽ち其の故里を戀ふの念頻りに生ず、如何ぞ長く此の處に滯留するを得んや、是の時氣を靜かにして園林の好きを念はば、人間卽ち普通人世の俗事は良に辭すべし、餘年も亦長からざるを知る、心を縦にして復疑ふ所のもの無し、

辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗中

辛丑の歲七月、假に赴き江陵に還る、夜行塗中

閒居三十載。遂與塵事冥。　閒居三十載、遂に塵事と冥し、
詩書敦宿好。林園無俗情。　詩書宿好敦く、林園俗情無し、
如何捨此去。遙遙至西荊。　如何ぞ此を捨て去り、遙遙西荊に至る、
叩枻新秋月。臨流別友生。　枻を叩く新秋の月、流に臨んで友生に別る、
涼風起將夕。夜景湛虛明。　涼風起つて將に夕ならんとす、夜景湛として虛明、
昭昭天宇闊。皛皛川上平。　昭昭天宇闊く、皛皛川上平かなり、
懷役不遑寐。中宵尙孤征。　役を懷うて寐ぬるに遑あらず、中宵尙孤征、
商歌非吾事。依依在耦畊。　商歌吾が事にあらず、依依耦畊に在り、
投冠旋舊墟。不爲好爵縈。　冠を投じて舊墟に旋る、好爵に縈はれず、
養眞衡茅下。庶以善自名。　眞を養ふ衡茅の下、庶はくは善を以て自ら名けん、

【注解】辛丑は安帝の隆安七年、淵明年三十七、假は地名、江陵は春秋のときの楚の諸宮の地、漢に江陵縣、今湖北の荊南道なり、塗中を一本塗口に作る、是とす、沙陽縣より下流一百一十里、赤圻に至る、赤圻より二十里、塗口に至る、閒居は在廬の時代、塵事は世事なり、敦宿好、生來好む所の詩書を讀む、林園は全く俗情無し、捨此去、此の如き好林園を捨て去つてなり、遙遙は「ハルバル」なり、西荊は、李善曰く、西荊州なり、時に京都は東に在り、故に荊州を謂つて西と爲す、各本、南に作るは非、今の江陵縣卽ち舊荊州なり、枻は楫「カヂ」と同義、新秋月、七月なればなり、臨流別友生、送りて以て此に至りし人に別離する、將夕、前旬の月に應ず、而して夜景に入る、水色は湛湛として、天色は虛明なり、昭昭も皛皛も明白の形容、懷役、役事ある爲め心配する、不遑寐、心配する故なり、中宵は夜半なり、尙孤征、舟停泊せず、夜半猶ほ行く、商歌は春秋の寗戚が歌ひしもの、南山矸、白石爛、生不遭堯與舜禪、短布單衣適至骭、從昏飯牛薄夜半、長夜曼曼何時旦と歌うて、桓公の聞く所となり、登用せらる、非吾事、淵明の意、商歌を歌うて以て君に遭ふなぞの致は無し、依依在耦畊、夫妻として相耕す、我が意は茲に在るなり、投冠は辭職する、旋は還るなり、舊墟は田園なり、不爲好爵縈、縈は「メグラス」旋なり、『毛詩』に葛藟縈之とあり、好爵の爲め捕縛せられざるを謂ふ、養眞は眞樸を養ふなり、衡茅下は、好爵者と反對、貧賤の生活を謂ふ、庶は冀ふなり、以善自名、『孟子』人の有生の初、其の性は本善、未だ嘗て惡あらず、淵明の意亦茲に在り、下平聲八庚の韻、陳祚明曰く、叩枻の六句、景色生動すと、蔣丹崖曰く、篇中澹然恬退、憤激を露はさず、之を楚騷に較するに、靜躁の分ありと、

【題義】安帝の隆安五年、靖節年三十七、假州に赴き江陵縣に還る時、夜、塗口に行きて作る所のも

のなり、

【大意】行役中の情懷を敍す、閒居して讀書すること三十年、是の間全く塵事と沒交涉なるが故に冥し、唯詩書のみ宿性の好む所、乃ち意を詩書に敎くす、林園は全く俗情無し、捨つる能はざるものを捨て去つて、遙遙たるの西荊に至る、西荊に至るには水路に憑る、故に枻を叩く、新秋月正に好し、友生と此處に別る、秋熱無くして涼風あり、此の夕太だ可し、夜景夏に虛明にして好し、天宇は昭昭たり、故に闊く、川上は皛皛たり、故に平かなり、行役の忽諸に付す可からざるを懷へば、決して寐ぬる遑あらず、夜中も尙征行する、商歌を發して明主を求め榮達を計るは我が事にはあらず、吾は依依として耦畊する事を愛す、耦畊を愛する者には冠の必要なし、是の故に冠を投げて舊墟に旋らん、好爵の爲め縈はるる者は他人なり、我は好爵に縈はるるを嫌ふなり、我は眞機を貧賤の家に養ひ、以て善と思ふことを爲さん、

癸卯歲始春懷古田舍 二首　癸卯の歲始春古田舍を懷ふ　二首

在昔聞南畝。當年竟未踐。　在昔南畝を聞き、當年竟に未だ踐ます、

屢空既有人。春興豈自免。　屢空既に人あり、春興豈自から免れん、

夙晨裝吾駕。啓塗情已緬。　夙晨吾が駕を裝ひ、啓塗情已に緬なり、

鳥弄歡新節。冷風送餘善。　鳥弄新節を歡び、冷風餘善を送る、

寒竹被荒蹊。地爲罕人遠。　寒竹荒蹊に被り、地は人罕なる爲に遠し、

是以植杖翁。悠然不復返。　是を以て植杖の翁、悠然として復返らず、

卽理愧通識。所保詎乃淺。　理に卽して通識に愧づ、保つ所詎ぞ乃ち淺き、

【注解】癸卯は安帝の元興二年、桓玄が自ら楚王と稱せし歲、淵明年三十九、古田舍は生地卽ち潯陽の柴桑里なり、在昔聞南畝、『毛詩』に、以我厚耜、俶載南畝とあり、乃ち昔人に南畝に耕すの著を聞く、而かも我は官途に出游し、當年、ソノカミ、竟未踐、屢空既有人、『論語先進篇』に、回也其庶乎、屢空、賜不受命而貨殖焉、億則屢中とあり、回の如き人は衣食の道を缺くも（屢空）道に於ては實踐躬行したるなり、（既有人）我は回に恥づとの意あり、春興、春耕の已に興起の節となる、豈自免、古田舍を懷ふの意始めて出づ、我も歸田して耕作の著を思ふ、夙晨は早晨なり、裝吾駕、農具を整理して、出發の用意をする、啓塗は我が田畝を啓拓するを言ふ、未だ行かざるも、已に此の思が發するゆゑ、情已緬と言ふ、緬は緬遠なり、鳥弄は鳥が好音を弄す、歡新節、正に是れ好時節、鳥も亦歡喜するなり、冷風送餘善、『莊子』に、列子御風而行、冷然善也とあり、此の語より得來る、妙言ふべからず、一本に、鳥弄新節、冷風送餘善と、今の本を以て可しとす、寒竹被荒蹊、主人不在なるを以て寒竹が跋扈する、地爲罕人遠、罕を幽に作る本あり、罕を以て可しとす、人跡稀疎なれば、地も自ら僻遠なり、路の遼遠なるを言ふと解すべからず、罕は俗字、早に作るを正とす、是以植杖翁、『論語微子篇』に、子路從而後、遇丈人以杖荷蓧、子路問曰、子見夫子乎、丈人曰、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子、植其杖而芸、昔し荷蓧翁は田園に身を託して、世間には復返せざりき、卽理愧通識、所保詎乃淺、道理に卽いて我は通識と稱

せらるるを愧づ、通識の人は古より節を褒ふ者多し、黄文煥曰く、躬耕の内、節義身名、皆以て自ら全うすべし、詭ひ獨子たる僞は ざるも、亦丈人たるを失はず、此れ其の保つ所なりと、上蔡十六銑の誤、饒伯敬曰く、腴は朴に生じ、淸は老に出で、高は厚に本づき、逸は細に原す、此等の作を讀み、當に之を自得すべし、蔣丹厓曰く、此等の田舍翁、近今得べきにあらず、若し能く領略すれば、便ち高士と作ると、

【題義】 癸卯は安帝の元興二年、靖節年三十九、始春卽ち正月、田園生活を貴ぶ上より、古の田舍の狀態を懷うて作る、

【大意】 在昔、周以前の人が南畝に畊したることを聞く、而かも我は當年自から畊すことを爲さず、回也の如く衣食は屢空しきも、道に於ては其れ得たるの人なり、然るに今や春期にて畊作すべき時なり、其の善なることを知つては我も自から之を免るることをせんや、畊さざるべからず、乃ち夙晨に農具と旅裝を整理して出づ、出づる時已に兎やせん角せんと情は已に緬なり、鳥の聲を弄するは新節を歡ぶなり、風の冷冷たるは餘善を送るなり、其の荒蹊は寒竹滿ち、其の地は僻陋なれば人は罕なり、是れ所謂自然に適ふの地、我は古の植杖翁の如く、此に身を託して世間に再び返らず、此處に悠然たるに如かず、農人なぞと爲るを笑ふ者は笑ふべし、我は通識の人にはあらず、而かも保つ所のものは保つ、詎ぞ之を淺しと言はんや、

先師有遺訓。憂道不憂貧。　先師遺訓あり、道を憂へて貧を憂へず、

瞻望邈難逮。轉欲思常勤。　瞻望邈として逮び難く、轉た常勤を思はんと欲す、

秉耒懽時務。解顏勸農人。　耒を秉つて時務を懽び、顏を解いて農人に勸む、

平疇交遠風。良苗亦懷新。　平疇遠風交ふ、良苗亦新を懷ふ、

雖未量歲功。卽事多所欣。　未だ歲功を量らずと雖も、卽事欣ぶ所多し、

耕種有時息。行者無問津。　耕種時ありて息む、行く者津を問ふ無し、

日入相與歸。壺漿勞近鄰。　日入つて相與に歸る、壺漿近鄰を勞す、

長吟掩柴門。聊爲隴畝民。　長吟柴門を掩ふ、聊か隴畝の民と爲る、

【注解】 先師は孔子を指す、憂道不憂貧は『論語』の語、瞻望、先師の高德を瞻望するも、邈は隔遠なり、難逮、追隨する能はずとなり、轉欲思常勤、勤むべきを勸むるが淵明の主義、是れ以て貧を憂ふる心あるなり、而かも淵明の經濟は決して蓄財の爲めにはあらず、所謂常勤努力に在るなり、耒は卽ち「スキ」なり、懽時務、晉人多く時務を懽ばず、放談空論、光陰を徒消す、淵明の反對する所以、解顏は愉快なる面を云ふ、勸農人、畊作の精勵すべきを勸告する、平疇交遠風、良苗亦懷新、東坡曰く、平疇の二句、古の耦畊植杖者にあらずんば道ふ能はずと、『遺山詩話』に、子瞻（東坡）一日學士院に在りて閑坐す、左右に命じて紙を取り、平疇の二句を書す、大小楷行草凡そ七八紙、遂りに歎息して好しと稱し、左右の給事に散ずと、張裘臣曰く、僕、田中に居る、稼穡是れ力む、夏秋の交、稍旱して雨を得、雨餘徐歩すれば、淸風颯颯、禾黍秀を競ひ、塵埃を濯うて新綠を泛ぶ、乃ち悟る、淵明の句善く物を體するなと、雖未量歲功、卽事多所欣、歲功卽ち收穫の有るや無きやは未だ計量する迄はあらざるも、畊作其の物、欣喜する所多しとなり、耕種有時息、行者無問津、畊者の樂は行者に勝るを謂ふなり、子路問津の事、『論語微子篇』に出づ、要するに淵明は畊作

を救ふ爲め、孔子の道を謀つて食を謀らず、道を憂へて貧を憂へず等の意味には、全く反對したるものなり、行者無問津の五字、如何に解釋すべきかは問題なり、但『論語』に反對したる意義は明白なりとす、日入相與歸、落日に家に返るを言ふ、壺漿勞近鄰、美酒佳肴にあらざるも、濁酒疎肴、以て近鄰の人人と慰勞する、長吟掩柴門、聊爲隴畝民、古の隴畝の民は、決して我田引水の爭論を爲さず、淵明が今の農と爲らずして、古の農たらんと欲する所以、其の質朴に在るなり、十一眞と十二文（勤、欣、）とは古通韻なり、何義門曰く、瞻望の二句、此れ道の行ふ可からざるときは、聊か農と爲り以て世を毀するを謂ふ、歲功の二句妙絕、仍ほ貧を憂ふるに一ならず、故に言近く旨遠し、行者無問津の句、已に遯世の意を寓すと、温謙山曰く、唐人、卽事を以て題とす、蓋し此の詩に本づくかと、

【大意】先師卽ち孔夫子は遺訓を垂る、其の語は何ぞ、道を憂へて貧を憂へず、彼の高德は瞻望せざるにあらず、而かも逮び難きを如何、是に於てか轉じて人は人として常の勤めを爲さんことを思ふ、乃ち我の常勤は耒を秉つて時務卽ち農畊を懽ぶに在るなり、自から勤め亦以て他の農人にも勸告する、乃ち知る平疇は遠風交ふ、良苗は新ならんことを懷ふ、春畊の結果は秋日に顯はる、故に歲功卽ち秋穫は今日量る能はざるも、常勤其の事が今日の欣びであるなり、畊者卽ち我輩農民は時ありて息ふ、行者卽ち子路は今日の世の人にあらず、故に津を我に問ふ無し、要なき議論を爲すを免るるを言ふ、落日に家に歸り、濁酒疎肴以て近鄰と懽飮す、古の農人の如く長吟して柴門を掩ひ、肯て水論など爲さず、古の隴畝の民は決して水論など爲さざるなり、

癸卯歲十二月中作與從弟敬遠

癸卯の歲十二月中作り、從弟敬遠に與ふ

寢迹衡門下。邈與世相絕。
顧盼莫誰知。荊扉晝常閉。
淒淒歲暮風。翳翳經日雪。
傾耳無希聲。在目皓已絜。
勁氣侵襟袖。簞瓢謝屢設。
蕭索空宇中。了無一可悅。
歷覽千載書。時時見遺烈。
高操非所攀。深得固窮節。
平津苟不由。棲遲詎爲拙。
寄意一言外。茲契誰能別。

寢迹衡門の下、邈として世と相絕つ、
顧盼誰の知る莫く、荊扉晝常に閉づ、
淒淒歲暮の風、翳翳經日の雪、
耳を傾け希聲無く、目に在り皓已に絜、
勁氣襟袖を侵し、簞瓢屢設くるを謝す、
蕭索空宇の中、了に一の悅ぶべき無し、
千歲の書を歷覽して、時時遺烈を見る、
高操攀づる所にあらず、深く固窮の節を得、
平津苟くも由らず、棲遲詎ぞ拙と爲ん、
意を寄す一言の外、茲契誰か能く別たん、

【注解】寢迹は起臥棲息と同義、世と絕交す、顧盼は「カヘリミル」なり、來觀にはあらず、莫誰知、誰人も知る者は莫し、荊扉

は蹕末の門、凄凄は二義あり、『毛詩』の「秋日凄凄」は、毛傳に涼風也と、今は歲暮なれば、寒風の貌と解すべし、翳翳は陰翳と同じ、經日雪、每日雪の爲め天色の晴霽たるを言ふ、傾耳無希聲、在目皓已絜、此の十字は神來の句、心を以て解すべし、字を以て解すべからず、羅大經（宋人）は、後世能く加ふる者無しと評せり、洵に其の言の如し、耳に就いては其の輕きを知り、目に就いては其の絜きを知る、勁氣、强勁寒氣、簞は食を盛る器、竹を以て之を爲る、圓は簞、方は笥、瓢は酒器、謝屢設、敬遠が淵明に對して飢寒を免かれしめん爲に酒食を貽る、之を謝すとなり、蕭索空宇中、空は空虛、宇は屋宇、室中、貧人の如く贅澤品のあらざるを言ふ、了無一可悅、喜悅すべき材料なし、唯以て喜悅せしむる者は、千載書のみ、遺烈は古人の遺風芳烈なり、高操は古人の高操、操を謙山本操に作る、非所攀、古人の高風堅操は我の追攀する所にはあらず、深得固窮節、平津苟不由、前漢武帝の時、公孫弘、平津侯に封ぜらる、弘は學識共に高く、武帝を補けて功多し、詔に曰く、漢興以來、股肱、位に在り、身、儉約を行ひ、財を輕んじ、義を重んずる、未だ公孫弘の如き者はあらずと、今、淵明、晉室の爲め股肱たる能はず、大に公孫弘に恥づるありとなり、棲遲詎爲拙、衡門の下、棲遲するは、古の隱者の道、拙と爲す者は爲せ、拙ならずと爲す者は爲せ、寄意一言外、一言とは固窮を指して云ふ、固窮の節を守ると云ふ一言の外は、總て言ふ所にあらず、暗に桓玄が帝と稱するの代を痛む、玆契誰能別、契は契合、別は辨別なり、人の之を辨別する者は少なし、汝、敬遠は能く辨別せよとなり、入聲九屑の韻、陳祚明曰く、起四句一句一意、一意一轉、曲折、致を盡す、全く子卿が骨肉緣枝葉の章句を得、而して攀摹の迹無しと、溫謙山曰く、傾耳の五字、渾化迹無し、陶詩の高、千古に卓越する所以と、

【大意】 衡門の下に起臥して、世と交を絕つ、顧盼するに知る者は莫し、白晝も扉を閉づ、寒天の故に風は淒淒と吹き、冬暮の故に雪は經日息まず、而して雪の聲を聞かんと欲するも聲は微にして太だ希なり、而かも目に在つては其の色の皓絜なるを看る、寒氣は勁烈にして襟袖に侵入す、之を禦ぐには友の貽られたる所の酒食の有るあり、室中は蕭索、我を慰安する具は無し、我を慰安するものは唯古人の書のみ、之を讀み古人の遺烈を見る、而かも其の遺烈は良とに高操にして之を慕ふも之に攀づるを得ず、深く固窮の節を得て、遺烈を後世に留むる平津侯の如き、之を敬慕するも之に追由するを得ず、平津侯の如き人に追由するを得ざるに於ては、寧ろ衡門の下に棲遲して、以て拙を守るに如かず、乃ち我が意を固窮なる一言に寄與する、爾敬遠は能く我が意の存する所を分別するであらう、

乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪

乙巳の歲三月、建威參軍と爲り、都に使し錢溪を經

我不踐斯境。歲月好已積。　我斯の境を踐まず、歲月好し已に積む、
晨夕看山川。事事悉如昔。　晨夕山川を看る、事事悉く昔の如し、
微雨洗高林。清飈矯雲翮。　微雨高林を洗ひ、淸飈雲翮に矯たり、
眷彼品物存。義風都未隔。　彼の品物の存するを眷る、義風都て未だ隔てず、
伊余何爲者。勉勵從茲役。　伊余何爲る者ぞ、勉勵茲役に從ふ、
一形似有制。素襟不可易。　一形制有るに似て、素襟易ふ可からず、
園田日夢想。安得久離析。　園田日に夢想す、安んぞ久しく離析するを得ん、

終懷在歸舟。諒哉宜霜柏。　終に懷ひは歸舟に在り、諒なる哉霜柏に宜し、

【注解】乙巳は晉の義熙元年、淵明年四十一、建威參軍の職を奉じ、上京に使す、錢溪は安徽貴池縣の東西四十五里の地、今日は梅根河、又梅根渚と名づく、是の年、安帝、江陵に在り、南陽の魯宗之、義兵を揚ぐるも、賊（桓玄の兵）の爲め敗らる、然りと雖も、晉大失あらずして、舊物を損せず、淵明此の詩ある所以、我不踐斯境、錢溪は嘗て一遊せし地、而かも久しく踐まずとなり、歲月好已積、昔遊より已に久しとなり、晨夕看山川、今來りて此に二宿か三宿かは知らず、晨夕に此の土地を看る、事事悉如昔、山川の猶ほ舊なるを喜ぶなり、微雨洗高林、淸飈矯雲翮、此の十字、千古の名句、何義門曰く、二句奮迅出塵と、飈は風なり、矯は種種の義あるが、今は高く擧がるの義を取る、翮は羽莖なり、風が來つて雲の羽を高く擧ぐるの謂ひなり、極めて細微の景を敍す、眷は眷戀、品物は此の錢溪に於ける事事物物を言ふ、義風都未隔、義善の風、猶ほ舊と同じ、伊余は『毛詩』に「伊余來塈」とあり、何爲者は、「史記」（項羽紀）客何爲者とあり、「イカナルモノゾ」「ナンスルモノゾ」共に通ず、勉勵從茲役、平語なるか、不平語なるかは判じ難きも、建威參軍の役に從事して、勉勵すとの意、一形似有制、形は形體、制は制裁、役人と爲れば、役人の形としての制裁は免るる能はず、役人と爲つて居ては幽人と爲ることは能はず、其の制裁あればなり、而かも我に於ては素襟、卽ち素志、卽ち宿心は變易すべからず、形體の爲めに、素志までも變易する能はずとなり、是の故に、園田は夢にだも忘れず、夢にだも忘れざる園田、安んぞ久しく離析することを得んや、終懷在歸舟、諒哉宜霜柏、霜柏は人の節操固きを云ふ、形は世の爲め役せらるるも、素志は始終一貫して、決して變ずべからずとなり、入蹕十一陌の題、陳祚明曰く、一形の二句眞に素語と、

【題義】乙巳は安帝の義熙元年、靖節年四十一、是の年三月劉懷肅が建威將軍と爲つて、逆黨を江陵に擊つ、靖節是が參謀と爲つて之に赴き、途中、錢溪に於て、其の情懷を歌ふものなり、

【大意】三月、都に使して路を錢溪に取る、是の錢溪は曾游の地、其の曾游も已に久し、是に於てか感慨に堪へず、山川の風景を看るに、事事悉く昔日と異らず、而して只今看る所は微雨が一過して高林洗ふが如く、淸風は雲の羽莖を捲いて高く天上に擧る、昔時も此の狀を見たるなり、其の品物今猶ほ存して此の如し、昔も今も隔絕せず、余は伊れ何爲る者ぞや、天地自然の悠悠たるに對して、我は役役として參軍なる職務の爲め勉勵する、而かも一形は易ふ可からず、我の心魂は日夜園田に在るなり、參軍と爲ると雖も、決して園田と心は離析せず、終には歸去來を歌ひ、一舟に棹して歸らんのみ、霜柏の節は終始無し、我の志も亦終始無きなり、

還舊居　舊居に還る

疇昔家上京。六載去還歸。　疇昔上京に家す、六載去つて還歸る、
今日始復來。惻愴多所悲。　今日始めて復た來る、惻愴悲む所多し、
阡陌不移舊。邑屋或時非。　阡陌舊を移さず、邑屋或時は非なり、
履歷周故居。鄰老罕復遺。　履歷故居に周し、鄰老復た遺る罕なり、
步步尋往迹。有處特依依。　步步往迹を尋ね、有處特に依依、
流幻百年中。寒暑日相推。　流幻百年の中、寒暑日に相推す、
常恐大化盡。氣力不及衰。　常に恐る大化の盡くるを、氣力衰ふるに及ばず、

廢置且莫念。一觴聊可揮。　廢置且念ふ莫し、一觴聊か揮ふ可し、

【注解】上京は、『朱子語錄』に曰ふ、廬山に淵明古迹の處ありと、上京と曰ふ、今、土人、荊に作る、江中に一盤石あり、石上に痕あり、淵明、其の上に醉臥すと云ふ、淵明醉石と名づく、陶澍曰く、『名勝志』に、南康城西七里、玉京山あり、亦上京と名づく、淵明の故居あり、嚮昔家上京とは、即ち是れなりと、六載去還歸、韓子蒼（宋人）曰く、淵明、庚子の始より建威參軍と爲り、參軍より彭澤令と爲る、途に官を棄てて歸る、是の歲乙巳、故に六載と云ふと、趙泉山曰く、乙未より鎭軍の幕を佐け、今に迄る六載、子蒼誤ると、吳瞻泰曰く、鎭軍、建威は皆暫時、治軍の官、公、庚子の歲、鎭軍參軍と作る、建威にはあらずと、陶澍曰く、蓋し己亥より甲辰に至る、正しく六年、去還歸は己亥を以て出で、庚子、假に還る、辛丑再び還り、甲辰、閒に服し、又本州建威參軍と爲る、去つて歸り、歸つて復た去る、故に六載去還歸と曰ふ、韓、趙、吳、均しく之を考へざるのみと、惻愴は、「荀悅文」に惻愴勸懷とあり、悲を形容する語、阡陌不移舊、東西南北の地形は依然たり、而かも邑屋は舊と同じからず、履歷周故居、舊時の樣は、處處遊遍してあり、鄰老罕復遺、人は已に逝いて、遺老は幾人も無し、感慨の目を以て往迹を尋問し、其の往迹の依然として有處に到れば、特に依依、戀戀の情が起るなり、流は流轉、幻は幻化、古往今來、人間は流幻ならざるは無し、乃ち世上の意味に解す、世上百年の中、寒暑日相推、『易』に、寒暑相推、而歲成焉と、推は遷移義なり、常恐大化盡、廣義に言へば、天地有情皆盡きる、狹義に言へば、人間は壽命盡きて死すとなり、氣力不及衰、神經の作用猶ほ盛なるを云ふ、廢置且莫念、萬事舍て置き、何事も念頭に置かず、一觴聊可揮、忘愁帶を以て天下の憂、悉皆忘るべし、陳祚明曰く、大化の二語名言、人の慮かる所のもの衰ふ、孰か衰ふるに及ばざる者有るを知らんや、感ずる所、要に深しと、上平聲五微の韻、

【題義】一たび家を出でて、南船北馬、已に五年餘、今日其の舊居に還り、感慨を敍べられしものなり、義熙二年、靖節年四十二、

【大意】疇昔、上京に居住し、此に居住すること六年、而して今日亦復た茲に來る、疇昔と今日とを俯仰すれば、惻愴として悲しむべきもの多し、街區の劃態は依然たるも、屋宅の形狀は皆舊にあらず、是に於て故居即ち自身が舊住の處を周游して見れば、舊知の老人遺る者罕なり、感慨の目を以て步步に往迹を尋ね、其の舊物の有る處に到りては、情特に依依たるものあり、乃ち思ふ、流轉幻化百年の中、寒來暑往堂堂として節は推し移る、移るは可なり、常に恐る終には大化の盡くるに至るを、氣力の未だ衰へざるの時、天下の事憂へても限りなし、如かず一杯の酒を飲み、以て元氣を發揮せんには、

戊申歲六月中遇火　戊申の歲六月中火に遇ふ

草廬寄窮巷。甘以辭華軒。　草廬窮巷に寄せ、甘んじて以て華軒を辭す、
正夏長風急。林室盡燒燔。　正夏長風急に、林室盡燒燔す、
一宅無遺宇。舫舟蔭門前。　一宅も遺宇無し、舫舟門前に蔭る、
迢迢新秋夕。亭亭月將圓。　迢迢新秋の夕、亭亭月將に圓ならんとす、
果菜始復生。驚鳥尙未還。　果菜始めて復た生じ、驚鳥尙未だ還らず、
中宵佇遙念。一盼周九天。　中宵佇んで遙に念ひ、一盼九天に周し、
總髮抱孤念。奄出四十年。　總髮孤念を抱き、奄出四十年、

形迹憑レ化往。靈府長獨閒。　形迹化に憑つて往き、靈府長く獨り閒なり、

貞剛自有レ質。玉石乃非レ堅。　貞剛自から質あり、玉石乃ち堅きに非ず、

仰想東戸時。餘糧宿二中田一。　仰想す東戸の時、餘糧中田に宿す、

鼓腹無レ所レ思。朝起暮歸眠。　鼓腹思ふ所無し、朝に起き暮に歸眠す、

既已不レ遇レ茲。且遂灌二西園一。　既已に茲に遇はずんば、且遂に西園に灌がん、

【注解】 戊申は義熙四年、淵明年四十四、窮巷は柴桑里なり、草廬は孔明が三顧草廬の文字、華は美麗、軒は大夫の車なり、『十六國春秋』に、修弃ニ管仲一、不レ足ニ華レ軒堂ヲ阜とあり、正夏は六月、林室は林と室となり、燔は炙なり、又、焚なり、無遺宇、幾棟ありしや知らず一家全燒なり、舫舟は兩舟が竝ぶなり、門前の江水には舟のみ燒け殘り、柳蔭に在り、迢迢は高遠の貌、新秋夕、天が澄みて高遠なるを云ふ、亭亭は聳え立つの貌、即ち聳立は高きを以て今月の中天に圓なるを云ふ、果菜は果蔬に作る本あり、始復生、根が燒けざりしを以て芽を發生したるなり、驚鳥尙未還、林已に燒けたり、鳥の歸宿する處なし、還らざる所以、中宵は夜半、竚は竚立、中庭に竚立するなり、遙念、天の遙なるを望んで念ふ、一盼周九天、盼は顧みるなり、視るなり、天上を殘るところなく願望するをいふ、總髮は總角と同じ、『毛詩』に「總角丱兮」とあり、其の髮を總聚して之を結束する、少年少女なり、孤念は俗語の頑固なり、自己を信ずる厚く、人と和せざる性質、淵明は此の性質を保持して、茲に四十年を荏出したるなり、形迹憑化往、靈府長獨閒、有形の幻軀は時勢に依つて種種と變化するも、無形の精神は今昔異なること無く、一の主義を始終通貫して居るとなり、靈府は『莊子』に「不レ可レ入ニ於靈府一」とあり、心の異名と心得べし、貞剛自有質、玉石乃非堅、精神の貞剛と、玉石の堅剛と比較するときは、玉石は柔にして、精神は強なり、仰想は敬意を表する時用ふる語、東戸時、何孟春曰く、子思子曰く、東戸季子の時、道上雁行して、遺を拾はず、餘糧宿中田、東戸氏の時、耕者、餘糧を隴畝に宿す、上代の人の正直、他人の田を刈らざるを言ふ、鼓腹無所思、朝起暮歸眠、上代の民は鼓腹して以て昇平を樂しむ、其の故に思ふ所も無きなり、唯是れ朝起暮眠、尋常生活の道を講ずるのみ、干戈爭奪の事はあらず、仰想より歸眠に至る二十字は過去上世の事を言ふ、既巳、「スデニ」なり、「スデニスデニ」と訓む何の所以を知らず、不遇茲、上世の鼓腹昇平に今日は遇はずとなり、且遂灌西園、水を西園に灌ぐの意味、十二文、十三元、一先、は古通韻なり、蔣丹厓曰く、他人此の火變に遇はば、定んで牢騷愁苦の語を作さん、先生、一筆を著けず、末に僅に仰想東戸、宕、言外に在り、此れ眞に能く靈府獨り閒なる者と、

【題義】 義熙四年戊申、靖節年四十四、栗里の家居、火を失す、其の情景を敍するものなり、

【大意】 草廬の在る所は窮巷即ち細民窟なり、此の窮巷に甘んじて決して繁華豪勢の處へ移らざるなり、時正に六月仲夏、風の急なるに乘じて誤つて火を失し、林室盡く燒燔して、餘す所の物無く、一家全燒す、住するに家無ければ、門前の水流に舟を泛べ、舟中に起臥するに至る、舟中に起臥する半月餘、終に新秋即ち七月、月も將に圓ならんとする十五夜も舟中に於て見るに至る、既にして燒跡を見れば、果菜は自然と復た芽を生じたるも、燒前棲んで居りし鳥は林が燒けたれば遂に還歸せず、中宵に竚立して遙に念ひ、九天を周く願望す、而して自身を顧みれば總髮より以來孤立の念を抱き、今に至る四十年、其の念は變せず、形迹は時の化に一任して往くも、靈府即ち精神一片は長く獨り閒なり、而して此の精神の貞剛は、非常に堅固にして、玉石も此に比すれば堅きを失するを覺ゆ、是に於て上古東戸氏時代を想像する、餘糧は中田に宿して、民皆鼓腹し、何等の欲念も無し、朝に起き暮に眠る、今や茲東戸氏の時代に遇ふ能はず、且く是の燒跡に生じたる果菜に水を灌ぎて以て自から慰せん、

乙酉歲九月九日

乙酉歲九月九日

靡靡秋已夕。淒淒風露交。
靡靡秋已に夕、淒淒風露交はる、

蔓草不復榮。園木空自凋。
蔓草復た榮えず、園木空しく自ら凋む、

清氣澄餘滓。杳然天界高。
清氣餘滓澄み、杳然天界高し、

哀蟬無留響。叢雁鳴雲霄。
哀蟬響を留むる無く、叢雁雲霄に鳴く、

萬化相尋繹。人生豈不勞。
萬化相尋繹す、人生豈勞せざらん、

從古皆有沒。念之中心焦。
古より皆沒あり、之を念へば中心焦す、

何以稱我情。濁酒且自陶。
何を以て我が情に稱はん、濁酒且自ら陶たり、

千載非所知。聊以永今朝。
千載知る所にあらず、聊か以て今朝を永うせん、

【注解】已酉は義熙五年、淵明、年四十五、身、栗里に在り、是の年、劉裕、南燕を伐つ、南燕の慕容超、頻りに晉邊を侵略す、淵明が重九の詩ある所以、靡靡は『毛詩』の「行邁靡靡」は、遲遲と意義同じ、『書』の『商俗靡靡』は、隨順の意、今の意、遲遲と見るは的確ならざるも、此の他の義理を發見せず、夕は晩なり、秋晩なり、風露交、正に是れ秋晩の實狀、蔓草も園木も平等に凋落する、滓は「カス」澱なり、水澄の粉末を澱と曰ふ、清氣が天地に充滿して、滓澱に至るまで澄まざる者なきを言ふ、天界高、清の極、澄の極、無留響は哀蟬、卽ち秋蟬が鳴き止まざるを言ふ、叢は聚なり、萬化相尋繹、蟬も雁も皆萬化の中を出でず、繹は『論語』に繹之爲貴とあり、抽繹なり、理なり、其の端緒を引いて之を窮むるなり、天地間種種の事、尋繹すべきもの多し、人生豈不勞、勞勞役役、人生の常なり、人たる者は勞せざる可からず、從古皆有沒、念之中心焦、人生に公道のものは死より外なし、貴人も賤人も皆は是れ平等なり、而かも死事を思念するに於ては、焦慮せざるを得ず、生死共に大義存すればなり、此の焦慮を消滅するには何物を以てせんや、唯一杯の濁酒あるのみ、千載非所知、千載を知る淵明の如きはなし、而かも自ら所知にあらずと云ふ、悲慨極まり無し、聊以永今朝、千載の事を思念せんよりは、眼前今朝の樂を永うせんのみ、下平聲二蕭の韻、溫謙山曰く、清氣の二語、高秋の爽色を道ひ盡くす、留響を歸響に作る本あり、留字の妙に及ばずと、

【題義】義熙五年己酉、靖節年四十五、九月九日の佳節に遇うて所懷を敍ぶ、九月九日の佳節、秋日の感慨を敍べられしものなり、

【大意】靡靡たる秋晩、風露は正に淒淒、蔓草は將に枯れんとし、園林は凋落す、天は高くして餘滓無く、清氣杳然たり、哀蟬は鳴くを止めず、雲霄を望めば、叢雁の鳴いて過ぐるあり、秋の秋たる萬化、箇の中に於て以て尋繹すべし、人生も萬化の中を出でず、豈勞せざるを得ん、勞したる後は終に死沒す、古往今來然り、之を念へば中心焦慮に禁へず、是の焦慮を醫するに何を以てせば可からん、唯一杯の濁酒あるのみ、千載の上も下も關知する所にあらず、聊か以て憂を忘れ樂を取らんのみ、

庚戌歲九月中於西田穫早稻

庚戌の歲九月中、西田に於て早稻を穫る

人生歸有道。衣食固其端。
人生有道に歸す、衣食固に其の端、

孰是都不營。而以求自安。　孰か是都て營ます、而かも以て自安を求めん、
開春理常業。歲功聊可觀。　開春常業を理し、歲功聊か觀る可し、
晨出肆微勤。日入負耒還。　晨出微勤を肆にし、日入つて耒を負うて還る、
山中饒霜露。風氣亦先寒。　山中霜露饒く、風氣亦先寒し、
田家豈不苦。弗獲辭此難。　田家豈苦ならざらん、此の難を辭するを獲ず、
四體誠乃疲。庶無異患干。　四體誠に乃ち疲る、庶はくは異患干無からん、
盥濯息簷下。斗酒散襟顏。　盥濯簷下に息ひ、斗酒襟顏散ず、
遙遙沮溺心。千載乃相關。　遙遙沮溺の心、千載乃ち相關す、
但願長如此。躬耕非所歎。　但願ふ長く此の如くならんことを、躬畊は歎ずる所に非ず、

【注解】庚戌は義熙六年、人生歸有道、衣食固其端、衣食足而知禮節の意、禮の道、衣食より始まる、常人に就いて言ふ、非常人に於て言ふにあらず、『論語』學而篇に、子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事、而愼於言、就有道而正焉、可謂好學也已、是れ非常人に就いて言ふ、淵明は彼の空談放論、光陰を徒消する徒に對して、勤勉主義を鼓吹せん爲め、口を開けば衣食の道を說く、孰是都不營、而以求自安、獨立の語は生活其のものに在り、未だ生活する能はず、何ぞ獨立するを得ん、自ら營み、自ら安んず、獨立は此に在るなり、開春は新春、新春に先づ各自の常業を整理し、而して其の結果は秋日の歲功卽ち收穫と爲る、早晨に家を出で、日暮に家に還る、田畝の業に從事する、白晝僅僅の間のみ、故に微勤と曰ふ、而かも山中の田は霜露寒風を受くる備く、其の收穫も努力に報ゆるに足らず、田家の常業、苦なりとせず、而かも此の苦難を辭するに於ては、獨立の生活は能はず、苦難決して辭すべからず、四體は肢體なり、『孟子』曰く、四端四體也と、身の全體を言ふ、庶は庶幾なり、異患干、身體は疲勞するも、遂に異なる憂患を免るとなり、陶澍曰く、四體の二語、龐德公、妻子を率ゐて隴畝に躬耕し、而して曰く、世人皆殆るに危を以てす、我獨り給るに安を以てすと、盥は物を洗ふ器と曰ふ、濯も亦洗ふなり、物を洗ひ終つて休息するなり、斗酒散襟顏、或は濁酒、或は清酒、或は升酒、或は斗酒、皆其の時の實事のみ、得れば卽ち襟顏を散ずるなり、遙遙は春秋時代を今日卽ち晉時代から見ればなり、沮溺心、千載乃相關、長沮桀溺が耦耕する心事、我が今田園に從事する心と全く同一なり、人を避けて耕すは我が心にあらず、世を避けて以て耕す、其の心事は沮溺と我と相關係するものならずや、但願長如此、躬耕非所歎、李公煥曰く、此の詩を讀めば、知る元亮旣に休居し、惟躬耕是れ資するを、故に蔡德施曰く、道に安んじ、節に苦しみ、躬耕を以て恥とせずと、譚元春曰く、陶公の眞實本分の語を讀む毎に、生產を事とせざるの人は反つて是れ俗根未だ脫せざるを覺ゆ、故に淸高と作すと、上平聲十五刪の韻、

【注解】義熙六年庚戌、靖節年四十六、栗里に在りて、早稻を西田に穫り收め、其の平日辛勞の功ありしを嘆喜して敍べしものなり、

【大意】人生の有道も無道も、衣食を以て其の端とす、衣食あり、乃ち以て有道なり、衣食なし、乃ち以て無道なり、是を以て何人も衣食の道を營み、以て自安を求めざるは無し、開春に先づ常業を整理し、而して是の功を秋に收む、早晨に家を出で、日入つて還る、而かも山中は霜露饒多なれば、風氣も亦寒し、收穫の善は暑にありて寒にあらず、故に山中の農田は勞多くして功少し、山農は苦なりと雖も、而かも此の難を辭するを得ず、四體の疲るるは當然なれども、此の如くするときは患も亦免かるべし、家に還りて、器具や手足を洗ひ以て簷下に憩ひ、一日の勞を慰するに斗酒あり、飲んで以

て襟顏を散ずべし、遙遙たる周代の沮溺の心、千載の下、我と乃ち相關係する、但願ふ農事の爲め勞することと長く此の如くにして止まざることを、躬畊は我が分なり、何ぞ曾て歎ずる所あらんや、

丙辰歲八月中於ニ下潠田舍一穫

丙辰の歲八月中、下潠の田舍に於て穫る

貧居依ニ稼穡一。戮レ力東林隈。
貧居稼穡に依る、力を戮す東林の隈、

不レ言春作苦。常恐負ニ所レ懷。
言はず春作の苦を、常に恐る懷ふ所に負くを、

司田眷レ有レ秋。寄レ聲與レ我諧。
司田秋あるを眷、聲を寄せ我と諧す、

飢者懽ニ初飽一。束帶候ニ鳴雞一。
飢者初飽を懽び、東帶鳴雞を候す、

揚レ檝越ニ平湖一。汎隨ニ淸壑一廻。
檝を揚げて平湖を越え、汎として淸壑に隨つて廻る、

鬱鬱荒山裏。猿聲閑且哀。
鬱鬱荒山の裏、猿聲閑且哀し、

悲風愛ニ靜夜一。林鳥喜ニ晨開一。
悲風靜夜を愛し、林鳥晨開を喜ぶ、

曰余作ニ此來一。三四星火頹。
曰ふ余此來を作し、三四星火頹く、

姿年逝已老。其事未レ云乖。
姿年逝いて已に老い、其の事未だ云に乖かず、

遙謝荷蓧翁。聊得ニ從レ君棲一。
遙謝す荷蓧の翁、聊か君に從つて棲むを得たり、

【注解】丙辰は義熙十二年、淵明年五十二、下潠は地名、未詳なるも栗里ならん、下潠に於て秋の收穫を作す、貧居依稼穡、貧に託して、稼穡の道を奬勵する、戮力は一人にあらず、一家擧つてなり、東林隈は廬山の東林にはあらざるべし、不言春作苦、春作は苦なりと言ふ者に反す、常恐負所懷、春作の勞に對して、其の收穫の果して酬ゆるや否やを懸念するなり、司田は『周禮』に田を掌理する官、眷有秋、巡視して以て有秋所謂豐年を眷顧するなり、寄聲與我諧、豐年の狀を眷て、司田官が淵明と其の事を話し、同聲諧和するなり、飢者懽初飽、此の豐年に會ひ、今日まで飢餓に苦しみし者が、初めて飽食するを得て懽ぶなり、東帶候鳴雞、淵明が東帶するのか、司田官が東帶するのか明白ならず、今且らく司田官の巡視と看る、候鳴雞、早晨に東帶して出發する、田を巡視するならん、揚檝越平湖、平湖は湖水に相違なきも、今日は縣名なり、浙江省錢塘道に屬る、汎隨淸壑廻、壑の曲處に隨つて汎汎たる舟が見えたり、隱れたりするなり、鬱鬱荒山裏、猿聲閑且哀、二句全く荒山の景、題目の田舍と全く關係無きものの如し、詩の調理法としても、不統一の傾向を覺ゆ、然りと雖も是れ實事なりとせば、亦如何ともすべからず、悲風愛靜夜、林鳥喜晨開、是れは荒山裏の景なるや、山を出で田舍に歸りて後の景なるや、判然せざるも、風は悲しみ、鳥は喜び、時の變化窮り無きの意を寓せしなるべし、曰余作此來、此の田舍に來つてよりの意、三四星火頹、頹は隤に同じ、壓の義、摧の義、三四年を經過すとの意、姿も年も共に衰老、其事、我が素心の事は、未だ初めより乖かざるなり、荷蓧翁は古の農事奬勵の人、君は荷蓧翁を指す、八齊と九佳と十灰の三韻、古代通用す、李公煥曰く、蔡寬夫曰く、秦漢已前、字書未だ備はらず、旣に多く假借（頹と隤と音通なるを以て、同一義に用ふ、之を假借と云ふ）、而して音反切無し、平仄皆通用す、齊梁より後、旣に拘するに四聲を以てし、又限るに音韻を以てす、故に士率れ偶儷聲病を以て工と爲し、文氣安んぞ卑弱ならざるを得ん、惟淵明、韓退之、時時、俗の拘忌を擺脫す、故に栖字乖字と、皆其の傍韻を取つて用ふ、蓋し筆力自ら以て之に勝るに足る、淸渾曰く、蔡論太だ善し、栖字乖字と傍韻を取る云云、何等の獺言ぞ、今韻（唐以後）と古韻（唐以前）との別を知らば、何ぞ正韻傍韻の說を爲さんや、又韻に拘はるを俗と言はば、李白も杜甫も皆俗なり、韓詩の雅ならざる、蓋し是の故なり、

【大意】秋穫の所感を敍ぶ、貧居、稼穡に依つて衣食する、是の故に一家力を戮せて東林の隈の田を畊す、苦は樂の因たるを知る、何ぞ春畊の勞苦を言はん、旱天雨天、豐凶を卜すれば、懷ふ所に背くを恐るるのみ、然るに秋日に臨み、司田官が巡視して其の有秋を懽べば、我も亦之と同聲に喜聲を發す、飢者も遂に飽くことを得ん、雞鳴即ち早晨に束帶し、檝を揚げて平湖を越ゆ、其の舟の影は清壑の曲處より隱見する、荒山は樹木鬱鬱たり、而して猿聲は哀哀たり、悲風は靜夜に宜しく、林鳥は晨開を喜ぶものの如し、余は此の中に來りて、已に三年四年の星火を送る、然らば四年前より老いたる所以なり、而かも素心の事は未だ乖かず、我の農事に勞苦する心は、古の荷蓧翁より得來るもの、遙かに謝せざるべからず、恩人なればなり、君が徒と爲つて此に棲むを得たるは、我が喜ぶ所なり、

飲酒　二十首并序

飲酒　二十首并に序

余閒居寡懽。兼此夜已長。偶有名酒。無夕不飮。顧影獨盡。忽焉復醉。既醉之後。輒題數句自娛。紙墨遂多。辭無詮次。聊命故人書之。以爲懽笑爾。

余閒居懽寡し、此の夜已に長きを兼ぬ、偶ま名酒あり、夕として飮まざるは無し、影を顧みて獨り盡す、忽焉復醉ふ、既に醉ふの後、輒ち數句を題し自ら娛む、紙墨遂に多く、辭詮次無し、聊か故人に命じて之を書し、以て懽笑を爲すのみ、

衰榮無定在。彼此更共之。

衰榮定在無し、彼此更に之と共にす、

邵生瓜田中。寧似東陵時。

邵生瓜田の中、寧ろ東陵の時に似ん、

寒暑有代謝。人道每如茲。

寒暑代謝あり、人道每に茲の如し、

達人解其會。逝將不復疑。

達人其の會を解く、逝いて將に復疑はざらんとす、

忽與一觴酒。日夕懽相持。

忽ち一觴酒を與へらる、日夕懽んで相持す、

【注解】飮酒、淵明退歸の後、世變日に甚し、酒にあらずんば憂を掃ふ能はず、酒にあらずんば娛を求むる能はず、酒に託して以て禍を逃るるものなり、衰榮無定在、彼此更共之、彼は衰にて、此は榮と定め無く、彼にしても衰と榮とあり、此にしても衰と榮とは免れざるなり、邵生は邵平なり、秦の廣陵の人、東陵侯に封ぜらる、秦亡びて後、瓜を長安城東に種う、瓜、五色あり、甚だ美、世、之を東陵瓜、又、靑門瓜と云ふ、瓜屋の主人と、東陵侯と身分は違ふ、而かも其の違ふ所以の者は、其の人、義を守り、漢に仕へず、田野に甘んず、淵明以て託する所茲に在るなり、寒暑代謝は、古今の常理なり、人道の衰榮亦古今の常理なり、而かも達人にあらずんば衰と榮との二道に於て心志を移し、道を誤る者のみ、僅かに達人のみ其の會を解く、不復疑、衰と榮との往來の道を疑はざるなり、淵明自ら達人を以て許す、許すも亦妨げざるなり、淵明の心事を審知する王宏なる者あり、一觴酒を寄贈す、淵明日夕の懽、是に於てか相持するを得、平暦四支の觀、

【題義】飲酒と題するも、一々、飲酒を歌ふにはあらず、要は飲酒、憂を忘るるを主題とし、平生の所懐を敍述せられしものなり、作年は異說あるが、恭帝の元熙二年か、或は宋の永初元年、靖節年五十六七ならんか、

【大意】閒居寡歡、況や夜の長きに於てをや、偶ま名酒あり、每夕必ず飲む、獨飲獨酌、忽焉として醉ふ、醉うた後是の二十首を題し以て自ら娛む、覺えず二十首の多きに達す、辭詞に順序次第なし、故人卽ち友人に命じて之を書せしめ、以て我が懽笑と爲す、彼にも衰榮あり、此にも衰榮あり、彼は定んで衰、此は定んで榮と云ふことは天下に無し、邵生が東陵侯と稱せる間は榮なり、瓜を東門外に種うる時は衰なり、而かも邵平は此の衰榮の爲めに節を損せざりし人なり、人や國には衰榮あり、時や節には寒暑あり、達人は其の自然の理を曉むるが故に、衰榮寒暑の道を疑はず、疑はずと雖も衰は憂へざるべからず、其の憂を忘るるには一觴酒に依賴するより外なし、故人幸に酒を贈り、我をして日夕に懽を爲さしむ、

積善云有報。夷叔在西山。　積善報ありと云ふ、夷叔は西山に在り、

善惡苟不應。何事立空言。　善惡苟くも應せずんば、何事ぞ空言を立つる、

九十行帶索。飢寒況當年。　九十行いて索を帶ぶ、飢寒況や年に當る、

不賴固窮節。百世當誰傳。　固窮の節に賴らずんば、百世當に誰か傳ふべき、

【注解】積善云有報、『易』に曰ふ、積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、今此の易の遺言に對し、其の然らざるを反詰す、夷叔、伯夷と叔齊は非常に積善の人、而かも西山に餓死するに至る、善惡苟不應、何事立空言、善人は餓死し、惡人は榮達す、善因は善果、惡因は惡果ならざるべからず、然るに此の道理には應ぜざるなり、是に於てか知る、易の言ふ所、空言なることを、憤世の言、陶公の面目躍如たり、九十行帶索、飢寒況當年、『列子』に曰ふ、榮啓期、郕の野に行く、鹿裘帶索、琴を鼓して歌ふ、孔子問うて曰く、先生樂しむ所以は何ぞ、對へて曰く吾が樂甚だ多し、天、萬物を生じ、人を貴しと爲す、吾、人と爲るを得、一樂なり、男女の別、男尊女卑、吾、男と爲るを得、二樂なり、人生、日月を見ず、襁褓を免れざる者あり、吾已に行年九十、三樂なり、貧は士の常、死は人の終、常に處し、終を得、當に何を憂ふべけんや、孔子曰く、善い哉能く自ら寬うするや、淵明の意、九十に至り、猶ほ行いて索を帶ぶるを免れず、長老に至る、其の飢寒艱苦、其れ何ぞ此の如くなるや、窮士の悲しむべき所以、當年は壯年と解すべし、九十の者でも悲し、況や壯年に於てをやの意、不賴固窮節、百世當誰傳、善惡不應と云ふと雖も、善卽ち固窮の節は守らざるべからず、百世も千世も傳ふべきなり、十五刪（山）十三元（言）一先は古通韻なり、沈歸愚曰く、伯夷傳大旨已に此に盡く、末二句司馬遷云はゆる各の其の志に從ふなり、

【大意】積善と積不善と共に報ありと聞く、是の語を眞なりとせば、伯夷叔齊の如き善人が何故に西山に餓死したるや、善惡の報が其れ相當に來らずとせば、何事の爲めに空言を立てたるや、榮啓期の如き善人も九十の長壽にして猶ほ且つ飢寒を免れず、而かも固窮の節は生前其の報の有無に關せず、守らざるべからず、以て百世の下に淸風を傳ふ、

道喪向千載。人人惜其情。
有酒不肯飮。但顧世間名。
所以貴我身。豈不在一生。
一生復能幾。倏如流電驚。
鼎鼎百年內。持此欲何成。

道喪びて千載に向ふ、人人其の情を惜む、
酒あり肯て飮まず、但顧みる世間の名、
我が身を貴ぶ所以、豈一生に在らざらん、
一生復能く幾ぞ、倏ち流電の驚くが如し、
鼎鼎百年の內、此を持し何を成さんと欲する、

【注解】道喪は正道喪失なり、正道喪失したること久し、亢倉子曰く、道喪ぶ時、上士は乃ち隱る、人人惜其情、情を惜むは君子の道にあらず、而かも人人が皆其の情を惜むは、正道喪失したればなり、有酒不肯飮、但顧世間名、酒あらば飮むべし、酒有るも飮まざるは、飮名狂名の世間に聞ゆるを顧慮すればなり、所以貴我身、豈不在一生、金印紫綬、高官顯達、皆我が身を貴しと思ふ、而かも一生の間に稱せらるるは言ふに足らず、百世に通じて貴と稱せらるる者に至り、始めて以て眞貴を認むべし、蓋し一生も假に可とするも、其の一生は果して能く幾多の年月ぞや、五十年、六十年、七十年、電光石火の流と殆んど同じ、倏然古今と爲る、鼎鼎は太舒緩の貌、『檀弓』に鼎鼎爾則小人とあり、『疏』に、自ら嚴敬ならざるときは、小人の如く然り、形體寬慢なり、持此は世間の名を持するなり、酒杯を持つの謂にあらず、百年の內に、世間の浮名に捕はれて拘束する、遂に欲何成や、下平聲八庚の韻『寅江詩話』曰く、此旨是れ何等の見地、魏晉六朝の人、易代を觀ること遊旅の如く、務めて世俗の浮名を弋る、頗を知らざるのみ、成さんと欲する者、節を全うして以て道に合するなり、之を言ふ迹無し、超ゆる所以なり、

【大意】正道の喪失するや久し、是を以て人人其の情を惜むに至る、酒有りて飮まざるは、世間に飮名の流るるを恐るる徒輩なり、乃ち僞君子なり、我が身は生前も貴し、亦死後も貴きなり、五十年六十年を過ぐ、殆んど電光石火、鼎鼎たる百年の內、此の世間の浮名狂名に拘束せらるる徒、遂に能く何を成さんと欲するや、

棲棲失羣鳥。日暮猶獨飛。
徘徊無定止。夜夜聲轉悲。
厲響思淸晨。遠去何依依。
因植孤生松。斂翮遙來歸。
勁風無榮木。此蔭獨不衰。
託身已得所。千載不相違。

棲棲羣を失する鳥、日暮猶は獨飛す、
徘徊定止無く、夜夜聲轉悲し、
厲響淸晨を思ふ、遠去何ぞ依依たる、
孤生松を植うるに因つて、翮を斂めて遙かに來歸す、
勁風榮木無く、此の蔭獨衰へず、
身を託する已に所を得、千載相違はず、

【注解】棲栖より以下四句二十字、鳥が羣を失して、其の悲鳴する狀を言ふ、正面は鳥、側面は淵明が自況、棲栖は、猶ほ皇皇と云ふがごとし、急迫の貌なり、『論語』に丘何爲ぞ是栖栖たる者か、厲響は淸晨に吹く風の音烈しきを云ふ、遠去何依依、別に依依たる處ありて去るにあらず、唯烈風に會うてのみ、淵明が廬を出でて以て官遊せしことに況す、孤生松は一株松なり、此の一株の松こそ、是れ眞に鳥が止まるべき處なり、斂翮來歸、鳥の來歸は卽ち淵明先生の來歸なり、勁風は冬日の北風なり、無榮木、北風の凛烈たる、天下何の處に青青たる樹あるや、一木も無きなり、但松蔭のみ、蒼蒼の色あり、身を以て此に託す、千載不相違、一冬にはあらず、千載の長きも違はず、上平聲五微、趙泉山曰く、此の詩、殷景仁、顏延年が輩、宋に附麗するを譏る、溫謙山曰く、服案する

に、通首俱に是れ比體、靖節、志を失ひ、肯て宋に附かず、飮酒託興、聊か物を借り以て自況す、殷氣輩を謂ると言ふは、正旨にあらざるに似たり、淸潭、今、亦、謙山の說を可しとす、一も二も讀切と云ふは、淵明の意にあらざるなり、

【大意】棲棲として失羣の鳥、日暮に及んで猶ほ獨飛する、其の樹の棲むべき無ければ、東西徘徊して定止する所なく、其の鳴聲夜夜に悲し、忽ち厲響あるを聞く、是れ則ち淸晨と爲る、何處を目的と無く依依として飛び去る、幸に一株の松を得たるを以て翮を斂めて遙かに來歸す、勁風の前には天下榮木無し、獨り松樹の陰のみ衰へず、身を此の松下に託す、千載相違はざるなり、

結廬在人境。而無車馬喧。　廬を結んで人境に在り、而かも車馬の喧無し、
問君何能爾。心遠地自偏。　君に問ふ何ぞ能く爾る、心遠ければ地自ら偏、
採菊東籬下。悠然見南山。　菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る、
山氣日夕佳、飛鳥相與還。　山氣日夕佳し、飛鳥相與に還る、
此中有眞意。欲辨已忘言。　此の中眞意あり、辨ぜんと欲して已に言を忘る、

【注解】人境は塵境、市街と見るも可、而の一字は千斤の力あり、唐の棗山、可矣棗山道、而無車馬聲の而は何の爲めの而か、其の意を辨するに苦しむなり、人境に在りながら車馬の喧無し、問君何能爾、夫れは如何なる理由ぞや、曰く心遠地自偏、身は市に在るも、心は山に在り、心が山に在るときは、市街の土地も、山間の土地と異ならず、大隱は市に藏るの意、採菊東籬下、悠然見南山、採と謂ひ、見と謂ひ、東と謂ひ、南と謂ひ、自然にして天造の妙あり、東坡曰く採菊の次、偶然、山を見る、初意を用ひず、而して景と意と會す、故に喜ぶべきなり、無識者、見を以て望と爲す、白樂天、時傾一樽酒、坐望終南山、則ち淺俗の失久し、韋蘇州、采菊露未晞、擧頭見秋山、乃ち眞に淵明の意を得たり、『鐘肪集』に云ふ、記、廣陵に在るの日、東坡に見えて云ふ、陶意、詩に在らず、詩以て其の意を寄するのみ、采菊東籬下、悠然望南山、則ち旣に采菊、又望山、意此に盡く、餘韻無し、淵明の意にあらず、采菊東籬下、悠然見南山、則ち本自ら菊を采る、山を望むに意無し、適ま首を擧げて之を見る、悠然情を忘る、輒ち閑にして累遠し、此れ未だ文字精麤の間に於て之を求めず、『遯齋閑覽』に云ふ、王荊公、金陵に在りて詩を作る、多く淵明詩中の事を用ふ、四韻詩、全く淵明詩を使ふ者あり、且言ふ、其の詩奇絕及ぶ可からざるの語あり、結廬在人境の四句二十字の如き、詩人より以來、此の句無きなり、然らば則ち淵明趣向不羣、詞彩精拔、晉宋の間一人のみ、山氣は南山の秀氣、日夕佳、秀氣は朝夕掬すべきなり、飛鳥相與還、溫注に『管子』を引いて曰く、夫鳥之飛、必還山集谷と、此中有眞意、欲辨已忘言、『莊子』に得意忘言とあるに本く、李公煥曰く、張九成云ふ、此卽ち淵明、畎畝に君を忘れざるの意、溫謙山曰く、淵明の詩、類れ高韻多し、此の首尤も興會獨絕と爲す、境は實中に在り、神は象外の遠きに遊ぶ、得力、起句二十字に在り、奇絕妙絕、以下倏ち一直寫し去る、神ありて迹なし、却て此の處に於て領取すべし、俗人反つて先づ其の採菊數語を賞するは何ぞ、結二句に至りて則ち愈よ眞、愈よ遠、語は盡くるあるも、意は窮まり無し、張九成評して云云、眞に著相を嫌ふ、平聲十三元と十五刪、古通韻なり、

【大意】我廬を結んで普通の人境に在り、別に山中にあらず、而かも車馬の喧噪は無し、如何なる理由ありて爾るやと問ふ者あり、乃ち答ふ、心が俗事と遠隔して居るを以て、地も亦自から偏なり、菊を東籬の下に采り、悠然として南山を見る、南山の氣色、日夕に當り愈よ佳し、飛鳥は羣を爲し相與に還る、此の中一點の僞を容れざる眞意あり、辨ぜんと欲するも言舌に上らざるを奈何せんや、

行止千萬端。誰知非與是。
是非苟相形。雷同共譽毀。
三季多此事。達士似不爾。
咄咄俗中惡。且當從黃綺。

行止千萬端、誰か知らん非と是とを、
是非苟も相形るれば、雷同して共に譽毀す、
三季此の事多し、達士は爾らざるに似たり、
咄咄俗中の惡、且く當に黃綺に從ふべし、

【注解】行止、非與是、『莊子』曰く是其所非、非其所是、非なりと言ふ者、是なりと言ふ者、紛紛擾擾、定處有ること無し、其の是非が無形の間は、猶ほ可なるも、苟も有形と爲つて顯はれたらば、彼分嗚漢の徒が雷同して以て之を譽め又毀つに至る、三季は三代の末、多此事、三代以前は此の事なし、三代以後は此の事多し、達士似不爾、達士や偉人は、時代思潮を受けず、超然たる所ありて、彼等と別なり、咄咄は嗟嘆の聲『後漢書』に、咄咄子陵、不相助爲理耶とあり、晉の殷浩は咄咄怪事の語を發明せり、俗中惡、俗は風俗の場合、何等の忌む所無きも、庸凡曰俗に至りては、其の意義良に嫌ふべし、今は庸凡の俗惡を云ふ、乃ち達士と反對の徒、雷同する徒、是非の爲め紛紛たる徒、皆是れ俗惡なり、我は此の俗惡は嫌ふ所、且當從黃綺、黃公と綺公は古の達士なり、我は是の二達士の道を慕はんとなり、上聲四紙の韻、

【大意】世上の或は行或は止、良に千萬端なり、如何なる智者も、是と非とを容易に判じ難し、而して其の是非が無形なら已みなん、苟も有形と爲つて來らば、譽むる者と毀つ者と紛紛として現ずるに至る、三代の末の歷史を覽て此の事を知るべし、達士のみ別に超然として愚俗と混せず、達士にあらざる凡俗惡徒は、論ずるに及ばず、我は黃公綺公の如き古の達士を慕はんのみ、

秋菊有佳色。裛露掇其英。
汎此忘憂物。遠我遺世情。
一觴雖獨進。杯盡壺自傾。
日入羣動息。歸鳥趨林鳴。
嘯傲東軒下。聊復得此生。

秋菊佳色あり、露に裛うて其の英を掇る、
汎たる此の忘憂の物、我が遺世の情を遠ざく、
一觴獨り進むと雖も、杯盡きて壺自ら傾く、
日入つて羣動息み、歸鳥林に趨りて鳴く、
嘯傲す東軒の下、聊か復此の生を得たり、

【注解】秋菊、裛露掇其英、香の衣を襲ふを裛と曰ふ、早晨は露未だ晞かざる時、菊の英を掇り以て酒の肴と爲し、之を食ふ、英は花の最美なるを曰ふ、菊英を食ふこと、淵明以前よりか其の以後か明白ならず、而かも淵明の之を食ひしことは實際なり、汎此忘憂物、酒に菊を插して食ひしものの如し、潘岳の賦にも泛流英於清醴とあり、遠我遺世情、忘憂物の爲め陶然と爲つて、總て世俗の牽情と隔遠する、一觴雖獨進、杯盡壺自傾、獨酌獨樂、杯中の酒盡きれば、酒壺は傾倒する、日入羣動息、早晨より已にして夕日に及ぶ、實際とすれば、十二時間を酒の爲め費消したる事となる、庸凡人なれば皆むべき價値あり、聖人は寸陰を惜む、淵明の善く知る所、而かも此の言を吐く、酒に託して以て言ふのみ、朝から晩まで酒を飲むの理なし、然りと雖も淵明は努力の人、何事も徹底的を喜ぶ、酒も亦徹底的なるやも知る可からず、個中の消息は、禁酒門中の凡夫の知る所にあらざるなり、夕日なれば鳥も亦林に歸栖する、嘯傲、飲酒後獨り氣焰を吐くこと、得此生、東坡曰く、靖節、無事を以て得此生と爲す、則ち物に役せらるるは失此生にあらずや、定齋曰く、南北朝より以來、菊詩多し、未だ能く淵明の詩に及ぶはあらず、濱齋曰く、秋菊の五字、古今塵俗の氣を洗盡す、謙山曰く、秋菊の佳、愛菊者誰か之を知らざらん、誰か之を慕はざらん、唯此の起五字渾成、却て人の道ひ得る無し、淵明は菊花の知己と謂ふべきなり、下平聲八庚の韻、

【大意】東籬の秋菊色愈よ好く、早晨に起き露に裛うて其の英を掇る、其の英を掇り來つて忘憂物卽ち酒の中に涵して之を食ふ、此の如くにして世中の情を隔遠する、獨飲獨酌、杯中の酒盡くれば壺は自から傾く、而して黃昏に及ぶ、歸鳥も已に林に趨りて鳴く、我も亦東軒の下に嘯傲して、我は我として意義ある今日の生を送りしとなり、

青松在東園。衆艸沒奇姿。　青松東園に在り、衆艸奇姿を沒す、
凝霜殄異類。卓然見高枝。　凝霜異類を殄し、卓然高枝を見る、
連林人不覺。獨樹衆乃奇。　連林人覺らず、獨樹衆乃ち奇とす、
提壺挂寒柯。遠望時復爲。　壺を提げて寒柯に挂け、遠望時に復爲す、
吾生夢幻間。何事紲塵羈。　吾が生夢幻の間、何事ぞ塵羈に紲がる、

【注解】青松、此の詩は松を詠ずるが主意なり、殄は殄滅、凝霜の强威に松以外の異類は絶滅する、而して青松のみ卓然として聳ゆ、遠望時復爲は、陶澍曰く、時復爲遠望の倒句法なり、孤松を以て自況す、淵明が寫眞なり、湯漢曰く、連林以下四句二十字、屈復の例に傚へば刪除するも可なり、淵明集中最下なるもの、四支の贅、

【大意】青松一樹、東園に在り、衆艸は凝霜の爲め絶滅するも、青松のみ卓然として聳ゆ、連林は人覺知せず、青松獨樹のみを奇とす、酒壺を寒柯に挂け、遠望時に復爲す、吾が生も夢幻の間なり、塵羈に紲がるるは遂に何事ぞ、

清晨聞叩門。倒裳往自開。　清晨門を叩くを聞く、倒裳往いて自ら開く、
問子爲誰歟。田父有好懷。　問ふ子誰と爲すか、田父好懷あり、
壺漿遠見候。疑我與時乖。　壺漿遠く候せらる、疑ふ我が時と乖くを、
繿縷茅簷下。未足爲高栖。　繿縷茅簷の下、未だ高栖を爲すに足らず、
擧世皆尙同。願君汨其泥。　擧世皆尙同じ、願くは君其の泥を汨めよ、
深感父老言。稟氣寡所諧。　深く感ず父老が言、稟氣諧ふ所寡し、
紆轡誠可學。違己詎非迷。　紆轡誠に學ぶ可し、己に違ふ詎ぞ迷にあらざらん、
且共懽此飮。吾駕不可回。　且く共に此の飮を懽せん、吾が駕回らす可からず、

【注解】清晨に柴門を叩く音を聞く、倒裳は日本語の「アワテ」なり、「毛詩」に顚倒裳衣とあり、客を門側に久しく待たせる如きは、客を懽迎する所以にあらず、問は淵明なり、子は客なり、爲誰歟、誰であるぞ、田父、卽ち榮達なぞ眼中に無き人なり、有好懷、淵明先生と酒を飲まんとて遠く問候し來る、唯此の一意にて來る、是れ眞の好懷なり、疑ふ者は客、我は淵明、先生は時世と乖

く者と擬ふ者の如し、何故ぞや、東帶衣冠以て世を驚かす才を持し乍ら、襤褸卽ち「ボロ」敝衣を衣て、茅簷下に起臥すればなり、紫閣紅樓と茅簷とは非常に異なる、未足爲高栖、何故に高栖卽ち榮達の道に就かざるやを訝る、舉世皆尙同、時と乖かず、世と諧同しては如何、願君、願ふ者は田父、君は淵明、汨其泥、汨は汨濁なり、『漁父篇』に、"世人皆濁、何不汨其泥而揚其波"とあり、是に本づく、泥は水底を掘りくづして、强ひて濁らす、而して泥は水底にあり、波は水面にあり、世の中が濁らば、其の濁中に浮沈して、而かも己が淸きを保てよとなり、『楚辭』は、漁父に託し、此は田父に託して言ふのみ、深感父老言、屈原は漁父の言に感ぜず、淵明は田父の言に感ぜしなり、屈と陶の性格の異同、知るべし、一は死、一は生、洵に然るべきなり、稟氣は、天然の生質、寡所諧、屈は人と諧和せざるの極、遂に死せり、淵明は諧和せざる性格を自分で知ると雖も、而かも生の貴きを知る、紆轡、紆は曲なり、識なり、轡は馬の「タヅナ」なり、誠可學、違己詎非迷、紆轡何ぞ必ずしも非ならん、宜しく之を學ぶべきなり、而かも己が稟氣に違うてまで之を學ばんとするは、是れ迷にあらずして何ぞ、何ぞ己を屈し人に從ふを得ん、且共懽此飮、淵明と田父と共に懽飮し、復何ぞ世事を論ぜん、吾駕不可囘、客の歸駕を言はずして、吾駕と言ふ、我が此の田園に歸隱する素志は固し、如何に誰が勸告するも、決して廬を出でずとなり、李公煥曰く、趙泉山云ふ、時輩多く靖節を勉むるに出仕を以てす、故に此の篇を作る、陶淵明と杜子美は世の偉人なり、田父、飮を索むる每に、必ず之をして其の懽を畢へ而して後去らしむ、淵明淸晨叩門、老杜田翁社日、二公皆位に在る者、田父に於て何ぞ拒まん、陳祚明曰く、稟氣の句截然、吾駕の句尤も截然、九佳十灰、古通韻なり、

【大意】淸晨に門を叩く者あり、衣裳を顚倒して直ちに往いて開く、乃ち問ふ客は誰と爲すや、客曰く田父今日は好懷あり、是を以て壺漿を提げて問候する者なり、而かも客は我を疑ふ者の如し、衣冠東帶堂堂たる風采の人ならんと想像して來るも、我が襤褸の衣を著用して茅簷の下に居りしには其の想像と反對したるの感あるものの如し、乃ち曰ふ、君は大才を抱きて何故に高栖卽ち堂堂たる邸宅に住まざるや、舉世混濁、皆一樣なり、其の混濁の世に處して其の泥を汨め、以て己が淸を保たば如何と、深く此の父老の言に感ずるも、我が性質は到底他と諧和せざるを自覺す、紆轡誠に學ぶ可しと雖も、强ひて己が本性に違うて之を學ぶは、是れ亦迷ならずや、我は決して駕を官途卽ち榮達の路へ囘らさずとなり、

在昔曾遠遊。直到東海隅。　在昔曾て遠遊し、直に東海の隅に到る、

道路迥且長。風波阻中塗。　道路迥として且長く、風波中塗に阻す、

此行誰使然。似爲飢所驅。　此の行誰か然らしむる、飢の驅る所と爲るに似たり、

傾身營一飽。少許便有餘。　身を傾けて一飽を營み、少許便ち餘あり、

恐此非名計。息駕歸閒居。　恐る此れ名計にあらざるを、駕を息うて閒居に歸る、

【注解】東海隅は今日の膠州灣一帶の地を言ふ、南北朝時代、東海郡を置く、曲阿卽ち是れなり、迥は遠なり、道路の長遠なるのみならず、風波も荒く、屢ば中途の阻險を憂ふるなり、此の如き辛勞の行を爲す所以のものは何の爲めぞ、他無し、生活其のものの爲めなり、飢餓と云ふ者が、我を驅役するなり、傾身は全力を傾倒する意味、既にして少許「スコシバカリ」餘裕が生じ來る、而かも復致ふ、恐此非名計、生きる爲にのみ勞役するは名計にあらざるなり、息駕歸閒居『列子』に、孔子、衞より魯に反り、駕を河梁に息うて觀るとある、何義門曰く、末二句恐らくは固窮の節を壞さんことを、平聲六魚の韻、

【大意】在昔遠游して東海の隅に到る、道路も長危、風波も荒阻、此の道路、此の風波を侵して遠游

するは、何の爲めぞ、人は業務を求めずんば飢餓なる恐るべき者に襲はる、此の恐るべき者に襲はるるを免るるには、遠游も何ぞ、道路も何ぞ、全力を傾倒して、身計を爲さざるを得ず、而して又效ふ、此の如く營營たるのみが人間の本能にあらずと、是に於てか駕を息めて閒居に歸り、以て自然を修養するに如かず、

顏生稱爲仁。榮公言有道。　顏生は仁を爲すと稱し、榮公は道ありと言ふ、

屢空不獲年。長飢至於老。　屢空しうして年を獲ず、長飢老に至る、

雖留身後名。一生亦枯槁。　身後の名を留むと雖も、一生亦枯槁す、

死去何所知。稱心固爲好。　死し去つて何の知る所ぞ、稱心固に好しと爲す、

客養千金軀。臨化消其寶。　客千金の軀を養ひ、化に臨んで其の寶を消す、

裸葬何必惡。人當解意表。　裸葬何ぞ必ずしも惡しからん、人當に意表を解くべし、

【注解】顏生は顏回なり、榮公は榮啓期なり、屢空不獲年、是れ顏回を言ふ、回也屢空で、極めて貧、年も二十九にして髮毛盡白し、長飢至於老、榮公は九十を超ゆと雖も、飲物は滿足ならず、仁者にして此の如し、有道者にして此の如し、賢人と稱せられ、高人と稱せらるる身後の名は、太だ隆隆たるも、其の人、一生の間は一瓢の飲、一簞の食、身枯槁するの憂あり、死去何所知、稱心固爲好、俗流の輩より見れば、一瓢一飲の貧を笑ふも、其の人自分より見れば是れ稱心なり、死も亦滿足なり、笑ふ彼等は亦大に笑ふべき者なり、而して善人には稱心あり、惡人には稱心無し、客養千金軀、臨化消其寶、千金子、千金軀、共に富者を謂ふ、東坡曰く、寶は軀に過ぐる者なし、軀亡ぶときは寶も亦亡ぶ、裸葬何必惡、人當解意表、李公煥曰く前漢の楊王孫、終に臨み、其の子に令して曰く、吾、裸葬以て吾が眞に反らんと欲す、死せば則ち布囊を爲り、尸を盛り地に入る七尺、既に下る、足より引いて其の囊を脫し、身を以て土に親しましめよ、其の子遂に裸葬すと、淵明の意、其の事は必ずしも惡と斷定すべからず、反つて他人の意表外に出づるの疑問を解かんとなり、韓文公曰く、或人曰ふ、前八句、名の頼むに足らざるを言ひ、後四句、身の惜むに足らざるを言ふ、淵明解歲、正しく身名の外に在り、謝山曰く、陶公一生志節此の如し、其の身名を顧惜すとも何如と爲すや、篇中身世惜むに足らずと言ふは、世人の見に就いて、反して之を言ひ、以て自ら寫すに過ぎず、一時の達瓿と云ふ爾、然らずんば、飲酒の餘、身名惜まず、何を以て靖節と爲んや、上厪十九皓の韻、

【大意】顏回は孔門の仁者、榮啓期は有道の高士、而して回は屢ば空乏を告げ、年も亦夭す、榮は九十の長壽なるも、飢餓身に逼る、二子共に仁者高士の名を身後に留むと雖も、一生頗る窮貧枯槁なり、死して後は何事も知らざるべし、唯生前心に稱ふを好しと爲す、飢うと言ひ、貧しと言ひ、皆稱心なり、人世に客と爲りて千金の軀を養ふ、化即ち死に臨んでは其の寶を消す、裸葬に對し我は必ずしも惡なりと言はず、唯從來孔門の敎に無き所、故に多くの人は其の意表外の事に解釋すべし、

長公曾一仕。壯節忽失時。　長公曾て一仕、壯節忽ち時を失す、

杜門不復出。終身與世辭。　門を杜ぢて復出でず、終身世と辭す、

仲理歸大澤、高風始在茲。　仲理大澤に歸る、高風始めて茲に在り、
一往便當已、何爲復狐疑。　一往便ち當に已むべし、何爲ぞ復狐疑せん、
去去當奚道、世俗久相欺。　去去當に奚をか道はん、世俗久しく相欺く、
擺落悠悠談、請從余所之。　悠悠の談を擺落して、請ふ余が之く所に從へ、

【注解】 長公、李公煥曰く、前漢の張釋之が子、張摯字は長公、官、大夫に至る、容るるを當世に取る能はざるを以て、終身仕へず、『漢書』の長公が傳、以上の數字のみ、仲理、後漢の楊倫字は仲理、郡文學掾と爲り、志、時に乖く、遂に職を去る、復た州郡の命に應ぜず、大澤中に講授す、弟子千餘人に至る、一往、狐疑、一たび決心したるときは、必ず以て其の志を替ふべからず、乃ち去去勇退して躊躇せず、亦奚の道ふ所あらん、世俗久相欺、時の擾亂に乘じ、舉俗互に自ら欺くなり、擺落は猶ほ排斥と言ふがごとし、悠悠談は、所謂晉人の淸談卽ち空談なり、『晉書』王導傳に、悠悠の談、宜しく智者の口を絕つべし、請從余所之、誰に從へと人を指すにあらず、余と志を同じうする者は宜しく余が之く所に從へとなり、先生、長公仲理を以て自ら許す、孔明が管仲樂毅を以て自ら許すと相似たり、而かも身後の名は長公仲理は淵明の足下にも至らず、然らば則ち長公たり仲理たるの人、以て光榮と爲すべきなり、
平聲四支の韻、

【大意】 長摯は曾て漢に仕へたるが、壯節不幸にして時を失し、門を杜ぢ世を辭す、後漢の仲理も、一度は官に就きしも、去つて大澤中に講授す、二人共に高風茲に在り、一往卽ち一たび決心したるときは、萬牛も挽く能はず、何爲ぞ狐疑して決せざるものぞ、去去奚の道ふ所かあらん、世俗の多くは此等高人の所爲と異り、相互に欺くこと久し、是の故に、我は悠悠の談、卽ち空談空理を排斥して、正道の實行すべきに就かん、其の志を同じうするの士は、來つて我に從へよ。

有客常同止、趣捨邈異境。　客有り常に同止、趣捨邈として境を異にす、
一士常獨醉、一夫終年醒。　一士常に獨り醉ひ、一夫終年醒む、
醒醉還相笑、發言各不領。　醒醉還相笑ふ、言を發し各の領せず、
規規一何愚、兀傲差若穎。　規規一に何ぞ愚なる、兀傲差穎の若し、
寄言酣中客、日沒燭當秉。　言を寄す酣中の客、日沒せば燭當に秉るべし、

【注解】 同止は猶ほ同居の如し、趣は取と同じ、一方は取り、一方は捨つ、邈然として其の境を異にす、一士は醉、一夫は醒、醒者は醉者を笑ひ、醉者は醒者を笑ふ、各不領、語言するも互に領會する所無し、規規は、『莊子』に自失也とあり、兀傲は頑固と差や同じ、穎は敏なり、醉うて以て兀傲の淵明が、規規たる彼の醒者を笑ふ、酣中客は、酒酣中の客ならん、日沒燭當秉、古人已に秉燭の遊びあり、夜も亦憂ふるに足らず、酣醉以て秉燭の遊を作すも亦可ならずや、何義門曰く、張融陽言ふことあり、未だ人倫を識らず、焉んぞ天道を知らん、大義を明めずんば、醒者何ぞ必ずしも醉に愈らん、溫謙山曰く、篇中言ふ、醒者は愚にして、醉者は穎、或は謂ふ、淵明、酒を嗜む、故に左袒の論を爲す、豈知らん其の悲憤牢騷、意を酒に寄するに過ぎず、遂に之を言ふ覺えず論に近きのみ、淵明豈眞に醉人に左袒せんや、善く陶を讀む者、當に之を自得すべし、去聲十八嘯の韻、

【大意】人あり二人同居す、而して是の二人其の取捨を異にす、一人は常に酒を好み、一人は常に酒を禁ず、而して醉者は醒者を笑ひ、醒者は醉者を笑ふ、兩者の心同じからず、談話するも互に領會する無し、其の自失する所は、兩者共に愚なり、唯酒を好んで兀傲の者差穎の若し、故に兀傲の者より言を醉中の客に寄せて曰く、日の沒するまで酒を飲むべし、日沒したる後は燭を秉りて以て遊ぶべきなり、

故人賞我趣。挈壺相與至。　故人我が趣を賞し、壺を挈げて相與に至る、
班荊坐松下。數斟已復醉。　班荊松下に坐し、數斟已に復醉ふ、
父老雜亂言。觴酌失行次。　父老亂言を雜へ、觴酌行次を失す、
不覺知有我。安知物爲貴。　覺えず我あるを知る、安んぞ知らん物を貴しと爲すことを、
悠悠迷所留。酒中有深味。　悠悠留まる所に迷ふ、酒中深味あり、

【注解】班荊、荊を地に布いて坐するなり、荊は蒲にて製せし布團、『左傳』に、楚人伍舉、聲子と相善し、伍舉將に晉に奔らんとし、聲子と鄭郊に遇ふ、班荊相與に食ふ、とあり、故人と酒を松下に飲む、既にして酩酊す、父老も之に交はり、驢事馬事、言ふ所正しからざるのみならず、先輩も後輩も、其の行次を失し、不覺知有我、安知物爲貴、陳祚明曰く、二句超超名理と、酒に沈醉する者は多く我を主張す、他を容るる無し、而して我より以外の物を貴しとすること無し、淵明の如きは我を忘れ、物を忘れ、物我一如、塗に世人の飲酒と異る、悠悠迷所留、酒を止める程度が無きなり、酒中有深味、酒を旨しとする深味にはあらず、酒に依つて悶を忘るる深味なり、解して此に至る、詩亦深味あり、上聲四紙の韻、

【大意】故人あり我が好む物を知り、酒壺を挈げて訪ひ至る、乃ち班荊して松下に坐し、互に斟み互に酌む、飲んで乃ち醉ふ、醉うて亂言と爲る、或は行次を失し、或は我有るを知つて、他物の貴しと爲すを知らず、悠悠として酒を飲み、留まる所無し、酒中良に深味あり、清潭曰く、不覺知有我、安知物爲貴の十字、解す可く、又解す可からず、今且く一案を出すのみ、更に後賢の叱正を望む、

貧居乏人工。灌木荒余宅。　貧居人工に乏し、灌木余が宅を荒す、
班班有翔鳥。寂寂無行跡。　班班翔鳥あり、寂寂行跡無し、
宇宙何悠悠。人生少至百。　宇宙何ぞ悠悠たる、人生百に至る少なり、
歲月相從過。鬢邊早已白。　歲月相從過す、鬢邊早く已に白し、
若不委窮達。素抱深可惜。　若し窮達に委せずんば、素抱深く惜む可し、

【注解】乏人工、貧なれば栽種師の類を雇ふ能はず、灌木は叢木、荒余宅、ツマラヌ樹木が宅園に跋扈するのみ、班班は、『後漢書』に、京都童謠曰車班班とあり、是は車聲を形容す、又、明著の貌、今は明著に翔鳥あるを見る、行跡は人行の跡、宇宙は悠悠、

人生は忽忽、歳月は堂堂、鬢髪は蓬蓬、若不委窮達、素抱深可惜、窮と達とは運命なり、運命は如何ともすべからず、其の運命に委す能はざる者は、折角素抱、即ち素心を抱く者も遂に惜むべしとなり、入聲十一陌の韻、温謙山曰く、結二句、寓意甚微、

【大意】貧居なれば人を雇ふ能はず、灌木の縱横に荒るるに一任す、班班として翔鳥あるを看るも、寂寂として人行あるを看ず、宇宙は悠悠、人生は百年に至らず、歳月は匆匆、黒髪は白髪に變じ易し、窮達は運命なり、達せんと欲する素抱ある者も遂に達せざることあり、運命なれば是れ深く惜むべし、

少年罕$_{二}$人事$_{一}$遊好在$_{二}$六經$_{一}$。　少年人事罕なり、遊好六經に在り、
行行向$_{二}$不惑$_{一}$。淹留遂無$_{レ}$成。　行行不惑に向ふ、淹留遂に成ること無し、
竟抱$_{二}$固窮節$_{一}$。飢寒飽$_{レ}$所$_{レ}$更。　竟に固窮の節を抱き、飢寒更る所に飽く、
敝廬交$_{二}$悲風$_{一}$。荒艸沒$_{二}$前庭$_{一}$。　敝廬悲風交り、荒艸前庭を沒す、
被褐守$_{二}$長夜$_{一}$。晨雞不$_{二}$肯鳴$_{一}$。　被褐長夜を守り、晨雞肯て鳴かず、
孟公不$_{レ}$在$_{レ}$茲。終以翳$_{二}$吾情$_{一}$。　孟公茲に在らず、終に以て吾が情翳たり、

【注解】罕人事、少年時代は、古今共に諸生時代、俗人の事には關係少し、六經は易、書、詩、春秋、禮記、周禮、古は易、書、詩、禮、樂、春秋を以て、六經と爲す、秦火、樂經を燬く、今と異る所以、行行は年の進行するを云ふ、不惑は四十、「向ツテ惑ハズ」と訓したる本あり、笑ふ可し、無成、四十にして成る無きを恥づ、竟抱固窮節、飢寒飽所更、飢にあらざる時は寒、寒にあらざる時は飢、飢と寒とを更代する事柄に飽きたりとなり、而かも固窮の節、士の常、之を變へて言ふにはあらず、敝廬は破屋、荒艸、人工を入れざる庭中、艸も亦芳艸にあらず、褐、貧者の常、冬も褐なり、晨雞不肯鳴、晨雞の鳴くは、士、達するの兆なり、貧居遂に此の事なし、孟公、前漢の陳遵、字は孟公、酒を嗜み、大飲毎に賓客滿堂、輒ち門を閉ざし、客の車轄を取つて井中に投じ、急ありと雖も、終に去るを得ざらしむ、不在茲、今日は孟公の如き人無し、吾が情の翳即ち蔽翳なる所以なり、平聲八庚の韻、何義門曰く、敝廬の四句、治平を見ざるを謂ふ、

【大意】少年人事罕、罕なる理由は六經を研究中なればなり、既にして年四十に向ふ、一所に淹留して進境を見ず、業遂に成ること無し、而かも六經に依つて造りたる魂、固窮の節は抱懷して改めず、飢と寒と交代に我を苦む、其の苦は已に飽く、而かも敝家は常に悲風に吹かれ、荒艸の前庭を沒するまで發生するに一任す、單衣即ち被褐にて冬夜を守る、而かも容易に晨雞鳴いて我が出世を報するを聞かず、孟公の如き好客の士は今日在らず、吾が情の翳にして明ならざる所以なり、

幽蘭生$_{二}$前庭$_{一}$。含$_{レ}$薰待$_{二}$清風$_{一}$。　幽蘭前庭に生じ、薰を含んで清風を待つ、
清風脫然至。見$_{レ}$別$_{二}$蕭艾中$_{一}$。　清風脫然として至る、蕭艾の中に別るるを見る、
行行失$_{二}$故路$_{一}$。任$_{レ}$道或能通。　行行故路を失するも、道に任せば或は能く通せん、

覺悟當念還。鳥盡廢良弓。　覺悟して當に還るを念ふべし、鳥盡きて良弓を廢す、

【注解】幽蘭、孔子、幽谷の中に於て、蘭獨り茂るを見、幽蘭の名、此に出づ、薫は香氣、蘭花より發す、清風が一たび脫然として至る、蕭艾の中より香氣は來ると雖も、蕭艾は固より香氣なし、故に香氣は蘭より發するものなりと知るなり、蕭は艾なり、艾は蕭なり「ヨモギ」なり、行行失故路、故路は卽ち善路なり、故路に復する者は蓋し亦多幸なり、任道或能通、窮して後達に至り、沈んで後浮ぶを知る、道に任せて或は能く通ず、皆此の理、覺悟當念還、鳥盡廢良弓、人は要するに還るに如かざるなり、俗人の多くは覺悟せず、又還るを忘る、良弓は良に相違なきも、鳥を捕る時のみ入用なり、鳥は已に捕へらる、良弓の廢せらるる、止むを得ざるの眞理なり、韓信の如きは戰雄にして高士にあらず、殺さるる所以は還らざるが爲めなり、平聲一東の韻、陳祚明曰く、此の章の意、寄思に出づると雖も、其の故を得ず、但覺ゆ忠厚の思望人淺からざるを、設ひ彼の元勳を譽するにあらざるも、何か當に還を許すべき、溫謙山曰く、此の詩只是幽蘭を借りて以て自ら喩ふ、別意無きに似たり、唯末語指す所甚だ明晰ならず、清潭曰く、謙山、末語明晰ならずと言ふ、淵明の詩大底は此の句法なり、獨り此の首のみならず、還歸を以て人間の至上とす、其意極めて明晰なり、謙山何を疑ふや、

【大意】幽蘭前庭に生ず、清風吹き來れば、必ず薫香を發す、清風脫然として至れば、臭香を發するもあり、香を發せざるもあり、蕭艾の如きは固より香なし、香あらば知る是れ蘭なるを、人の行行故路を失する場合あり、此の際道に任せて行く、或は又通ずることあり、人は還るを忘るべからず、若し還るを忘るる者あらば、捕鳥後の良弓と同じ、廢せらるべし、殺さるべし、

子雲性嗜酒。家貧無由得。　子雲性酒を嗜む、家貧にして得るに由無し、

時賴好事人。載醪祛所惑。　時に好事の人に賴る、醪を載せて所惑を祛る、

觴來爲之盡。是諮無不塞。　觴來つて之が爲め盡く、是の諮塞たざるは無し、

有時不肯言。豈不在伐國。　時あり肯へて言はず、豈國を伐つに在らずや、

仁者用其心。何嘗失顯默。　仁者其の心を用ひば、何ぞ嘗て顯默を失せん、

【注解】子雲、楊雄字は子雲、前漢蜀郡の人、家貧にして學を好み、天下の大文豪と爲る、而かも酒を買ふ金なきなり、好事人、子雲殊に文字學に精し、是の故に字を問ふ者、子雲が好む所の醪を載せて以て束脩の禮と爲し、其の惑ふ所の字義を問うて、以て其の疑を祛るなり、是の人を好事人と云ふ、觴來爲之盡、好事の人の爲めに盡くすとも解すべし、酒を飲み盡くすとも解すべし、淵明が詩意は多く渾然たる所にあり、キチンと定解を下す如きは淵明の意にあらず、是諮、諮は問なり、謀なり、好事の人が疑を問うて以て各の其の意に滿足するを無不塞と云ふ、有時不肯言、豈不在伐國、不言は字の如く默するなり、人の問ふにも答へざるなり、是れは子雲と關係なし、董仲舒の故事を用ふ、漢の董仲舒傳に、魯君、柳下惠に問ふ、吾、齊を伐たんと欲す、如何、柳下惠曰く、不可なり、歸つて憂色あり、曰く、國を伐つは仁人に問はず、此の言何爲ぞ我に至るや、仁者用其心、仁者は問を好まず、豈人の國を伐たんや、何嘗失顯默、顯は語の意味に見よ、平生の用心、仁の一字に在るに於ては、其の人格が、語に依り默に依りて變ずるものにあらずとなり、子雲は富貴に汲汲たらず、貧賤に戚戚たらずと稱するも、人の家國を伐つ事に於ては、肯て其の是非を言はず、獨り柳下惠は伐國の非を言ふ、眞に仁者の言、淵明は酒に於て子雲を取り、仁に於て柳を取る、其の意極めて深し、蔣丹匡曰く、肯て伐國を言はず、隱然劉宋を以て新莽（子雲が頌を呈せし王莽）に比す、蓋し之を言ひ難きなり、淸潭曰く、謙山云ふ、淵明は子雲に賢ること遠し、豈同日に語る可けんやと、是の言や善し、入聲十三職の韻、

【大意】楊子雲は性酒を嗜む、而かも酒を買ふの錢無し、好事の人あり、子雲が文字に精通せるが爲

め、醪を以て東脩の禮と爲し、各の其の所惑を祛る、子雲は幸にして酒が飲め、好事の人は幸に疑を解く、時ありては言ひ、時ありては言はず、豈國を伐つにあらざらん、仁者は鬪を好まざるなり、顯たり默たるは、仁者に於て得失無きなり、

疇昔苦長飢。投耒去學仕。　疇昔長飢に苦み、耒を投じて去つて學仕す、
將養不得節。凍餒固纏己。　將養節を得ず、凍餒固に己を纏ふ、
是時向立年。志意多所恥。　是の時立年に向ふ、志意恥づる所多し、
遂盡介然分。拂衣歸田里。　遂に介然の分を盡し、衣を拂うて田里に歸る、
冉冉星氣流。亭亭復一紀。　冉冉星氣流れ、亭亭復一紀、
世路廓悠悠。楊朱所以止。　世路廓として悠悠、楊朱止まる所以、
雖無揮金事。濁酒聊可恃。　金を揮ふ事無しと雖も、濁酒聊か恃むべし、

【注解】疇昔は猶ほ前日と言ふが如し『禮記』に疇昔之夜とあり、後世轉じて昔日の意味に使用する者もあり、今は前日の意味、投耒、生活卽ち長飢を救ふ爲め耒を棄るなり、淵明は耒にて生活を支ふる能はず、去つて學官と爲る、將養不得節、而かも母を養はんとするも、猶ほ調節するを得ず、凍餒は飢餓なり『孟子』に無凍餒之老」とあり、固纏己、飢寒は己が身に纏うて、生活猶ほ安泰ならず、是時向立年、立年は三十なり、志意多所恥、人間三十にして生活の安泰を得ずんば、誰人として恥ぢざらん、況や淵明に於てをや、遂盡介然分、『孟子』に山徑之蹊介然とあり、是れ耿介の貌、『離騷』には堯舜之耿介とあり、正と明との義を含むが介と心得べし、分は分際、自分だけの道卽ち正義は盡したりとなり、拂衣は一本拂死に作る、拂衣の可きに如かず、歸田里、彭澤令を罷めて歸るなり、冉冉星氣流、亭亭復一紀、歲星十二年にして一週す、是を一紀又一終と謂ふ、亭亭は遼遠の意に見よ、世路廓悠悠、廓は廓濶なり、楊朱は戰國の時の人、一派の學說を立て、墨子兼愛說と反す『淮南子』說林訓に、楊子、逵路を見て哭す、其れ以て南し、以て北すべきが爲なり、所以止、南行して可なるや、北行して可なるや、逵路に止まつて以て哭するなり、雖無揮金事、今日の俗語で言へば、成金の豪奢は之れ無しと雖もの意、濁酒一杯は我に於て聊可恃、我に於て、此の濁酒こそ揮金以上の愉快であるなり、上聲四紙の韻、

【大意】疇昔長飢に苦しむ、耒にては長飢を救ふ能はず、是に於て、百姓を休めて學官と爲る、學官の俸給にても、猶ほ母を養ふ調節を得ず、凍餒が己を纏うて離れざる感あり、而して是の年三十、男兒立つべき年にして立つ能はず、恥づる所多きを感ずるなり、然りと雖も、介然の分、卽ち正義なりと思ふことは盡くせり、是の故に衣を拂うて田里に歸るも、俸祿の盜人とは爲らず、歸田後、歲月は冉冉と流れ、亭亭として復一紀を閱す、世路は曠廓にして悠悠たり、南行せんや、北行せんや、楊朱が哭して岐路に止まる所以、我は我相當の金を以て、濁酒を求め、聊か之を恃とすべし、

羲農去我久。擧世少復眞。　羲農我を去ること久し、擧世眞に復ること少なり、
汲汲魯中叟。彌縫使其淳。　汲汲たり魯中の叟、彌縫其れをして淳ならしむ、

鳳鳥雖不至、禮樂暫得新。
洙泗輟微響、漂流逮狂秦。
詩書復何罪、一朝成灰塵。
區區諸老翁、爲事誠殷勤。
如何絕世下、六籍無一親。
終日馳車走、不見所問津。
若復不快飮、空負頭上巾。
但恨多謬誤、君當恕醉人。

鳳鳥至らずと雖も、禮樂暫く新なるを得たり、
洙泗微響を輟み、漂流狂秦に逮ぶ、
詩書復何の罪かある、一朝に灰塵と成る、
區區諸老翁、事を爲す誠に殷勤、
如何ぞ絕世の下、六籍一親無き、
終日車を馳せて走り、津を問ふ所を見ず、
若復快飮せずんば、空しく負かん頭上の巾、
但恨む謬誤多きを、君當に醉人を恕すべし、

【注解】羲は伏羲なり、農は神農なり、極めて上古を言ふ、堯舜の世も含むと知るべし、今の世は上古聖人を去る遠し、人欲の私増長して、復眞即ち道の自然に因つて動く人は少し、汲汲は遠ならんと欲するの意、急急と略似たり、魯中叟は孔子、孔子は魯の昌平鄕の人なり、彌縫は、『左傳』に「彌縫其闕」とあり、孔子は上古の聖人に反して新宗を開きし人にはあらず、上古の道の闕けし所を彌縫して以て我が一生の事業と爲したるなり、鳳鳥雖不至、孔子の人格は鳳鳥の至る德あり、如何せん世路渾濁、是を以て鳳鳥來儀せざるなり、而かも禮樂は暫時、孔子が東奔西走の間、四五十年、其の新なるを得たり、洙泗、洙水と泗水とは、共に魯地を流るる水、以て孔子の道に喩ふ、輟微響、洙泗の水音止みたるは、即ち孔子の道亦輟むなり、而かも他の惡水漂流して以て、狂秦時代に逮ぶ、詩書、灰塵、秦の始皇は諸儒を坑にし、羣籍を燒棄し、大殘酷の業を爲せり、區區は二義あり、「ツマラヌ」小事と解するが一、得志の貌と注するが一、今は即ち得志の貌、諸老翁は漢初の學者伏毛や孔鄒の諸人を指すならん、爲事誠殷勤、學事を爲すこと丁寧殷勤なり、如何絕世下、絕世下は今日を謂ふなり、六籍無一親、詩も書も禮も六經總て一人として之を親む者無し、晉陽秋云ふ、六籍存すと雖も皆聖人の糟粕と、放談者流の言ふ所、多く此の如し、淵明より見れば、無賴の狂漢ならずして何ぞ、終日馳車走、不見所問津、今の世、事を東西南北に驅走せしむるも、曾て孔子の道を實行する者は無しとの意、字義に就いては『論語』を見よ、若復不快飮、空負頭上巾、淵明が戴く所の頭巾は酒を漉す道具、或は頭巾と爲り、或は漉酒器となる、若し酒を飮まざるときは、漉酒巾の用は無し、無用の物とすれば負くものにあらずして何ぞ、但恨多謬誤、君當恕醉人、酒を飮む者は多く支離滅裂の事を言ふ、人が言ふにあらずして、酒が言ふなり、謙彼の別無くドウカ醉人が謬語を恕して吳れ玉へとなり、二句十字良に悲痛の言なり、平聲十一眞、鐘伯敬曰く、莊子一部の書、聖賢を嘲謔す、此の立言の獨妙なるに如かず、覺ゆ孔子一生の遑作周流、只是れ彌縫使淳なるを、彌縫の二字、他人固より敢て下さず、亦下す能はず、沈歸愚曰く、彌縫の二字、孔子が一生を該盡す、爲事誠殷勤の五字、漢儒が訓詁を道ひ盡す、末段忽ち接して飮酒に入る、此は是れ古人神化の處、温謙山曰く、彌は補なり、縫は合なり、二字固に聖人參贊の妙を盡す、然れども予謂ふ、著眼尤も一使字に在り、孔子にあらずんば彌縫の手段なく、孔子にあらずんば淳ならしむる能はず、使字無限の功用在る有り、淵明、聖賢中の人たり、故に能く之を道ふ、親切味ひあり、是の詩を讀む者、何ぞ必ずしも飮酒の類を爲さんや、

【大意】羲農は我生を去ること久し、世俗亦一人として眞に復る者少し、敎を說いて汲汲たる魯中の叟、世俗をして眞に復らしめんと勞せり、鳳凰の如き靈鳥は至らずと雖も、禮樂の正しき、暫時は其の新なるを得たり、其の孔子の道も漸く響を輟め、既にして狂秦の世に及ぶ、秦は詩書を盡く火中に投じ、詩書盡く灰と爲る、特志の諸先生、秦火の餘を探索して、道の爲めに殷勤を竭くす、然るに如何ぞや今日の世俗、六籍と一親せず、試に終日車を馳せて走り看よ、津を問ふ所の人有ること無

し、若復快飮せざるときは、何の爲めに頭上に漉酒巾を戴くや、酒を飲み但恨むらくは、言ふ所謬誤の多きを、之を聞く人は請ふ醉人の言として恕して呉れ玉へ、

止酒

居止次城邑。逍遙自閑止。
坐止高蔭下。歩止蓽門裏。
好味止園葵。大懽止稚子。
平生不止酒。止酒情無喜。
暮止不能寢。晨止不能起。
日日欲止之。營衛止不理。
徒知止不樂。未知止利己。
始覺止爲善。今朝眞止矣。
從此一止去。將止扶桑涘。
淸顏止宿容。奚止千萬祀。

酒を止む

居止城邑に次す、逍遙自ら閒止、
坐して高蔭の下に止まり、歩して蓽門の裏に止まる、
好味園葵に止まり、大懽稚子に止まる、
平生酒を止めず、酒を止むれば情喜びなし、
暮止寢ぬる能はず、晨止起くる能はず、
日日之を止めんと欲す、營衛止む理あらず、
徒に止の樂まざるを知る、未だ知らず止の己を利するを、
始めて止の善たるを覺ゆ、今朝眞に止む、
此より一に止め去る、將に扶桑の涘に止まらんとす、
淸顏宿容止まる、奚ぞ千萬祀に止まらん、

【注解】止酒、字の如く飲酒を中止する、居止は單に居るなり、次は「ヤドル」、再宿を信と爲し、信を過ぐるを次と爲す、『周禮』に處るなりと註す、城邑に處るとなり、逍遙は城邑の中を乙地甲地と進行すること、閑止、而かも身は閑止なり、止高蔭下、大樹の影に止息すと、蓽門は貧者の家の門、廣厦華堂は大樹の影に及かざるなり、朱門紫閣は蓽門の裏に止まるに及かざるなり、園葵、葵は菁にて「セリ」の類、蔬類食ふべし、又、日葵、蜀葵、秋葵は皆葵の名、俗に「アフヒ」なり、五鼎方丈の味、我が園葵には及かずとなり、大懽止稚子、稚子の遊戯言語、人の意表に出づ、懽言ふべからず、燕歌趙舞も之に及かざるなり、以上、止まる所に止まるなり、然るに止まる所に止まらざるは唯酒あるのみ、酒の止まることを知らざることは、古今東西貴賤貧富皆一樣の看あり、暮にも晨にも、酒にあらずんば情の喜び無し、而かも其の止むべきの善なるを知る、日日、之を思ふも能はず、而かも又思ふ止まらなければならぬ道理を發見する能はず、是の故に止まると云ふの利を已に得る能はざるを信ず、旣にして又思ふ、止を上善と爲すと、飲酒は決して己を利する者にあらざるを知る、是に於てか斷斷乎として今朝より眞に廢止す、止むと決心するからには必ず止む、扶桑は理想の木『山海經』に、黑齒の北を暘谷と曰ふ、扶木あり、九日下枝に居り、一日上枝に居る、皆烏を載く、涘は音「シ」、訓「ミギハ」、水涯なり、昔は酒の爲め惛惛、今は之を廢止したるが爲め心事明明たりとの意、淸顏止宿容、中毒せざる裏に之を廢止す、淸顏依然として宿容なり、中毒後なりせば何の詮も無し、奚止千萬祀、永久に廢止するのみならず、廢止したるに依つて、非常に自分に德あるを言ふなり、二十箇の止字を運用して、車輪の縱橫に奔馳するが如し、飲酒者の心事を闡破して巧妙を極む、遊戯の作にあらず、眞實際の作、千古不朽の文字なり、尋常の飲酒者も敬讀すべし、又不飲酒者も敬讀すべきなり、温謙山曰く、止の義たる甚だ大、人能く遇に隨つて安んずるときは止まる所を得、淵明能く飲み能く止む、物に役せられず、道を知る者にあらずんば能はず、上聯四紙の韻、

【大意】わが身は城邑に處る、逍遙して身は頗る閒なり、坐するには高蔭の下、歩するには蓽門の裏、食ふには園葵、懽ぶ者は稚子、以上六つのもの其の止るに易し、然るに平生酒を止むるに難きは何ぞ、酒を止むるときは情に於て不滿足なればなり、暮に入れば飲念湧く故に寢る能はず、晨も亦然

り、日日に之を止めんと欲するも、亦止めなければならぬ理由を發見せず、徒らに慾に驅られて止めて樂しまざるを知るも、止めて後己を利する德あるを知らず、既にして止を以て善しと爲すことを覺る、今朝は眞に止む、扶桑の涘の廣きにまで止まんと欲す、猶は淸顏の在るあり、中毒せざるうちに止むるに如かず、奚ぞ止千萬祀のみならん、

述酒

酒を述ぶ

儀狄造、杜康潤色之、
儀狄造り、杜康、之を潤色す

重離照南陸、鳴鳥聲相聞、
重離南陸を照し、鳴鳥聲相聞ゆ、

秋草雖未黃、融風久已分、
秋草未だ黃ますと雖も、融風久しく已に分る、

素礫皛脩渚、南嶽無餘雲、
素礫脩渚皛かなるも、南嶽餘雲無し、

豫章抗高門、重華固靈墳、
豫章高門に抗し、重華靈墳固し、

流淚抱中歎、傾耳聽司晨、
淚を流して中歎を抱き、耳を傾けて司晨を聽く、

神州獻嘉粟、西靈爲我馴、
神州嘉粟を獻じ、西靈我が爲めに馴る、

諸梁董師旅、羋勝喪其身、
諸梁師旅を董し、羋勝其の身を喪ふ、

山陽歸下國、成名猶不勤、
山陽下國に歸り、成名猶勤めず、

卜生善斯牧、安樂不爲君、
卜生斯牧を善とす、安樂君が爲ならず、

平王去舊京、峽中納遺薰、
平王舊京を去り、峽中遺薰を納る、

雙陵甫云育、三趾顯奇文、
雙陵甫めて云に育し、三趾奇文を顯す、

王子愛清吹、日中翔河汾、
王子淸吹を愛し、日中河汾に翔る、

朱公練九齒、閒居離世紛、
朱公九齒を練り、閒居世紛を離る、

峨峨西嶺內、偃息常所親、
峨峨たる西嶺の內、偃息常に親む所、

天容自永固、彭殤非等倫、
天容自ら永固、彭殤等倫にあらず、

【注解】述酒は酒と直接の關係なし、國事に就いて假りに此の題目を設く、湯東磵曰く、晉の元熙二年六月、劉裕、恭帝を廢して零陵王と爲し、明年、毒酒一甖を以て張偉に授け、王を酖せしむ、偉自ら飲んで卒す、繼いで又兵人をして垣を踰え藥を進めしむ、王肯て飲まず、遂に之を掩殺す、此の詩爲に作る所、故に述酒を以て篇に名く、詩辭盡く隱語、故に觀る者省せず、獨り韓子蒼、山陽下國の一語を以て疑ふ、是れ義熙後感ありて賦するを、予反覆詳考して後知る零陵王の哀詩なるを、因つて其の曉むべき者を疏し、以て此の老（淵明）が朱白の忠憤を發す、是れ眞に近きものならん、重離は、太陽の異名、照南陸、正面の文字は、日が南方を照すなり、側面の意は晉室の威光が南陸を赫破せし時を言ふ、晉の祖司馬氏は重黎氏が後なればなり、東晉は都を南朝に置く、鳴鳥聲相聞、正面は衆鳥が白日に諧諧と鳴く、側面は晉の民、晉の政治を謳歌するなり、秋草雖未黃、未の字、近の字に改め見よ、秋草は黃

むに近しと雖の意、晉室は衰勢に近しと雖の意、近と言はずして未と言ふ所、融風の旬に應ずればなり、融風久已分、秋草はマダマダ黄色を呈せないと云ふ者も有るが、然らず然らず、融風即ち晉室を謳歌する眞の風は早巳に分離して居るにあらずやとの意、東晉は、元帝、明帝以後、安帝、恭帝に至るまで、眞の融風天下に滿ちし時は無かりしなり、素礫は白き小石なり、晶は白色の光、脩渚は長江、長江は江左即ち南朝なり、低處の脩渚は猶ほ此の如き賞すべき美觀は存するが、高處の南嶽を仰見すれば餘雲全く影なし、晉室未だ亡びずと雖も、已に氣數の盡きんと欲するを言ふ、豫章抗高門、重華固靈墳、湯東磵曰く、義熙元年、劉裕、匡復の功を以て豫章郡公に封ぜらる、重華は恭帝、宋に廢るを謂ふ、吳師道曰く、愚謂ふ、恭帝、零陵王に封ぜらる、舜が冢零陵九嶷に在り、故に云爾、裕實は篡弑なり、陶公豈肯て篡を以て之を目せんや、今曰く、豫章は湯說の如し、重華は吳說を以て正しとす、湯東磵說を信ずる者は皆是れ誤れるなり、乃ち知る重華は舜の名、靈墳、九嶷山に在り、流淚抱中歎、傾耳聽司晨、淵明が孤忠、彼を思ひ、此を思ひ、流淚して歎を抱き、耿耿として天明に達す、司晨は雞の異名とす、神州獻嘉粟、西靈爲我馴、東磵曰く、義熙十四年、鞏縣の人、嘉禾を獻ず、裕以て帝に獻ず、帝以て裕に歸す、西靈は或は四靈の誤ならんと、裕が篡を受けし文に四靈あり、諸梁董師旅、芊勝喪其身、諸梁は葉公、芊勝は白公、白公は葉公の爲め殺さる、白公は篡弑の野心あり、是を以て葉公の爲め殺さる、楚國遂に安泰なり、晉の世、誰を葉公と爲し、誰を白公と爲すやは明白ならず、山陽歸下國、魏の曹丕、漢の獻帝を降して山陽公と爲し、卒に之を弑す、成名猶不勤、古の人主終を善くせざる者、靈若くは厲の號有るなり、此れ正しく零陵先に廢し、而して後弑するを指す、謚不勤とは哀愍の謂なり（東磵の說）と、卜生善斯牧、東磵曰く、魏の文侯、卜子夏に師事す、此れ之を借りて以て魏の文帝を言ふなり、（文帝は曹丕なり）安樂不爲君、安樂公は蜀の劉禪なり、丕旣に漢を篡ふ、安樂公、君たるを得ず、黄文煥曰く、此『莊子』の牧たらんか、君たらんかの語を用ふ、天子と爲つて自ら其の[illegible]を保たず、即ち人の牧と爲るを求むるも、亦何ぞ得べけんや、自らトす此の生は寧ろ牧を以て安樂と爲さん、君と爲るを願はざるなり、牧は牧民官、一縣の公吏に過ぎず、一縣の公吏と爲るも、一國の王と爲るを願はずとなり、平王去舊京、峽中納遺薰、周の平王は幽王の後、王位に登るも、西都は戎に逼るを以て都を洛邑に遷す、之を周の東遷と言ふ、而して王室の衰微愈よ甚し、以て東晉の王室振はざるに喩ふ、劉裕が恭帝を廢して之を秣陵に遷す、所謂舊京を去るなり、峽中は洛陽ならん、後に陶澍の說あり、雙陵は陶澍の說を見よ、甫云育の三字、三趾顯奇文、皆陶澍の說を可とす、王子愛清吹、王子晉は仙を學び、好んで笙を吹く、日中翔河汾、日中は午時なり、翔は飛翔、鶴に乘つて午時に河汾の空を翔る、河汾は晉の地なり、朱公は陶朱公、陶朱公は越の范蠡が後身なりとの說あるも、信じ難し、練九齒は仙丹を練るなり、或は九齒は九齡、九十なり、淵明は唯的に此の人に寄託して、世を遯るる事を言ふのみ、峨峨は山の高き貌、西嶺は、東磵曰く、當に恭帝の葬るる所を指すなるべし、帝年三十六にして弑せらる、此但其の葬の固くして壽は夭なるを言ふ、置いて必ずしも論ぜず、奈何ともすべき無きの辭なり、夫れ淵明の歸田、本、易代を避くるが爲めなり、而かも嘗て之を正言せず、此に至りて、則ち主弑せられ國亡ぶ、其の痛疾深し、肯て言はずと雖も、亦言はざるべからず、故に是の若きか、天容自永固、彭殤非等倫、西嶺は永く我が君の魂を藏する處、是に於てか、天容は千秋萬歲なり、彭祖は、虞夏を經て商に至り、年七百歲と稱せらる、殤は夭なり、未だ成人せずして死す、壽命が長い短いのと論ずる尋常の論は、我が今言ふ所と何等の關係なしとなり、此の首、大意何に在るや明白ならず、故に注者議一定せず、陶澍曰く、重離以下は晉室南渡、而して王氣遂に盡くるを敍し、抱中歎（九句）以下は再三反覆し、以て之を痛む、神州嘉粟、我謂は此『穆天子傳』西王母諸國獻禾の事を用ひ、西晉全盛の時、五胡未だ亂れず、四夷來服するも、今は見る能はざる事を謂ひ、次ぎは則ち芊勝、楚を亂して、沈諸梁、之を復す、東晉の初、王敦蘇峻の亂、即ち陶侃溫嶠の功、國猶ほ人ありしも、今は見る能はざるを言ひ、次ぎは則ち山陽、魏に歸るも猶ほ令終を獲、忿忿剪除を事とせず、而して今は見る能はざるを言ひ、次ぎは則ち萬乘を以て匹夫たらんと求むるも得ず、此牧人君たるを願はざる所以、平王以下は、晉、江左に遷りしより、中原、鮮卑に沒し、劉裕、姚泓を平げ、晉の五陵を修復し、守衞を置く、國恥甫めて雪ぎ、而かも篡狀已に成る、薰は獯鬻、史記五帝本紀、葷粥に作り、周本紀、薰育に作る、獯鬻竝び遁ず、峽は蓋し郟鄏、成王鼎を郟鄏に定む、今の洛陽、峽郟通ずるなり、晉の五陵、洛陽に在り、敢て五陵と顯言せず、故に雙陵と曰ふ、蓋し亦晴の一、又を以て其の辭を亂る、其の實若し宣・景・文・三王を除きて數へずば則ち武・惠二帝正しく雙陵のみ、三趾乃ち曹魏篡を受くるの辭、左太冲『魏都賦』其三黑匪烏、三趾而來儀、注に曰く、延康元年三趾の鳥、郡國に見はる、裕、篡を受くる時、太史令亦符瑞天文數十事を陳す、王子晉が事は、位を棄て仙を學び、世世天家に生るる莫れとの旨を言ひ、朱公以下は、亂を避け、遯跡の心を言ひ、天容以下は、『楚辭』遠遊の旨、富貴は長生に如かざるの意を敍す、十一眞十二文は、古通韻なり、

【大意】重離が南陸を照すに當るや、晴天を喜ぶは鳥の性、是を以て皆啾啾として鳴く、秋犻は未だ黃色ならざるに、融風は久しく已に分る、外形と內容とは已に判然たり、低處の素礫は猶ほ光ありと雖も、高處の南嶽は已に雲無し、是の時に當りて、豫章は高門に抗し、重華は靈墳依然として九疑に在り、彼を思ひ、此を念へば、流淚して中歎を抱く、歎ずるが故に夜寢ぬる能はず、耳を傾けて曉雞を聞くに至る、時しも神州に嘉粟を獻ずる者あり、而して西靈は我が爲めに馴る、而して諸梁は師旅卽ち軍勢を董率して芈勝を殺せり、而して山陽公は下國に歸り、他の爲めに弑せらる、成名猶ほ不動、卜生は斯牧を善にするも、安樂は君たらず、平王は舊京を去つて洛邑に遷る、而して峽中には遺薰を納れ、雙陵卽ち晉の五陵は洛陽に在り、天趾には奇文を顯し、王子晉は吹笙を愛し、鶴に乘つて日中に河汾を翔り、朱公は九齒を練り、今、我は閒居して全く世紛を離れ、眼前に在るものは、峩峩たる西嶺、偃息しながら親しむ所は、是の西嶺なり、天子の容は自ら永固なり、彭殤の如きは晉の天子の永固には等倫ならず、

責子

子を責む

白髮被兩鬢。肌膚不復實。
白髮兩鬢に被り、肌膚復實ならず、

雖有五男兒。總不好紙筆。
五男兒有りと雖も、總て紙筆を好まず、

阿舒已二八。懶惰故無匹。
阿舒已に二八、懶惰故に匹無し、

阿宣行志學。而不愛文術。
阿宣行くゆく志學、而かも文術を愛せず、

雍端年十三。不識六與七。
雍端年十三、六と七とを識らず、

通子垂九齡。但覓梨與栗。
通子九齡に垂なんとす、但梨と栗とを覓む、

天運苟如此。且進杯中物。
天運苟も此の如し、且く杯中の物を進めん、

【注解】責子、子を款戒する、五子の名舒儼、宣俟、雍份、端佚、通佟、白髮、不實、共に父たる淵明は其の老に迺るを言ふ、後を願とする五男兒は總て不肖なり、二八は十六、志學は十五、行とあれば宣俟は十四なり、雍と端は共に十三、孖が然らざれば一は妾が子なり、一妻が一年二度產を爲さず、淵明は妾が無きなり、乃ち雙生見たり、而かも此の兩見、六と七との區別を知らず、第五子の通佟は六齡、梨と栗とを覓むるを知つて、其の餘を知らず、嗚乎生むことは生んだり、天運にして如何ともするなし、我は酒を飲まんのみ、今問はんとす、酒を飲む親の罪、遂に子に報いしものにあらずや、罪は親に在り、子に在らず、入犀四貫の頭、淵明旣に國を憂ふ、憂ふるも以て如何とも爲すべからず、又子を憂ふ、憂ふるも亦以て如何とも爲すべからず、五柳を種ゑて以て五子の秀出を期待す、父たる其の志のみ、肖不肖は天運に一任せんのみ、

【大意】白髮は兩鬢に蓬蓬、肌膚は艷を失ひ、五人の子あるも、總て不肖、信に是れ天運なりと覺らば、悔恨共に無し、唯酒を飲むに如かず、

有會而作　并序

會ありて作る　并に序

舊穀既沒。新穀未ㇾ登。頗爲㆓老農㆒。而値㆓年災㆒。日月尚悠。爲ㇾ患未ㇾ已。登歳之功。既不ㇾ可ㇾ希。朝夕所ㇾ資。煙火裁通。旬日已來。始念㆓飢乏㆒。歳云夕矣。慨然永懷。今我不ㇾ述。後生何聞哉。

舊穀既に沒し、新穀未だ登らず、頗きて老農と爲る、而して年災に値ふ、日月尚悠なり、患を爲す未だ已まず、登歳の功、既に希ふべからず、朝夕資する所、煙火裁に通ず、旬日已來、始めて飢乏を念ゆ、歳云に夕れぬ、慨然永く懷ふ、今我述べずんば、後生何を聞かんや、

弱年逢㆓家乏㆒。老至更長飢。　弱年家乏に逢ひ、老至つて更に長飢、

菽麥實所ㇾ羨。孰肯慕㆓甘肥㆒。　菽麥實に羨む所、孰か肯て甘肥を慕ふ、

惄如亞㆓九飯㆒。當ㇾ暑厭㆓寒衣㆒。　惄として九飯を亞ぐが如し、暑に當つて寒衣を厭ふ、

歳月將ㇾ欲ㇾ暮。如何辛苦悲。　歳月將に暮れんと欲す、如何ぞ辛苦悲する、

常善㆓粥者心㆒。深念㆓蒙袂非㆒。　常に粥者の心を善とす、深く蒙袂の非を念ふ、

嗟來何足ㇾ吝。徒沒空自遺。　嗟來何ぞ吝むに足らん、徒らに沒し空しく自ら遺る、

斯濫豈彼志。固窮夙所ㇾ歸。　斯に濫す豈彼の志ならん、固窮夙に歸する所、

餒也已矣夫。在昔余多ㇾ師。　餒や已矣夫、在昔余師多し、

【注解】有會、心に會する所ありて作る、頗は偏也、不正なり、老農と爲つて、田園生活久しきも、災年に會する事多く、辛うじて一家を支ふるに過ぎず、登歳は卽ち豐年、豐年は望むべくもあらず、煙火を散通すれば滿足なり、然るに旬日來、煙火すら擧ぐるに至らず、殆んど飢乏に堪へず、而かも歳暮に會ふ、此の事、豈言ふこと無からんや、弱年は少年、家乏は一家の貧乏、老境愈よ飢う、菽と麥とが羨念に堪へず、菽の甘き、麥の肥えたる、そんなことは問ふ所にあらず、惄如亞九飯、『毛詩』に、惄如調飢とあり、『說苑』に曰く、子思、衞に居る、三旬に九たび食に遇ふ、淵明が意、吾が飢うるは恰かも子思が飢ゑたると同じとなり、當暑厭寒衣、衣服は一個、夏も冬も同一なり、此の如くにして歳暮に至る、粥者は鬻者と同じ、賣也、『禮』に田里不ㇾ粥とあり、賣者の心を善しと爲すなり、深念蒙袂非、『禮記』に、蒙袂齊飢うる時、輯屨貿貿然と、徒沒空自遺、黔婁が故事、黔婁先生は齊の隱士、貧甚し、歿して衣、體を蔽はず、後人以て貧士の喩と爲す、斯濫豈彼志、貧すればとて濫するは彼が志にあらず、固窮は始終を一貫しての我が所歸なり、餒也、飢餓と爲るは亦已むを得ず、余多師、固窮節を守るを以て師と爲すは在昔よりなり、今日始めて師と爲すにはあらず、平聲因支の韻、陳祚明曰く、琢句、拙中に於て老に到る、句句用意轉合、故に曲にして直ならず、淺率の識無し、

【題義】心中に何か會得する所ありて作ると云ふのが、有會而作の意なり、是の作年は未詳なるも、詩に從つて之を案ずれば、五十以後の作たるは明白なり、

【大意】舊穀消費し、新穀は未だ登らず、老農と爲りて、此の如き年災に値ふ、痛嗟の極なり、日月は悠久なり、前途を思念して、患何ぞ已まん、豐年は望むべくもあらず、朝夕の煙を揚ぐるを得ば足りぬ、而かも旬日來、飢乏の念に堪へず、況や歳も將に暮れなんとす、慨然として永懷す、今我が此の事を敍べずんば、子孫は此の凶年の苦を知る能はず、我は弱年より富を知らず、老年に及ぶまで貧

乏なり、菽麥は尋常の食物なり、貴人の食物にはあらず、此の尋常の食物を我は實に羨む、甘も肥も問ふに遑あらざるなり、昔し子思が三旬に九食したる事を聞きたるが、我も是と殆んど同じ、食物已に然り、衣服の如きも寒暑一衣のみ、然かも我は古の粥者の心を善と爲すものなり、蒙袂や黔婁の如き、飢乏にも、窮寒にも、其の志を改めざりしは、我の敬慕する所なり、貧にも寒にも濫せざるは、彼等古人の志なり、固窮は我も夙に歸する所、飯也は已むを得ず、在昔より我の師範と爲る人は多し、

蜡日

風雪送餘運。無妨時已和。
梅柳夾門植。一條有佳花。
我唱爾言得。酒中適何多。
未能明多少。章山有奇歌。

蜡日

風雪餘運を送る、妨げ無し時已に和す、
梅柳門を夾んで植ゑ、一條佳花あり、
我唱ふ爾言ひ得ん、酒中適何ぞ多き、
未だ多少を明むる能はず、章山奇歌あり、

【注解】蜡日は臘祭の日、伊耆氏始めて蜡を爲す、蜡とは索なり、歲の十二月、萬物を合聚して、之を索饗するなり、此の詩の作意、何に在るやは知るべからず、呉會の『拜經樓詩話』に、述酒篇と同意と爲し、一一、國事に關して附會す、陶明若し知るあらば、果して何と謂ふか、陳祚明曰く、梅には多く一枝を用ふ、未だ一條を用ふる者あらず、孤讓山曰く、一條の句も亦佳、秋菊佳色と別に一佳致、平原五歌の類、

【大意】年將に暮れんとし、風雪は餘運を送る、餘運を送り去れば自然と時和が至る、梅も柳も所謂時和を含んで來る、梅の如きは一條殊に佳花を著く、我も時和を唱ふるを以て爾も共に之に和せよ、酒中には適意の事多し、適意の多少は其の人にあらずんば知る能はず、章山には奇歌あり、

四時

春水滿四澤。夏雲多奇峯。
秋月揚明暉。冬嶺秀孤松。

四時

春水四澤に滿ち、夏雲奇峯多し、
秋月明暉を揚げ、冬嶺孤松秀づ、

【注解】『許彥周詩話』曰く、此顧長康の詩、誤つて彭澤集中に入る、思悅上人曰く、此れ顧凱之の神情の詩、文に類す、全篇あり、然れども顧詩、首尾類せず、獨り此警絕、劉斯立曰く、當に是れ凱之此を用ひて足して全篇と成すべし、篇中唯此の警策、居然知る可し、或は顧作と雖も、淵明、四句を摘出す、眷擇と謂つ可し、

陶淵明集卷三終

陶淵明集 卷四

詩五言

擬古 九首

榮榮窗下蘭。密密堂前柳。
初與君別時。不謂行當久。
出門萬里客。中道逢嘉友。
未言心先醉。不在接杯酒。
蘭枯柳亦衰。遂令此言負。
多謝諸少年。相知不忠厚。
意氣傾人命。離隔復何有。

擬古 九首

榮榮たり窗下の蘭、密密たり堂前の柳、
初め君と別れし時、謂はざりき行く當に久しかるべしと、
門を出づれば萬里の客、中道嘉友に逢ふ、
未だ言はず心先づ醉ふ、杯酒に接するに在らず、
蘭枯れ柳も亦衰ふ、遂に此の言をして負かしむ、
多謝す諸少年、相知忠厚ならざらんや、
意氣人命を傾く、離隔復何か有らん、

【注解】擬古は詩の法も、詩の意も、所謂古人に擬うて作るを言ふ、榮榮は蘭葉の盛なる形容、自ら比す、詩騷に多く用ふ、密密は柳條の盛なる形容、彼を比す、共に春日より夏日の間の景、與君、君とは的確に何人と指すにあらず、然れども晉の君主と見るべし、當久、行かんと欲する時は短日月にして還る心存なりしも、出門するに及んでは遂に萬里の客と爲る、中道逢嘉友、遠行の中途にて、偶然嘉友に邂逅す、未言心先醉、挨拶も未だ濟まざるに心已に醉ふが如し、懷に堪へざるが爲めなり『列子』に、見之心醉とあり、不在接杯酒、醉の字あり、酒の字無かるべからず、句法として然るなり、蘭枯柳亦衰、嘗て征途に上りし時は、蘭柳共に盛なりしも、早已に秋に遇うて蘭柳共に枯衰するを見る、國も家も枯衰し、我も君も共に枯衰すとなり、遂令此言負は、一本に時沒身還朽に作る、清の焦竑は後句非なりと、清譚曰く、焦竑は何が故に時沒の句を非なりと爲すや、陳祚明も亦言負の句を取るものの如きも、前句の蘭枯の文字に對しても、極めて明了に意義を爲すは時沒の句にありとすべし、此言の文字に就いて作者淵明以外には何を以て此言と爲すや、一讀解すべからず、焦や陳の如く解すれば、そは陳焦二人の意にて、遂に淵明の意にはあらず、余は句として拙と爲すも、意義は全く明了と爲るなり、多謝は日本語の難有と同じ、諸少年は未だ枯衰に至らざる人、相知は俗語の「知リ合ヒ」なり、忠厚を知って居る人人なり、「忠厚ナラズ」「忠厚ナラザラン」二樣に讀めること分別すべし、意氣傾人命は、諸少年の意氣が人の生命を傾倒せしむるまで眞實のものであると感嘆の言なり、離隔復何有、千里萬里離隔しても、肝膽相照すに於ては、復何かあらんやとなり、劉履曰く、靖節、義を見て作ち、鎭軍參軍より、卽ち求めて彭澤令と爲り、未だ幾ならずして歸を賦し、晉宋易代の後に及んで、終身仕へず、當在朝の諸親舊、或は之を諷動する者ありて、故に此の詩を作り以て意を寄するか、何孟春曰く、此の詩解する者謂ふ、蘭柳は衰へ易きの物、而して榮茂するは、以て晉室羸しと雖も、尙ほ其の爲す有るを望むべし、圖らざりき、一別既に久しく、且遠く、中道に迷留して、今日枯衰して遂に爲すべからざるに至らんとは、諸少年卽ち向の所謂嘉友なる者、當時相逢ふや、未だ言はずして、其の意氣に心醉し、以て人命を傾くべきに似たり、今日離隔し、竟に何の成就する所ぞや、此れ靖節、當時、與に心を同じうして國を憂ふる者無きが爲めに發するなり、劉履以爲へらく、易代の後、在朝の諸親舊、或は其の任へんことを勸むる者あり、故に此を作りて意を寄すと、豈其れ然らんや、上擧二十五有の韻、

【題義】詩の體も詩の意も、古人に擬つて作る、古とは漢代を指す、而して晉宋の革命の際、深く感慨を此の中に寓す、

【大意】窗下の蘭は榮榮たり、堂前の柳は密密たり、恰かも春夏の間、人と離別する時、是の離別は久遠なりとは謂はざりき、然るに門を一歩出づれば、千里萬里の客、離別久しかるまじなどの言は忘れる、中道にして嘉友に逢ふ、逢ふは偶然に逢ふ、其の懽び形容するに物なし、懽喜の極醉ふが如し、而かも此の醉や、酒の爲にはあらず、既にして蘭は枯れ柳も亦衰ふ、時沒すると共に人の身も還朽ちるに至る、多謝すらくは諸少年、我が知る範圍の人は皆忠厚の士なり、其の意氣、人命を傾倒せしむるに至る、千里萬里隔つるを初めは恨みに思うたが、其の意氣を察すれば、我と非常に離隔して居るも恨む所はあらず、表面此の如し、裏面は其の反對と知るべきなり、

辭家夙嚴駕。當往至無終。　家を辭し夙に駕を嚴にし、當に往きて無終に至るべし、

問君今何行。非商復非戎。　君に問ふ今何くに行く、商にあらず復戎にあらず、

聞有田子泰。節義爲士雄。　聞く田子泰あり、節義士雄たりと、

斯人久已死。鄉里習其風。　斯人久しく已に死す、鄉里其の風に習ふ、

生有高世名。既沒傳無窮。　生きて高世の名あり、既に沒して無窮に傳ふ、

不學狂馳子。直在百年中。　學ばず狂馳子、直百年の中に在り、

【注解】辭家、人が今正に遠行する意を敍ぶ、嚴駕は悠悠の反對、當往、往くべくして往くなり、至は陶澍本に從ふ、各本、志に作る、無終は國名、春秋時代の山戎、秦に無終縣、今日の京兆縣是れなり、或は「終り無シ」と讀ませたるものあり、一笑を發すべし、問君今何行、君とは辭家の人を指す、非商復非戎、商は成湯が夏に代つて天下を有つの號、國を商と號す、今日の河南の商丘縣なり、戎は春秋衛の邑、楚丘に在り、今日山東曹縣の東南に故城址あり、溫注に、戎兵也と、大に非なり、諫山亦地名たるに竟が到らざるなり、聞有田子泰『三國志』及び『魏書』に、田疇字は子泰、右北平無終の人、董卓、獻帝を長安に遷す、幽州の牧劉虞、使を遣り奔らして行在を問はんと欲するも其の人無し、疇が奇士たるを聞いて、乃ち署して從事（今日日本の屬官の類）と爲す、疇將に行かんとす、道路阻絶、遂に間道に循つて長安に至り命を致す、詔して騎都尉を拜す、疇、天子蒙塵を以て、榮寵を荷佩すべからずと、固辭して受けず、報を得て還る、虞已に公孫瓚の滅ぼす所と爲る、疇、虞の墓に謁し、哭泣して去る、瓚怒りて曰く、汝何ぞ章報を我に致らざる、或、瓚に說いて曰く、疇は義士なり、君禮する能はざるときは、恐らくは衆心を失せん、乃ち縱ちて之を遣る、疇、北に歸り、遂に徐無山中に入る、子泰、子春、史に據つて異る、今定め難し、節義、節は人の志操なり、氣概なり、義は人の正道に伏るなり、田子泰の如き人は、此の節義を全うしたるなり、眞の士雄と稱爲すべし、而かも斯人は三國の初めの人、晉を距る二百年前に死せり、死せりと雖も、其の遺風は滅せず、鄕里の士人は皆其の節義を習ふを知る、生有高世名、既沒傳無窮、田が如きは、生前も死後も、狂馳子は一生を樂に送らんとして、節も義も眼中に無く、權門にも拜塵する鼠輩、我は子泰を學ぶも、何ぞ狂馳子を學ばんや、彼等は百年節も命と名と共に朽つる徒なればなり、溫謙山曰く、晉衰ふるに、此の詩當に是れ劉裕が帝を廢して零陵王と爲す時の作なるべし、蓋し當時、裕、兵を以て之を守り、行在の消息、能く知る者無し、故に元亮、慨を子泰に寄するなり、濟澤、亦、溫說を是なりと信ず、上平聲一東の韻、

【大意】家を辭して將に旅行の途に上らんとす、若し旅行の途に上らば、當に無終縣まで往くべし、サテ君は何處まで行く心ぞや、行く先きは商にもあらず、復戎にもあらず、果して何處ぞ、昔田子泰なる人ありて、危險を冒して使して歸り、節義超絶、士の雄たる者なり、而して今日斯人有る無し、然りと雖も其の節義の風は鄕里卽ち無終の人皆之に習ふ、生前も死後も、其の風を無窮に傳ふ、此の風を學ばざる狂馳子は、たとひ功名を爲すも百年の中のみ、田の如く美德を千秋に傳ふるものにあらず、

仲春遘時雨。始雷發東隅。　仲春時雨に遘ひ、始雷東隅に發す、

衆蟄各潛駭。草木縱橫舒。　衆蟄各潛駭し、草木縱橫に舒ぶ、

翩翩新來燕。雙雙入我廬。　翩翩新來の燕、雙雙我が廬に入る、

先巢故尙在。相將還舊居。　先巢故尙在り、相將ゐて舊居に還る、

自從分別來。門庭日荒蕪。　分別してより來、門庭日に荒蕪、

我心固匪石。君情定何如。　我が心固に石に匪ず、君が情定んで何如、

【注解】仲春は二月、時雨は「ウルホヒノアルアメ」なり、二月に始めて雷聲發す、二月に雷聲無きときは五穀登らずとの說あり、東隅、春の氣は東にあればなり、衆蟄各潛駭、蟄は「カガム」なり、蟲類が靜處に蟄伏する、雷聲に驚いて以て其の潛を出づるなり、

有情此の如し、非情の草木も亦縱横に其の芽を舒ぶ、而して來燕は翩翩たり、雙雙は二四以上、先巢は去年の巢なり、舊居は去年の居なり、人は去年の居、燕は去年の巢なり、自從は二字にて「ヨリ」と讀む、分別來、分明に識別してより以來、門庭日荒蕪、我が見聞の自由ありしよりこのかた、門庭は荒蕪する一方なり、我心固匪石、我心匪石は『毛詩』の語、石なれば自由に轉ばすが、心は轉ばすこと能はず、種種と變化する狀を見ては慨然たらざるを得ず、君情定何如、我が心は此の如し、君が情は此の如くならざるか何如、君は燕を指す、温謙山曰く、愚案するに、新に因つて舊を感ず、之を讀む人をして慨然たらしむ、衆蟄二句警妙、結語問燕、別に深致ありと、上平聲六魚の韻、

【大意】仲春二月喜びの雨に遘ひ、且つ始めて雷聲の東隅に發するを聞く、地下の衆蟄は各の潜を出て、地上の草木は盡く芽を舒ぶ、又翩翩として新來の燕子あり、雙雙として我が廬に入る、去年の巢今猶在るを彼は知れり、今年は新來の燕なるも巢は即ち舊居なり、我は考ふ我の知識分別してより來、門庭は荒蕪の一方、石にあらざる我が心は感慨動かざるを得んや、燕子の君は定んで何如なる情あるぞ、

迢迢百尺樓。分明望四荒。　迢迢百尺樓、分明に四荒を望む、
暮作歸雲宅。朝爲飛鳥堂。　暮に歸雲の宅と作り、朝に飛鳥の堂と爲る、
山河滿目中。平原獨茫茫。　山河滿目の中、平原獨り茫茫、
古時功名士。慷慨爭此場。　古時功名の士、慷慨此の場を爭ふ、
一旦百歲後。相與還北邙。　一旦百歲の後、相與に北邙に還る、
松柏爲人伐。高墳互低昂。　松柏人に伐らる、高墳互に低昂、
頹基無遺主。游魂在何方。　頹基遺主無く、游魂何の方に在る、
榮華誠足貴。亦復可憐傷。　榮華誠に貴ぶに足る、亦復憐傷すべし、

【注解】迢迢百尺樓、枚乘の詩に、迢迢牽牛星とあり、迢迢は高き貌、四荒は四方なり、暮作、朝爲の二句、總て物皆定め無きを言ふなり、定め無くして而して又必ず有るは歸雲と飛鳥となり、宅たると堂たるとは問ふ所にあらず、山河滿目中、平原獨茫茫、樓上より望見する所の景、平原の茫茫として廣大なる處、是れ古昔功名と勳績とを夢想する人士が、鬪爭する場と爲す、秦皇も漢武も皆共に是れなり、而して一旦死亡して後は、秦皇も漢武も、北邙山上に於て唯松柏の聲を聞くのみ、北邙は漢以後多く貴人を葬むる墓處とす、而かも松柏は人の爲め亂伐せられ、之を叱咤する能はず、徒らに高墳が互に或は低く或は昂く、墓墳の低昂を競ふより外なし、頹基無遺主、墳のみ存するも已に後嗣の無きものもあり、況や香火あらんや、游魂在何方、骨は泉下に在るを知る、魂は其れ何處に在るを知らず、榮華誠足貴、亦復可憐傷、死後尚ほ墳の高低を競ふ如き人は榮華と云ふの外無し、而かも其の榮華たるや一面には貴む可く、一面には憐むべきものなり、陳祚明曰く、歸雲飛鳥、倏ち是れ但無し、一旦百年、漢家何くに屬せん、解すべきは獨り是を以てのみ、然れども山河滿目二語何ぞや、悲涙之が爲めに下る、句法全く十九首に似たり、温謙山曰く、愚案するに、詩意即ち所謂貴賤同歸土一邱なり、然して悲惜淋漓、人をして卒讀に忍びざらしむ、下平聲七陽の韻、

【大意】迢迢たる百尺樓に登れば、瞭瞭分明に四荒を望むを得、暮には歸雲を看、朝には飛鳥を看る、而して山河は歷歷として目に在り、平原も茫茫として亦目に在り、高處も低處も共に目に在り、殊に

思ふ此の平原、此の山河、古代より功名を爭ふの士、我主たらん、我王たらんと欲して逐鹿場と爲したる地なり、而して一旦百歲(百歲は死の代名詞)卽ち死んだ後、敵も味方も北邙なる墓地に入る、墓上の松柏は人の爲めに伐られ、墳墓は或は低く或は昂く、現存するが如きも、頹甚なる所を見ると子孫も無き樣なり、而して彼等の游魂は其れ何方に在る、人として榮華は貴ぶべきものなり、其の貴ぶべき榮華の裏面は復憐傷すべきものなり、

東方有一士。被服常不完　東方に一士あり、被服常に完からず、
三旬九遇食。十年著一冠。　三旬九たび食に遇ひ、十年一冠を著く、
辛苦無此比。常有好容顏。　辛苦此の比無し、常に好容顏あり、
我欲觀其人。晨去越河關。　我其の人を觀んと欲し、晨去河關を越ゆ、
青松夾路生。白雲宿簷端。　青松路を夾んで生じ、白雲簷端に宿す、
知我故來意。取琴爲我彈。　知る我が故に來るの意を、琴を取つて我が爲に彈ず、
上絃驚別鶴。下絃操孤鸞。　上絃は驚別鶴、下絃は操孤鸞、
願留就君住。從今至歲寒。　願くは留まること君に就て住まり、今より歲寒に至らん、

【注解】東方有一士、東方は日の出る方位、大明の意あり、他を言ふ如くにして而して淵明自身を言ふ、被服常不完、完全なる被服を著用する能はざるは貧なればなり、三旬九遇食、『說苑』に、子思三旬九食と、淵明は貧なるも子思を以て自ら許すものなり、十年著一冠、辛苦無此比、十年一冠、榮達の爲め志を變ぜざるを言ふ、變ずれば身は安樂なり、變ぜざるを以て辛苦す、常有好容顏、心に樂ふ所あり、辛苦の爲めに容顏憔悴すること無し、我欲觀其人、十年一冠の人を觀んと欲す、觀らるる人は我なり、觀んと欲する人も我なり、乃ち河關千里を越えて行く、其の道路には紅塵無く、俗埃無し、唯青松と白雲とが或は路傍に、或は簷端に在るのみ、而して其の人は我が特に來問せし意を知り、優待の意味にて琴を取り我が爲めに彈ぜらる、上絃は驚別鶴の一曲を彈じ、下絃は操孤鸞の一曲を彈ず、之を聞いて還る念を忘る、是に於てか、留住せんことを願ふ、歲寒、年の盡きるまで此の清境に住まらんと希望するなり、謙山曰く、身困んで道亨る、古の聖賢、憂患に處して悔いざる者、特此あるのみ、辛苦中固限り無き好容顏、直に古今聖賢の道源を將て說き盡くす、人奈何して聖賢たらざらんや、上平聲十四寒の韻、

【大意】東方卽ち日出づる方に一士あり、而かも完全の衣服を著けしを見ず、其の一士や三旬九食、十年一冠、衣食住共に滿足ならず、常人としては辛苦言ふべからず、而かも常に滿足充分なる好容顏を爲す、何の故に然るや、其の人を觀んと欲す、是に於て朝來去つて河關を越えて行く、其の道路には青松生じ、其の簷端には白雲滿つ、其の人や我が故に來る意を察知し、我の爲め特に琴を彈じて聞かしむ、驚別鶴の一曲を彈じ終り、更に操孤鸞の一曲を彈ず、是に於てか、此に留住せんことを願ひ、直ちに歲寒に至らんとなり、

蒼蒼谷中蘭。冬夏常如茲。　蒼蒼たる谷中の蘭、冬夏常に茲の如し、

年年見霜雪。誰謂不知時。　年年霜雪を見る、誰か謂ふ時を知らずと、
厭聞世上語。結友到臨淄。　聞くを厭ふ世上の語、友を結んで臨淄に到る、
稷下多談士。指彼決吾疑。　稷下談士多し、彼を指して吾が疑を決す、
裝束既有日。已與家人辭。　裝束既に日あり、已に家人と辭す、
行行停出門。還坐更自思。　行行出門を停む、還坐更に自ら思ふ、
不怨道里長。但畏人我欺。　道里長きを怨みず、但畏る人我の欺くを、
萬一不合意。永爲世笑嗤。　萬一意に合せずんば、永く世の笑嗤と爲らん、
伊懷難具道。爲君作此詩。　伊懷ひ具に道ひ難し、君が爲に此の詩を作る、

【注解】谷中蘭、蘭は幽谷に在るを以ての故に蒼蒼たり、冬夏共に蒼蒼の色を變ぜす、谷中と雖も霜雪の降らざる年は無し、是を以て時節は自ら知るなり、曆日無しと言ふ者は誰ぞや、厭聞世上語、尋常庸俗の語る所、眞味有る無し、聞くも益なし、乃ち同調の友を結んで臨淄に到る、臨淄は濟寧府臨淄、青州に屬す、鄒を兗州府と爲す、孔子所生の地なり、稷下は地名、臨淄縣の北に當る、齊の古城西、稷山あり、館を其の下に立つ、故に稷下と曰ふ『史記』に齊宣王、文學を喜ぶ、是を以て齊の稷下學士復盛ん、數百千人と、多談士、雄辯家の僞藝とす、指彼、彼の談士を指す、此等の人を訪問して以て、吾が疑問を解決せんと欲す、裝束既有日、旅行の準備は早巳に整頓して居るなり、已與家人辭、離別の言を敍し、別杯も巳に濟む、行行停出門、旣にして兎や角、又變心する、其の變心する所以は何ぞ、靜かに元の坐に還つて千思萬思する、人は道里長きが爲め中止するやと疑ふ者もあらんが、我は道里の長きなんぞは畏るる所にあらず、但畏人我欺、人は稱す稷下の士は谷中の蘭の如く霜雪に耐ふと、然れども其の事、實ならざるときは我は欺かれたるなり、千里は厭はず、欺かるるに於ては反つて世の笑嗤と爲るなり、不合意、我は霜雪の意、彼は趨炎の意、是の意、冥合せず、是れ征行を躊躇する所以、而かも伊懷は十分に言道する能はず、爲君作此詩、湯東磵曰く、蒼蒼の四句二十字、興にして比、以て言ふ我に定見あり、談者の爲めに眩せられざるを、白蓮社中の人を謂ふに似たり、溫謙山曰く、交情の薄、古今同歎、然して趨炎の輩、究めて霜雪に耐ふる者の久しかる可きに若かざるなり、閲世深き者にあらずんば、安んぞ、此の語を得ん　上平聲四支の韻、

【大意】蒼蒼たるものは谷中の蘭なり、冬夏此の蒼蒼の色を變せず、而して冬には必ず霜雪あり、山中時を知らずと謂ふ者は誤る、世上俗人の語を聞くを厭ふ、乃ち同調の友と結んで臨淄に到る、臨淄には蘭の如く冬夏變せざるの談士多く住するなり、吾が平生疑問とする所は此の談士に依つて解決せらる、巳に旅裝して出立せんとし、離別を家人に告ぐ、告げし後復出門するを停む、元の座に還り坐して靜思する、他人は道里の遠きを以て厭に爲りしやと思ふものあらんも然らず、稷下の談士、古は蘭の如き人なりしも、果して今日も然るや否やを疑ふ、若し然らずとせば、我は欺かれたるも同然なり、反つて世の笑嗤と爲る、然りと雖も行きたきことは行きたきなり、伊の懷ひ具に道ひ難し、乃ち君が爲めに此の詩を作る所以なり、

日暮天無雲。春風扇微和。　日暮天雲無し、春風微和を扇ぐ、

佳人美清夜。達曙酣且歌。　佳人清夜を美とし、曙に達して酣且歌ふ、
歌竟長歎息。持此感人多。　歌竟つて長歎息す、此を持して人を感ずる多し、
皎皎雲間月。灼灼葉中華。　皎皎たる雲間の月、灼灼たる葉中の華、
豈無一時好。不久當如何。　豈一時の好き無からん、久しからず當に如何すべき、

【注解】日暮天無雲、春風扇微和、此の十字、正面は、春日暮天の景象清高たる處を敍ぶ、裏面は劉履の言ふ如く、日暮を以て晉祚の垂沒を比し、天無雲、風微和、以て恭帝が暫く開明溫煦の象を過ぐるに喩ふ、淸夜は已に且晝の晝にあらず、而して達曙、則ち又知る其の樂を爲す幾くも無きを、是の時、宋公(劉裕なり)肆に弑立を行ひ、以て昌明の後、尙ほ二帝ありの讖に應ず、恭帝、一時南面の樂を得と雖も、懷ふに感嘆無からざらんや、譬へば猶ほ雲間の月、掩蔽なからず、葉中の花、久しからずして零落するも當に如何かすべきや、其の明年六月果して廢せられて零陵王と爲る、又明年弑せらる、此れ靖節預め惻悼の意を爲す、其れ深からざらんや、古詩に、皎皎明月光、灼灼朝日暉の句あり、『蛩溪詩話』曰く、靖節の觀言餠於春酒、日暮天無雲、此れ映帝に處して堯舜を樂しむものなり、堯舜の道、卽ち田夫野人共に樂しむ所のもの、惟賢者之を知るのみ、下平聲五歌の韻、

【大意】日は正に暮、天に片雲無し、春風は習習と吹いて微和を扇ぐ、佳人は此の淸夜を奈何せん、曉天に達するまで酣歌す、酣歌の竟るのを待つて我は長嘆息する、此の歌に依つて印象深ければ所謂諷に持す、持するが故に感殊に多し、皎皎たる雲間の月も、灼灼たる葉中の華も、寸時一時の好きなり、久しからずして零落すべし、其れを如何せんとするや、

少時壯且厲。撫劍獨行遊。　少時壯且厲、劍を撫して獨り行遊す、
誰言行遊近。張掖至幽州。　誰か言ふ行遊近しと、張掖より幽州に至る、
飢食首陽薇。渴飮易水流。　飢ゑて首陽の薇を食ひ、渴して易水の流を飮む、
不見相知人。唯見古時邱。　見ず相知の人、唯見る古時の邱、
路邊兩高墳。伯牙與莊周。　路邊兩高墳、伯牙と莊周と、
此士難再得。吾行欲何求。　此の士再び得難し、吾が行何を求めんと欲する、

【注解】少時　少年の時、壯厲は氣槪なり、撫劍、壯厲なれば劍と離れず、敵を求むる氣あり、而して行遊は十里二十里の近きにあらず、張掖至幽州、張掖は郡名、漢に置く、唐代は回鶻葛に據る、今日の甘肅甘州府の地、幽州は今日の直隸と奉天との一帶の地、乃ち張掖より幽州に至るは、全土を横斷したるの大旅行なり、此の間飢餓に遇うては首陽の薇、卽ち特に淸廉なる薇を食ひ、渴湯に際しては易水の流、卽ち特に寒冽なる水を飮む、伯夷叔齊の跡、荆軻の蹤を慕へばなり、不見相知人、相知の人は夷齊や荆軻を指すか、又自分の平生知る所の人を指すか、二者共に此の中に含むと見て可なり、古時邱、古人去つて依然たる者は古邱のみ、路邊に二箇の高墳あり、一は伯牙の墳、一は莊周の墳、伯牙は鍾子期の爲め、終身、琴を彈ぜざりし人、莊周は惠子の爲め、終身言ふを止めたる人、眞に晉を解する者無く、眞に理を解する者無ければなり、此士は伯牙と莊周、此の如き人は再得すべからず、再得すべからざる人を求むるは、果して何を求むるや、蔣丹崖曰く、易水の荆軻たらずんば、便ち首陽の夷齊と爲らん、撫劍行遊は其の進取なり、伯牙莊周は其の退步なり、溫謙山曰く、寄託遙深、只知者の爲め道ふべきのみ、下平聲十一尤の韻、

【大意】少年の時、意氣壯厲、劍を撫して獨り行游を千里に試む、張掖より幽州と、支那の北部を横斷する、此の間飢ゑては首陽の薇を采つて食ひ、渴しては易水の流を汲んで飲む、中途にて相知の人は一人も見ず、唯古哲人の住せしと思はるる古時の邱陵あるを見る、路旁に二箇の墓あり、一は伯牙、一は莊周を葬る、此の二士、今日、再び得る能はず、吾千里行游、其れ果して何を求むる爲めぞ、

種桑長江邊。三年望當採。　桑を種う長江の邊、三年當に採るべきを望む、

枝條始欲茂。忽値山河改。　枝條始めて茂らんと欲す、忽ち山河の改むるに値ふ、

柯葉自摧折。根株浮滄海。　柯葉自ら摧折し、根株滄海に浮ぶ、

春蠶既無食。寒衣欲誰待。　春蠶既に食無し、寒衣誰に待たんと欲する、

本不植高原。今日復何悔。　本高原に植ゑず、今日復何ぞ悔いん、

【注解】桑に比託して以て晉祚の衰亡に至るを悲むものなり、故に一句一語を解釋する要なし、黄叔琳曰ふ如く、此の首專ら革選に感ず、最も明顯と爲す、他の隱語と同じからず、桑は地の佳きを得ず、國は地の利を得ず、桑の根株も國の根株も滅茶滅茶と爲る、蠶は桑に依つて生き、人は國に頼つて生く、其の根本破壞せらる、亦何の依賴する所かあらん、何孟春曰く、此の首全く鬼谷子が書意を用ふ、『逸民傳』に、鬼谷、蘇秦と張儀に遺る書に曰く、二君豈河邊の樹を見ざるや、僕御其の枝を折り、風浪其の根を盪かし、此の木、豈天地と讐怨あらんや、居る所然るなり、子、嵩岱の松柏を見るや、上枝は青雲を干し、下枝は三泉に通ず、千秋萬歳、斧斤の患に逢はず、豈天地と骨肉あらんや、居る所然るなり、黄文煥曰く、劉裕、戊午の年十二月を以て晉主を東堂に弑し、琅邪王德文を立つ、是を恭帝と爲す、己未は恭帝の元熙元年と爲す、二年庚申にして裕、遂に禪を逼る、長江の邊豈桑を種うるの地ならん、裕が立つる所と爲つて、而して以て裕が勢を防ぐ無く、終に制を受け、遂に坐ながら改革を聽く、追悔すべきなきなり、事悔ゆるに堪へざるに至りて、其の痛み愈よ深し、沈歸愚曰く、言はんと欲して言ひ難し、陶公の詩の根本節目全く此に在り、上歷十諭の韻、

【大意】當面の文字以外に説明を要する餘地無し、

雜詩　十二首

雜詩　十二首

人生無根蔕。飄如陌上塵。　人生根蔕無し、飄として陌上の塵の如し、

分散逐風轉。此已非常身。　分散風を逐うて轉じ、此れ已に常身にあらず、

落地爲兄弟。何必骨肉親。　地に落ちて兄弟と爲る、何ぞ必ずしも骨肉の親ならん、

得懽當作樂。斗酒聚比鄰。　懽を得て當に樂を作すべし、斗酒比鄰を聚む、

盛年不重來。一日難再晨。　盛年重ねて來らず、一日再晨難し、

及時當勉勵。歲月不待人。　時に及んで當に勉勵すべし、歲月人を待たず、

【注解】雜詩は公自ら題せしものか、後人の命名せしものか分明ならず、或は擬古、或は雜詩、公に於ては意は一、蔣丹厓、陳祚

男、缺落を襲うて云云、公に於て其の用なし、蒂は草木の根なり、草木は根蒂あり、人生は根蒂なし、是の故に飄飄として、陌上卽ち街頭の塵埃と異ならず、風を逐うて南北に展轉する、古詩に、人生寄一世、奄忽若飄塵とあり、常身は永く動かざる身、人生の多くは然らず、落地爲兄弟、四海皆兄弟と同義、南北に淪落して或は兄と爲り、或は弟と爲る、親戚と爲る、眞の骨肉のみが親戚にあらざるなり、是に於て此等南北の兄弟と懽樂を爲すの無意味ならざるを信ず、故に斗酒あり、南鄰も來るべし、北鄰も來るべし、來襲して酒は飲むも、我の說く所は、勉勵努力に在り、諸子の逸遊を獎勵するにはあらず、二十より三十に至るまでは盛年なり、盛年は希望あり、良に樂むべしと雖も、歲月は堂堂として過ぐ、今日勉勵せずんば悔ゆるも及ばずとなり、言言句句、千載の下、少年輩を誡むるに足る、上平聲十一眞の韻、

【題義】或る一體の事を歌ふにあらず、或は感慨、或は節序、或は人事、或は景物、而かも此の詩は歸宿する所感慨にあるなり、

【大意】人生は草木の如く根蒂あらず、飄飄として陌上の塵と同じ、或は分散し、或は死歿し、何人も常身を保つこと無し、此の地上に生落して來た者は皆兄弟なり、骨肉のみが唯獨り親しきにはあらず、是の故に心に懽あれば、形に於て樂みを作すべし、斗酒卽ち比鄰を招飲する所以、盛年は重ねて來らず、今日の晨は昨日の晨にあらず、酒を飲み樂みを作すと雖も、勉勵すべきは勉勵せざるべからず、何ぞや、歲月は堂堂と過ぎ、決して人を待たず、

白日淪西河。素月出東嶺。　白日西河に淪み、素月東嶺に出づ、

遙遙萬里輝。蕩蕩空中景。　遙遙萬里輝き、蕩蕩空中景あり、

風來入房戶。夜中枕席冷。　風來つて房戶に入る、夜中枕席冷か、

氣變悟時易。不眠知夕永。　氣變じて時の易るを悟り、眠らずして夕の永きを知る、

欲言無予和。揮杯勸孤影。　言はんと欲して予に和する無し、杯を揮うて孤影に勸む、

日月擲人去。有志不獲騁。　日月人を擲ちて去る、志あるも騁するを獲ず、

念此懷悲悽。終曉不能靜。　此を念うて悲悽を懷き、終曉靜なる能はず、

【注解】白日淪西河、吳均の白日隱城樓より勝る、素月出東嶺、公が發明せし句、前人に未だ有らず、遙遙も蕩蕩も共に廣大の形容、夜中は中夜なり、易は交易なり、無予和、予に和せんと欲する人無きを謂ふ、句法誤讀し易し、揮杯勸孤影、安溪先生曰く、豪傑の士にあらずんば、此の言を爲す能はず、日月擲人去、有志不獲騁、日本には人を擲つて去る日影を召し還さんとしたる狂人あり、志を實行したる人、地下の陶公は如何なる感を爲すや、念此は此の日月の交代速かなるを念うて悲悽する、不能靜は卽ち安眠する能はざるの謂ひなり、溫謙山曰く、欲言の二句、妙は欲の字、勸の字に在り、寂寞無聊の況に於て、此の閒趣を得、周青輪謂ふ、遣悶の妙法、上聲二十三梗の韻、

【大意】白日は西に淪み、素月は東に出づ、遙遙蕩蕩、千萬年同じ、已にして覺ゆ冷風の吹いて房戶に入るを、夜中に至りて枕席冷かなり、氣候の變じたるを悟る、夜も愈よ永きを知る、言詠に志を發したるも誰も來つて和する者無し、是に於て一杯我が影に勸む、白日も素月も人を擲つて堂堂と去

る、日や月を追ひ驅けて引き止めんとするもそは能はず、此の事を念うて悲悽の情を懐き、曉天に達するまで氣が靜かにならざるなり、

榮華難久居。盛衰不可量。　榮華久しく居り難く、盛衰量る可からず、
昔爲三春蕖。今作秋蓮房。　昔は三春の蕖と爲り、今は秋蓮の房と作る、
嚴霜結野艸。枯悴未遽央。　嚴霜野艸に結び、枯悴未だ遽央ならず、
日月有環周。我去不再陽。　日月環周あり、我去つて再陽ならず、
眷眷往昔時。憶此斷人腸。　眷眷往昔の時、此を憶うて人腸を斷つ、

【注解】榮華の二句字の如し、蕖は芙蕖「ハスノハナ」なり、蓮房は「ハスノミ」なり、石崇が王昭君を詠ずる詩、昔爲匣中玉、今爲糞上英より來る、嚴霜結野艸、枯悴未遽央、霜が野艸に凝結するも、艸の枯悴未だ央ならざるなり、遽は全なり、疾なり、卒なり、王粲の詩、調弦未遽央とあり、有環周、一本、還復周に作る、有環周を以て可とす、環周して止む時無きなり、今日の我は昨日の我にあらず、況や去年と今年の我に於てをや、不再陽を悲しむなり、眷眷は追慕に堪へざる貌、湯東澗曰く、此の篇、亦、興亡に感ずるの意、蔣丹匡曰く、今昔の感、語意呑吐、何ぞ必ずしも興亡と泥定せんや、温謙山曰く、世人多く榮華を慕うて盛衰を計す、却つて淵明に語語喚醒せらる、下平聲七陽の韻、

【大意】榮華は久居すべからず、盛衰は運なり、量知すべからず、昨日の蓮花、今日は早蓮實と爲る、嚴霜が降りて野艸に凝結すれば、枯悴即ち「カレ」「カジケル」未だ遽央ならず、艸が枯れ盡きるに至らざる間に日月は環周あり、乃ち艸木は春夏秋冬を度度閲することを得、然るに我は枯悴が早くして且再陽せず、往昔の少年時を回顧して、此の事を憶ひ腸を斷つ、

丈夫志四海。我願不知老。　丈夫四海に志す、我願ふ老を知らざることを、
親戚共一處。子孫還相保。　親戚共に一處、子孫還相保つ、
觴絃肆朝日。樽中酒不燥。　觴絃朝日に肆にし、樽中酒燥かず、
緩帶盡懽娛。起晩眠常早。　緩帶懽娛を盡し、起くる晩く眠る常に早し、
孰若當世士。氷炭滿懷抱。　當世の士の、氷炭懷抱に滿つるに孰若や、
百年歸邱壟。用此空名道。　百年邱壟に歸す、此を用て空しく名道、

【注解】丈夫は男子の通稱、志四海、天下を自由にする志なり、傅玄の詩に、雄心志四海とあり、我願不知老、我は前の丈夫と反對なり、我は四海に志は無し、唯願ふ身健全にして、老を知らざるを願ふとなり、而して親戚も圓滿、子孫も圓滿、而して酒觴、而して管絃、朝日より肆にして晩日に及ぶ、而して酒は日日飲んで燥かざるを願ふ、燥は乾燥、孔文擧の句に樽中酒不空と同意、緩帶は俗語の「クツロゲ」なり、起晩眠常早、駸駸と世を渡る、督督と世を渡ると異なるなり、孰若は孰與と同じ、當世士、氷炭滿懷抱、

四海に志を抱く者は、氷炭相容れざる事に於て交も戰はざるを得ず、それ等の士と蜉蝣と世を渡る人と孰若ぞや、而かも百年歸丘壟、彼も死し、此も死し、忽ち一邱壟と爲る、用此空名道、空名道の三字意義明了ならず、察するに空名は無益なりと斷ずるに在るか、此の首は解釋の方法にて其の意義が種種に取れる、我願も丈夫其の人の事と解する事も出來る、余は自ら信ずる所、丈夫は彼、我は此と別別に見るの勝るを覺ゆるを以て、其の解此の如し、尙後賢の叱正を求む、溫謙山曰く、親戚一處、子孫相保、順境に處する者にあらずんば、此の景象を描寫し、而して況や亂世か、語語質、語語眞、此の眞樂あり、便ち歡飲、憂を忘るべし、此れ淵明隱遁に甘んじ、悔いざるもの其れ所に在るか、上靡十九皓の韻、

【大意】丈夫の多くは四海に志を馳す、我は願ふ身健にして老を忘るることに、親戚も子孫も共に圓滿、朝日には絃を彈じ、暮夜には酒を飲み、一家皆くつろぎ、起きるは晩く眠るは早く、此の如きは當世の士、卽ち四海に志ある者と孰若が可きか、氷と炭と相容れざる形あり、百年の間には共に邱壟、卽ち墓田に歸るものなり、四海に志す者も、老を願ひし者も共に空しく名道と爲るなり、

憶我少壯時。無樂自欣豫。　憶ふ我が少壯の時、樂無きも自ら欣豫す、

猛志逸四海。騫翮思遠翥。　猛志四海に逸し、騫翮遠翥を思ふ、

荏苒歲月頹。此心稍已去。　荏苒歲月頹く、此の心稍已に去る、

値懽無復娛。每每多憂慮。　懽に値ふも復娛無し、每每憂慮多し、

氣力漸衰損。轉覺日不如。　氣力漸く衰損し、轉た覺ゆ日に如かざるを、

壑舟無須臾。引我不得住。　壑舟須臾無し、我を引いて住まるを得ず、

前塗當幾許。未知止泊處。　前塗當に幾許なるべき、未だ知らず止泊の處を、

古人惜寸陰。念此使人懼。　古人寸陰を惜む、此を念うて人をして懼れしむ、

【注解】憶は記憶、無樂自欣豫、樂は苦の反對、欣豫は憂患の反對、希望に滿つれば欣豫する所以、猛志逸四海、逸は奔逸、騫は騫に作るを可とす、軒飛なり、翮は鳥の羽根、翥は飛擧の貌、荏苒は俗語の愚圖愚圖なり、頹は空しく歲月を消誠するなり、此心は此の四海に奔逸せんとするの心、稍已去、全く去るにはあらず、多少減少したるなり、値懽無復娛、希望が減少したれば娛なき所以、而かも每每憂慮すべき事のみ多し、而かも氣力は衰損する、日不如は、淵明始めて此の語を用ふ、擧と同義に用ふるものの如し、以て去年と爲す、平年の義にあらず、氣力が低下する一方にて、少しも軒擧せざるを覺ゆとなり、壑舟は『莊子』に出づ、曰く、藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣、然而夜半有力者、負之而走、昧者不知也、壑は谷なり、谷に舟を放つ、須臾の間も無し、千里直ちに流る、引我不得住、人命と壑舟と均し、堂堂と去つて、少時も住まらず、前塗當幾許、老いて以て前塗を想ふ、悲愴極まり無し、未知止泊處、泊を宿に作る本あり、舟の字に對しても泊を以て可とす、此處ぞ安心立命の地と定める處なし、古人惜寸陰、念此使人懼、何の爲めす陰を惜むや、道を聞かんと思へばなり、而かも道を聞く能はずして歿するに至るに及ぶ、懼るる所以なり、去靡六御の韻、蔣丹厓曰く、老年に至らずんば、此の閱歷眞實の語なし、然れども少壯の人、聞くを樂まざる所、次章便ち直に接し去る、溫謙山曰く、自日の詩に念此、榮曆の詩に憶此、丈夫の詩に用此、憶我の詩に念此とあり、此の詩の句法として知るの要あり、

【大意】憶起す我が少壯時代、樂と稱するもの無きも自ら欣豫、猛志は四海に奔逸せんとし、飛鳥と

同じく遠翥を思ふ、已にして老境に向ひ、此の猛志次第に消滅し、憫ぶべき事に値ふも是を娛みとせず、唯每每憂慮のみ多し、氣力は衰損する、日日低下する一方なるを覺ゆ、所謂人命は壑舟の如し、須臾なぞ言ふ遑も無し、我を引き去つて暫住もせず、前塗幾許ぞといふ遑も亦無し、止泊の處無く奔疾して過ぐ、古人寸陰を惜んで勉む、勉めずんば懼るべし、

昔聞長者言。掩耳每不喜。　昔長者の言を聞き、耳を掩うて每に喜ばず、

奈何五十年。忽已親此事。　奈何ぞ五十年、忽ち已に此の事を親しくせんとは、

求我盛年懽。一毫無復意。　我が盛年の懽を求むるに、一毫復意無し、

去去轉欲遠。此生豈再値。　去去轉じて遠ざからんと欲す、此の生豈再び値はん、

傾家時作樂。竟此歲月駛。　家を傾けて時に樂みを作さん、竟に是れ歲月駛す、

有子不留金。何用身後置。　子あり金を留めず、何ぞ用ひん身後に置くを、

【注解】長者は三義あり、一は年長者、一は顯貴者、一は謹厚者、然かも此の三義を一にしたる者でなければ、眞の長者にはあらず、今の長者は此の三を兼ねたる者を謂ふ、掩耳每不喜、長者の謹厚は少年の理想と合せず、是を以て聞くを喜ばざるなり、既にして自分が早や其の長者と爲る、五十年、半百と爲る、忽已親此事、老人が少年を教誡する役目と爲る、歲紀は二十一より二十九に至る、五十にして三十時代の懽を求むるに、一毫無復意、盛年の懽は老人の懽にあらず、去去轉欲遠、彼此相違ひ、少老取次す、傾家は家產を傾くるなり、老人は少年の懽を求めずと言ふものの、再思するに此の生は再値する者にあらず、財產の有らん限り、人間としての娛樂を作すべし、歲月は駛走して堂堂たり、有子不留金、何用身後置、此の二句は放達の言、其の可否は實驗者にあらずんば斷じ難し、余輩門外漢は讀する資格無し、去聲四寘の韻、

【大意】少年の時、長者の言を聞く、我と逆ふを以て聞くを喜ばず、既にして五十年、始めて彼の長者の言に感ずるなり、五十にして少年の懽を求むるやと言はば、一毫も其の意は無し、意無きのみならず、愈よ少年とは遠ざからんとす、又思ふ此の生は再値すべからず、家產の有らん限りを竭して樂みを作すべし、歲月堂堂として過ぎ去る、子孫の爲め金を留むる要無し、身後に金を置くは子孫を愚にする所以なり、

日月不肯遲。四時相催迫。　日月肯て遲たず、四時相催迫す、

寒風拂枯條。落葉掩長陌。　寒風枯條を拂ひ、落葉長陌を掩ふ、

弱質與運頽。玄鬢早已白。　弱質運と頽き、玄鬢早已に白し、

素標插人頭。前塗漸就窄。　素標人頭を插み、前塗漸く窄むに就く、

家爲逆旅舍。我如當去客。　家は逆旅舍爲り、我は當に去るべきの客の如し、

去去欲何之。南山有舊宅。　去去何に之かんと欲する、南山舊宅あり、

【注解】遲は息ふなり、又待つなり、日月は聊も遲息せず、忽ち春、忽ち夏、忽ち秋冬と交代する、而かも人の感を多く引くは秋風と寒風となり、枯樹の條枚を拂ふ、長陌は長路の街陌なり、弱質は生來の體質、健康ならず、時運と共に頽朽せんとする、玄鬢は黒髪なり、公は早年にして髪白しと傳にあり、素標插人頭、前句の注脚を爲す、窄は狹窄、隘なり、寛の反、前途の巳に短なるを言ふ、家、暫時は我が家なり、而かも我家は逆旅舍と何ぞ異らん、我如當去客、去は卽ち死去なり、旅舍は去らざる可からず、人は死せざる可からず、然らば其の去るは何處にぞ、去去の文字は、蘇武の去去從此辭より來る、南山有舊宅、陶一家の墓田と見て可なり、舊宅を宇の如く、舊宅と見るは可ならず、入聲十一陌の韻、陳祚明曰く、初め疑ふ素標插人頭の句の險を、然れども語固に弱からず、周靑輪曰く、逆旅の二句、達人能く言ふ、癡人讀み難し、何義門曰く、素標の句險語、葛常之曰く、日月不肯遲、用字含蓄、

【大意】日月は少しも遲つこと無し、春夏秋冬と相催迫す、寒風枯條を拂ひ、落葉長陌を掩ふの候、特に人の感を引く、弱質卽ち壯健にあらざる身體、時運と共に頽朽し、黒髪も早巳に白髪と化し、頭上の素標憐むべし、前塗の窄まる知るべし、思へば人生は逆旅舍と同じ、我は明日出逢すべき客なり、而して此を出逢して之く先は何處ぞ、それは南山に我が一家の舊墓田が有るなり、

代耕本非望。所業在田桑。　代耕本望にあらず、業とする所田桑に在り、

躬親未曾替。寒餒常糟糠。　躬親未だ曾て替へず、寒餒常に糟糠、

豈期過滿腹。但願飽粳糧。　豈滿腹に過ぐるを期せん、但粳糧に飽くを願ふ、

御冬足大布。麤絺以應陽。　冬を御ぐ大布足る、麤絺以て陽に應ず、

正爾不能得。哀哉亦可傷。　正爾得る能はず、哀しいかな亦傷むべし、

人皆盡獲宜。拙生失其方。　人皆盡く宜しきを獲、拙生其の方を失す、

理也可奈何。且爲陶一觴。　理や奈何すべき、且く一觴を陶みと爲ん、

【注解】代耕は筆舌を以て耕すに代ふる意ならん、其れは我が本來の希望にあらず、本來の希望は田桑、卽ち自ら耕耘するに在り、躬親は自分が親しく耕すなり、未曾替、人をして交替せしめざるのみならず、自分も替へんと欲する心無し、餒は飢餒、糟糠はイクラ食うても滿腹と言はざるを得ず、豈期過滿腹、『莊子』に、偃鼠飮河、不過滿腹とあり、粳糧は粳米と同じ、糟糠の下等に對し、上等の部を出す、總て滿腹なり、美味惡味問ふ所にあらず、御冬は禦冬なり、大布は大布の衣、麤衣なり、絺は葛細なり、應陽、夏日は麤末な葛細にて足る、正爾不能得、其の貧者にあらず、貧者の著ける衣服、貧者の食ふ食物も滿足に得る能はず、哀哉を喚び、可傷を歎ふ所以、人皆盡獲宜、人は普通人なり、凡俗なり、凡俗の徒は其の宜しきを得るなり、拙生失其方、何焯曰く、道を謀りて食を謀らざるを謂ふ、今謂ふ公が素志は食を謀るにある如きこと一卷二卷の詩に於て在在拾ふべし、今は然らず、老年に及んで饑年の心事は變じ來るものならん、陶は陶陶の意味にて和樂なり、鬱陶の場合は憂思と爲る、今は且く一觴を樂とするなり、下平聲七陽の韻、陳祚明曰く、始めは言ふ代耕と、後は言ふ人皆獲宜と、自ら宜しきを得ざるものあり、然れども固より理なり、直ちに是れ命なるにはあらず、

【大意】代耕卽ち官吏と爲つて生活するは本望にはあらず、自分の本望は鋤を秉つて自耕するに在り、

乃ち躬親しく耕して其の希望を替へず、寒にも餒にも食ふものは糟糠、糟糠でも滿腹すれば足る、但偶には粳糧に飽かんことを願ふ、冬を御ぐには大布あり、夏を防ぐには麤絺あり、其の麤末の物すら滿足に得る能はず、哀哉を叫んで傷悲せざるを得ず、他人は盡宜しきを獲て居るに、我は生計に拙にして其の良方を失す、而かも此の理や奈何ともすべき樣無し、如かず一觴の酒を飲み、陶然と爲るには、

遙遙從羈役、一心處兩端。　遙遙羈役に從せ、一心兩端に處す、
掩淚汎東逝、順流追時還。　淚を掩うて汎として東逝し、流に順じ時を追うて還る、
日沒星與昴、勢翳西山巓。　日沒して星と昴と、勢は翳ふ西山の巓、
蕭條隔天涯、惆悵念常餐。　蕭條天涯を隔て、惆悵常餐を念ふ、
慷慨思南歸、路遐無由緣。　慷慨南歸を思ふ、路遐にして由緣無し、
關梁難虧替、絕音寄斯篇。　關梁虧替し難し、絕音斯の篇を寄す、

【注解】一心處兩端、身は是れ羈役に在り、而して心は是れ鄕里に在り、掩淚、掩は覆ふなり、遮なり、ツマリ掩覆なり、汎は泛と通ず、汎浮なり、汎汎柏舟と『毛詩』に在る如く、流に順じ、時を追うて還る、自然に一任するなり、日沒は夜に入る、夜に入れば暮星天に出づ、昴は星の名、二十八宿の一、勢翳、凡そ隱蔽する之を翳と曰ふ、暮星の勢が西山の巓を隱蔽するなり、隔天涯は鄕里の天と今は大に遠隔せるを謂ふ、念常餐、汎東逝の身分では常餐にはあらず、鄕里に常住しての餐が始めて常餐とす、豈此の常餐を念はざらんや、而かも得ず、惆悵する所以、思南歸、南方の鄕里に歸るを思ふなり、蕭條は氣候に就いての意、惆悵は個人に就いての意、慷慨は家國に就いての意、其の文字使用法を知るべし、遐は遠遐なり、關梁は『楚辭』に、猛犬狺狺而吠兮、關梁閉而不通とあり、關は關所、梁は橋梁、『禮記』の月令に、孟冬之月、謹關梁とあり、虧替は、閉而不通の意なり、虧は物の損を受くるを虧蝕と曰ふ、所謂虧損したるも替へざるなり、通行困難の意義と爲る、絕音寄斯篇、消息の音を絕つも、斯篇に寄せてある、途に絕音とはならざるなり、十四寒（端、餐）と一先は古通韻なり、溫謙山曰く、此れ當に是れ懷思の作なるべし、其の中情綿邈、遠くして達するに由無し、眞に天南地北の感ある有るを覺えざるなり、

【大意】身は是れ羈役の客、心は是れ故鄕の人、兩端に跨る所以、而かも行かざる可からず、淚を掩うて東逝し、流に順つて還る、日と無く、夜と無く、行くに順つて故鄕は天涯と爲る、故鄕の常餐を念へば惆悵たり、南歸を思へば慷慨する、路は遠遐と爲る、信を寄するに由無し、關梁は不通なり、故に我が思を斯の篇に寄す、

閑居執蕩志、時駛不可稽。　閑居蕩志を執れば、時駛稽む可からず、
驅役無停息、軒裳逝東崖。　驅役停息無くんば、軒裳東崖に逝く、
沈陰擬薰麝、寒氣激我懷。　沈陰薰麝に擬し、寒氣我が懷に激す、
歲月有常御、我來淹已彌。　歲月常御あり、我來つて淹として已に彌る、

慷慨憶綢繆。此情久已離。　慷慨綢繆を憶ふ、此の情久しく已に離る、
荏苒經十載。暫爲人所羈。　荏苒十載を經、暫く人の羈する所と爲る、
庭宇翳餘木。倏忽日月虧。　庭宇餘木翳ふ、倏忽に日月虧く、

【注解】執蕩志、閑居は蕩志にあらず、蕩志は閑居にあらず、而して閑居が主となれば蕩志は執らるる所以、時駛、駛は駛疾なり、歳月早く過ぎて稽む可らずとなり、閑居すれば日の纔かな覺えて、日の疾きを知らず、驅役無停息、所謂羈役に從かして、督督と停息なきときは、軒裳は軒車に下帯あるもの、逝は征行なり、沈陰は沈香ならん、以て薫爵の奇香に擬すとなり、寒氣は冽冽、我が懐思を激昂させるなり、淹は久なり、彌は極まるなり、綢繆は『毛詩』の語、猶ほ纏綿と同じ、種種の念が起り、而かも其れが一つの纏つたものにあらざるの意、此の綢繆の情も久しく已に離れて、十載年も經過するに至る、暫爲人所羈、他人の爲めに羈がるるの狀態と爲る、庭宇翳餘木、餘木は叢木なり、此の首、閑居より我懐に至る六句は、平聲九佳の韻、歳月より日月虧に至る六句は、平聲四支なり、或は謂ふ二首なりしものを一首と爲せしにやと、此の首は頗る拙に屬し、陳祚明も、沈陰の句頗る自然を缺くと評せり、

【大意】閑居して蕩志卽ち遠行の志を抑ふれば、時日は駛疾くして稽む可からず、之に反し驅役して停息無くんば、軒裳東崖に逝く、閑居して沈陰を焚き薫爵の美に擬ふ、而かも寒氣は我が懐を激昂さす、何ぞや、歳月常御ありて、我が此に閑居來年稍や久しきに彌る、慷慨して以て綢繆を憶ふ、而かも此の故郷に對する綢繆の情久しく已に離る、荏苒として已に十年、暫く他人の處に閑居する身と爲つた、庭宇を看れば、叢木の陰翳鬱として、倏忽に日月の影を虧すに至りしなり、

我行未云遠。回顧慘風涼。　我が行未だ云に遠からず、回顧風涼慘たり、
春燕應節起。高飛拂塵梁。　春燕節に應じて起ち、高く飛んで塵梁を拂ふ、
邊雁悲無所。代謝歸北鄉。　邊雁所無きを悲み、代謝北鄉に歸る、
離鵾鳴清池。涉暑經秋霜。　離鵾清池に鳴き、暑を涉りて秋霜を經、
愁人難爲辭。遙遙春夜長。　愁人辭を爲し難し、遙遙春夜長し、

【注解】塵梁は梁塵の倒用、鵾は『玉篇』に鶏に似て大なり、『楚辭』に鵾雞啁哳而悲鳴とあり、和名を「メウマル」と曰ふ、離鵾は一匹なり、下平聲七陽の韻、陶澍曰く、遙遙より此の首に至る三詩は、皆羈旅行役の感なり、謝山曰く、離人思婦、境に觸れて皆悲しむ、其の情然るなり、古今忠臣義士、時の不遇に遭ひ、日月已に逝き、貧苦無聊、情況人に告ぐるに堪へざる者あり、其の悲憤の懐、亦是の若きのみ、淵明の傷春、正に宋玉の悲秋と同一悽愴、何ぞ境候を分たんや、

【大意】征行して未だ遠からず、回顧すれば家を出でし時は風涼慘たり、卽ち初秋なり、今や春燕來り、梁塵を拂ふに至る、邊雁は住むに所無きを悲しみ、春燕と代つて北鄉に歸る、一匹の鵾雞は清池の畔に鳴き、夏と秋とを經過す、愁人は此の鳥の鳴くを聞いて、何の辭を以て我が情を遣らん、遙遙として長夜の長きを恨むのみ、

孏孏松標崖。婉孌柔童子。
年始三五間。喬柯何可倚。
養色含精氣。粲然有心理。

孏孏松標崖、婉孌柔童子、
年始三五の間、喬柯何ぞ倚る可けん、
養色精氣を含む、粲然心理あり、

【注解】此の首に就いて、忌悅曰く、東坡和陶、此の篇無し、陶澍曰く、諸本、皆、擬詩十二首と題す、此の首を併せて其の數乃ち足る、温謙山曰く、此の首寥寥數語、甚意義無し、蔣丹崖曰く、缺落全からず、其れ或は然らんか、大意を記する要無し、

詠貧士　七首

萬族各有託。孤雲獨無依。
曖曖空中滅。何時見餘暉。
朝霞開宿霧。衆鳥相與飛。
遲遲出林翮。未夕復來歸。
量力守故轍。豈不寒與饑。
知音苟不存。已矣何所悲。

貧士を詠ず　七首

萬族各の託あり、孤雲獨り依ること無し、
曖曖空中に滅し、何の時か餘暉を見ん、
朝霞宿霧を開き、衆鳥相與に飛ぶ、
遲遲林を出でて翮る、未だ夕ならず復來歸す、
力を量りて故轍を守り、豈寒と饑とせざらん、
知音苟くも存せずんば、已矣何の悲む所ぞ、

【注解】貧士、廣義には所謂多くの貧者、狹義には公自身を指す、七篇皆然り、萬族は羣品なり、萬物なり、各有託、獨立すと言ふと雖も、各自相互に依託して以て生計する、而して全然依託する所なく、飄飄乎たるものは孤雲なり、孤雲は卽ち貧士に喩ふ、曖曖は雲色の曖昧の形容、空中滅、空に生じ、空に滅す、何時見餘暉、日影の餘暉を受ける時は雲も亦光輝を發するなり、其れは何の時なるを知らず、朝霞開宿霧、衆鳥相與飛、萬族の中、鳥の一類を出して以て其の有託を言ふ、衆鳥は貧士以外の衆人を言ふ、劉履曰く、朝霞開霧は朝廷の更新（宋が晉に代る）に喩へ、衆鳥羣飛は諸臣の趨府に喩ふ、而して遲遲出林、未夕來歸は、則ち又自況、其の審時出處、衆と趣を異にするなり、量力は分際を自ら知るなり、守故轍、更新に趨らず、依然舊節を守る、豈不寒與饑、新に趨れば衣食は十分なり、故を守れば衣食は不十分なり、我は寧ろ其の不十分を取らん、知音苟不存、已矣何所悲、彼は節を守るの士、道に於て貧なる士にあらずと知る者は是れ知音なり、若し其の知音無きときは、其れ亦天運のみ、何の悲む所かあらん、平靡四支と五徵は古通用なり、鍾伯敬曰く、孤雲獨無依、妙なり、老杜の詩、孤雲亦羣游と、古人妙想窮まり無きこと此の如し、然れども獨の字、羣の字、語は則ち相翻へす若くにして機は實に相引く、温謙山曰く、孤雲を以て自ら比す、身分絕高、唯其れ孤雲たり、時に隨つて散見す、依託を事とせざる所以、此れ淵明が眞色相なり、

【題義】題するに貧士を以てすとも、單に貧なる士を言ふにあらず、貧にして淸なる士を言ふなり、彼に仕へ、此に事ふるは貧士にあらず、淸士にあらず、仕ふる主亡ぶれば自ら守り、此に事へず、事へざれば祿無し、祿無ければ其の人は貧なり、乃ち古の貧にして淸なる士を拉し來りて以て自況するが此の詩の旨なり、

【大意】貧士の狀態を感詠す、萬族卽ち萬物は相互に扶助して依託するも、一片の孤雲のみは全く依る所無し、忽ち空に生じ、忽ち空に滅す、日影の餘暉を受ける遑も無し、朝霞が燦として宿霧の消散

する時、衆鳥は一齊に飛び、遲遲として林中を出でて翔る、而して黃昏には復來歸す、貧士は自分の力を量れば、肯て新奇に趨らず、依然として故轍を守る、故轍を守るが故に、寒と飢とを免れざるなり、而かも知音が無きときは、そは天運なり、何の悲む所かあらん、

凄厲歲云暮。擁褐曝前軒。　凄厲歲云に暮る、褐を擁して前軒に曝す、
南圃無遺秀。枯條盈北園。　南圃遺秀無く、枯條北園に盈つ、
傾壺絕餘瀝。闚竈不見煙。　壺を傾けて餘瀝を絕つ、竈を闚ふに煙を見ず、
詩書塞座外。日昃不遑研。　詩書座外に塞がり、日昃研に遑あらず、
閒居非陳阨。竊有慍見言。　閒居陳阨にあらず、竊に慍見の言あり、
何以慰吾懷。賴古多此賢。　何を以て吾が懷を慰する、賴に古此の賢多し、

【注解】 凄厲は冬日の氣、褐は夏日の衣服、冬服にあらず、貧士なるが故に此の褐を著て前軒に曝し、以て暖を取るなり、而して南圃も北園も荒涼なり、南圃には秀でたる蔬菜は無く、北園には生きたる樹木は無し、家の外は此の如し、家の内は如何、壺中の酒は一滴も無し、竈戶の邊は炊煙を見ず、飲む物も、食ふ物も缺乏す、闚は竊覗なりと注して「コッソリ覗ル」なり、細君の不平察すべきなり、詩書塞座外、主翁は貧なりと雖も、詩書は座外に充塞する、日昃不遑研、昃は日が「カタムク」なり、詩書多く所有すれども、之を研究する遑が無きなり、陳阨は、昔孔子、楚の昭王の聘に應じ、將に往かんとす、陳蔡の大夫、徒を發して之を圍む、孔子は糧道を陳蔡の間に絕たる、之を陳蔡の厄と稱す、今我が閒居して食無きは孔子の其れとは異なるとなり、竊有慍見言、『論語』衞靈公篇に、陳に在りて糧を絕てり、從者病みて、能く興つ莫し、子路慍り見えて曰く、君子も亦窮することあるか、子曰く、君子は固窮す、小人窮すれば斯に濫す、とあり、慍見の語とは、この子路の言をさす、何以慰吾懷、吾が貧士の懷を慰安すべき道は無し、賴古多此賢、古人を以て我が師とし友とし、知己の感あり、古人を以て我を慰安する友と爲す、十三元と一先は古通韻なり、陳祚明曰く傾壺の句、貧の極、古より窮は自ら取る者にあらず、天なり、怨む可きなし、今茲の貧、應に悔多きに似たるべし、賴に古賢固より窮す復何なか慍みん、

【大意】 冬日も暮に垂んとす、而かも褐衣にて暖を前軒に取る、南圃には食ふべき蔬菜無く、北園も亦荒涼、壺中には酒一滴も無し、竈には煙を揚げず、詩書は多く所有すれども、研究の遑無し、貧なれば餘裕無きなり、孔子は昔陳蔡の厄に苦しみ玉うたが、我は閒居して然るなり、孔子の時には、子路が慍り見えて不平を言ひしが、今の我にも慍り見えて不平を言ふもの無きに非ず、如何にして我が懷を慰むべきか、唯前賢中にも我と同じき貧士あり、以て聊か慰むるに足る、

榮叟老帶索。欣然方彈琴。　榮叟老いて索を帶び、欣然として方に琴を彈ず、
原生納決履。清歌暢商音。　原生決履を納れ、清歌商音を暢ぶ、
重華去我久。貧士世相尋。　重華我を去ること久し、貧士世相尋ぬ、

敝襟不掩肘、藜羹常乏斟。　敝襟肘を掩はず、藜羹常に斟むに乏し、

豈忘襲輕裘、苟得非所欽。　豈輕裘を襲ふを忘れん、苟得は欽する所にあらず、

賜也徒能辯、乃不見吾心。　賜や徒に能く辯ず、乃ち吾が心を見ず、

【注解】 榮叟は前の飮酒詩の下に於て辯ぜり、原生は原憲なり、『莊子』に曰く、原憲、魯に居る、環堵の室、茨くに生艸を以てす、子貢往いて憲を見る、憲、縰履し杖藜して出づ、子貢曰く、嘻、先生、何ぞ病める、憲曰く、財無きを貧と謂ひ、學んで行ふ能はざる、之を病と謂ふ、憲は貧なり、病にはあらず、子貢慙づ、納決履は、穴のあきたる破れ履をはきたるをいふ、而かも悠然として淸歌し以て商音即ち金石の音を發暢して樂む、重華は舜帝の名、去我久、舜帝時代に生るるの希望はあるがそれは空想に過ぎず、幸にして貧士即ち榮子期や原憲は我も亦追隨すべき資格あり、敝襟不掩肘、肘は臂節なり、敝は破と同義、破れし襟袖は臂節を掩ふに至らず、衣服此の如し、食物は如何、藜羹の如き麁末のものですら乏斟なり、何ぞ旨しと感ずることあらん、『說苑』に、孔子、陳蔡に困み、七日、藜羹糝せずと、豈忘襲輕裘、輕裘は貴人の襲ける所の衣服、人間として、此の美好の物を忘るる道理無し、而かも苟得は吾が本志に背く、非所欽なる所以、得べき性質の物にあらずして之を得、之を苟得と言ふ、苟得は小人の事なり、君子の事にあらず、三代より下苟得の者多く、不苟得の者は少なし、先生は蓋し千古の一人、賜也、子貢の字は賜、徒能辯、貧病に就いて辯論を吐き、原憲が爲めに喝破せらる、乃不見吾心、原憲が形を見て、原憲が心を見ず、今の世の人、淵明が形を見て、淵明が心を見ず、乃至擧世皆然り、嘆ぜざるべけんや、下平聲十二侵の韻、溫陵山曰く、屢榮するに始終原憲を以て自況す、其の能く貧に安んずる所以のもの、惟だ苟得の念萌さざるのみ、世上縱ひ子貢多きも、安んぞ能く外至の紛華を以て、吾が不易の素志を變ぜんや、

【大意】 榮叟は索を帶にし、原生は決履を納るるの貧、而かも琴を彈じ、而かも淸歌す、重華即ち舜時代に我は生れざりしも、榮原二貧士に追隨する光榮あり、破れし襟は肘を掩はず、藜羹すら滿足に食はず、貧士と雖も人なり、輕裘を嫌ふにあらず、苟くも得るは欽幸と爲す所にあらず、賜也は徒らに貧病を論じて原生に喝破せらる、是れ原生が形を見て、原生が心を見る能はざるなり、

安貧守賤者、自古有黔婁。　貧に安んじ賤を守る者、古より黔婁あり、

好爵吾不榮、厚饋吾不酬。　好爵吾榮とせず、厚饋吾酬いず、

一旦壽命盡、敝服仍不周。　一旦壽命盡き、敝服すら仍周からず、

豈不知其極、非道故無憂。　豈其の極を知らざらん、道にあらざる故に憂なし、

從來將千載、未復見斯儔。　從來將に千載ならんとす、未だ復斯の儔を見ず、

朝與仁義生、夕死復何求。　朝に仁義と與に生る、夕死も復何をか求めん、

【注解】 安貧守賤者、自古有黔婁、劉向が『列女傳』に、魯の黔婁先生死す、曾子、之を哭して曰く、何を以て諡と爲さん、其の妻曰く、康を以て諡と爲さん、曾子曰く、先生が在時、食、口に充たず、衣、形を蓋はず、死しては則ち手足斂めず、何ぞ此を樂まん、而して諡するに康を以てす、其の妻曰く、昔先生、君嘗て之に政を授け、以て國相と爲さんと欲す、辭して受けず、是れ餘貴あるなり、君嘗て之に粟三十鍾を賜ふ、辭して受けず、是れ餘富あるなり、彼の先生は天下の卑位に安んじ、貧賤に戚戚たらず、富貴に忻忻たらず、仁を求めて仁を得、義を求めて義を得たり、其の諡して康と曰ふ、亦宜しからずや、乃ち此の如き人は、好爵即ち總理大臣、眼中に無し、厚饋即ち粟三十鍾、是れ亦眼中に無し、死して後も、斂服の體を覆ふ無きも、何の憂ふる所

かあらん、人間の纏度を知るの達人、庸人の纏度を知らざる者とは天地の相違あり、非道、受くるは道にあらず、是を以て受けず、故に愛は一毫も無し、從來將千載、黔婁先生後已に千載、而かも斯の如きの儔は嘗て見ず、多くは好爵を榮とし、厚饋を酬ゆるの人のみ、朝與仁義生、夕死復何求、貧なれば生に遠ざかり、死に近づくものなり、然りと雖も仁義の道を聞いて以て之を守る、夕死も愼むる所にあらず、復何の求むる所かあらん、陳祚明曰く、其の胸襟如、何義門曰く、死生、其の操を改めず、貧賤も道を以て得ざれば去らず、陶公誠に造次顛沛、必ず是に於てするものなり、下平聲十一尤の韻、

【注意】貧に安んじ賤を守り、而かも人格の高き、黔婁の如きは無し、好爵も何ぞ有らん、厚饋も何ぞ有らん、一旦死して、斂服の體を覆ふ無きも何の憂ふる所かあらん、道と衣服とは異なればなり、黔婁前に黔婁無く、黔婁後に亦黔婁無し、此の人仁義に生れ、仁義に死す、他に何ぞ復求むるものあらんや、

袁安困積雪、邈然不可干、　袁安積雪に困む、邈然干む可からず、
阮公見錢入、卽日棄其官、　阮公錢入を見、卽日其の官を棄つ、
芻藁有常溫、採莒足朝飡、　芻藁常溫あり、莒を採り朝飡足る、
豈不實辛苦、所懼非飢寒、　豈實辛苦ならざらん、懼るる所は飢寒にあらず、
貧富常交戰、道勝無戚顏、　貧富常に交戰ひ、道勝てば戚顏無し、
至德冠邦閭、清節映西關、　至德邦閭に冠たり、清節西關に映す、

【注解】袁安困積雪、困を一本門に作る、袁安は後漢汝南の人、字は邵公、章帝の時、河南の尹と爲る、在職十年、竣、慈愛を尙ぶ、官、司徒に至る、袁安未だ顯ならざる時、洛陽大雪、人多く出でて食を乞ふ、袁獨り僵臥して起きず、洛陽の令、見て之を賢なりとし、擧げて孝廉と爲す、不可干、袁が令に謂つて曰く、食を人に干む宜しからず、今其の語を用ふ、阮公見錢入、晉の阮修、字は宣子、清言に善し、常に百錢を以て杖頭に挂け、酒店に至れば便ち酣暢す、當世富貴と雖も、肯て顧みず、家に儋石の儲無きも晏如たり、年四十餘、未だ室あらず、王敦等、錢を斂めて婚を爲す、後、太子洗馬（官名）と爲る、見錢入は持參金の婚を言ふ、卽日に官を棄つ、眼中に官なぞは無し、酒錢を得るが爲めのみ、今や持參金の細君あり、酒を飮むに自由を缺かず、芻藁有常溫、ワラにも溫氣あり、何ぞ官を慕ふに足らん、採莒、莒は稆に作るべし、自生稻なり、『後漢書』獻紀に、尙書郎以下自ら出で稆を採ると、稆は穭と同じ、和名未詳、豈不實辛苦、常人の食ふ物より以下に至りては、命を支ふるに過ぎず、口欲を充たすなし、辛苦と云はざる可けんや、所懼非飢寒、君子より言へば飢寒も固より懼るべし、而かも其れ以上懼る可きものあり、何義門曰く、苟も富榮を求むるときは、身敗れ名辱しめらる、飢寒より甚しきものあり、故に貧賤に戚戚たらず、但恐る修名の立たざるを、貧富常交戰、貧なるときは身苦し、富なるときは名辱めらる、我が心と我が心と日に戰うて息まず、道勝無戚顏、而かも道に於て修養あるものは、辛苦を辛苦とせず、是を以て戚顏卽ち憂顏は無きなり、孔子の如き人は、其の尤も大なる人なり、袁安の如きは、孔子を學んで、亦能く得たる所の人なり、至德冠邦閭、至大の德、邦閭に冠絶す、清節映西關、袁安の如き人は、德も節も共に讚すべきものなし、溫謙山曰く、道勝無戚顏の一語、是れ陶公の眞實本領、千古聖賢の身處、窮困して泰然自得する者、皆、道勝を以てなり、回也屢空、此れ眞樂なる哉、上平聲十四寒の韻、

【大意】袁安は積雪に困むも、邈然と食を人に干むるを嫌ふ、阮公は眼中官も無く、榮も無し、唯酒

を好むを以て酒錢あれば足る、持參金の細君を得て忽ち官を罷め去る、芻藁でも温氣あり、稆の如きものでも朝飡に充分なり、此の如き麤布麤食は辛苦と言はざる可からず、口欲を滿足に常人はせざればなり、而かも飢や寒は懼るるに足らず、此以上懼るべきものあればなり、然れども貧は身苦し、富めば名辱しめらる、我と我心と日に戰うて息ます、而かも道に於て勝る者は曾て戚顏を爲さず、至德良に邦閭に冠たるもの、淸節亦永く西關に映ず、皆是れ袁安を稱揚しての語なり、

仲蔚愛窮居。遶宅生蒿蓬。　仲蔚窮居を愛し、宅を遶りて蒿蓬生ず、

翳然絕交游。賦詩頗能工。　翳然交游を絕ち、詩を賦し頗る能く工、

舉世無知者。止有一劉龔。　舉世知る者無し、止だ一劉龔あり、

此士胡獨然。寔由罕所同。　此の士胡ぞ獨り然る、寔に同じき所罕なるに由る、

介焉安其業。所樂非窮通。　介焉其の業に安んず、樂む所窮通にあらず、

人事固以拙。聊得長相從。　人事固に以て拙、聊か長く相從ふを得ん、

【注解】仲蔚は『高士傳』に、張仲蔚、扶風平陵の人、同郷魏景卿と倶に道德を修し、身を隱して仕へず、天官博物に明らか、善く文を屬し、詩賦を好む、常に窮素に居り、處る所蓬蒿人を沒す、門を閉ぢ性を養ひ、榮名を治せず、時人知る者無し、唯劉龔之を知る、翳然は隱然と同じ、劉龔は劉向の孫なり、此士は仲と劉の二高士を指す、由罕所同、世上に同調の者罕なり、多くは是れ俗人惡人奸人のみ、交遊せざる所以、介焉は介然と同じ、孤立なり、所樂非窮通『莊子』に、古の道を得る者は、窮も亦樂し、通も亦樂し、樂む所は窮通にあらず、人事固以拙、聊得長相從、人事は俗事、俗事に巧なるは凡人のみ、拙なるを以て君子なるを知る、仲蔚なり劉龔なりは皆拙なる人に屬す、而して我は其の拙なる人に長く相從はんとなり、溫謙山曰く、起語、一の愛字、貧士の人に異なるを見る、然れども貧士、人に異なるにあらず、人自から貧士に異なるのみ、沈歸愚曰く、陶公の人品は原憲の下に在らず、平原一東二冬は古通韻なり、

【大意】仲蔚は榮達を求めず、窮居を愛して處る、宅邊には蒿蓬の生ずるに一任す、翳然と隱れて交游を欲せず、詩頗る工なるも、一世此の人を知る者無し、劉龔一人を知音と爲す、何故に此の士のみ知音なるや、世上には同調の者罕なるも、此の二人は同調なればなり、介焉として二人其の業に安んじ、窮も樂みなり、通も亦樂みなり、窮通共に道を離れざればなり、人事卽ち俗事は固に以て拙、其の拙なる人に我は長く相從はんとなり、

昔有黃子廉。彈冠佐名州。　昔黃子廉あり、冠を彈じて名州に佐たり、

一朝辭吏歸。淸貧略難儔。　一朝吏を辭して歸る、淸貧略儔しき難し、

年饑感仁妻。泣涕向我流。　年饑ゑて仁妻に感じ、泣涕我に向つて流す、

丈夫雖有志。固爲兒女憂。　丈夫志ありと雖も、固より兒女の憂を爲す、
惠孫一晤歎。腆贈竟莫酬。　惠孫一晤歎、腆贈竟に酬ゆる莫し、
誰云固窮難。邈哉此前修。　誰か云ふ固窮は難しと、邈たる哉此の前修、

【注解】黄子廉は、湯東磵曰く、『黄蓋傳』に云ふ、南陽の太守黄子廉の後なり、黄蓋は三國の時、吳の臣とす、而して子廉は其の祖とすれば漢代の人なること分明なり、然れども事蹟明了ならず、『困學紀聞』に、『風俗通』を引きて曰く、潁川の黄子廉、馬に飲ふ每に輒ち錢を水に投すと、要するに淵明は其の人の清廉を稱するものなり、名州は南陽を指すならんか、辭吏歸、黄の事を言ふか、自身の事を言ふか分明ならず、黄にしても自身にしても同調なるときは妨げなきなり、年饑感仁妻、細君が家の貧を救ふ爲め、努力するを感じての言なり、泣涕向我流、貧の爲めには泣涕することあり、古今同一、丈夫雖有志、丈夫は節義の爲めとすれば、渴しても盜泉の水を飲まざる氣槪を有せざるべからず、又之を有するなり、如何せんや、兒女の爲め憂へざるべからず、惠孫の爲め圖らざるべからず、他人から腆贈卽ち厚き賜物あらば、又酬いざるべからず、此も人情、彼も人情なり、而して丈夫は節義の爲めとなれば、固窮を守らざる可からず、是を難と言はずして、將何を難しと言ふや、邈哉は邈遠なる哉、前修は黄子廉の如き前修者を指す、下平聲十一尤の韻、黄叔琳曰く、貧士多く古人を列れ、初首は今世の知音無きを歎じ、後六首は古人の同調あるを追ひ、層層、堪へ難きを說く、然して後、堅骨靜力を以て之に勝つ、安貧中勉强下手の工夫を道ひ出し、浪りに高話を說かず、故を以て雖能く深く入る、陸靜明曰く、兒女の憂、念を動かさざるにはあらず、然れども志は固より奪はれず、前修は師とすべし、

【大意】黄子廉は、所謂廉潔の士、始めて冠の塵を彈じて名州に佐たりと雖も、一朝罷めて歸り、吏たりし時賄なぞ受けざりし故清貧此の上無し、饑年に會し細君の貞操に感じ、泣涕我と我に向つて流す、丈夫は丈夫として別に志あり、而かも兒女の爲めに憂へざるべからず、惠孫の爲めにも圖らざるべからず、他人の腆贈にも酬いざるべからず、而かも不義にして富を謀るべからず、固窮に處するは嗚呼難し、邈たる哉黄の如き前修の人、

詠二疏

二疏を詠ず

大象轉四時。功成者自去。　大象四時轉じ、功成る者自ら去る、
借問衰周來。幾人得其趣。　借問す衰周來、幾人か其の趣を得たる、
游目漢廷中。二疏復此舉。　游目す漢廷の中、二疏復此の舉、
高嘯返舊居。長揖儲君傅。　高嘯舊居に返り、長揖す儲君の傅、
餞送傾皇朝。華軒盈道路。　餞送皇朝を傾け、華軒道路に盈つ、
離別情所悲。餘榮何足顧。　離別情悲む所、餘榮何ぞ顧みるに足らん、
事勝感行人。賢哉豈常譽。　事行人を感ずるに勝へたり、賢なるかな豈常譽ならんや、
厭厭閭里懽。所營非近務。　厭厭閭里懽ぶ、營む所近務にあらず、

促席延故老。揮觴道平素。　席を促して故老を延き、觴を揮つて平素を道ふ、
問金終寄心。清言曉未悟。　問金終に寄心、淸言未だ悟らざるを曉む、
放意樂餘年。遑恤身後慮。　意を放ちて餘年を樂む、身後の慮りを恤ふるに遑あらん、
誰云其人亡。久而道彌著。　誰か云ふ其の人亡しと、久しうして道彌著る、

【注解】二疏、揚東孫曰く、漢の『疏廣傳』に、廣、字は仲翁、太子太傅と爲る、兄の子受、太子少傅と爲る、位に在る五歲、廣、受に謂つて曰く、足ることを知れば辱められず、止まるを知れば殆からず、今、仕官、二千石に至る、名立つ此の如し、去らずんば懼らくは後悔あらん、豈父子相隨ひ關を出で、故鄕に歸老するに如かんや、亦善ならずや、卽日上疏して骸骨を乞ふ、宣帝、之を許す、公卿大夫、故人邑子、祖道を設け、東都の門外に供帳す、送る者車數百兩、觀者皆曰く、賢なる哉二大夫、廣、鄕里に歸る、日に酒食を具へ、故舊賓客、與に相娛樂す、大象は造化と同じ、自然の造化が春夏秋冬と運轉する、功成者自去、春は發生の功を遂げて去る、而して夏は長養、秋は收成、冬は安寧と、各自に功成れば去る、衰周は確實に定め難きも東周の平王以來は周德已に衰へしものなり、以來なれば春秋戰國より秦漢に至るまでを言ふ、幾人得其趣、功成つて去る人は幾人ありしぞ、漢は前漢の宣帝の時僅に二人の高擧を見るのみ、此擧は自去を指す、儲君は宣帝の太子、名は奭、後の元帝なり、其の師傅を辭して去る、元帝は年十二にて論語孝經に通ぜし人、廣兄弟が力を見るべし、傾皇朝、宮廷の人盡く餞送するなり、華軒、宮內官の車馬を云ふ、餘榮、此の如き餞送の盛なる、他人は餘榮とすべし、兄弟に於ては何足顧、そんな事は餘榮とせず、眼中に榮華なければなり、當人は之を感ぜざるも、行人は此の榮を觀て感に歎へざるなり、厭厭は上聲にて「エフ」の音とす、「エン」にあらず、人の服するなり、服するなり、閭里懽、鄕里の人は兄弟の德に服し居るを以て其の歸來を懽迎するなり、歸來以て營む所はあらんも、近務にあらざるを以て、先づ故老を招待して燕席を設く、道平素、平生の素志を互に相話す、問金終寄心、人が廣に勸むるに金を遺して子孫の爲めにせよと、廣の曰く、賢にして財多きときは其の志を損じ、愚にして財多きときは其の過を益すと、詩意是を謂ふ、此の淸言を以て、故老が未悟の心を道曉せしむるなり、放意樂餘年、遑恤身後慮、身後の慮を爲すときは、生前に必ず惡事を爲さざるべからず、惡事もせずして、子孫に財產を遺すなどは、到底出來得べからざるなり、是を以て稀論の聖人者は妻を求めず、妻あれば子が生る、子が生るれば、煩惱が之に移り、子孫の爲めに田地を泥棒するに至る、此の如き淸言を吐きし人は已に亡し、亡しと雖も其の淸言の道は久しくして彌よ顯著と爲る、去聲六御の韻、蘇東坡曰く、淵明未だ嘗て出でず、二疏は既に出でて返るを知る、其の志一なり、或ひと謂ふ既に出でて返る、病より愈ゆるを得るが如し、其の味、初より病まざるに勝る、此れは癡者顚倒の見のみ、

【題義】詠二疏は其の人の高潔なるを嘆じ、詠三良は其の人の忠義を嗟し、詠荊軻は其の人の堅志を稱するなり、

【大意】二疏を詠ずる詩、一氣にして貫成す、和譯の上に於て大意彰彰、屋上屋を架するの要無し、

詠三良

三良を詠ず

彈冠乘通津。但懼時我遺。　冠を彈じて通津に乘り、但懼る時我を遺すを、
服勤盡歲月。常恐功愈微。　勤に服して歲月を盡くし、常に恐る功愈よ微なるを、
中情謬獲露。遂爲君所私。　中情謬つて露るるを獲、遂に君の私する所と爲る、
出則陪文輿。入必侍丹帷。　出づれば則ち文輿に陪し、入つては必ず丹帷に侍す、

箴規嚮已從。計議初無虧。
一朝長逝後。願言同此歸。
厚恩固難忘。君命安可違。
臨穴罔惟疑。投義志攸希。
荆棘籠高墳。黄鳥聲正悲。
良人不可贖。泫然沾我衣。

箴規嚮に已に從はれ、計議初め虧くる無し、
一朝長逝の後、願うて言に此の歸を同じうす、
厚恩固に忘れ難し、君命安んぞ違ふ可けん、
穴に臨んで惟れ疑ふ罔し、義に投ず志の希ふ攸、
荆棘高墳を籠め、黄鳥聲正に悲し、
良人贖ふ可からず、泫然として我が衣を沾す、

【注解】三良は、子車氏が子、奄息、仲行、鍼虎なり、秦の穆公歿す、三良、之に殉ず、國人、黄鳥を賦し之を哀む、『詩經小雅』に、「交交タル黄鳥棘ニ止マル、誰カ穆公ニ從フ、子車奄息、維レ此ノ奄息、百夫ノ特、其ノ穴ニ臨ミ、惴惴其レ慄ク、彼ノ蒼タル者ハ天、如シ贖フベクンバ、人其ノ身ヲ百ニセン、」彈冠乘通津、但懼時我遺、温謙山曰く、古詩に、何不策高足、先據要路津、都合好くならんと願ふも、時と我と遺ふを如何せん、服勤盡歲月、常恐功愈微、通津に乘じた後は、勤勉以て其の功の微なるを恐るるのみ、中情謬獲露、遂爲君所私、君に殉ずるの志は有するも、君の方から之を私するは謬まれることを言ふ、文輿と丹帷は、穆公の乘車と其の住處なり、箴規は臣は君に殉ずる規定を言ふ、嚮已從、計議初無虧、規定ある以上は、計議して三人殉せざる可からざる事に至る、一朝長逝後、願言同此歸、君が長逝して、臣以て此の歸を同じうす、君は自然の死、臣は不自然の死、君たる者の暴、何ぞ言ふに勝へん、厚恩固難忘、君命安可違、君の恩は甚だ厚し、君の命も亦違ふべからず、投義と言はざるを得んや、今日來りて高墳を弔するに荆棘卽ちイバラ之を籠めて、啾啾たる鳥聲正に悲し、良人は卽ち善人、三士を指す、不可贖、此の如き人は復た得べからず、泫然たる雙涙、我が衣を沾すのみ、上平聲四支五微は古通韻なり、殷有翼曰く、秦の穆公、三良を以て殉葬し、詩人之を刺る、則ち穆公信に罪あり、然れども臣が君に事ふる、猶ほ子の父に事ふるが如し、陳章已魏顆の事を以て之を觀るに、三良亦譏り無きを容れず、昔の三良を詠ずる者、王仲宣、曹子建、陶淵明、柳子厚あり、或は曰く、心亦有所施、或は曰く、殺身誠獨難、或は曰く、君命安可違、或は曰く、死沒寧分張、曾て一語の其の非是を辨ずる者なし、惟だ東坡和陶に、魏顆眞孝愛、三良安足希、是の如き言を秦にするときは、三良、罪なき能はず、浦渾曰く、當時の人已に之を哀しむ、後世、三良を以て罪なりと爲す、我其の何の謂ひたるを知らず、詩人は宜しく其の悲みを悲みとすべきのみ、

【大意】奄息と仲行と鍼虎との三良を哀しむ詩なり、冠を彈じて通津に乘らんと欲するも、懼るることは時と我と遺ふを、通津に乘るを得たる後は、歲月を盡くしても功を立つるの微なるを又恐る、三良が中情は外に露る、而かも他は其の中情を愍まずして、其の君の爲めに殉せしむるに至る、出づるときは穆公の文輿に陪從し、入るときは必ず穆公の丹帷に侍坐す、君死する時は其の箴規の如く三子共に殉せざるを得ず、規則なれば如何ともすべからず、乃ち君が長逝したる時は、臣たる者同じく此の土中に歸せざるを得ず、已に君の恩を受く、然らば君の命何ぞ違ふ可けんや、穴に入るに臨んで聊かも狐疑する無し、義に投ずるは三人共に平常に希ふ攸なり、今日此の三良の墳前に來つて看れば、荆棘が叢生して墳を沒し、黄鳥は墳前に於て其の鳴くや悲し、而して此の三良は復得べからず、之を想うて我は泫然として泪衣を濕すなり、

詠荊軻

荊軻を詠ず

燕丹善養士。志在報强嬴。
燕丹善く士を養ふ、志强嬴に報ゆるに在り、

招集百夫良。歲暮得荊卿。
百夫の良を招集し、歲暮に荊卿を得、

君子死知己。提劍出燕京。
君子知己に死す、劍を提げて燕京を出づ、

素驥鳴廣陌。慷慨送我行。
素驥廣陌に鳴き、慷慨我が行を送る、

雄髮指危冠。猛氣衝長纓。
雄髮危冠を指し、猛氣長纓を衝く、

飮餞易水上。四座列羣英。
飮餞す易水の上、四座羣英列す、

漸離擊悲筑。宋意唱高聲。
漸離悲筑を擊ち、宋意高聲を唱ふ、

蕭蕭哀風逝。澹澹寒波生。
蕭蕭哀風逝き、澹澹寒波生す、

商音更流涕。羽奏壯士驚。
商音更に涕を流し、羽奏壯士驚く、

心知去不歸。且有後世名。
心知去つて歸らず、且後世の名あり、

登車何時顧。飛蓋入秦庭。
車に登り何れの時か顧みる、飛蓋秦庭に入る、

凌厲越萬里。逶迤過千城。
凌厲萬里を越え、逶迤千城を過ぐ、

圖窮事自至。豪主正怔營。
圖窮事自から至る、豪主正に怔營、

惜哉劍術疎。奇功遂不成。
惜い哉劍術疎、奇功遂に成らず、

其人雖已沒。千載有餘情。
其の人已に沒すと雖も、千載餘情あり、

【注解】燕丹、燕の太子、名は丹、秦に質と爲る、秦王冷遇す、丹怨んで亡げ歸る、秦王に報いんと欲する志止まず、天下の士を養ふは、以て强嬴卽ち天下第一の强秦を擊たんが爲めなり、人あり荊軻卽ち荊卿を勸む、丹厚く之を遇す、荊卿又丹の爲め死を以て之を許す、君子死知己、君子を之子に作る本あり、一匹夫の身を以て一國の太子の爲め上卿に拜せらる、知己と言はずして何ぞ、提劍出燕京、强秦に赴く時なり、素驥は白馬、廣陌は街上の廣場、荊卿が發足に臨み、之を送る者、皆、白衣冠を著く、雄髮指危冠、猛氣衝長纓、『史記』の文を擧げて注に代ふ、之を送る者、易水の上に至り、旣に祖す、高漸離、筑を擊つ、荊軻和して歌ふ、變徵の聲を爲す、士皆涙を垂れて涕泣す、又前んで歌つて曰く、風蕭蕭として易水寒し、壯子一去復た還らず、復た羽聲（怒音を羽聲と曰ふ）を爲して忼慨す、士皆目を瞋らし、髮盡く上りて冠を指す、是に於て荊軻、車に就いて去る、終に已に顧みず、商音は悲哀の音を發す、羽音は奮怒の音を發す、宋意は人の名、筑は竹を以て製す、箏に似て小、細項圓肩、頸箏に似て十三絃あり、飛蓋は車蓋を威勢よく飜せること、凌厲は奮迅無前の貌、逶迤は曲り遶るなり、萬里と千城、燕は今日の北京、秦は今日の陝西なれば支那里程としても容易ならず、圖窮、計圖ならず、竟に秦王の爲めに殺さるればなり、豪主は秦王なり、怔營、怔は恐懼の貌、軻、左手に秦王の袖を把り、右手に匕首を持して之を揕す、未だ身に至らず、秦王驚き、自ら引いて起つ、袖絕つ、劍を拔く、劍長し、其の室を操る、時に惶急、劍堅し、故に立ろに拔く能はず、荊軻、秦王を逐ふ、而して秦王の爲めに左股を斷たれ、且羣臣の爲めに殺さる、劍術疎、軻初め劍術を以て衞の元君に說くも元君用ひず、元君は軻が術に於て疎なるを知ればなり、魯句踐曰く、惜哉其不講於刺劍之術と、奇功の不成功に歸す、止むを得ざればなり、其人は荊軻、千載有餘情、戰國には奇士頗る多きも、軻の如きは其の壯烈刺客傳中第一

の人、太史公曰く、其の義成り、或は成らず、然れども其の立意皎然たり、其の志を欺かず、名、後世に垂る、豈妄ならんや、下平聲八庚の韻、朱文公曰く、淵明は詩人皆說いて平澹の人と、此の首の如きは其の豪放の本相を露出す、平澹底の人、如何ぞ此の如き詩を得ん、淸澤曰く、左太沖が荊軻飮燕市の詩と、千秋の下、以て軒輊を爭ふべし、

【大意】燕の太子丹が士を養ふ所以は、其の志、强嬴を殺さんと欲するに在るなり、武勇の士を多く招集して、最後に荊卿を得たり、荊卿は太子を以て己が知己と爲し、誓つて强嬴を刺殺せんと、乃ち劍を提げて燕京を出づ、白馬に跨つて以て廣陌に出づ、多くの壯士慷慨して以て其の行を送る、壯士皆怒髮冠を指し、猛氣長纓を衝く、荊卿を送りて易水の上に餞す、羣英星の如く列す、而して高漸離は悲筑を擊ち、歌を高聲に唱ふ、哀風は蕭蕭、寒波は澹澹たり、商音も羽奏も共に壯烈を極む、荊卿は決して歸るを欲せず、成るも成らざるも天命を期す、後世の名を奈何せん、竟に何等の顧慮する所無く、飛蓋して秦庭に入る、此の間萬里千城を經過す、秦庭に入り、刺さんと欲して、計圖空しく、反對に殺さるるに至る、秦王卽ち豪主は聊か怔れたりと雖も、荊卿は劍術に於て疎、遂に奇功成らず、其の人や已に沒して久しと雖も、其の壯烈を思へば、千載餘情あるなり、

讀山海經　十三首

山海經を讀む　十三首

孟夏草木長。遶屋樹扶疎。　孟夏草木長ず、屋を遶りて樹扶疎、
衆鳥欣有託。吾亦愛吾廬。　衆鳥託あるを欣び、吾も亦吾が廬を愛す、
既耕亦已種。時還讀我書。　既に畊し亦已に種う、時に還我が書を讀む、
窮巷隔深轍。頗廻故人車。　窮巷深轍を隔つ、頗る廻らす故人の車、
懽言酌春酒。摘我園中蔬。　懽言春酒を酌み、我が園中の蔬を摘む、
微雨從東來。好風與之俱。　微雨東より來り、好風之と倶なり、
汎覽周王傳。流觀山海圖。　汎覽す周王の傳、流觀す山海の圖、
俯仰終宇宙。不樂復何如。　俯仰宇宙を終ふ、樂まずんば復何如、

【注解】山海經は一部十八卷、晉の記室參軍郭璞の著とす、奇怪荒唐の記事多きも、地理を說くに於て頗る權威を有する書なり、孟夏は始夏卽ち四月なり、草木生長此の時を以て最とす、扶疎は樹木の繁茂する形容、衆鳥欣有託、吾亦愛吾廬、此の如き句は固に是れ天來の妙語、人間の語にあらず、扶疎たる樹林は鳥の依託する所、又吾の屋廬とする所、殺生は禁斷なり、俗事も亦禁斷なり、既耕亦已種、時季を誤らずして耕種し畢る、安心して以て我書を讀むを得、窮巷隔深轍、大路は車馬縱橫に往來するも、窮巷は小路なり、故に車轍の迹を隔つ、今日自動車を容れる處は窮巷にあらざること知るべし、頗廻故人車、故人が偶ま訪問して來れるのみ、廻は廻去にあらず廻來なり、懽言は二意あり、一は懽は獨懽なり、言は語辭、言談の言にあらず、又一說は懽言にて故人と共に懽談する、今暫く後說を取る、酌春酒、摘我園中蔬、上に我書とあり、此に我蔬とあり、我が所有の物にあらざれば、讀まず食はざるなり、微雨從東來、好風與之俱、雨は微雨にて豪雨にあらず、風は好風にて猛風にあらず、氣體共に可、而して周王傳と山海圖とな

或は汎覽し、或は流觀す、心眼にて熟視せず、肉眼にて略視する、是を汎覽流觀と言ふ、甚解を求めざるの主義なればなり、周の穆王が八駿の馬に乘つて、西王母と崑崙に遊びし事、山海經に出づればなり、俯仰終宇宙、不樂復何如、宇宙なるが故に俯仰と言ふ、意味は俯仰の間に人生は死歿するなり、此の短日月の間に於て、樂まざるときは何如するぞとなり、上平聲六魚の韻、溫譚山曰く、此篇是れ淵明偶ま得る所あり、自然に流出す、所謂斧鑿の痕を見ざるなり、大約、詩の妙、自然を以て造極と爲す、陶詩率れ自然に近し、而して此の首夏に人をして思議す可からざらしむ、神妙の極なり、

【大意】始夏に當りて草木も成長し、我が屋宅を圍繞する樹も亦繁茂す、鳥は得意に吾が依託する所あるを欣び、吾も亦吾廬の好きを愛す、畊し終れば亦種殖す、家に入つては我書を讀み、窮巷なれば貴人の車轍は容れざるも、時に故人の車を容るることあり、是に於て懽言して春酒を酌み、肴は我が園の蔬菜を以てす、微雨は東の方より來り、好風は之と俱に吹き來る、乃ち山海經を開きて、周王傳を汎覽し、又思ふ俯仰の間に宇宙を終ふ、樂まざるときは復何如するぞ、

玉臺凌霞秀。王母怡妙顏。　玉臺霞を淩いで秀づ、王母妙顏怡ぶ、

天地共俱生。不知幾何年。　天地と共俱に生じ、知らず幾何の年を、

靈化無窮已。館宇非一山。　靈化窮巳無く、館宇一山にあらず、

高酣發新謠。寧效俗中言。　高酣新謠發す、寧ろ俗中の言に效はんや、

【注解】玉臺は玉山なり、西王母の居る所、又、崑崙之邱と曰ふ、而して王母は離宮別館あり、專ら一山に住せず、穆王を瑤池の上に迎へて、王母、天子の爲めに歌ひ、王亦新謠を發するなり、王母と穆王と且歌ひ且詠ず、世の俗と相關せざるなり『穆天子傳』は、郭璞、注を著はす、凡そ六卷、晉の太康二年、汲郡の人不準、魏の襄王の冡を盜掘して始めて此の書を得と、專ら穆王が西行の事を記す、支那小說の最古とす、十三元と十四寒とは古通韻なり、

【大意】玉臺は秀麗なり、王母は妙顏なり、此の二者、天地と共に生れて、今に至る幾千年なるを知らず、靈化の窮巳無きを覺ゆ、而して王母の游所とする館宇は一山に限るにあらず、乃ち王母と共に謠ふ、此の謠や世俗の謠とは異なるなり、

迢遞槐江嶺。是謂元圃邱。　迢遞たり槐江の嶺、是を元圃の邱と謂ふ、

西南望崑墟。光氣難與儔。　西南に崑墟を望む、光氣與に儔しき難し、

亭亭明玕照。落落淸瑤流。　亭亭玕照明かに、落落瑤流淸し、

恨不及周穆。託乘一來遊。　恨むらくは周穆の、乘に託して一來遊するに及かざるを、

【注解】迢遞は縣邈長遠を言ふ、槐江嶺、『山海經』(卷二)に、三百二十里、曰槐江之山とあり、是謂元圃邱、槐江卽ち元圃、元圃卽ち槐江なり、縣圃音同じきも自ら別なり、西南に望見する山は崑墟、卽ち崑崙なり、光氣難與儔、崑崙山の秀色光氣、宇宙絕倫なり、亭亭は高き貌、玕は琅玕、玉の名、落落は合し難き形容、水流の平かならざるの山、瑤流は淸の統、恨以下の十字は二句一讀

法とす、周穆王の如く、八駿の馬に乘り以て一來遊するに及ばずとなり、崑崙の如き事實上の山を以て、他の空想的の山を潤色す、是を以て眞と假と混じたる一部小說なりと知るべし、陳祚明曰く、總て是れ盡世の志と、

【大意】槐江の嶺を越えて元圃の邱に登り、以て西南に崑墟を望めば、崑崙の光氣に比すべきものなし、亭亭たる玕照は明かに、落落たる瑤流は淸し、唯恨む我は周の穆王の如く、飛龍馬に乘じて來游する能はざるを、

丹木生何許、迺在峚山陽。　丹木何許に生ずる、廼ち峚山の陽に在り、
黃花復朱實、食之壽命長。　黃花復朱實、之を食へば壽命長し、
白玉凝素液、瑾瑜發奇光。　白玉素液を凝し、瑾瑜奇光を發す、
豈伊君子寶、見重我軒黃。　豈伊れ君子の寶ならんや、我が軒黃を重んずるを見よ、

【注解】丹木は赤莖黃華赤實にして味は飴の如しと、何許は何處と同じ、峚は音密なり、密に作る和本あり、誤なり、『山海經』に、峚山の上に丹木あり、之を食へば饑ゑず、丹水焉に出づと、白玉は卽ち玉石、素液卽ち素色の液液を凝結する、瑾瑜は玉の最善なるもの、君子寶、『山海經』二に、君子服之、以禦不祥、天地鬼神、是食是饗とあり、軒黃は黃帝有熊氏、名は軒なり、穆王を重んぜずして軒黃を重んず、公が心事、奇怪を好まず、正實を旨とすること知る可きなり、下平聲七陽の韻、陳祚明曰く、調甚だ高古、晉宋の實を愛するのみ、

【大意】丹木は峚山の陽に生じ、花色は黃にして果實は朱し、此の實を食へば壽命長く、而して白玉は素液を流し、瑾瑜は奇光を發す、此の如き寶は寶に相違なきも、俗人の寶にして君子の寶にあらず、君子の寶として重んずるは軒黃氏のみなり、

翩翩三靑鳥、毛色奇可憐。　翩翩たる三靑鳥、毛色奇可憐なり、
朝爲王母使、暮歸三危山。　朝に王母の使と爲り、暮に三危山に歸る、
我欲因此鳥、具向王母言。　我此の鳥に因り、具に王母に向つて言はんと欲す、
在世無所須、唯酒與長年。　世に在りて須つ所無し、唯酒と長年と、

【注解】翩翩は飛ぶ貌、『山海經』十二に、三靑鳥は一は大鶖、一は少鶖、一は靑鳥、今共に三靑鳥と言ふ、毛色奇可憐、可憐は俗語の「カハイラシイ」の意に當る、王母の使者と爲つて三危山に往來する、王母の居城より西二百五十里にして三危山あるなり、我は淵明自身を云ふ、此鳥に託因して王母に言はしむ、我は生前に於て須つもの一として無し、唯酒と長年とのみ願ふなり、三危山は、暴沅の說に依れば、甘肅の燉煌郡にして、王母は人の名にあらずして、國名なりと、淵明は蓋し牛面は神仙を以て之を見、普通人間として取扱はず、淵明のみならず、詩人は皆然るなり、下平聲一先の韻、溫謙山曰く、其の懸懷、隱して想見すべし、

【大意】文字の當面直ちに解し易し、大意を記するの要無し、

逍遙蕪皐上、杳然望扶木。　逍遙す蕪皐の上、杳然として扶木を望む、

洪柯百萬尋、森散覆暘谷。　洪柯百萬尋、森散として暘谷を覆ふ、

靈人侍丹池、朝朝爲日浴。　靈人丹池に侍し、朝朝日浴を爲す、

神景一登天、何幽不見燭。　神景一たび天に登る、何の幽か燭らされざらん、

【注解】蕪皐は無皐の誤寫、『山海經』に、無皐之山、東望榑木とあり、榑木は卽ち扶桑木なり、洪柯は扶桑木の洪大なる柯條、百萬尋は樹の高さを言ふ、森散は葉の繁茂、暘谷は扶桑木の下に在り、晴、之を暘と曰ふ、日の出づる處なり、靈人は神人、丹池は丹穴の山より出づる水、神人多く此の丹池に侍するなり、朝朝爲日浴、丹池卽ち咸池は日の浴する處、而して扶桑を拂ふ、是を晨明と言ふ、神景一登天、何幽不見燭、旣にして日影が天に中する時は、何如なる幽隱の處も、光燭せられざるは無し、四海盡く明なるなり、入聲一屋の韻、陳祚明曰く、長夜漫漫を如何ともする無きなり、

【大意】無皐の上に逍遙して、杳然として扶桑木を望む、其の扶桑の枝は百萬尋も高く、葉は繁茂して暘谷を覆ふ、多くの靈人は丹池に侍し、朝朝に日浴を爲す、旣にして日影、天に上る、如何なる幽處も盡く明處と爲る、

粲粲三珠樹、寄生赤水陰。　粲粲たる三珠樹、生を寄す赤水の陰、

亭亭凌風桂、八幹共成林。　亭亭風を凌ぐの桂、八幹共に林を成す、

靈鳳撫雲舞、神鸞調玉音。　靈鳳雲を撫して舞ひ、神鸞玉音を調す、

雖非世上寶、爰得王母心。　世上の寶にあらずと雖も、爰に王母が心を得たり、

【注解】粲粲は三珠樹が美麗にして光輝ある形容、此の三珠樹の寄生する處は赤水の陰と爲す、此の赤水は同じく理想郷と知るべし、赤水軍として吐蕃を距ぐ爲め甘肅の武威縣に置きしものとは全く別なりと知るべし、亭亭は高き貌、桂は桂樹、八幹共成林、僅かに八樹にして森森と林を成す、而して靈鳳は舞ひ、神鸞は歌ふ、雖非世上寶、爰得王母心、總て是れ普通人間界とは懸絕する者、然れども西王母の居處は此の如く極樂世界を現ずるなり、此の八幹の桂樹は番禺縣に在りと言ふは理想を以て現實化したる者なり、彼は彼、此は此として別論すべし、强ひて現實化するに及ばざるなり、下平聲十二侵の韻、陳祚明曰く、世上の寶は、安んぞ能く王母の心を得んや、

【大意】三珠樹は粲粲として赤水の陰に在り、八幹桂は亭亭として風を凌いで林を成し、而して靈鳳舞ひ、神鸞歌ふ、世上の寶にあらざるが故に、爰に王母の心を得るとなり、

自古皆有歿、何人得靈長。　古より皆歿あり、何人か靈長を得たる、

不死復不老、萬歲如平常。　死せず復老いず、萬歲平常の如し、

赤泉給我飲、員邱足我糧。　赤泉我が飲に給し、員邱我が糧足る、

方與三辰游。壽考豈渠央。　方に三辰と游ぶ、壽考豈渠央、

【注解】自古皆有沒は、普通人間に就いて言ふ、何人得靈長『山海經』に、不死の民、交脛國の東に在り、其の人、黒色、壽、死せずと、赤泉の文字は『山海經』には見えず、張華が『博物志』に、員邱山の上、不死樹あり、之を食へば乃ち壽と、赤泉あり、之を飲めば老いず、三辰は日月星の三なり、渠央は五十六十では央にも何にも問題にならざるなり、下平聲七陽の韻、陳祚明曰く、兀然として來る甚だ奇、

【大意】人間は古今皆死といふことあり、百年二百年靈長の者無し、然るに仙山は不死不老、萬歲も平常と同じ、赤泉の水は飲むべし、員邱の果實は食ふべし、方に日月星と游ぶ、壽命なぞ人間と比すべくもあらず、

夸父誕宏志。乃與日競走。　夸父誕宏の志、乃ち日と競走す、
俱至虞淵下。似若無勝負。　俱に虞淵の下に至り、勝負無きが若きに似たり、
神力既殊妙。傾河焉足有。　神力既に殊妙、河を傾け焉んぞ有するに足らん、
餘迹寄鄧林。功竟在身後。　餘迹鄧林に寄す、功竟に身後に在り、

【注解】夸父は上古の人名とも、或は神獸とも曰ふ、『山海經』五に、夸父、力を量らず、日影を逐はんと欲し、之に禺谷即ち虞淵に逮ぶ、渴して飲を得んと欲して、河渭に飲む、河渭不足なり、北して大澤に飲む、未だ至らず道にして渴し死す、其の杖を棄つ、化して鄧林と爲る、誕宏志は俗語の「無法ノ志」なり、日景と競走して、竟に勝負無し、唯鄧林を現出したる功のみ、身後に存すと爲す、此の詩、劉裕を以て夸父に喩へ、以て之を笑ふものなりと、上聲二十五有の韻、何義門曰く、妙、其の詞を龍にして以て之を寄するに在り、後人、此の妙を窺はざるなり、陶澍曰く、此れ宋武（劉裕）を笑ふ、事に垂んとして事を舉げ、急に禪代を圖る、而して志厭く無からんと欲す、其の枝績を究むるに、給す所一隅の勝に過ぎざるのみ、

【大意】夸父が無法の志を發し、日と競走せんと欲し、日と共に走りて虞淵に至る、同時に至るを以て勝負は無きが如きも、夸父は神力殊妙なるも、河水を飲まんと欲し、能はず、渴死す、其の餘跡は鄧林と爲りて保存せらるるを以て、功は竟に身後に在りとなり、

精衛銜微木。將以塡滄海。　精衛微木を銜み、將に以て滄海を塡めんとす、
刑天舞干戚。猛志固常在。　刑天干戚を舞はし、猛志固に常に在り、
同物既無慮。化去不復悔。　同物既に慮無し、化し去つて復悔いず、
徒設在昔心。良晨詎可待。　徒に在昔の心を設け、良晨詎ぞ待つ可けん、

【注解】精衛、『山海經』二に、精衛は炎帝の少女、名を女娃と曰ふ、東海に遊ぶ、溺れて反らず、故に精衛と爲る、常に西山の木石を銜み、以て東海を塡む、刑天は首無し、手に干戚を操つて舞ふ、乳房を目と爲し、臍を以て口と爲す、神を爭うて勝たず、帝の爲

めに戮せらる、帝、其の首を斷り、之を常羊の山に葬る、干戚は武樂の具、今の盾斧なり、『禮』に干戚之舞とあり、刑天舞干戚を、刑天無千歲に作る本あり、義理は如何にも附會すべし、『山海經』と關係有る無し、余は刑天の句を可とす、上壓十賄の韻、

【大意】精衞は口に微木を銜み、以て滄海を塡塞せんとし、刑天は手に干戚を舞はし、神を爭ふ猛氣は常に所有す、物同じければ異慮の筈なし、形が化するも復悔いず、我は徒に在昔の猛氣を失はざるも、良晨は詎ぞ待つべけんや、良晨の來る筈は無し、

巨猾肆威暴。欽䲹違帝旨。　巨猾威暴を肆にし、欽䲹帝旨に違ふ、
窫窳強能變。祖江遂獨死。　窫窳強能く變じ、祖江遂に獨死す、
明明上天鑒。爲惡不可履。　明明上天鑒み、惡を爲す履む可からず、
長枯固已劇。鵕鶚豈足恃。　長枯固に已に劇し、鵕鶚豈恃むに足らん、

【注解】巨猾、鍾山の神、其の子を鼓と曰ふ、其の鼓を指して巨猾と言ふ、威暴を肆にして、欽䲹なる者と共に帝命を奉ぜず、欽䲹は人面龍身、鼓と欽䲹と共同して祖江を殺す、帝乃ち祖江の爲めに此の鼓と欽䲹の二怪を戮す、窫窳なる龍首の怪物も、弱水の中に居りしが、貳負臣の爲めに殺さる、此の三、卽ち鼓と欽䲹と窫窳と共に化して大鶚と爲る、互に殺し、又殺さる、其の是非は上天が明明に照鑒して見るる所なし、是を以て惡は履行すべからず、長枯は盛衰と字を代へて見よ、盛衰は劇しきなり、朝に暮を待たざるなり、鵕は「ヤマドリ」と爲すも、今此の鵕鶚は普通の解釋を以てすべからず、李善曰く、此の篇、宋武弑逆の爲めに作る、『山海經』を借り以て時事を諷ぜしもの、眞詩人たる者は宜しく此の手段を講ぜざるべからず、上壓四紙の韻、

【大意】巨猾は威暴を肆にし、欽䲹は帝命を奉せず、窫窳も强者なれど强乃ち變じ、祖江に於て遂に獨り死す、此の三者皆上天の理に合はず、明明たる上天は此等の惡人を何ぞ鑒照せざるあらん、故に善を爲す者は此等の轍を履むべからず、長枯卽ち盛衰は良に劇し、鵕鶚の强も豈恃むに足らんや、

鵃鵝見城邑。其國有放士。　鵃鵝城邑に見はる、其の國放士あり、
念彼懷王世。當時數來止。　念ふ彼の懷王の世、當時數來止す、
青邱有奇鳥。自言獨見爾。　靑邱奇鳥あり、自ら言ふ獨り見はるる爾、
本爲迷者生。不以喩君子。　本迷者の爲めに生ず、以て君子に喩へず、

【注解】鵃鵝は惡鳥なり、形は鳥、手は人、此の怪鳥が城邑の中に見はる、放士は君の爲め放逐せられたる人、楚の屈原は卽ち放士なり、念彼懷王世、楚の懷王は天下の暗君、忠臣を放逐して知らぬ顏の半兵衞なり、當時「ソノトキ」懷王の世に此の惡鳥が數來止したるなり、然るに柜山には此の惡鳥が棲むが、靑邱には奇鳥實は善鳥が棲むなり、自言獨見爾、我は我で單獨に出現する、鵃鵝とは何等の關係無し、本爲迷者生、不以喩君子、惡鳥も善鳥も其の本を質せば、卽ち懷王の如き迷者が有るに依つて出現したるのみ、迷者無きときは、奇鳥も怪鳥も出現するの要無きなり、善鳥は君子に喩ふる者もあらんが、我は喩へざるなり、上壓四紙の韻、結句の意義解し得て此の如きも、別に深意あらば、願くは其の說を聞かん、溫謙山曰く、此の首、意頗る解し難し、陳祚明評して云云、

亦未だ甞だ了然たらず、

【大意】鴟鴞と曰ふ惡鳥が城邑の中に現る、其の國に用ひられざる士あり、乃ち念ふ楚の懷王の世、此の惡鳥數來ると、然るに靑邱には奇鳥あり、奇鳥自から言ふ、我は單獨に見はるるのみ、惡鳥も奇鳥も迷者卽ち暗君の爲めに生る、此の奇鳥も以て君子には喩へざるなり、

巖巖顯朝市。帝者愼用才。　巖巖朝市に顯はる、帝者愼んで才を用ふ、
何以廢共鯀。重華爲之來。　何を以て共鯀を廢する、重華之が爲めに來る、
仲文獻誠言。姜公乃見猜。　仲文誠言を獻す、姜公乃ち猜せらる、
臨沒告飢渴。當復何及哉。　沒するに臨んで飢渴を告ぐ、當に復何ぞ及ぶべけんや、

【注解】巖巖は堂堂と意義同じ、顯朝市、一國の政權を把握する意ならん、堂堂たる宰臣を指す、帝者は一國の主權者、主權者は人を用ふる宜しく其の才に應じて登用すべきなり、何以廢共鯀、鯀は堯より舜に至る九年間、水を治めしむるも績揚がらず、舜は乃ち共工を流し、鯀を殛す、重華は舜の名、堯は鯀が天下を治める才あらば、之を用ふべきも、鯀に其の才無し、是を以て重華をして天下を取らしめしなり、仲文は仲父と同じ、齊の管仲、字は仲文なり、獻誠言、桓公を相けて覇業を成せし人、姜公は桓公を指す、是れ支那人の禮式として陶桓公の祖を避け姜と爲したるなり、見猜、管仲が力に依つて齊は財を積み、兵は强し、是を以て四鄰の小國より猜心を以て見らるるなり、臨沒告飢渴、當復何及哉、此の二語は、重華や仲文や姜公には何等の關係なし、又『山海經』とも關係なし、盜人を見て始めて綱を結ぶ如きは何等の誤も無しとの意、黃文煥曰く、當復何及の一語、大聲疾發、蓋し皆室由る所、式微の故に、恨を此に寄せ、後人をして尋繹して引援を知らしむ、實に以て慨世、異聞に侈るにあらず、上平聲十灰の韻、溫謙山曰く、首章、俯仰宇宙の四字を揭明して一切を包括し、下十二章、俱に此より出づ、神仙荒怪の論を借り、以て其の悲憤不平の慨を發す、此れ其の大較なり、然して『山海經』に就いて言ふ、事、荒渺無稽に涉ると雖も、余謂ふ天地有れば便ち鬼神有り、鬼神有れば便ち事物有り、宇宙間、何の有らざる所あらん、唯見ざるのみ、然らば則ち上下古今、山海の一經、豈盡く荒唐の說ならんや、淸潭曰く十三首盡く郭璞が遊仙詩より脫化し來り、而して別に新想あるなり、

【大意】巖巖たる英雄が朝市の中に顯る、帝者は愼んで以て其の才を用ふべきなり、昔、堯帝は何を以て共鯀を廢せしぞ、其理は共鯀は無才にして重華は雄才なれば、鯀に代ふるに重華を以てしたるなり、是より後、齊の管仲文は誠言を獻じて以て姜公の輔翼と爲り、姜公は爲めに鄰國より猜せらるるに至る、人は沒せんと欲するに臨み飢渴を告ぐるも、當に復何ぞ及ぶべけんや、

挽歌詩

挽歌詩

有生必有死。早終非命促。　生あれば必ず死あり、早終命の促すにあらず、
昨暮同爲人。今旦在鬼錄。　昨暮同じく人爲り、今旦鬼錄に在り、
魂氣散何之。枯形寄空木。　魂氣散じて何くに之く、枯形空木に寄す、

嬌兒索父啼。良友撫我哭。　嬌兒父を索めて啼き、良友我を撫して哭す、

得失不復知。是非安能覺。　得失復知らず、是非安んぞ能く覺らん、

千秋萬歲後。誰知榮與辱。　千秋萬歲の後、誰か榮と辱とを知らん、

但恨在世時。飲酒不得足。　但恨む在世の時、飲酒足るを得ざるを、

【注解】挽歌は、紼を執る者、相和する聲、挽は輓に同じ、何人を哭しての作なるかは知る能はず、然れども自挽と見るを至當とす、一本、挽の上に擬字あり、無きを以て可とす、有生以下讀み易し、鬼錄は過去帳、魏の文帝故人の名を記して鬼錄と題したるを嚆矢とす、枯形寄空木、如何なる狀態を言ふなるや分明ならざるも、遺骸は棺中に寄託すとの意味なり、嬌兒は俗語の腕白小僧なり、撫我哭、我が遺骸を撫して哭す、得失も是非も榮も辱も、總て知覺無きなり、但恨在世時、飲酒不得足、一面は非常に佳謔の如きも、一面は非常に悲慨を含む、入聲一屋の韻、陳祚明曰く、理を言ふ極盡す、故に哀を言ふ極深、淸譚曰く、晉代の詩、淵明の如く生死に就いて一種の考を持するものは少し、晉代の作家、陸機、陸雲、潘岳、張協、左思、劉琨、郭璞、盧諶、袁宏、數十家を降らずと雖も、生死に就いての感想はゼロと謂つて可なり、獨り淵明ありて玄理を想像せる者の如し、然り而して白蓮の社に入らざるは何ぞや、淨土思想は淵明と全く思想を異にすればなり、惠遠は一代の淸僧なりと雖も、其の思想は未來往生に在り、淵明は現在主義の人にて、現世已に國の不幸を見、之に殉する能はず、未來何ぞ淨土に往生して身を安樂に處せんと欲する念あらんや、蓮社に入らざる所以は極めて心地明明たり、佛敎史家、淵明の廬山に入らざるを論じて云云、皆淵明を知るものにあらず、淵明が淨土思想を喜ばざる見地は、宗敎に於ても卓識の人と謂ふ可きなり、

【題義】挽歌の題は、漢武帝より起る、多くは人を哭する詩、然るに靖節は人を哭するにあらず、自身を哭する詩を作る、後世自挽の詩を作る者は、皆靖節を祖とするものなり、

【大意】表面は人を弔ふ詩、裏面は自らを弔ふ詩、生有る者は必ず死有り、早死する者は天命の促すものにあらずや、昨日は人間の戶籍に在る人、今日は已に過去帳の人なり、魂氣の之く所を知らず、殘骸は空しく棺中に在り、遺兒は父を索めて啼き、良友は屍を撫して哭す、死人は得失に於て復知ること無し、何ぞ是非を分別せんや、千秋萬歲の後、誰か榮と辱とを知らんや、但恨むらくは生前に於て、十分に酒を飲むを得ざりしことを、

在昔無酒飲。今但湛空觴。　在昔酒の飲む無く、今但空觴湛たり、

春醪生浮蟻。何時更能嘗。　春醪浮蟻生じ、何の時か更に能く嘗めん、

殽案盈我前。親舊哭我傍。　殽案我が前に盈ち、親舊我が傍に哭す、

欲語口無音。欲視眼無光。　語らんと欲するも口音無く、視んと欲するも眼光無し、

昔在高堂寢。今宿荒艸鄉。　昔高堂に在つて寢ね、今荒艸の鄉に宿す、

相送出門去。歸來夜未央。　相送りて門を出でて去る、歸來夜未だ央ならず、

【注解】在昔は生前を言ふ、今但は棺前の狀を言ふ、湛は浸なり、『禮』に湛諸美酒とあり、空觴、觴に酒は湛として在るが飲む

こと能はざれば空ならずや、醪は汁滓酒なり、浮蟻は酒滓の浮き上る者、「登協傳」に、浮蟻星沸とあり、「登衡賦」に、浮蟻若レ萍とあり、此の新酒の醗發する天の甘露の如きものならん、而かも嘗むること能はず、而かも佳殽は我が棺前に盈つ、親戚や故舊は我が遺骸の傍に哭泣す、欲語以下十字、滑調に似て決して滑調にあらず、悲愴の極なり、文章にての數百言、乃ち詩十字にして足る、生前高堂、死後荊郊、相送、葬を墓田に送る、歸來は送る者、夜未央、「毛詩疏」に、未央、前限未レ到之辭、故漢有二未央宮一、猶ほ前の長きを言ふ辭なり、下平聲七陽の韻、陳祚明曰く、起即ち上章を承け、下、致を作すあり、春醪の句佳、欲語の二句奇創、語を出す、古より此を言ふ者無し、清潭曰く、唐の寒山は、此等の詩を善學して以て一宗を開きしものなり、王孟韋柳の四大家は、此等の處に於て開卻す、時代思潮の實際が異なればなり、

【大意】生前は好む所の酒を滿足に飮む能はず、今は棺前に供へて有るも空觴も同然なり、春醪が浮蟻を生ずる美酒新酒も、死後は決して嘗むる能はず、殽は棺前に盈ち、人は棺前に哭するも、我は一語も發する能はず、視んと欲するも眼光已に無し、昔は高堂上に寢ぬるも、今は荒艸の郷に宿す、棺を送るの人門を出でて去る、而して夜半に至らずして歸來す、

荒艸何茫茫。白楊亦蕭蕭。　荒艸何ぞ茫茫たる、白楊亦蕭蕭たり、

嚴霜九月中。送我出遠郊。　嚴霜九月の中、我を送りて遠郊に出づ、

四面無人居。高墳正嶕嶢。　四面人の居る無く、高墳正に嶕嶢、

馬爲仰天鳴。風爲自蕭條。　馬爲めに天を仰いで鳴き、風爲めに自ら蕭條、

幽室一已閉。千年不復朝。　幽室一たび已に閉ぢ、千年復朝せず、

千年不復朝。賢達將奈何。　千年復朝せず、賢達將に奈何せんとする、

向來相送人。各自還其家。　向來相送る人、各自其の家に還る、

親戚或餘悲。他人亦已歌。　親戚或は餘悲、他人亦巳に歌ふ、

死去何所道。託體同山阿。　死し去つて何の道ふ所ぞ、體を託す同山阿、

【注解】荒艸、古詩に四顧何茫茫とあり、白楊、古詩に白楊何蕭蕭とあり、送我、我が棺を送るなり、郊、邑外を郊と曰ふ、墓林は何れの國を論ぜず、盡く郊外なり、四面無人、嶕嶢は墓石の高き形容、馬も悲哀を知り嘶き鳴く、風も亦悲悽の音を發して蕭條、幽室は墓穴を言ふ、棺を埋卻し去る、一度埋卻し去るや、千年も萬年も復朝すること無し、一句を疊用、力極まり無し、賢者も達人も此に至り、亦奈何ともする無し、向來は「サキニ」なり、相送人、會葬者を言ふ、各自還其家、死者を埋卻して後は、生者は各自に家に還る、親戚或餘悲、狙愾談なぞして涙を流す者もあり、他人も亦弔歌し去る、死去何所道、託體同山阿、人は死して灰と爲る、灰死して土と爲る、所謂賢達も皆同山阿ならずや、蕭蕭より復朝に至る十一句、下平聲二蕭の韻、奈何より山阿に至る七句、下平聲五歌の韻、陳祚明曰く、一氣劉灌、十九首より外、漢人に在つて亦多く得ず、哀響の中、發するに壯調を以てす、然れども彌よ壯、彌よ哀し、親戚の十字、十九首にあらずんば、安んぞ此の名句を得ん、温謙山曰く、晉人、清虛を墓び、曠達を尙ぶ、諧所、輓歌詞を爲る、皆其の一時の習尙然らしむ、然れども悉く閑暇宴遊を撰び、相率ゐて放誕の舉を爲す、靖節の如き、屬纊の時に於て、猶能く此の達語を作る、生平定力定識有るにあらずんば、烏んぞ能く此を得ん、清潭曰く、此篇全く古詩十九首中の、驅車上東門、遙望郭

北慕の篇（十八句）を學ぶもの、故に淵明が此の詩を讀む者は、必ず古詩を讀むべし、古人の文字を用ふと雖も、我が神より之を運用する公が力を知るべきなり、

【大意】此の章の意、文字の當面信に明白なり、別に記錄の要無し、

聯句

鳴雁乘風飛。去去當何極。
念彼窮居士。如何不歎息。（淵明）
雖欲騰九萬。扶搖竟何力。
遠招王子喬。雲駕庶可飭。（愔之）
顧侶正徘徊。離離翔天側。
霜露豈不切。務從忘愛翼。（循之）
高柯濯條幹。遠眺同天色。
思絕慶未看。徒使生迷惑。（淵明）

聯句

鳴雁風に乘じて飛ぶ、去去當に何を極むべき、
念ふ彼の窮居士、如何ぞ歎息せざらん、
九萬に騰らんと欲すと雖も、扶搖竟に何の力ぞ、
遠く王子喬を招き、雲駕庶はくは飭るべし、
侶を顧みて正に徘徊、離離天側に翔る、
霜露豈切ならざらん、務めて忘愛の翼に從ふ、
高柯條幹を濯ひ、遠眺天色同じ、
思絕慶未だ看ず、徒に迷惑を生せしむ、

【注解】聯句は漢武の柏梁臺に始まる、七言にして二十五人が一人一句づつなり、魏を經て晉に來り、七言を五言として變ず、兩して今、淵明と愔之と循之の三人にて、一人四句づつ賦す、唯初めより韻を異にせず、此の點のみ柏梁の法を存す、然れども愔之と循之とは傳の全く無き人、或は淵明が假託しての人ならんとも思へるなり、何極は何處まで飛び去らんとするぞと問ふ、窮居士は淵明自身を言ふ、自身を稱して彼と言ふ、他人を指すが如くにする詩寓なり、不歎息、已に冬ならんとして雁が來る、氣候の變に就いて特に歎息する、雖欲騰九萬、扶搖竟何力、人の徒らに大志を抱くも、竟に何の詮も無きことを言ふ、『莊子』に、鵬の南冥に徙るや、水に擊つこと三千里、扶搖を摶つて上るもの九萬里と、遠招王子喬、雲駕庶可飭、王子喬は王喬とも曰ふ、東漢の人、明帝の時、尙書郞と爲る、其の朝に來る、車騎を見ず、帝怪しみ、太史をして之を伺はしむ、或る時雙鳧飛び來る、羅張して之を取れば、一舄「クツ」を得、乃ち賜ふ所の舄なり、九萬里に上るは望む所にあらざるも、王喬の如きは或は雲中の飾りと爲りて面白し、是れは稍や望む所なりとなり、顧侶正徘徊、離離翔天側、是れ鳴雁に掛る、雁は侶を愛すること他鳥に勝る、天側卽ち天中を飛翔するにも侶を顧するを忘れず、以て人間の友情、此の如くなりと比す、霜露豈不切、務從忘愛翼、務從の句、一本に徒愛雙飛翼に作る、雙飛翼の句を以て意義を爲すものの如し、要するに意義明了ならず、高柯以下の意義も亦明了を闕く、温謙山の集評、此の聯句に繼ぐに「歸去來辭」、「五柳先生傳」、「讀史述九章」を以てして卷四と爲す、陶澍の靖節先生集は、前に出だせる「歸田園居」、「問來使」、「四時」の三章を聯句の次ぎに出して以て卷四終りとす、澍本に依つて前後したること此の四章のみ、他は悉く澍本に從うて錄す、

【大意】鳴雁が風に乘じて飛來す、此の飛去は何の極處まで至るや、此の雁の無限に飛ぶを見て彼の窮居士の憫むべき狀を念ふ、之を念へば何ぞ歎息せざらん、居士の志は九萬里の遠きに騰らんと欲すと雖も、扶搖も竟に何の力も無し、遠く王子喬を招致して、雲駕庶くは飭る可し、鳴雁は侶を顧みて徘徊し、離離として天側を翔る、秋天なれば霜露正に切なり、務めて雙飛翼に從すべし、高柯條幹を濯ふ、遠眺すれば天色は同じ、思絕慶未だ看ず、徒に迷惑を生せしむとなり、

陶淵明集卷四終

陶淵明集 卷五

感士不遇賦 并序　　士の不遇を感ずる賦 并に序

昔董仲舒作士不遇賦。司馬子長又爲之。余嘗以三餘之日。講習之暇。讀其文。慨然惆悵。夫履信思順。生人之善行。抱朴守靜。君子之篤素。自眞風告逝。大僞斯興。閭閻懈廉退之節。市朝驅易進之心。懷正志道之士。或潛玉於當年。潔己淸操之人。或歿世以徒勤。故夷皓有安歸之歎。三閭發已矣之哀。悲夫寓形百年。而瞬息已盡。立行之難。而一城莫賞。此古人所以染翰慷慨。屢伸而不能已者也。夫導達意氣。其惟文乎。撫卷躊躇。遂感而賦之。

昔董仲舒、士不遇の賦を作る、司馬子長又之を爲る、余嘗て三餘の日、講習の暇を以て、其の文を讀み、慨然惆悵す、夫れ信を履み順を思ふは、生人の善行なり、朴を抱き靜を守るは、君子の篤素なり、眞風逝くを告げしより、大僞斯に興り、閭閻廉退の節を懈り、市朝易進の心を

驕る、正を懷ひ道に志すの士、或は玉を當年に潛め、己を潔くし操を淸うするの人、或は世を歿するまで以て徒に勤む、故に夷皓は安歸の歎あり、三閭は巳矣の哀を發す、悲夫、形を寓する百年、而かも瞬息已に盡き、行を立つるの難き、而も一城賞する莫し、此古人翰を染め慷慨し、屢ば伸べて已む能はざる所以の者なり、夫の意氣を導達するは、其れ惟文か、卷を撫して躊躇し、遂に感じて之を賦す、

【注解】賦は詩の變體なり、秦の荀卿に始まり、楚の宋玉に至り、之を中天に揭げ、而して漢、而して魏と益す盛隆と爲る、董仲舒は漢の廣川の人、武帝の時、江都の相と爲り、後、膠西王の相と爲る、士不遇賦、四百十二字、悲憤を極む、司馬子長は漢蜀郡成都の人、長卿、相如同一人なり、三餘、冬は歲の餘、夜は日の餘、陰雨は晴の餘、信は僞の反、順は逆の反、生人は人生の倒用、朴は飾の反、靜は躁の反、篤素は君子と稱せらるる所以の定義なり、眞風は聖人の正道、大僞斯興、正道廢けば邪道興るは是れ亦當然なり、閭閻は『漢書』に閭閻且千とあり、里中門なり、後、民間を通稱す、淸廉謙退の節を懈るなり、市朝は閭閻の字に對して曰ふ、彼も此も民衆の代名詞と心得べし、容易進退の心を增長する、玉は美質、正しき人は出でざるを曰ふ、以徒勤、個人を淸潔に生活するのみ、世間より何の優待も受けず、夷皓は伯夷と四皓を曰ふ、伯夷は曰く、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣と、四皓は曰く、唐虞世遠、吾將安歸、三閭は、楚の屈原は曰く、巳矣哉國無人、莫我知兮、又何懷乎故都と、伯夷も叔齊も屈原も皆是れ徒勤の人なりしなり、寓形百年、百年は長しと言ふは、五十年に比較すればなり、瞬息に過ぎ、電光石火に似たるものあり、一城莫賞、一城を與へて以て賞と爲すとの意にあらず、一城中の人が賞すること無きなり、染翰は文章の成るを曰ふ、伸は慷慨の意を伸べるなり、

【大意】漢の董仲舒と司馬子長、共に士不遇の賦を爲る、淵明、三餘を以て其の文を讀み、慨然惆悵

として以爲らく、信と順とを履思する者は人生の善行にして、朴と靜とを抱守する者は君子の篤素なりと、而かも眞の聖人の風化が行はれざるに及んで、大僞が興り、在野の人は廉退の節を懈り、在朝の人は易進の心を驅り、懷正志道の士は、僞を抱く人なぞと游ぶ能はず、是の故に玉卽ち美質を當年に潛む、又潔己淸操の人、死に抵るまで徒らに精勤す、伯夷も四皓も、安くに歸るの歎を發せざるを得ず、屈原は巳矣の哀を發せざるを得ず、悲しい夫人の壽は百年限度なり、其の百年も亦瞬息に盡く、行を立つるの難き士、天下皆之を優待せざるべからず、而かも一城中の者誰も賞する者莫し、此れ古人の文章を爲り慷慨し、屢ば伸べて已む能はざる所以のものなり、文章にあらずんば意氣を導達する能はず、卷を撫して躊躇し、遂に感じて之を賦す、

咨大塊之受氣。何斯人之獨靈。稟神智以藏照。秉三五而垂名。或擊壤以自懽。或大濟於蒼生。靡潛躍之非分。常傲然以稱情。世流浪而遂徂。物羣分以相形。密網裁而魚駭。宏羅制而鳥驚。彼達人之善覺。乃逃祿而歸畊。山嶷嶷而懷影。川汪汪而藏聲。望軒唐而永歎。甘貧賤以辭榮。

咨大塊の氣を受くる、何ぞ斯人の獨靈なる、神智を稟け以て照を藏し、三五を秉つて名を垂る、

或は擊壤以て自ら懽ぶ、或は大に蒼生を濟ひ、潛躍の非分靡きも、常に傲然として以て情に稱ふ、世流浪して遂に徂き、物羣分して以て相形る、密網裁して魚駭き、宏羅制して鳥驚く、彼の達人の善覺なる、乃ち祿を逃れて歸畊す、山嶷嶷として影を懷ひ、川汪汪として聲を藏す、軒唐を望んで永く歎じ、貧賤に甘んじ以て榮を辭す、

【注解】吞は歎息の辭、大塊は宇宙の自然を曰ふ『莊子』に大塊載ㇾ我以ㇾ形とあり、受氣は總ての生物を指す、而して人間の獨靈は何ぞ、稟神智以藏照、秉三五而垂名、人は神智を自然より稟け來りて、以て光照を藏匿し、妄に顯はさず、而して三王五帝の道を聞いて以て名を千古に垂る、擊壤、壤は木を以て之を爲る、前廣後狹、長さ尺四寸、闊さ三寸、其の形履の如し、將に戲れんとす、先づ擊壤を地に側て、遠く三四十歩、手中の壤を以て之を擊つ、中る者を上と爲す、上古の遊戲とす、潛躍、聖人、下に在り、隱れて未だ顯はれざるの象、『易』に、潛龍勿ㇾ用、自分は聖人に比する非分の志は抱かざるも、傲然として他を蔑視し以て己が情に稱ふ、而かも世事は流浪して遂に徂去し、物は萬物、羣分、人は人にて羣分し、鳥獸は鳥獸にて羣分し、互に相形はるるなり、荀卿曰く、人の禽獸に異る所以は、其れ能く羣するを以てなり、形を羣するのみならず、意も亦羣するを以てのみ、密網裁而魚駭、宏羅制而鳥驚、魚も鳥も覺得知あり、密網と宏羅を見ては、駭驚して遁竄す、君子も聖人も、惡世には遁竄して、我が身を全うするに比す、達人之善覺、乃逃祿而歸畊、達人にあらずんば天下の用を爲さず、而して之を要路に登用すれば、小人等の猜みあり、生命を危うするの怖れあり、乃ち善覺するに於ては歸畊に若かず、作者淵明先生蓋し其の一人なり、嶷嶷は巍巍と大異なし、山に就いては多く巍巍、人の德を稱するとき多く嶷嶷を用ふ、『史記』に其德嶷嶷とあり、『論語』に巍巍乎惟天爲ㇾ大とあり、今正面は山にて、側面は人を言ふ、汪汪は水の大且つ深を形容す、山の嶷嶷たる處に隱るれば、誰か影を認めんや、川の汪汪たる邊に隱るれば、誰か其の聲を聞かんや、軒唐は黃帝軒轅氏と、帝堯陶唐氏となり、此の上世を羨望して以て永歎する、辭榮は乃ち達人の善覺なればなり、

【大意】大塊の中に生を受け、生物は多きも何ぞ人のみ靈なるや、人は神智を自然に稟け、三王五帝の道を聞いて名を千古に垂る、百姓は擊壤して懽び、英雄は大に蒼生を濟ひ、潛龍が躍る如き非分の身にあらざるも、常に傲然として以て情に稱ふ、世事は變遷流浪して遂に徂き、萬物は各の分ありて種種の形を爲す、魚は密網を看て駭き、鳥は宏羅を見て驚く、達人にあらずんば天下を救ふ無し、而かも小人の猜を善覺すれば、乃ち祿を逃れて歸畊する、山は巍巍として影を懷ひ、川は汪汪として聲を藏む、軒唐を景望して永歎し、貧賤に甘んじて以て榮を辭す、榮を辭せざれば小人の猜あり、

淳源汨以長分。美惡作以異ㇾ途。原二百行之攸一ㇾ貴。莫二爲ㇾ善之可一ㇾ娯。奉二上天之成命一。師二聖人之遺書一。發二忠孝於君親一。生二信義於鄕閭一。推二誠心一而獲ㇾ顯。不二矯然而祈一ㇾ譽。

淳源汨れて以て長く分れ、美惡作つて以て途を異にす、百行の貴き攸を原ね、善を爲すの娯むべき莫し、上天の成命を奉じ、聖人の遺書を師とす、忠孝を君親に發し、信義を鄕閭に生し、誠心を推して顯を獲、矯然として譽を祈らざらん、

【注解】淳源は大僞の興らざる前、汨は亂なり、大僞興りし後、美惡が長く分るるに至る、美惡自ら異途となれば、美行と惡行と

の相違を掃はざるべからず、而して美に就いての種種の行の貴ぶ攸を原討せざる可からず、其の字、意義併し釋し、善卽ち美を爲すの娯樂たるを主張せざるべからず、古人も傷眷最樂の語あり、上天之成命、卽ち天理の自然を遵奉し、之に加ふるに聖人之遺書、各行を示す所の聖典、忠と孝は君親の間に發し、信と義とを鄉閭の中に生し、推誠心而獲顯、不矯然而祈譽、董仲舒曰く、情を矯め百利を獲と雖も、復た正心にして一善に歸するに如かず、誠心は大僞の反對、顯は顯位、達人君子も顯位を得ずんば、其の志を行ふ能はざるは、古今東西同一なり、誠心に依つて獲たる譽は眞譽なり、虛譽にあらず、眞譽は獲ざるべからざるなり、

【大意】淳源が汨らざる時は、美惡と判然分たざるも、淳源が汨るや、美途と惡途と異を爲すを見る、人は宜しく百行の貴き攸を原ねて、善を爲すの娯みを求むるに若くは莫し、上天の成命を奉じ、聖人の遺書を師とし、君に於て忠、親に於て孝、友に於て信、鄉に於て義、誠心を以て大僞を破り、矯矯然として譽を祈らざるべからず、

嗟乎雷同毀異。物惡其上。妙算者謂迷。直道者云妄。坦至公而無猜。卒蒙恥以受謗。雖懷瓊而握蘭。徒芳潔而誰亮。

嗟乎雷同して異を毀ち、物其の上を惡み、妙算者を迷へりと謂ひ、直道者を妄なりと云ひ、坦至公にして猜無きは、卒に恥を蒙り以て謗を受く、瓊を懷きて蘭を握ると雖も、徒らに芳潔にして誰か亮かとせん。

【注解】雷同は『禮』に毋勦說、毋雷同と、雷の聲を發する、物同時に應ぜざる者無し、人の言ふ、當に各の己に由るべし、當然ならざるは雷同なり、甲黨は乙黨の異を毀ち、丙黨は丁黨の異を毀ち、以て當然なりと思へる如きは、遂に當然ならず雷同のみ、而して己より學にせよ修にせよ上者を憎惡するは、小人の常態、而して二三が六、二四が八、妙算者は決して迷はず、而かも之を迷と謂ふに至る、直道は卽ち三代の道、正道ならずして何ぞ、是の直道を行ふ者を妄と云ふに至る、而して平坦至公は私ならざれば、猜は無き筈なり、然るに至公なる人も卒に恥を蒙むり謗を受くるに至る、懷瓊握蘭、瓊玉の如き美質、蘭蕙の如き佳香を具する君子も、徒、總て報の無きを皆徒と言ふ、芳潔、其の人は芳潔なり、而して社會の人は誰か之を亮として遇するぞや、亮は本義明亮、而して公亮鯁亮卽ち忠直の義と爲る、

【大意】己に同ずる者と和し、己に異なる者を毀ち、總て上なる者を惡む、妙算者を指して迷ふと謂ひ、直道者を指して妄と云ふ、平坦至公なれば猜無き筈なり、而かも至公なる者は恥を蒙り謗を受く、瓊の如き美、蘭の如き香を持つ人も、他は之を認めず、自ら徒らに芳潔なるのみ、

哀哉士之不遇。已不在炎帝帝魁之世。獨祇修以自勤。豈三省之或廢。庶進德以及時。時既至而不惠。無爰生之晤言。念張季之終蔽。愍馮叟於郎署。賴魏守以納計。雖僅然於必知。亦苦心而曠歲。審夫市之無虎。眩三夫之獻說。悼賈傅之秀朗。紆遠轡於促界。悲董相之淵致。屢乘危

而幸濟。感ニ哲人之無ㇾ偶。淚淋浪以灑ㇾ袂。

哀しい哉士の不遇なる、已に炎帝帝魁の世に在らず、獨り祇修めて以て自ら勤む、豈三省の或は廢せんや、庶はくは德を進め以て時に及ばん、時既に至りて忘らず、爰生の晤言無く、張季の終蔽を念ふ、馮叟を郎署に愍み、魏守に賴つて以て計を納れ、必知に僶然たりと雖も、亦苦心して曠歲、夫の市の虎無きを審かにするも、三夫の說を獻ずるに眩し、賈傅の秀朗を悼み、遠轡を促界に紆げ、董相の淵致を悲み、屢ば危に乘じて幸濟し、哲人の偶無きに感ず、淚淋浪として以て袂に灑ぐ、

【注解】不遇の士を一一掲げ來る、已不在炎帝は、卽ち神農氏、帝魁は炎帝の子、獨なり、炎帝時代は衆皆善、今は獨修獨勤の世、三省は『論語』に出づ、人の爲め謀って不ㇾ忠か、朋友と交はりて不ㇾ信か、傳へて不ㇾ習か、曾子の如く、此の三省を我亦廢せざるなり、庶は希望なり、進德及時、『論語』に學而時習ㇾ之、『禮』に禮時爲ㇾ大と、時に及ぶを大事とす、時既至而不忘、聖人も是れなり、君子も是れなり、爰生は爰盎、字は思、楚の人、漢の景帝、時時人をして餘策を問はしむ、梁王求めて嗣と爲らんと欲す、盎、說を進む、其の後語塞がる、(塞は行はれざるなり)梁王、盎を怨み、人をして刺さしむ、刺者、盎の德を知り、刺すに忍びずして止む、張季之終蔽、張釋之、字は季、南陽の人、文帝に獻する者の是、喋喋する者の斃、及び秦の敝を說きし事あり、此の事を念ふなり、愍馮叟於郎署、馮叟は馮唐なり、祖父は趙人、唐は漢に徙り、文帝に事へて郎中署長と爲る、鯁直を以て一官十年の久しきを歷むなり、賴魏守以納計、馮唐と同時に魏尙は雲中守と爲る、魏尙は匈奴を破つて功あり、而して文帝、賞せず、馮唐が忠言に賴つて魏尙は雲中の守と爲る、故に此の賦は賴の字の上に文帝の二字を挿入すれば分明となる、僶は此に止まるの謂ひ、必知、此の如しと必知すと雖も、亦苦心而曠歲、曠は空なり、迅速に事の運ばざるを言ふ、審は審知、夫市之無虎、眩は眩惑、三夫之獻說、『韓非子』に龐共、太子と邯鄲に質たり、魏王に謂つて曰く、今一人言ふ市に虎ありと、王信ずるか、既にして二人言ひ、三人言ひ、遂に之を信ずるに至る、共曰く市に虎無きや明かなり、三人言ふときは市虎を成す、願はくは王之を察せよ、悼賈傅之秀朗、漢の賈誼は洛陽の人、文帝の時博士と爲る、年二十餘、梁の懷王の太傅と爲る、故に賈傅と曰ふ、文才秀朗、天下第一なるも、年三十三にして歿す、紆遠轡於促界は、明了に解する能はざるが、不幸短命にして他界に遠征し去るとの意ならん、促は短促、短命の世を終ふとなり、悲董相之淵致、董仲舒は江都王相、淵は淵深、致は高致、此の如き淵深高致の人も僞なる者の爲め嫉視せられ、其の書を竊取せらる、是が爲め罪せられんと爲したるも、辛うじて免かる、屢乘危而幸濟、屢ば危難に出會するも幸に救濟せらる、感哲人之無偶、哲人は固より偶の有るべき筈なし、而かも偶無きときは孤立なり、孤立は哲人と雖も大事を爲す能はず、感ずる所以、此の事を思へば雙淚淋漓として袂に灑がざるを得ず、

【大意】炎帝帝魁の世なりせば不遇の士はあらず、哀しい哉時代が降れり、是に於て獨修獨勤以て三省すべきのみ、德を進めて時に及び、其の時を怠らずして勤む、爰生も張季も馮叟も魏守も其の才を展ぶるを得ずして歿せし人なり、此等の人が自身の事に於て必知すと雖も、徒らに苦心して曠歲の已むを得ざるを看る、夫れ市には虎は住まず、而かも三人之が住むと主張すれば聞く者或は信ずるに至る、賈傅は秀朗なるも短命、董相は淵致なるも不遇、此の如く古哲人の不遇を思へば、淚淋浪として袂に灑がざるを得ず、

承前王之清誨。曰天道之無親。澄得一以作鑒。恆輔善而佑仁。夷投老以長飢。回早夭而又貧。傷請車以備槨。悲茹薇而殞身。雖好學與行義。何死生之苦辛。疑報德之若茲。懼斯言之虛陳。

前王の清誨を承く、曰ふ天道の親み無き、澄んで一を得以て鑒と作し、恆に善を輔けて仁を佑く、夷は老に投じて以て長飢し、回は夭を早くして又貧、車を請ひ以て槨を備ふるを傷み、薇を茹ひ而して身を殞すを悲しむ、好學と行義と雖も、何ぞ死生の苦辛なる、德に報ゆるの茲の若きを疑ふ、斯言の虛陳なるを懼る、

【注解】前王は上代の聖王を總括して言ふ、清誨は清直なる訓誨なり、天道は無私なり、無私なるが故に無親なり、得一の文字は『老子』より出づ、昔之得一者得、得一以清、得一以寧、天道は一德を以て多くの鑒と爲す、是の故に輔善而佑仁ならざるべからず、善人が苦しみ、仁者が困する道理の有るべき筈なきなり、然るに何ぞや、夷は九十の老年に及んで飢餓に迫る、是の人は善者なり、回は孔門第一の仁者、而かも貧、且つ三十二を以て卒す、傷請車以備槨、槨は亦椁に作る、外棺なり、論語に、顏淵死、顏路請子之車以爲之椁とあり、茹薇殞身は乃ち伯夷と叔齊とが西山に餓死せしを云ふ、雖好學與行義、何死生之苦辛、顏回の如き好學の者も、夷齊の如き行義の者も、生と死の中間に於て其の身を處する苦辛、容易ならざるものあり、疑報德之若茲、德に報ゆるに苦辛を以てするは、積不善の家に餘慶あるが如し、是の理あるべからずして、而して事實は積不善の家に餘慶あり、積善の家に餘殃あるに於ては、天道の是非疑はざるべからず、聖人の言には虛陳あるべからず、而かも虛陳と爲るを懼る、若し虛陳にあらずんば、善人には必ず善報を以てせよとなり、

【大意】前王の訓誨を聞くに、天道は一人に親みを爲さず、多人の中で一人に親むは私なればなり、天道は卽ち一を得て以て鑒と爲す、仁者は仁者の報あり、不仁者は不仁者の酬ある筈なり、而かも夷は飢ゑ、回は貧、一は車を請うて槨に代用せんとし、一は薇を茹うて身を殞す、學正しく行義誠なるも、死生に於て何ぞ苦辛なる、德には德の報ありとの說は疑ふべし、實際と合はぬ言は虛陳にあらずして何ぞ、

何曠世之無才。罕無路之不澀。伊古人之慷慨。病奇名之不立。廣結髮以從政。不愧賞於萬邑。屈雄志於戚豎。竟尺土之莫及。留誠信於身後。動衆人之悲泣。商盡規以拯弊。言始順而患入。奚良辰之易傾。胡害勝其乃急。

何ぞ曠世の才無からん、無路の澀らざるは罕なり、伊古人の慷慨、奇名の立たざるを病む、廣は髮を結び以て政に從ふ、賞を萬邑に愧ぢず、雄志を戚豎に屈し、竟に尺土の及ぶ莫し、誠信を身後に留めて、衆人の悲泣を動かす、商は規を盡くして以て弊を拯ひ、言始め順にして患入る、奚ぞ良辰の傾き易き、胡ぞ勝れるを害するに其れ乃ち急なる、

【注解】曠世之才、曠は空なり、『晉書』に卓犖不羈、有二曠世之度一と、非常の才使なきにあらず、罕無路之不澀、澀の反は滑なり、發展せんと志すも路無し、往還に澀らざるを得ず、古人も慷慨し、今人も亦慷慨する所以、病は憂なり、奇名は譽名なり、奇怪にはあらず、『楚辭』に懼二修名之不一レ立とあり、廣は漢の李廣、文帝、廣に謂つて曰く、惜む、子が時に遇はざるを、若し高帝の時に當らば、萬戸侯豈道ふに足らんや、結髮從政、大將軍衞青の部下と爲り匈奴と闘ひ、大小七十餘戰、所謂萬邑を以て賞せらるるも愧ぢず、從弟李蔡は、名聲、廣に及ばずして樂安侯と爲る、而して廣は爵邑の恨無し、雄志を戚竪即ち小兒の如き徒輩に屈從する、尺土の一身に及ぶ莫し、然りと雖も知る者は知る、李廣將軍の誠信は身後に留むるを以て、將軍が自刎するや衆人之を惆んで皆悲泣す、單于を征して、一夜、道を失す、大將軍、之を責む、廣、部下に謂つて曰く、迷うて道を失す、豈天にあらずや、廣、年六十餘、復た刀筆の吏に對する能はずとて、刀を引いて自剄す、字面多く『漢書』中の語を用ふ、廣以下六句は皆廣一人に就いて言ふ、商盡規以拯弊、言始順而患入、何孟春曰く、王商は漢の成帝の時、左將軍と爲る、帝、商の固守を美壯とし、數ば其の議を稱す、後、丞相と爲る、甚だ之を尊任す、而して大將軍王鳳、商を猜み、人をして上書し、商が閨門の内事を言はしむ、商、相を免ぜられ、病を發し、血を歐いて薨す、順が變じて患と爲る、奚は何なり、良辰易傾、害勝其急、勝る者、傑出の者、滿足に生を終ること能はず、

【大意】曠世の才人無きにはあらず、而かも危路に於て澀らざるを得ず、古人の慷慨して、奇名の立たざるを病む所以、李廣の如き、結髮即ち少時より軍政に從ふ者、公爵を以て賞するも可なり、然るに雄志を戚竪即ち小兒の如き輩の下に屈し、竟に尺土の封侯と爲らず、李廣が誠信は後世に留むるを以て、衆人は反つて之を悲しみ泣く、王商は規を盡くし弊を拯ひ、始は順なりしも終は患と爲る、不世出の才の者、皆不滿足に生を終れり、

蒼旻遐緬。人事無レ已。有レ感有レ昧。疇測二其理一。寧固窮以濟レ意。不三委曲而累二己。既軒冕之非レ榮。豈縕袍之爲レ恥。誠謬會以取レ拙。且欣然而歸止。擁二孤襟一以畢レ歲。謝二良價於朝市一。

蒼旻遐緬、人事已む無し、感あり味あり、疇か其の理を測らん、寧ろ固窮以て意を濟すも、委曲して己を累せず、既に軒冕の榮にあらず、豈縕袍を恥と爲ん、誠に謬會以て拙を取る、且欣然として歸らん、孤襟を擁して以て歲を畢へ、良價を朝市に謝す、

【注解】蒼旻は上天なり、遐緬は高遠なり、人事は輪廻して已む時無し、疇は誰なり、人事や天理は測知する者無し、固窮しても我が意の儘を欲するが可、委曲するも己が累と爲ることを招くは不可、軒冕、軒車や冕服は一時の榮、永久の榮にあらず、縕袍即ち貧者の衣服を著けても此の分は反つて恥を招かず、謬は謬誤、取拙、謬つて以て拙を取る、拙や巧に勝る有り、出づるは不可、入るは可、欣然として歸去止、孤襟、榮達の人と交を絕ち、良價、非常に高給を以て招致するとも、決して朝市には向はざるなり、此の賦、韻を替ふること六度、句は六字句を多く用ひ、兮の字を一字も用ひず、又人物を擧ぐるに董は卞隨、務光、伯夷、叔齊、伍員、屈原を言ふ、今は此の他の人を以て、其の不遇を慨す、而して結は放達に歸して、其の本分の宗旨に入る、張自烈曰く、師聖人之遺書、不委曲而累己、此の二語以て吾人を津筏するに足る、夷投老以長飢、回早夭而又貧に至り、語氣悲咽、每讀此に至り、覺えず泫然流涕す、文の人を感ずる此の如し、

【大意】上天は遐かに遠し、人事は窮已有ること無し、感あり味あり、天理人事共に測る能はず、是

の故に固窮するも我が意の儘を爲すべし、兎や角と心痛するは反つて己を累するのみ、旣に公爵伯爵も榮にあらず、破袍垢袍も恥と爲すに足らず、拙は却つて巧に勝る、出行するは寧ろ歸止に如かず、孤襟卽ち孤立して以て歲を畢へ、如何に人が良價を以て招致するも決して朝市に向はずとなり、

閑情賦　幷序　　閑情の賦幷に序

初張衡作定情賦。蔡邕作靜情賦。檢逸辭而宗澹泊。始則蕩以思慮。而終歸閑正。將以抑流宕之邪心。諒有助於諷諫。綴文之士。奕代繼作。竝固觸類。廣其辭義。余園閭多暇。復染翰爲之。雖文妙不足。庶不謬作者之意乎

初め張衡、定情賦を作る、蔡邕、靜情賦を作る、逸辭を檢するに澹泊を宗とし、始は則ち蕩として思慮を以てし、而して終に閑正に歸す、將に以て流宕の邪心を抑へ、諒に諷諫に助あらんとす、文を綴るの士、奕代繼ぎ作る、竝に固より類に觸れ、其の辭義を廣む、余園閭暇多し、復翰を染め之を爲る、文妙足らずと雖も、庶はくは作者の意を謬まらざらんか、

【注解】閑は閒と異なる、閑邪の閑、卽ち「フサグ」なり、若し是を閒とすれば靜情と同じ、何孟春の閒に作るは誤謬なること知るべし、張衡、字は平子、漢の南陽西鄂の人、少うして善く文を屬る、安帝の世、郎中と爲り、出でて河間相と爲る、尙書を拜して卒す、蔡邕、字は伯喈、漢の陳留の圉人、河平長、郎中の官を經、後、董卓の爲め投獄せられ、獄死す、檢は檢讀なり、逸辭は張邕二子が賦を言ふ、澹泊、其の賦中の語は澹泊を宗旨とす、蕩は字義頗る廣し、今は放蕩の思慮なり、然れども終に閑正に歸宿する、邪を閑ぎ、正理を主張する、流宕は卽ち放蕩なり、諷諫は人の短所を露骨に言はず、暗示するを諷諫と云ふ、奕代は累代、漢より魏、魏より晉と、陳琳は止欲賦、王粲は閑邪賦、應瑒は正情賦、曹子建は靜思賦、張華は永懷賦と繼作して此の賦多し、公亦之に倣うて此の賦を作る、文妙不足と自ら謙す、後人は宜しく之を嘆稱すべきなり、

夫何瓌逸之令姿。獨曠世以秀羣。表傾城之艷色。期有德於傳聞。佩鳴玉以比潔。齊幽蘭以爭芬。澹柔情於俗內。負雅志於高雲。悲晨曦之易夕。感人生之長勤。同一盡於百年。何懽寡而愁殷。褰朱幃而正坐。汎清瑟以自欣。送纖指之餘好。攘皓袖之繽紛。瞬美目以流眄。含言笑而不分。

夫れ何ぞ瓌逸の令姿なる、獨り曠世以て羣に秀づ、傾城の艷色を表し、有德を傳聞に期す、鳴玉を佩び以て潔に比し、幽蘭に齊しく以て芬を爭ふ、柔情を俗內に澹にし、雅志を高雲に負ふ、

晨曦の夕なり易きを悲しみ、人生の長勤に感ず、一盡を百年に同じうし、何ぞ懽寡うして愁の殷なる、朱幃を褰げて正坐し、清瑟を汎して以て自ら欣ぶ、纖指の餘好を送り、皓袖の繽紛を攘ふ、美目を瞬にし以て流眄し、言笑を含んで分らず、

【注解】瓌は懷又は環に作る本あり、陶澍曰く、皆非なり、令は善なり、瓌逸善姿即ち曠世の人の羣に秀づる風采を歎美しての言なり、傾城之艶色、『詩』に哲婦傾城とありて、女色は人の城國を傾覆するを戒めたる語、今の句は正面此の傾城の語を借りて、側面は曠世の人の美を表稱したるなり、別に色を警戒する意は含ます、期有德於傳聞、傳聞とは諸を他人の轉述に得る者を謂ふ、諸を故老に聞き、故老又之を前人に聞くなり、有德の名を傳聞さすることを期す、佩鳴玉以比潔、齊幽蘭以爭芬、玉は貴人の佩ぶる物、馬飾なり、幽蘭は其の香氣の遠く及ぶを言ふ、鳴玉も幽蘭も共に『楚辭』の字面なり、其の人格の清高なるに比す、淡柔情於俗內、負雅志於高雲、柔は剛の反、柔情柔色は君子の戀を知る者なり、俗內に處するに此の柔情を以て宜しく澹泊を主とすべく、而して高雅の志は雲中の高きを負ふべきなり、決して卑下なるべからず、悲晨曦之易夕、感人生之長勤、尋常の語言にして、而かも人をして首肯せしむ、『楚辭』に、惟天地之無窮、哀人生之長勤とあり、同一盡於百年、百年の間に人間は大抵一盡し去る、平等なるが故に同と言ふ、何懽寡而愁殷、殷は二義あり、一は色の朱きを云ふ、一は衆多の意義、今は十二文の韻にて衆多の義、懽樂寡少にして、憂愁殷多なるなり、褰朱幃而正坐、汎清瑟以自欣、朱幃は朱色の幕帳なり、汎は汎徒、瑟の微小の貌、一に曰ふ波急なる解と、清瑟を弄して獨り欣厭するなり、送纖指之餘好、攘皓袖之繽紛、纖指は美人の指、皓袖は美人の衣、瑟を鼓する指の動くごとに衣袖が繽紛と翻へるなり、瞬は瞬に同じ、和語に「マタタキ」美目を動かすなり、流眄は斜視なり、不分は不忿なり、唐人は不忿君恩斷と咏じて「忿リニ静ヘザル」意に用ふるも、今の句は「忿ラズ」の義に當る、然らずんば含言笑と照應せず、李公煥曰く、此の章は莊姜が美貌、宜しく親幸すべき所を説く、莊姜は衞の莊公の夫人、當年の詩人をして其の美を嘆稱せしめしは、『毛詩』に於て明白なり、然りと雖も李は何に據つて此の章莊姜を咏ずと知るや、詩經の美目盼の語と、此の章に瞬美目とあるを以て指すならんか、我輩は莊姜が美貌を特に咏ずと思はざるなり、美人の美を設けるものにて、何ぞ必ずしも古の美人を指すと言はん、李說鑿せり、

【大意】瓌逸の令姿を有する人、乃ち曠世秀羣の人なり、美人の艶色に讓らざる美德を表し、之を後世に及ぶまで傳聞せしむ、而して鳴玉、而して幽蘭、其の人潔なり、其の人芳なり、世に處して柔情を俗輩の內に澹泊にし、自己の本領たる雅志は高雲の高きに負ふ、其の人太だ樂むべきに似て然らず、反つて晨時の夕なり易きを悲み、人生の長勤を感慨する、百年の間には皆灰滅し去る、其の百年の間懽寡くして愁は殷なり、愁を消せんと欲して乃ち朱幃を褰げて正坐し、清瑟を弄して强ひて自ら欣ぶ、美人をして瑟を鼓せしむ、纖指の動く毎に、皓袖は繽紛と攘ふ、或は美目を以て流眄し、或は言笑を含んで分らず、

曲調將半。景落西軒。悲商叩林。白雲依山。仰睇天路。俯促鳴絃。神儀嫵媚。擧止詳妍。激清音以感余。願接膝以交言。欲自往以結誓。懼冒禮之爲諐。待鳳鳥以致辭。恐他人之我先。意惶惑而靡寧。魂須臾而九遷。

曲調將に半ならんとし、景西軒に落ち、悲商林を叩き、白雲山に依る、仰ぎて天路を睇、俯して鳴絃を促す、神儀嫵媚、擧止詳妍、清音を激して以て余を感ぜしむ、願はくは膝を接して以

て言を交へん、自往以て結誓せんと欲す、冒禮の僭爲るを懼る、鳳鳥を待ち以て辭を致し、他人の我より先んずるを恐る、意惶惑して寧きこと靡し、魂須臾にして九遷す、

【注解】曲調は佳人が淸謳を汎徒する未だ畢らざるに、日景既に西軒に落つ、而して悲風商音を發して林を叩く、白雲は依依として山に依る、睇は『說文』に小視也と、久視の反對、促は催促、鳴絃せんと興が湧き來るなり、神儀嫵媚、擧止詳姸、其の態度、其の容姿、美なり、艷なり、姸なり、鼓瑟と歌聲共に淸音、余を感嘆せしむ、願接膝以交言、愈よ以て之に接近して、其の紅舌に觸れんと願ふなり、欲自往以結誓、懼冒禮之爲僭、千萬人の心情を道破して餘蘊あることなし、接近せんとするの念は、到底抑ふべからず、而かも強ひて往かば分限を越え、所謂冒禮なり、誓らるる僭を招くを懼る、待鳳鳥以致辭、恐他人之我先、煩悶の狀態、益す微に入る、鳳鳥に依託して、信を通ぜんと欲すれば、鳳鳥の來る何れの時にあるやは不明なり、若し延引する時は他人が我の先を越すの憂あり、如何かして宜しからんかと、惶惑して意が安寧ならず、『楚辭』に、鳳凰既受詒兮、恐高辛之先我とあり、魂須臾而九遷、容易に決斷する能はず、我が魂は種種に遷り變る、九遷は其の轉變の多きを云ふ、『楚辭』の魂一夕而九逝の語法を學ぶ、

【大意】曲調が漸く半にして、日は已に西に落つ、商風は林を吹き、白雲は山に依る、仰いで天路を睇、俯して鳴絃を促す、其の態度や美、其の容姿や姸、其の淸音や余を感ぜしむ、此の如くなれば膝を接して以て言を交へんと願ふ、是の故に自ら往いて以て吾が誓を結ばんと欲するも、冒禮の僭を招かんことを懼る、鳳鳥の如き靈鳥に依つて信を通ぜんと欲するも、其の期は定むべからず、我若し後るれば他人が先んずるの恐あり、此を思ひ彼を想へば惶惑して寧きこと靡し、魂や須臾にして種種に轉變するなり、

願在衣而爲領。承華首之餘芳。悲羅襟之宵離。怨秋夜之未央。願在裳而爲帶。束窈窕之纖身。嗟溫涼之異氣。或脫故而服新。願在髮而爲澤。刷玄鬢於頹肩。悲佳人之屢沐。從白水以枯煎。願在眉而爲黛。隨瞻視以閑揚。悲脂粉之尙鮮。或取毀於華妝。

願はくは衣に在りては領と爲り、華首の餘芳を承けん、羅襟の宵離を悲しみ、秋夜の未だ央ならざるを怨む、願はくは裳に在りては帶と爲り、窈窕の纖身を束ねん、溫涼の氣を異にす、或は故きを脫ぎて新しきを服るを嗟く、願はくは髮に在りては澤と爲り、玄鬢を頹肩に刷はん、佳人の屢ば沐し、白水に從り以て枯煎するを悲しむ、願はくは眉に在りては黛と爲り、瞻視に隨つて以て閑に揚らん、脂粉の尙鮮かなる、或は毀を華妝に取るを悲しむ、

【注解】願在衣而爲領、承華首之餘芳、以下願在の文字十處に渉る、二物を擧げ、其の關係密著にして離るべからざるものを言ふ、衣の肝要の處は領に在るなり、領は華首即ち華の如き顏に最も接近すればなり、悲羅襟之宵離、怨秋夜之未央、襟は衿と同じ、領即ち襟なり、悲宵離、羅襟は晝は著くも宵は離る、悲しむ所以、在裳爲帶、衣は必ず裳あり、裳あらば必ず帶あり、帶の用たる何ぞ、所謂窈窕の纖身を束ぬるに在り、蔦蘿が喬樹を纏ふが如く、離るる時無し、而かも溫氣と涼氣の異なる節が來るに於ては、冬日の故帶は春日の新帶と代る、其の永久ならざるを悲む、在髮爲澤、澤は多義あり、手澤、恩澤、衣澤、今の句、膏澤、之を澤と曰ふ義に據つて、櫛と油を日ふならん、乃ち次句の刷玄鬢於頹肩の語が極めて能く適す、刷は掃刷、玄は黑、

鬢は髪、類眉は眉の少しく斜なるを曰ふ、而かも悲しむ佳人は屢ば髪を洗うて、白水を以て故の油を枯散し去るを、在眉爲黛、眉の上に一點の黛を施す、支那上古よりの風俗なり、眉には黛の大事なること知るべし、而して日の瞻觀する毎に黛し共に閑揚卽ち現代語の活動するを得、是れも亦悲しむらくは脂粉は倚鮮なりと雖も、日日毀ち取られて、華妝が一新する、故きを舍て新しきに就くを悲しむなり、

【大意】衣を製するには領あり裳あり、裳は下なり、領は上なり、領は華首に近し、故に領たらんことを願ふなり、而かも其の領(襟)は宵に入れば之を脱ぐ、悲しむ所以なり、此の一願遂げずんばセメテ裳に在りて帶と爲らん、帶と爲らば直接に美人の纖身を束ぬ、此の二願遂ぐるにせよ、夏秋の氣節に値へば、故衣を脱ぎて新衣に移る、永久の樂にあらざるなり、美人の髮に在りては油澤たらんことを願ふ、油澤と爲らば日日美人が玄鬢を掃刷す、然るときは美人の手を離れず、而かも又悲しむ白水を以て其の油澤を洗ひ落さんことを、又願ふ眉に在つては黛と爲らんと、美人が物を視る毎に揚がる、而かも悲しむ、此の如きも、今日の華妝は明日の華妝にあらず、日に日に一新、故態は一も存せざることを、

願在莞而爲席。安弱體於三秋。悲文茵之代御。方經年而見求。願在絲而爲履。附素足以周旋。悲行止之有節。空委棄於床前。願在晝而爲影。常依形而西東。悲高樹之多蔭。慨有時而不同。願在夜而爲燭。照玉容於兩楹。悲扶桑之舒光。奄滅景而藏明。願在竹而爲扇。含淒飈於柔握。悲白露之晨零。顧襟袖以緬邈。

願はくは莞に在りては席と爲り、弱體を三秋に安んせん、文茵の代御、方に年を經て求めらるるを悲しむ、願はくは絲に在りては履と爲り、素足に附して以て周旋せん、行止の節あり、空しく床前に委棄せらるるを悲しむ、願はくは晝に在りては影と爲り、常に形に依つて西東せん、高樹の蔭多きを悲しみ、時ありて同じからざるを慨す、願はくは夜に在りては燭と爲り、玉容を兩楹に照さん、扶桑の光を舒べ、奄ち景を滅して明を藏すを悲しむ、願はくは竹に在りては扇と爲り、淒飈を柔握に含まん、白露の晨に零ち、襟袖を顧みて以て緬邈たるを悲しむ、

【注解】莞は樂器、「クダ」なり、又、莞蓆、擬緑の具、今乃ち其の樂器を包む席と爲り、倫り健康ならざる身體を三秋の寒涼に安泰にせんとなり、文茵は『毛詩』に文茵暢轂とあり、席卽ち文茵なり、代御、故きを代へて新しきを御せんとし、年を經れば必ず新を求めらるるを悲しむなり、在絲爲履は、事實に於て在履爲絲の方可ならんと思へども、韻法上、之を許さず、履を以て重しと爲す所以、素足、唐人でも日本人でも赤足、黒足は美の感無きもの同一なり、素は美人、美人は素と定義を下して可なり、美人外出する每に周旋すと雖も、竟には行止有節、履も遂には朽く、或は脱む結果空しく床前に委棄せらる、在晝爲影、依形西東、影とならば、形と離るること無し、西東も南北も隨從せざるは無し、而かも高樹の蔭には形影全く離る、不同を慨する所以、燭の夜に必要なること

曾匆し、玉容は美人の姿容、楹は「ハシラ」、兩楹は我と彼との兩楹の間を照すなり、而かも太陽の光暉は扶桑樹の邊に舒ぶれば、燈燭の晉は滅して何等の明も爲さず、悲しむ所以、竹扇、竹は扇を製する第一の條件、扇は一揮すれば、凄飆を起して、炎暑を除かしむ、而かも秋風白露の節が至れば、扇の功用は無し、是に於てか、襟袖を顧みて以て綿邈たるを悲しむ、

【大意】莞に追隨して離れざる物は席なり、此の席と爲りて弱體卽ち不健康の身を三秋に慰安せん、而かも悲しむ文茵（席）の故くなれば新しき物と代へられんことを、又願ふ絲に在りては履と爲り、美人の素き足に附いて離れざるを、而かも悲しむ美人が行止の久しき、竟に用ふべからずして床前に棄てられんことを、又願ふ白晝には影と爲り、美人の形に依附して西東して離れず、而かも悲しむ高樹の蔭に憩ふときは、其の影は滅するに至るを、又願ふ夜に在りては燭と爲り、美人の玉容を兩楹の際に照さんと、而かも悲しむ太陽の光が扶桑樹の邊に舒ぶるときは、燈燭は其の光の用を爲さざることを、又願ふ竹に在りては扇と爲り、美人の手に依つて凄風を柔握に含むことを、而かも悲しむ白露晨零の期至れば、扇は舍てらるることを、襟袖を顧みて綿邈たらざるを得ず、

願在木而爲桐。作膝上之鳴琴。悲樂極以哀來。終推我而輟音。考所願而必違。徒契契以苦心。擁勞情而罔訴。步容與於南林。栖木蘭之遺露。

翳青松之餘陰。儻行行之有覿。交欣懼於中襟。竟寂寞而無見。獨悁想以空尋。

願はくは木に在りては桐と爲り、膝上の鳴琴と作らん、樂極まり以て哀來り、終に我を推して音を輟むるを悲しむ、考ふ願ふ所必ず違ふ、徒らに契契以て心を苦しむ、勞情を擁して訴ふる罔く、步して南林に容與し、木蘭の遺露に栖り、青松の餘陰に翳はる、儻し行行の覿るあらば、欣懼を中襟に交へん、竟に寂寞として見る無く、獨り悁想して以て空しく尋ぬ、

【注解】桐は琴を製する第一の良材、琴と爲らば美人の膝上を曾て離れず、唯樂極哀來は古人已に詩に歌ふ所、其の樂極まりて哀來り、終に我を推し卸けて之を彈ぜざるに至らんことを悲しむ、我とは琴をいふ。輟は止と同義、輟音は、琴を彈ぜざるをいふ、思考するに、所願は必違、成就すること罕なり、契契は『毛詩』に契契寤歎とあり、憂苦の貌なり、擁は持擁なり、此の勞情は我と我との勞情なり、別に訴哀する所罔し、步は步行、容與は、『史記』に翩翔容與とあり、閒暇自得の貌、南林の下に徘徊するなり、而して木蘭樹の遺露ある邊に栖る、栖は「ヤドル」なり、『楚辭』に朝飲木蘭之墜露とあり、而して又青松の餘陰に身を翳はる、儻は倘と同じ、覿は音「テキ」訓「ミル」なり、意中の人を見るあらばとなり、其の時は欣と懼と交代に中懷に起る、懼は懇なり、和訓「ネンゴロ」なり、此の望も亦徒勞、寂寞として意中の人は見る所無し、悁想は悠想なり、憂想なり、悁は「イカル」なり、空尋、見る無ければ愈よ尋ぬる情が濃やかなり、

【大意】願はくは若し木と爲らば桐と爲らん、桐と爲らば琴に製して以て美人の膝上に在らん、而か

も悲しむ樂の極は哀なれば、終には之を彈ずるを輟むることを、乃ち考ふ、以上の諸願一も契ふもの無く、徒らに契契として心を苦しむることを、自ら此の心痛を擁し、而かも訴ふる所は罔し、是に於てか步して南林に容與し、木蘭樹の露ある邊に栖り、青松の餘陰に身を翳はる、倘し行行して意中の人に遇はば、欣と懼と中襟に交起らん、而かも意中の人は見る所無し、獨り悄想して以て空しく尋ぬるのみ、

斂輕裾以復路。瞻夕陽而流歎。步徙倚以忘趣。色慘悽而矜顏。葉燮燮以去條。氣淒淒而就寒。日負影以偕沒。月媚景於雲端。鳥悽聲以孤歸。獸索偶而不還。悼當年之晚暮。恨茲歲之欲殫。思宵夢以從之。神飄颻而不安。若憑舟之失棹。譬緣崖而無攀。

輕裾を斂め以て路に復し、夕陽を瞻て流歎す、步徙倚として以て趣を忘れ、色慘悽として顏を矜す、葉は燮燮として條を去り、氣は淒淒として寒に就く、日影を負うて以て偕沒し、月景を雲端に媚ぶ、鳥は聲を悽として以て孤歸、獸は偶を索めて還らず、當年の晚暮を悼み、茲の歲の殫きんと欲するを恨む、宵夢以て之に從ふを思ひ、神飄颻として安からず、舟に憑るの棹を失するが若く、崖に緣りて攀づること無きに譬ふ、

【注解】斂輕裾、斂は收むるなり、裾は衣の裔なり、輕裾の塵なぞ拂うて以て南林を出で、前路に復る、時正に夕陽、流歎する所以、徙倚は確然と顧る所無く、南北を行步するを曰ふ、趣は赴と同じ、目當として赴く所を忘るるなり、矜は「キン」の音と「キョウ」の音とあり、今は「キョウ」の音即ち「オゴル」意なり、色慘悽而矜顏、果して如何なる態度なるや、今日の言で解すれば、色は慘悽なるも、顏面は頗る緊張して居るとなり、燮燮は葉の落つる聲、淒淒は秋氣の寒き貌、日負、月媚、已に西山は落日、東嶺は上月、鳥は孤歸するを以て聲悽として悲し、獸は偶を索め去つて還らず、當年之晚暮、茲歲之欲殫、當年と茲歲と字の對を取らんとして極めて强語を爲す、意味としても深く解すべき無し、思宵夢以從之、神飄颻而不安、夢にでも望む所は之に從はんと欲する爲め、精神は安立する能はず、飄颻として風の如し、若憑舟之失棹、譬緣崖而無攀、棹を失すれば舟は行る能はず、懸崖は攀づる能はず、而かも舟は行りたきなり、崖は攀ぢたきなり、

【大意】南林の步を止め、輕裾を斂め以て前路に復る、前路方に夕陽、流歎を發する所以、乃ち無意識に步して何の目的たるを忘る、氣色は慘悽たるも顏は矜なり、樹葉は燮燮として條を辭し、秋氣は淒淒として寒に就く、而して西山は落日、東山は上月、鳥は歸宿せんと聲悽たり、獸は偶を索めて猶ほ還らず、當年の晚暮を悼むのみならず、今歲の殫きんと欲するを恨む、セメテ夢中にでも之に從はんことを思へば、精神は飄颻として安き無し、自分を顧みるに、舟に乘じて棹を失するが若く、懸崖の下に在つて攀づる能はざるに譬ふるなり、

于時畢昴盈軒。北風淒淒。烱烱不寐。衆念徘徊。起攝帶以伺晨。繁霜粲於素階。雞斂翅而未鳴。笛流遠以清哀。始妙密以閑和。終寥亮而藏摧。意夫人之在茲。託行雲以送懷。行雲逝而無語。時奄冉而就過。徒勤思以自悲。終阻山而帶河。迎清風以祛累。寄弱志於歸波。尤蔓艸之爲會。誦邵南之餘歌。坦萬慮以存誠。憩遙情於八遐。

時に畢昴軒に盈ち、北風淒淒たり、烱烱として寐ねず、衆念徘徊す、起つて帶を攝へ以て晨を伺ふ、繁霜素階に粲たり、雞は翅を斂めて未だ鳴かず、笛は遠きに流れて以て清哀、始め妙密にして以て閑和し、終に寥亮として藏摧す、意ふに夫れ人の茲に在る、行雲に託して以て懷を送る、行雲逝いて語無し、時奄冉として過に就く、徒らに思を勤め以て自ら悲しむ、終に山に阻せられ河を帶ぶ、清風を迎へて以て累を祛く、弱志を歸波に寄せ、蔓艸の會を爲すを尤む、邵南の餘歌を誦し、萬慮を坦にし以て誠を存し、遙情を八遐に憩ふ、

【注解】畢昴は二十八宿の二、西方の中星、盈軒、昴光の影軒に盈つるなり、淒淒は北風の氣、烱烱は『楚辭』に夜烱烱而不寐とあり、光明の貌なり、眼が爽えて寐られざるなり、衆念は種種の思念が起る、徘徊、煩悶する時はブラブラするより外は無し、攝は整正なり、帶を攝ふるからには安臥せざること明白なり、以て鳴鷄を待つ、粲は粲然、眞白の繁霜が素階に光を放つ、雞未鳴と言ふは猶は夜中なるを云ふ、而して笛聲は遠方に流れて清哀なり、其の清哀の調子始めは妙密即ち音が細微にして以て閑和し、閑和は調和なり、終には寥亮即ち音が強く響き來り、而して止まんと欲す、藏摧は音の止まんと欲するを言ふ、意は「オモフ」なり、茲に夫人が在つて、情を行雲に寄託して以て幽懷を遣るとなり、天上の行雲は逝いて我と語らず、時は奄冉として就過、奄冉は和柔の貌、『晉書』に奄冉倫榮とあり、前句の閑和と照應す、徒勤思以自悲、阻山帶河、夫の美人を思ふと雖も、山は險阻なり、河は帶の如く曲る、見んと欲し、行かんと欲するも到底不可能と爲す、只清風を迎へて以て煩累を祛け、弱志を歸波に寄せ、弱志は薄志と同じ、勇往の反、希望達せずんば歸去來のみ、歸波を認めざるべからず、尤蔓艸之爲會、會は會聚、蔓艸は會聚する第一の標本なり、我と反す、尤むる所以、邵南、邵は地名、晉の邑、邵南は詩篇の名、周南は聖人の化を得るもの、邵南は賢人の化を得るもの、餘歌は遺歌と見るべし、坦は平坦、萬慮を平坦にして以て一誠を存し、遙情即ち超然として塵俗に超えたる情を、八遐即ち廣大にして無邊なる處に憩はんとなり、此の賦、韻を代ふること十三、願在の字を用ふる十、美人の美態、癡人の癡態、人としての弱點、頗る細に入り微を穿つ、司馬相如を駕して上るの槪あり、昭明太子曰く、白璧微瑕、唯閑情一賦に在り、昭明は艷色を避け、方正を貴ぶの人、閑情一賦を錄ふ、固より其の所、東坡曰く、閑情一賦、所謂國風、　んで淫せず、正に周南に及ばざらしむるも、屈宋陳する所と何ぞ異ならん、而かも統大（昭明太子）之を譏る、此れ乃ち小兒强ひて事を解するを作す者、東坡には朝雲と稱する妾あり、昭明には妾無し、故に妾を蓄ふる者は東坡の說を贊すべし、妾無き者は昭明を贊すべし、妾の有無に於て決すべきのみ、

【大意】時に畢昴が軒に盈ち、北風は淒淒と響く、心烱烱として寐ぬる能はず、衆くの思念起るに依つて徘徊する、乃ち帶を整へて以て曉晨を伺へば、繁霜は素階に粲たるを看る、而かも雞は未だ鳴かず、唯笛音のみ響清哀なり、之を聞くに始めは妙密にして閑和、終りは寥亮として藏摧なり、意ふに夫れ人の茲に在る、行雲に意を託して以て其の懷を送る、天上の行雲は逝いて我と語らず、時は堂堂と

して過ぎ去る、徒らに勤思即ち勞思して自ら悲しむ、夫の美人を思ふも山河險阻にして行くこと能はず、徒らに淸風を迎へて以て煩累を卻け、弱志は到底險阻を突破せんことを思はず、唯歸波に寄せんのみ、蔓艸の會聚、卽ち小人の黨を成すを尤むるも、我は邵南の餘歌を誦して、小人の黨と爲らず、聊か賢人に追隨せん、萬慮を平坦にして以て一誠を存し、遙情を八遐に憩はんのみ、

歸去來兮辭　幷序

歸去來の辭　幷に序

余家貧。畊植不足以自給。幼稚盈室。缾無儲粟。生生所資。未見其術。親故多勸余爲長吏。脫然有懷。求之靡途。會有四方之事。諸侯以惠愛爲德。家叔以余貧苦。遂見用于小邑。于時風波未靜。心憚遠役。彭澤去家百里。公田之利。足以爲酒。故便求之。及少日。眷然有歸與之情。何則質性自然。非矯厲所得。飢凍雖切。違己交病。嘗從人事。皆口腹自役。於是悵然慷慨。深媿平生之志。猶望一稔。當斂裳宵逝。尋程氏妹。喪于武昌。情在駿奔。自免去職。仲秋至冬。在官八十餘日。因事順心。命篇曰歸去來兮。乙巳歲十一月也。

余が家貧、畊植以て自給するに足らず、幼稚室に盈ち、缾に儲粟無し、生生の資とする所、未だ其の術を見ず、親故多く余に勸めて長吏と爲らしむ、脫然懷ひ有り、之を求むるに途靡し、四方の事あるに會ひ、諸侯惠愛を以て德と爲し、家叔余が貧苦を以て、遂に小邑に用ひらる、時に風波未だ靜かならず、心遠役を憚る、彭澤家を去る百里、公田の利、以て酒を爲るに足る、故に便ち之を求む、少日に及んで、眷然歸與の情あり、何則質性自然、矯厲得る所にあらず、飢凍切なりと雖も、己に違へば交病む、嘗て人事に從ひ、皆口腹自役、是に於て悵然慷慨、深く平生の志に媿づ、猶ほ望む一稔、當に裳を斂め宵逝すべし、尋いで程氏妹、武昌に喪す、情駿奔に在り、自ら免じ職を去る、仲秋より冬に至る、在官八十餘日、事に因つて心に順ひ、篇に命じて歸去來兮と曰ふ、乙巳歲十一月なり、

【注解】幼稚盈室、家貧にして幼童稚子多し、我は食はざるも幼稚を如何にせん、缾は酒器又は水器、而かも淵明時代果を之に儲へしものならん、生生所資、未見其術、多少の田地を有するも、一家を支ふる能はず、其の他に於て、生活の資となるもの果して何ぞ、容易に其の術を發見せず、親故は親戚、故友なり、長吏は縣吏の尊者『漢書』景帝紀に六百石以上皆長吏とあり、脫然は心機一轉と解すべし、乃ち長吏と爲る決心を爲す、是も亦求むるの途を講ぜざるべからず、會有四方之事、準官吏と爲るを得たるも、四方奔走の官、建威の命を銜んで都に使する、諸侯惠愛、淵明が人と爲り、殺伐ならず、頗る惠愛の資を備ふ、是を以て諸侯は其れを德

と爲す、而かも諸侯の力で一縣の令とはならず、家叔は叔父太常夔なり、叔父の力に頼つて始めて小邑の長と爲る、李公煥曰く、當時の刺史（今日の知事）自ら所部縣令を采辟して、之を版授するを得、故に云ふ、風波未靜、心憚遠役、世上の風波と、水上の風波との二意を含むと解すべし、乃ち遠方へ赴任するは好まず、彭澤は隋に龍城と改め、又彭澤の名に復す、三國の時は鄱、現今は縣、江西の九江府、山に因つて城を爲し、江路阨塞の處、去家百里、柴桑と彭澤の間、疾脚の者なら一日にして達る、公田之利、足以爲酒、「酒代トナス」「酒ヲ爲ル」義は則ち一なり、故便求之、自分の酒料と爲るを言うて、幼稚の教育費と爲すと言はず、細君は依然として不平なりしならん、少日、任官以來僅僅三ヶ月に滿たず、早已に眷然として柴桑の鄉里に歸與の情生ずるなり、與は歟と同じ、何故に早辭職するぞと問ふ者あらば、乃ち答ふ、質性自然、八時に出勤、四時に退出、租税滯納の督促、縣吏任免の命令、皆是れ不自然、自然を尙ぶ公とは全く反對なり、矯厲は自然の反、官長たる者は上官に向つては平伏し、下官に向つては故意に自ら高うするの要あり、矯厲即ち自高して激厲するは自然人の所得にあらず、官吏を罷め、目前に來るは飢凍其の物であるが、而かも己が質性に違うてまで官吏と爲らざるべからざる道理無し、是の事を考ふれば病まざるを得ず、而かも嘗從人事、官と爲るも亦人間の事なりと解して、口腹自役、俸給は皆口腹の爲め、自己が自己を役するの愚を見る、今日に於て悵然として、平生の志と相反するを媿づ、猶望一稔、當斂裳宵逝、稔は年熟するを曰ふ、熟は一年一度なるが故に稔を以て年の代名詞とす、猶一年位は公事の爲め宵逝せんと思へども、宵逝は宵征と同じ、夜行なり、『毛詩』に肅肅宵征とあり、公事の爲め努力するの謂ひなり、然る處、其の妹にして程家に嫁したるが、武昌に於て死去したりと聞く、是の訃音を得るや、我が情は彭澤にはあらず、駿奔して已に柴桑に在るなり、遂に宵征の戒を破り、自免去職、諭旨免職の者より自免去職の者を見れば其れ何と謂ふや、督郵の爲め束帶を爲すを嫌うた事と、妹氏の逝去の事と、相合して以て辭職の念を早めしものなり、乙巳は安帝の義熙元年、公年四十一なり。

【大意】余が家貧、畊植するも自家用にすら足らず、而して幼稚即ち保護すべきもの多し、缾に儲粟なく、一家の生計を圓滿する、未だ其の術を見ず、親戚や友人は俸給生活せんことを勸む、此の勸告を容れんと欲するも、官吏と爲るの途なし、幸に四方奔走の人と爲り、諸侯と面晤するを得、諸侯は淵明の人物を愛す、而して陶家の叔父は、盡力の結果、淵明を以て小邑の長と爲す、時生憎風波が平穩ならず、心遠役を憚る、看よ彭澤は家を去る百里、太だ遠しとせず、且公田の利、聊か酒を爲るの便あり、乃ち之を求めて彭澤令と爲る、然るに頃者に及んで頻りに歸歟の情が起る、自分の質性は唯自然を好む、然るに官吏は出入往來一定の規則あり、頗る自然に背く、矯厲も我の嫌ふ所、是に於てか飢凍の苦痛を省みる遑なく、己が性に違すれば此の生命に關す、嘗て人事に從事するも、畢竟口腹自役するのみ、是に於て悵然として慷慨を發し、平生自ら志の誤る所を愧づ、而かも猶ほ公事の爲め努力して、裳を斂め宵逝せんとするも、不幸程氏が妹の死亡に遭ひ、乃ち一たび棺前に哭せんと欲するを以て、情は專ら此の方へ奔るに至る、已むを得ず公職を自免し去る、在官三月餘、其の事實に因つて我が心に順ひ、篇を命じて歸去來兮と曰ふ所以なり、

歸去來兮。田園將蕪胡不歸。既自以心爲形役。奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。
知來者之可追。實迷塗其未遠。覺今是而昨非。舟搖搖以輕颺。
風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。

歸去來兮、田園將に蕪せんとす胡ぞ歸らざる、既に自ら心を以て形の役と爲す、奚ぞ惆悵として獨悲しむ、已往の諫むべからざるを悟り、來者の追ふ可きを知る、實に塗に迷ふ其れ未だ遠からず、今は是にして昨は非なるを覺ゆ、舟搖搖として以て輕く颺り、風飄飄として衣を吹く、征夫に問ふに前路を以てす、晨光の熹微なるを恨む、

【注解】歸去來、林雲銘曰く、彭澤に就いて言へば、之を歸去と謂ひ、南村に就いて言へば、之を歸來と謂ふ、篇中思歸より以て家に到るに至る、步步敍明、故に合して之を言ひ、歸去來と曰ふ、うカヘンナンイザ」の和讀法は隨分古くから用ふるを以て今猶之に倣ふ、蕪は荒蕪、蕪は荓なり、胡は何と同じ、以心爲形役、『淮南子』に、是形神俱役者とあり、心は形の爲め役せられ、形は心の爲め役せらる、奚惆悵而獨悲、惆悵は悲哀の貌、形神俱役は人人の事なり、一人悲哀するに及ばず、已往、任官は已往なり、來者は歸去なり、迷塗未遠、今是昨非、行旅道塗に迷ふ、迷ふと雖も遠からず、早く回るべし、其の回る今日は是なり、迷うた昨日の非は問ふの要なし、搖搖は舟の水上を行く貌、飄飄は風の我が衣を吹く貌、前路の遠近を問ひ、或人曰く、或は水行、或は陸行、征夫は已に陸行に就いて、其の路を問ふなりと、是の說飾る是と爲す、晨光之熹微、李善曰く、熹は熙なり、熙は光明なり、又書注に、熹微日欲ㇾ暮也と、案ずるに二說共に非、光明の未だ盛んならざる形容を言ふ、晨光が已に盛なれば前路を問ふの要なし、旭光未だ盛ならず、色儚昧なるを以て前路を問ふなり、日暮を以て解するは何等の滑稽ぞ、

【大意】歸りなん、主人在さず田園の荒蕪知るべし、胡爲ぞ歸らざる、今日に至るまで心を以て形役と爲し、惆悵として獨悲むは何ぞ、而かも已往の事は是非共に諫むるも詮なし、唯來者を是れ愼むべし、實に塗に迷うたは迷うたが猶ほ深く迷ひ入らず、是に於てか、今は是にして昨は非なりしことを覺る、此の如く覺るに於ては舟は搖搖として輕く颺るを知る、風は飄飄として衣を吹くを感ず、陸行には征夫に前路の遠近を問ひ、晨光の未だ盛んならず、路の南北分明に知り難きを恨むなり、

乃瞻衡宇。載欣載奔。僮僕懽迎。稚子候門。三逕就荒。松菊猶存。攜幼入室。有酒盈罇。引壺觴以自酌。眄庭柯以怡顏。倚南窗以寄傲。審容膝之易安。園日涉以成趣。門雖設而常關。策扶老以流憩。時矯首而游觀。雲無心以出岫。鳥倦飛而知還。景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。

乃ち衡宇を瞻、載ち欣び載ち奔る、僮僕懽び迎へ、稚子門に候つ、三逕荒に就いて、松菊猶存せり、幼を攜へて室に入り、酒あり罇に盈つ、壺觴を引いて以て自ら酌み、庭柯を眄て以て顏を怡ばしむ、南窗に倚りて以て寄傲し、膝を容るるの安んじ易きを審らかにす、園日に涉つて以て趣を成す、門設けたりと雖も而かも常に關せり、策老を扶けて以て流憩し、時に首を矯げて游觀す、雲無心にして以て岫を出で、鳥飛ぶに倦んで還るを知る、景翳翳として以て將に入らんとす、孤松を撫して盤桓す、

【注解】已にして衡門屋宇を認め、我が家と知るや心は欣び足は奔る、僮僕は懽迎し、稚子は門に候つ、三逕は、淵明以前に、蔣詡、字は元卿が、舍中竹下に於て三逕を開く、此の三逕は良友以外の者は歩行を許さざるなり、主人稍久しく不在なりせば就荒、細君等は外庭の掃除をせざること古今同一なりと知らる、唯喜ぶは松菊は依然として猶存し、室内には酒あり、室外には庭柯あり、我を慰勞するに十分なり、寄傲は我より以外天地に上なきの意、審容膝之易安、『韓詩外傳』中に曰く、北郭先生が妻の曰く、今、駟を結び騎を列ぬるも、安んずる所は、膝を容るるに過ぎざるのみ、審かに此の事を思ふに、則ち須むる所、富貴にあらず、容膝亦安んずべきなり、園日渉、庭園は主人自ら手入れを爲す、日を經て趣向を成すに至る、關は閉すなり、策は策杖、矯は擧げてなり、雲無心以出岫、鳥倦飛而知還、舊注に曰ふ、雲は自然の氣、心意無うして以て山岫の中より出で、自ら喩ふ、心、事を營まずして、自ら縱逸することを爲すに、鳥は倦飛んで暮に故林に還る、亦猶人の日出でて作き、日入つて息ふがごとし、景は日影なり、翳翳は暗からんと欲する貌、盤桓は不進の貌と注して、此の處に佇立して他に行かざるなり、孤松を撫摩して佇立するを言ふ、

【大意】漸くにして我が衡宇を認む、載ち欣躍し、載ち奔喜す、僮子も僕從も懽び迎へ、稚子は門前に候つ、忽ち看る三逕の荒蕪、而かも松菊は猶は存す、稚子を攜へて室に入り、歸來を祝するに酒あり罇に盈つ、乃ち他人の酌を待たず、獨引して獨酌す、中庭の柯を眄て以て我が顏を怡ばせ、南窗に倚りて以て寄傲す、是に於て悟る、膝を容るるの室も我が一人の有なり、安んじ易きを審かにする、今日まで荒蕪したる庭園も手を入れる結果日に日に風趣を爲すに至る、門は設けたりと雖も常に關せり、俗人の來るを厭へばなり、時有り策に還つて以て流憩し、時に首を矯げ天を仰いで游觀すれば、雲は無心なる如くにして岫を出で、鳥は飛ぶに倦むを以て還るものの如し、已にして日影暗からんと欲するに逼る、孤松を撫して此に佇立する、

歸去來兮。請息交以絕游。世與我而相遺。復駕言兮焉求。悅親戚之情話。樂琴書以消憂。農人告余以春及。將有事于西疇。或命巾車。或棹孤舟。既窈窕以尋壑。亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮。泉涓涓而始流。善萬物之得時。感吾生之行休。已矣乎。寓形宇內復幾時。曷不委心任去留。

歸去來兮、請ふ交を息め以て游を絕たん、世と我と而かも相遺る、復駕せよ言兮焉ぞ求めん、親戚の情話を悅び、琴書を樂んで以て憂を消す、農人余に告ぐるに春の及ぶを以てす、將に西疇に事あらんとす、或は巾車に命じ、或は孤舟に棹す、既に窈窕として以て壑を尋ね、亦崎嶇として丘を經、木欣欣として榮に向ひ、泉涓涓として始めて流る、萬物の時を得るを善し、吾が生の行く休むを感ず、已矣乎、形を宇內に寓すること復幾時ぞ、曷ぞ心に委して去留に任せざる、

【注解】息交絕游する所以は、世上の談を避けるが爲めのみ、交を息めざるときは、世と相遺るる難ければなり、俗人や貴人は皆此の中に含む、駕言は『毛詩』の字面、今何等の深意あるにあらず、折角訪問したる客も駕して早く還り給へ、我は何等求むる所な

し、我は親戚と閑情話を爲し、又琴書を弄するのみ、西疇の事は卽ち畊作の事なり、農人は農事に赴く、我は時に巾車にて山行、時に孤舟にて水行、或は窈窕卽ち深長なる幽壑、或は崎嶇たる丘陵を跋渉して春日の樂しむべきを樂まん、木は欣欣たり、泉は涓涓たり、自然界の生意、此の如く其れ善し、此の萬物の得意の時に當り、吾生も今日の行休を得たるは亦以て自ら感ぜざるを得ず、巳矣乎は萬事を放擲するの言、寓形宇内復幾時、此の七字は善に奔る人と、惡に奔る人と二種の相盡を生ず、形を天地間に處する暫時なるを以て、此の間に於て四諦三昧を爲すべしとは、惡に奔る徒の言なり、暫時の間であるから德名を後に留めざるべからずとは、善に奔る人の言なり、今、委心任去留は何ぞ、善にして個人の善なり、竹林七賢の徒は大底此の實行者とす、然りと雖も、淵明の如きは放蕩に流るる自由にはあらず、我が身を汙衊させざることを以て終始一貫す、是れ善く人世を觀たる人なりと謂ふ可し、

【大意】歸りなん、請ふ俗人と交游を絶たん、俗人と我とは素より相遺る、我は駕して歸るに如かず、世に於て焉をか求めん、歸田後の事は如何、親戚の情話卽ち眞實の話は虛僞なし、悅ばざるを得ず、若し又憂を生ずるときは琴書以て樂みを求めん、畊作の時節は農人の來つて告ぐるあり、西疇今正に畊作すべき期なりと、或は巾車、或は孤舟、陸には窈窕たる壑を尋ね、又崎嶇たる高丘を攀登す、艸木は欣欣然として榮に向ひ、河泉は涓涓然として始めて流る、萬物の發生正に是れ得意の時なり、是の期に當りて吾も歸休したるは感何ぞ堪へん、已んぬるかな、形を宇内に寓する誰も長久の者無し、其の長久ならざるを知らば、去るも留まるも吾が心の任なるを可しとす、

胡爲乎遑遑欲何之。富貴非吾願。帝鄕不可期。懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。登東皐以舒嘯。臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡。樂夫天命復奚疑。

胡爲乎遑遑として何に之かんと欲する、富貴は吾が願にあらず、帝鄕は期す可からず、良辰を懷んじて以て孤往し、或は杖を植てて耘耔し、東皐に登りて以て舒ろに嘯き、清流に臨んで詩を賦す、聊か化に乘じて以て盡くるに歸す、夫の天命を樂んで復奚ぞ疑はん、

【注解】胡爲乎は其の從つて來る所を詰問するの詞と注して、俗語の「ソレハドウシテゾ」と云ふ意味、遑遑は皇皇と同じ、心不定の貌、『列子』に遑遑爾競二一時之譽一とあり、欲何之、淵明自身は安心立命決して心不定にあらざるも、假りに何に之くものぞと問を設けて云ふなり、乃ち答ふ富貴は吾が所願にあらず、帝鄕卽ち京都に官吏と爲るは亦期する所にあらず、只鄕里に在つて、良辰には孤往し、倦めば園圃を耘耔す、時に東皐、時に清流、或は舒嘯、或は賦詩、乘化、自然の變化に乘ずるなり、歸盡は性命の盡きるなり、天命は天の賦する所の命、凡そ窮通得失、何者か之を使むる有るが如きも、人力の能く爲す所にあらざる者、之を天命と曰ふ、天命を樂むは卽ち自然を樂むと同じ、此に信が確立する、擬ふの要なきなり、歐陽文忠曰く、晉に文章無し、唯陶淵明歸去來のみ、李公煥曰く、詩(毛詩四言)變じて騷(屈原)と爲り、騷變じて辭と爲る、皆歌ふ可きなり、辭則ち詩騷の聲を兼れ、尤も簡邃嵩なる者、漢の武帝、秋風辭一章を作る、三たび韻を易ふ、其の節短、其の聲哀、此れ辭の權輿か、淵明、彭澤の令を罷め、歸去來を賦す、而して自命して辭と曰ふ、人をして之を歌はしむるに迨び、頓挫抑揚、自ら聲調に協ふ、蓋し其の辭高甚、晉宋より下、之を追躡せんと欲するも能はず、然して「秋風辭」盡く楚辭を蹈襲す、未だ甚だ數暢せず、歸去來は則ち自ら機杼を出し、所謂首無く尾無く、終始く終無し、前歌にあらず、而して後辭にあらず、斷ぜんと欲して復た續き、作らんとして遽かに止む、洞庭鈞天と謂つて擠ならず、

霓裳羽衣と謂つて綺ならず、此れ其の先秦の世に超え、而して、之と軌を同じうする所以なり、林西仲曰く、此の文、騒の變體と爲す、騒は哀にして曲、此は直にして和、蓋し靈均、楚に於て宗臣たり、先生、晉に於て遺老たり、一は箕比たり、一は夷齊たり、處する所、故、同じからざるなり、陶澍曰く、先生の歸る、史に言ふ、肯て督郵に折腰せず、序に言ふ、妹の喪に因つて自免すと、竊に意ふ、先生何に託して去る、初め督郵を假りて名と爲す、文を屬ろに至り、又、其の説を狂とし、妹の喪に於て以て自ら晦ますのみ、其の實閔れむ晉祚の將に終らんとするを、深く知る時の爲す可からざるを、乃ち嚴栖谷隱、身を理亂の外に置き、庶はくは其の後凋の節を全くせんと、故に曰ふ景翳翳と、撫孤松と、帝鄕不期と、一篇の中三たび意を致す、特旨遠辭、測知し易からず、

【大意】 遑遑として何の處も之く必要も無きにあらずや、富貴も願にあらず、帝鄕に在住するも期する所にあらず、田園の良辰は以て孤往すべきのみ、而して或は杖を植てて耘耔し、或は東皐に登りて舒嘯し、或は清流に臨んで詩を賦し、乃ち自然の化に乘じて以て盡きるに歸す、已に天命を聞き之を樂む、復何の疑ふ所かあらん、

陶淵明集卷五 終

陶淵明集 卷六

桃花源詩 并記

桃花源の詩 并に記

晉太元中、武陵人捕魚爲業(漁人姓黃名道眞)、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹、芳艸鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行、欲窮其林、林盡水源、便得一山、山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹、纔通人、復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、有良田美池桑竹之屬、阡陌交通、雞犬相聞、其中往來種作、男女衣著、悉如外人、黃髮垂髫、竝怡然自樂、見漁人乃大驚、問所從來、具答之、便要還家、設酒殺雞作食、村中聞有此人、咸來問訊、自云先世避秦時亂、率妻子邑人來此絕境、不復出焉、遂與外人間隔、問今何世、乃不知有漢、無論魏晉、此人一一爲具言所聞、皆歎惋、餘人各復延至其家、皆出酒食、停數日辭

去。此中人語云。不足爲外人道也。既出得其船。便扶向路。處處誌之。及
郡下。詣太守說如此。（太守劉歆）太守卽遣人隨其往。尋向所誌。遂迷不復得
路。南陽劉子驥。高尚士也。聞之欣然親往。未果尋病終。後遂無問津者。

晉の太元中、武陵の人魚を捕ふるを業と爲す、溪に緣つて行き、路の遠近を忘る、忽ち桃花林に逢ふ、岸を夾む數百步、中に雜樹無し、芳艸鮮美、落英繽紛、漁人甚だ之を異しむ、復た前行して其の林を窮めんと欲す、林水源に盡く、便ち一山を得、山に小口あり、髣髴光有るが若し、便ち船を捨て口より入る、初め極めて狹く、纔に人を通ず、復た行くこと數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、良田美池桑竹の屬あり、阡陌交通し、雞犬相聞ゆ、其の中往來種作、男女衣著、悉く外人の如し、黃髮垂髫、竝んで怡然自から樂む、漁人を見て乃ち大に驚き、從つて來る所を問ふ、具に之に答ふ、便要家に還り、酒を設け雞を殺し食を作る、村中此の人有るを聞き、咸來つて問訊す、自ら云ふ先世秦時の亂を避け、妻子邑人を率ゐ、此の絕境に來り、復出でず、遂に外人と間隔す、問ふ今何れの世ぞ、乃ち漢あるを知らず、魏晉に論なし、此の人一一爲に具に聞く所を言ふ、皆歎惋す、餘人各の復延いて其の家に至る、皆酒食を出す、停ること數日辭し去る、此の中の人語つて云ふ、外人が爲め道ふに足らざるなり、既に出でて其の船を得、便ち扶けて路に向ふ、處處之を誌し、郡下に及び、太守に詣で說くこと此の如し、太守卽ち人を遣り其に隨つて往かしむ、向の誌す所を尋ぬ、遂に迷うて復路を得ず、南陽の劉子驥は高尚の士なり、之を聞いて欣然親ら往く、未だ果さず尋で病み終ふ、後遂に津を問ふ者無し。

【注解】桃花源詩并記は、桃花源記并序、又は桃花源記并詩に作る本あり、致ふるに、詩主にして記は客なれば、今、諸山に從つて題を定めたり、太元は東晉の第七主孝武帝の年號なり、丙子より丙申に至る二十一年間あれど、何年と云ふことは知るを得ず、武陵は縣名、淸朝に至るまで湖南省常德府、民國改めて酒陽縣乃ち是なり、桃花源も亦此の地と知るべし、繽紛は落英卽ち落花の飛ぶ形容、阡陌は東阡南陌と成語して、田間の道、又は市中の街を曰ふ、外人、漁人より見れば其風俗が本土人と異なる、黃髮は老人、垂髫は小兒、怡然は樂む貌、此人は漁人を指す、秦時より太元に至る、大凡そ六百年を經、間隔は往來斷絕なり、歎惋は驚歎嗟惋卽ちナゲクなり、不足爲外人道也、解釋次第で意義は種種に取れるが、要するに表面は外人に語る程の價値は無しとなり、側面は此の祕境を人間に洩してはならぬとなり、劉歆は晉書に傳なし、劉子驥は『晉書』（九十四）に傳あり、官光祿大夫、名は驎之、字は子驥、南陽の人、

嬴氏亂天紀。賢者避其世。
黃綺之商山。伊人亦云逝。
往迹浸復湮。來逕遂蕪廢。
相命肆農耕。日入從所憩。

嬴氏天紀を亂し、賢者其の世を避く、
黃綺商山に之き、伊人亦云に逝く、
往迹浸復湮、來逕遂に蕪廢す、
相命じて農畊を肆にし、日入つて憩ふ所に從す、

桑竹垂餘蔭。菽稷隨時藝。
春蠶收長絲。秋熟靡王稅。
荒路曖交通。雞犬互鳴吠。
俎豆猶古法。衣裳無新製。
童孺縱行歌。斑白懽游詣。
草榮識節和。木衰知風厲。
雖無紀曆誌。四時自成歲。
怡然有餘樂。於何勞智慧。
奇蹤隱五百。一朝敞神界。
淳薄既異源。旋復還幽蔽。
借問游方士。焉測塵囂外。
願言躡輕風。高擧尋吾契。

桑竹餘蔭を垂れ、菽稷時に隨つて藝う、
春蠶長絲を收め、秋熟王稅靡し、
荒路曖として交通し、雞犬互に鳴吠す、
俎豆猶古法、衣裳新製無し、
童孺縱に行歌し、斑白懽んで游詣す、
草榮えて節の和を識り、木衰へて風の厲しきを知る、
紀曆誌無しと雖も、四時自から歲を成す、
怡然餘樂あり、何に於て智慧を勞せんや、
奇蹤隱れて五百、一朝神界敞く、
淳薄既に源を異にす、旋復幽蔽に還る、
借問す游方の士、焉んぞ塵囂の外を測らん、
願うて言に輕風を躡み、高擧吾が契を尋ねん、

【注解】嬴氏は秦始皇の姓、天紀は曆數なり、尙書に出づる文字、始皇が儒生を坑に埋めし事なぞは天紀を擾亂したるなり、生命を全うせんが爲め賢者は多く世を遁れて山中に往く、黃公や綺公は商山に遁入して遂に出でず、伊人は黃公や綺公を指す、伊人も亦逝いて世に在らず、往迹は昔より以前を一括して言ふ、湮は多義を含む、今淺沈卽ち「シヅム」なり、湮は湮塞卽ち「フサガル」なり、來逕遂蕪廢、秦を避け始めて此に來りし時の逕は荒蕪廢滅せるなり、相命は鄕人相互に命ずるなり、肆は事肆、農耕を唯是れ事とす、肆を肄に作る本あり、肄は習なれば義亦通ず、日入從所憩、落日と共に各の家に還り休憩すとなり、堯の世、擊壤歌あり、日出而作、日入而息、今此の意を用ふ、餘蔭は桑や竹の發育の善きを言ふ、菽は豆なり、稷は粟なり、藝は種うるなり、春蠶も上乘なり、秋熟も亦上乘なり、而かも公稅の納入すべき義務無し、曖は影の暗き形容、外人は入る能はず、唯鄕人のみ交通する、雞は喔喔と鳴き、犬は猥猥と吠ゆ、俎豆は支那古代の禮器、祭祀に用ふる具、猶古法、俎の造樣は時代に依つて沿革あるも、要するに秦以前の法を守るなり、而して衣裳も舊時代の製法、晉の衣裳とは異る、童孺は小兒、斑白は頭髮が黑白斑なり、卽ち老人の代名詞、游詣は意の儘に鄕中を往來して游憧す、詣は往なり、草榮識節和、時節偕和すれば草木繁榮す、乃ち春、木衰知風厲、西風涼厲すれば草木凋衰す、乃ち秋、四時、春夏秋冬は自から歲の舊新變代を成す、紀も曆も必要は無きなり、於何、何事に於ても智慧を勞する必要も亦無きなり、奇蹤は此の桃源を指す、秦時より以來五百餘年も隱れて外間に知れざるなり、一朝敞神界、五百餘年外間と交通を絕ちしも、一人の漁人の爲め忽ち其の神界が世上に敞開するに至る、而かも此の桃源中の人は淳眞なり、世上の人は浮薄なり、本源既に異る、旋復還幽蔽、漁人は此の中に永住する能はずして還り、更に之を訪はんと欲する者は洞門幽蔽して入る能はず、借問は淵明が游方士に問ふなり、漁人以下劉子驥に至るまで總て游方士なり、焉測塵囂外、彼の人達は桃源が塵囂の外の異地であることを測るの明無しとなり、願言は『毛詩』の字、躡輕風、塵囂中の人は輕風を躡む能はず、但高尙の士のみ之を躡む、是を以て淵明は其の高尙の士たらんとの希望なり、高擧は天上に上るの謂にあらず、塵外に出でんとの意、吾契は我と同じく志を高尙に寄する人を尋ねん、其の人は必ず此の桃源中に游ぶことを得るの人なり、桃花源詩、或は是れ寓意、或は實事と論ずる者あり、余謂ふ地獄極樂の有無を論ずる者と一般、論ずる者の愚や及ぶべからず、淸の沈歸愚曰く、此れ卽ち羲皇の想なり、必ず其の有無を辨ずるは、殊に多事と爲

す、溫謙山曰く、桃花源記此れを借りて胸次を發揮す、眞に其の事を述ぶるにあらず、大抵漁人俗に近づかず、故に言を漁人に託するのみ、

【大意】秦の始皇が天の紀綱を紊亂してより、天下の賢者は皆避け逃る、黄公も綺公も去つて商山に入り、其の商山に入りし人も今は亡し、乃ち秦より晉に至るまで道は塞がる、秦時に此地に始めて來りし徑は廢滅し、內外往來を絕つ、邨人は互に命じて唯農事を務む、落日には家に還り憩ふ、蒼蒼たる桑竹は餘蔭を垂れ、靑靑たる菽稷は時節を誤らず藝う、春蠶も佳良なり、秋熟するも公稅の納むる無し、荒路曖たれども邨人は自由に交通する、雞と犬とは互に鳴き吠ゆ、而して祖先を祭るには猶は秦以前の禮法を用ひ、衣裳も秦以前の風を改めず、童子は互に行歌し、老人は互に游詣す、草色の榮を見て春なるを知り、樹葉の落つるを見て秋の晚なるを知る、紀曆は有る無しと雖も、時節は自然と知る、怡然として餘樂あり、別に智慧を勞する必要なし、此の奇蹤は隱れて人間と通せざること五百年、一朝にして此の神仙の境界を明白にしたるも、神界の淳と人界の薄と已に源異る、人界の人は人界に還らざるを得ず、因つて問ふ四方に山水を訪ふの士、焉んぞ測知せんや塵囂外に此の如き靈境あるを、願ふことなれば我も輕風を躡んで、此の塵外の境に我と同志の人を尋ねん、

【餘論】淸潭曰く、詩としては卷四を以て終とす、而して今此の篇を卷六と爲すは澍本が六に收むればなり、澍は記として詩と爲さず、詩と爲したるは溫謙山に從へばなり、

晉故西征大將軍長史孟府君傳

晉の故西征大將軍長史孟府君の傳

君諱嘉。字萬年。江夏鄂人也。曾祖父宗。以孝行稱。仕吳司馬。祖父揖。元康中。爲廬陵太守。宗葬武昌新陽縣。子孫家焉。遂爲縣人也。君少失父。奉母二弟居。娶大司馬長沙桓公陶侃第十女。閨門孝友。人無能間。鄉閭稱之。沖默有遠慮。弱冠儔類咸敬之。同郡郭遜。以清操知名。時在君右。常歎君溫雅平曠。自以爲不及。遜從弟立。亦有才志。與君同時齊譽。每推服焉。由是名冠州里。聲流京邑。太尉潁川庾亮。以帝舅民望。受分陝之重。鎭武昌。幷領江州。辟君部廬陵從事。下郡還。亮引見。問風俗得失。對曰。嘉不知。還傳當問從吏。亮以塵尾掩口而笑。諸從事既去。喚弟翼語之曰。孟嘉故是盛德人也。君既辭出外。自除吏名。便步歸家。母在堂。兄弟共相懽樂。怡怡如也。旬有餘日。更版爲勸學從事。時亮崇脩學校。高選儒官。以君望實。故應尚德之舉。大傳河南褚褒。簡穆有器識。時

爲豫章太守。出朝宗。亮正旦大會州府人士。率多時彥。君在坐。次甚遠。褒問亮。江州有孟嘉。其人何在。亮云在坐。卿但自覓。褒歷觀。遂指君。謂亮曰。將無是耶。亮欣然而笑。喜褒之得君。奇君爲褒之所得。乃益器焉。舉秀才。又爲安西將軍庾翼府功曹。爲江州別駕。巴丘令。征西大將軍譙國桓溫參軍。君色和而正。溫甚重之。九月九日。溫游龍山。參佐畢集。四弟二甥咸在坐。時佐吏竝著戎服。有風吹君帽墮落。溫目左右及賓客。勿言。以觀其舉止。君初不自覺。良久如廁。溫命取以還之。廷尉太原孫盛。爲諮議參軍。時在坐。溫命紙筆。令嘲之。文成示溫。溫以著坐處。君歸見嘲。笑而請筆作答。了不容思。文辭超卓。四座歎之。奉使京師。除尚書刪定郎。不拜。孝宗穆皇帝聞其名。賜見東堂。君辭以腳疾。不任拜起。詔使人扶入。君嘗爲刺史謝永別駕。永會稽人。喪亡。君求赴義。路由永興。高陽許詢。有雋才。辭榮不仕。每縱心獨往。客居縣界。嘗乘船近行。適逢君過。歎曰。都邑美士。吾盡識之。獨不識此人。唯聞中州有孟嘉者。將非是乎。然亦何由來此。使問君之從者。君謂其使曰。本心相過。今先赴義。尋還就君。及歸。遂止信宿。雅相知得。有若舊交。還至轉從事中郎。俄遷長史。在朝隤然。仗正順而已。門無雜賓。嘗會神情獨得。便超然命駕。逕之龍山。顧景酣宴。造夕乃歸。溫從容謂君曰。人不可無勢。我乃能駕御卿。後以疾終於家。年五十一。始自總髮。至于知命。行不苟合。言無夸矜。未嘗有喜慍之容。好酣飲。逾多不亂。至於任懷得意。融然遠寄。傍若無人。溫嘗問君。酒有何好。而卿嗜之。君笑而答曰。明公但不得酒中趣爾。又問聽妓。絲不如竹。竹不如肉。答曰。漸近自然。中散大夫桂陽羅含。賦之曰。孟生善酣。不愆其意。光祿大夫南陽劉耽。昔與君同在溫府。淵明從父太常夔。嘗問耽。君若在。當已作公不。答曰。此本是三司人。爲時所重如此。淵明先親。君之第四女也。凱風寒泉之思。實鍾厥心。謹按採行事。撰爲此傳。懼或乖謬。有虧大雅君子之德。所以戰戰兢兢。若履深薄云爾。贊曰。

孔子稱進德脩業以及時也。君清蹈衡門則令聞孔昭。振纓公朝則德音允集。道悠運促。不終遠業。惜哉。仁者必壽。豈斯言之謬乎。

君諱は嘉、字は萬年、江夏鄂の人なり、曾祖父宗、孝行を以て稱せらる、吳に仕へて司馬たり、祖父揖、元康中、廬陵太守と爲る、宗、武昌新陽縣に葬る、子孫焉に家す、遂に縣人と爲る、君少にして父を失ひ、母を奉じ二弟と居る、大司馬長沙桓公陶侃の第十女を娶る、閨門孝友、人能く間する無し、鄉閭之を稱す、冲默遠慮あり、弱冠儔類咸之を敬す、同郡の郭遜、淸操を以て名を知らる、時に君右に在り、常に君が溫雅平曠を歎す、自から以て及ばずと爲す、遜從弟立、亦才志あり、君と時を同じくし譽を齊しくす、每に推服す、是に由つて名州里に冠たり、聲京邑に流る、太尉潁川の庾亮、帝舅民望を以て、分陝の重きを受け、武昌を鎭し、幷に江州を領す、君を部廬陵從事に辟す、下郡より還る、亮引見し、風俗得失を問ふ、對へて曰く、嘉は知らず、傳に還り、當に從吏に問ふべし、亮塵尾を以て口を掩うて笑ふ、諸從事既に去る、弟翼を喚んで之に語つて曰く、孟嘉故是れ盛德の人なり、君既に辭し外に出づ、自ら吏名を除し、便步家に歸る、母堂に在り、兄弟共に相懽樂し、怡怡如たり、旬有餘日、版を更め勸學從事と爲る、時に亮學校を崇脩し、儒官を高選す、君の望實を以て、故に尙德の擧に應す、大傅河南の褚裒、簡穆器識あり、時に豫章太守たり、出でて朝宗す、亮正旦大いに州府の人士を會す、率多時彥なり、君坐に在り、次甚だ遠し、裒、亮に問ふ、江州に孟嘉あり、其の人何くに在る、亮云ふ、坐に在り、卿但自ら覓めよ、裒歷觀し、遂に君を指し亮に謂つて曰く、將是なる無からんや、亮欣然として笑ふ、裒が君を得たるを喜び、君が裒の得る所と爲るを奇とし、乃ち益す焉を器とす、秀才に擧げられ、又安西將軍庾翼府の功曹と爲る、江州別駕巴丘令征西大將軍譙國桓溫の參軍と爲る、君色和にして正、溫甚だ之を重んず、九月九日溫龍山に游ぶ、參佐畢集まる、四弟二甥咸坐に在り、時に佐吏竝に戎服を著く、風あり君が帽を吹いて墮落す、溫左右及び賓客を目し、言ふこと勿からしめ、以て其の擧止を觀る、君初め自から覺らず、良久しうして廁に如く、溫命じて取つて以て之に還さしむ、廷尉太原の孫盛、諮議參軍と爲る、時に坐に在り、溫紙筆を命じ之を嘲らしむ、文成り溫に示す、溫以て坐處に著く、君歸りて嘲けらる、笑うて筆を請ひ、答を作る、了に思を容れず、文辭超卓、四座之を歎す、使を京師に奉ず、尙書刪定郎に除せらる、拜せず、孝宗穆皇帝其の名を聞き、東堂に賜見す、君辭するに脚疾拜起に任へざるを以てす、詔して人をして扶け入らしむ、君嘗て刺史謝永が別駕と爲る、永は會稽の人、喪亡、君義に赴くを求む、路永興に由る、高陽の許詢儁才あり、榮を辭して仕へず、每に縱心獨往し、縣界に客居す、嘗て船に乘り近行す、適ま君が過ぐるに逢ふ、歎じて曰く、

都邑の美士、吾盡之を識る、獨り此の人を識らず、唯中州孟嘉なる者あるを聞く、將是にあらざるか、然れども亦何に由つて此に來る、君の從者に問はしむ、君其の使に謂つて曰く、本心相過ぐ、今先づ義に赴き、尋で還君に就かん、歸るに及んで、遂に止まつて信宿し、雅相知り得、舊交の若きあり、還り至り從事中郎に轉ず、俄に長史に遷る、朝に在りて隤然正順に仗るのみ、門に雜賓無し、嘗て神情獨得に會し、便ち超然駕を命じ、逕ちに龍山に之く、景を顧て酣宴し、夕に造りて乃ち歸る、溫從容君に謂つて曰く、人勢ひ無かるべからず、我乃ち能く卿を駕御す、後疾を以て家に終る、年五十一、始め總髮より知命に至るまで、行苟合せず、言夸矜無し、未だ嘗て喜慍の容あらず、好んで酣飲し、逾よ多く亂れず、任懷得意に至る、融然遠寄、傍人無きが若し、溫嘗て君に問ふ、酒何の好きあつて、卿之を嗜むや、君笑つて答へて曰く、明公但酒中の趣を得ざるのみ、又問ふ、妓を聽く、絲は竹に如かず、竹は肉に如かず、答へて曰く、漸く自然に近し、中散大夫桂陽の羅含之を賦して曰く、孟生善酣、其の意を愆たず、光祿大夫南陽の劉耽、昔君と同じく溫が府に在り、淵明が從父太常夔、嘗て耽に問ふ、君若し在らば、當に已に公と作るべきや不や、答へて曰く此れ本是れ三司人、時の重んずる所と爲ること此の如し、淵明が先親は君が第四女なり、凱風寒泉の思、實に厥の心に鍾まる、謹んで行事を按採し、此の傳を撰爲す、或は乖謬、大雅君子の德に虧くるあるを懼る、戰戰兢兢深薄を履むが若き所以と爾か云ふ、贊に曰く

孔子德を進め業を脩め以て時に及ぶを稱す、君衡門に清蹈せる則は、令聞孔だ昭か、纓を公朝に振ふ則は、德音允に集る、道悠に運促り、遠業を終らず、惜しい哉、仁者必ず壽、豈斯言之謬るか、

【注解】江夏鄂は今の湖北省武昌縣なり、曾祖父は和語の「ヒヂイ」なり、司馬は官名、周の時六卿の一、軍旅の事を掌る、祖父は「ヂイ」なり、宗と揖とは名、元康は晉の惠帝の年號、紀元九年に至る、太守は我が邦今日の知事、大司馬は大司徒、大司空と竝び三公と稱せらる、人無能間、間は間隙、又は間奮、閨門が謹嚴なるを以て他人が中傷する間隙無きなり、冲默は虛冲寡默、無駄口を聞かざるなり、弱冠、二十歲前後、在君右、郭遜は孟嘉より先輩なりしなり、而かも嘉が溫雅平曠の人と爲りを賞歎する、從弟は「イトコ」、立は名、郭遜郭立の二兄弟共に嘉に推服する、太尉は秦の官名、正一品にして後漢の代、司徒、司空と之を三公とす、潁川は地名、庾亮が生地を曰ふ、帝舅、成帝の穆皇后は卽ち庾亮が姉なり、亮は帝に於て舅なり、受分陝之重は大任の重きを受くるの意、何孟春曰く、袁煥が曹植（魏の曹子建）に與ふる書に、君公與周公受分陝之任也とあり、假武昌、蘇峻が亂を爲せしは庾亮實無しとせず、是を以て峻を平げて後、亮自から出でて武昌を假す、江州、荊州の軍事を都督したるなり、卽ち嘉を召辟して從事とす、從事は佐吏の稱、別駕、治中、主簿、功曹は皆是れ從事なり、風俗得失、下郡に於ける風俗等を問ふ、還傳は宿舍に還り、以て嘉が從吏に問ふべしとなり、從事としての責任觀念なぞは無きなり、是に於て亮が笑ふ所以、麈尾は印度より傳來して、漢土亦之あり、互塵の尾を以て製す、拂子と同形の具、自除吏名、何孟春と李公煥との二本には名の字を脫せり、非なり、名の字ある方善し、恰恰は和樂の形容、版は戶籍なり、名籍なり、官の役名を罷めたるなり、倘德之擧は嘉が德を倘んで之を推擧して以て勸學從事と爲せしなり、大傅、周の時、太師、太傅、太保を以て三公と定む、北魏の時に之を三師と云ふ、河南は地名、褚裒は康獻皇后の父にして、字は季野、簡穆有器識、裒が人品の超凡なるを云ふ、朝宗、朝廷に出仕する、率多の二字にて「オホムネ」と訓む、時彥、現時の俊

彥、太甚遠、褚褒と孟嘉と坐席に大分の差あり、而かも褒は嘉を的指せしなり、秀才の役に擧げらる、功曹は我が今日の書記の如き役、別駕も從事なり、桓溫、字は元子、晉書（卷九十八）叛逆傳に出づ、九月九日は重陽の佳節、參佐は參謀官、戎服は兵服、令嘲之、嘉が落帽を知らざりしことを溫が孫盛に命じて、嘲笑の文を作らしむ、了不容思、嘉が嘲笑に酬ゆるの文を爲るに遲疾なるを云ふ、孝宗穆皇帝は康帝卽ち成帝の子、君求赴義、謝永は舊恩誼ある人、其の亡を聞く、往いて之を哭せんと欲するなり、路は會稽に赴く順路なり、永興は縣名、現今湖南の衡陽道なり、許詢は晉書に傳なし、隱君子なること知るべし、縱心獨往、陋俗と伍せず、自由放浪す、嘉が會稽に赴く途次、此の隱君子に逢ひしなり、信宿、一宿以上を信宿と云ふ、嘉が許詢の家に二三宿せしなり、新知と雖も舊交と異ならず、從事中郎も長史も官名、隤然は『易』に夫坤隤然示㆓人簡㆒矣とあり、和柔の貌を云ふ、傲然の反對、仗正順、正當の道に憑仗のみ、無雜賓は惡黨や陋俗とは交通せざるの謂ひ、神情獨得、興懷が湧きしなり、迺は直なり、觸景は風景を四顧して以て酣宴する、造は至なり、夕陽に至りて駕を回らすなり、從容は「ユッタリ」の意、駕御卿、桓溫は奸兇の徒なり、奸兇なりと雖も、大將は大將なり、多數の英雄を駕御せざるべからず、而して孟嘉の如き人物を駕御し得たるを自負して云ふ、參軍殷浩は一代の人物なり、而かも溫は浩を輕んじ、嘉を重んず、嘉が人間に慾無ければなり、總髮は童子、知命は五十、行不苟合、善惡の區別無しに他人と雷同せざるなり、言無夸矜、夸は「オゴル」なり、矜も亦「ホコル」なり、夸邁驕矜は小人の態、君子は爲さず、喜と慍とを見はすは、修養不足の人なり、大人君子は決して喜慍の容を示さざるなり、酒を飲むこと愈よ多く、而かも不亂の態度を爲す、而かも眼中、王者無し、王侯無し、傍若無人、天地の間、忌憚する所無し、漸近自然、溫が酒に對する問や良とに愚問、答ふるに足らず、但絲竹の音は肉味の美に如かずとの言や、是れは自然を得たるの間なりとなり、中散大夫は正五品上の官、光祿大夫は從二品の官なり、劉耽は晉書に劉惔が父、官晉陵太守とあるのみ、劉耽と孟嘉と淵明が從父「チヂ」の聟と此の三人が溫の幕僚として一處に在りしなり、君若在、作公、聟が耽に問うて曰く、嘉が若し今日まで存命ならば、已に三公の位に昇りしなるべきかと、耽が答は、本是三司人、此人は本より三公と爲るべき人物なりとなり、所重、嘉が時人の爲め重んぜられずんば、耽宜此の言を吐かんや、淵明が先親は嘉が第四女、緬めて姻戚として近きものなり、凱風は『毛詩』衞風の篇名、七子が能く孝道を盡くし、以て其の母を慰めたるを美めたる詩、寒泉も『毛詩』の語、爰に寒泉あり、浚の下に在り、子七人あり、母氏勞苦す、淵明が母氏をして勞苦せしめ、子たる我は孝道の闕けたるを思ひ、厥心に感慨が極まるなり、深薄、深淵と薄氷となり、水の深きに入り、氷の薄きを踏むごときの意、孔子進仕儒業の事、皆論語より出づるの語、清節は其の志を高尚にすること、衡門は貧者の門、朱門の反對、令聞は善名が聞ゆるなり、孔昭は、嘉の善名は誰も彼も皆知るなり、振纓公朝、衡門を出でて朝廷の役人と爲る、纓は冠の紐なり、役人になれば役人としての德音が允集する、衆の仰ぐ所と爲り、排斥なぞ受けざるなり、道悠運促、嘉が求めんと欲する道は悠遠、而かも運命は促る、不終遺業、其の志す所は遂げず、五十一を以て歿するは惜哉と歎ずるなり、仁者必壽は、孔子の稱する所の語、而かも嘉の如く壽ならず、斯言之謬乎、疑はざるを得ざるを以て、謬乎と歎聲を漏らす所以、堂堂千有餘言、孟嘉の人品を詳敍して、毫髮の遺憾無し、六朝の文にして此の如きあり、後世韓愈も亦以て儀する所無かるべし、容齋隨筆に嘉の短命は酒の累する所なりと斷ず、或は然るか、然らば天壽にあらずして強ひて自から壽を損せしものなり、斯言は遂に謬にあらざるなり、

五柳先生傳

五柳先生の傳

先生不知何許人也。亦不詳其姓字。宅邊有五柳樹。因以爲號焉。閑靖少言。不慕榮利。好讀書。不求甚解。每有會意。便欣然忘食。性嗜酒。家貧不能常得。親舊知其如此。或置酒而招之。造飮輒盡。期在必醉。既醉而退。曾不吝情去留。環堵蕭然。不蔽風日。短褐穿結。簞瓢屢空。晏如也。常著文章自娛。頗示己志。忘懷得失。以此自終。贊曰。

黔婁有言。不戚戚於貧賤。不汲汲於富貴。極其言。茲若人之儔乎。酣觴賦詩。以樂其志。無懷氏之民歟。葛天氏之民歟。

先生は何許の人なるかを知らざるなり、亦其の姓字を詳かにせず、宅邊に五柳樹あり、因つて以て號と爲す、閒靖言少く、榮利を慕はず、好んで書を讀み、甚解を求めず、會意ある每に、便ち欣然食を忘る、性酒を嗜む、家貧常に得る能はず、親舊其の此の如きを知り、或は置酒して之を招く、造れば飲み輒ち盡くす、期必醉に在り、既に醉うて退く、曾て情を去留に吝にせず、環堵蕭然、風日を蔽はず、短褐穿結し、簞瓢屢ば空しきも、晏如たり、常に文章を著し自から娛み、頗く己が志を示す、懷を得失に忘れ、此を以て自ら終ふ、贊に曰く、黔婁言へることあり、貧賤に戚戚たらず、富貴に汲汲たらず、其の言を極むるに、茲若き人の儔か、酣觴詩を賦し、以て其の志を樂しむ、無懷氏の民か、葛天氏の民か、

【注解】何許は何處と同じ、閒靖の靖は竫と同じ、竫は靜に同じ、先生の性質「シヅカ」を好むなり、不求甚解、書は讀むを主とし、解を主とせず、每有會意、若し書中の眞旨を解得したる時は、欣然に堪へずして食を忘るるに至る、造は至るなり、馳走の酒を飲み盡すなり、醉を取れば足る、恡は吝なり、惜なり、去留共に戀戀たらざるなり、環堵は『禮』に出づる語、儒に一畝の宮、環堵の室あり、堵は長一丈、高さ一尺、而して環一堵を方丈と爲す、其の貧を言ふ、蕭然は室に長物無きの謂ひなり、不蔽風日、風も日も防ぐ備へなし、短褐は賤者の服する所、簞瓢屢空、瓢中に酒を闕くこと屢ばなり、晏如、而かも煩悶する態なし、文章は己志を敍し以て自娛するのみ、得失利害は眼中に無し、此の如くにして生を終らんとなり、黔婁は『通志』に出づ、古の賢士、或は曰ふ齊の隱士、貧甚し、歿して衾、體を蔽はず、此の賢士の言に、戚戚は『論語』に小人長戚戚とあり、憂を形容す、五柳先生は貧賤を憂へざるなり、汲汲は速かならんと欲する形容、五柳先生は富貴たらんことに骨を折らざるなり、以上の二語十二字は黔婁の言を借用して以て五柳先生自から謂ふ、極其言、五柳の平常言ふ所を黔婁が言ふ所に較すれば、殆ど是れ同一種の人なるか、無懷氏は上古の帝、其の民、食を甘んじ、居を樂しみ、土を懷ひ、生を重んじ、雞犬の聲相聞え、民老死に至るまで、相往來せず、之を無懷氏の民と謂ふ、葛天氏も上古の帝、其の治世言はずして信じ、化せずして行はる、五柳先生の人品淸高、以て想見するに足る、而して好讀書以下十六字は、千古讀書法の祕訣にして、達人の讀書は皆是れなり、古人曰ふ、甚解を求むるときは穿鑿に渉る、會意するときは章句に死せずと、謂ふ可し、五柳先生は萬古の師なりと、

讀史述九章

余讀史記有所感而述之

讀史述九章

余、史記を讀み、感ずる所有りて之を述ぶ、

夷齊

夷齊

二子讓國。相將海隅。
天人革命。絕景窮居。
采薇高歌。慨想黃虞。

二子國を讓り、海隅に相將ゆ、
天人命を革め、絕景に窮居す、
薇を采りて高歌し、黃虞を慨想す、

貞風淩俗。爰感懦夫。　　貞風俗を淩ぎ、爰に懦夫を感ぜしむ、

【注解】夷は伯、齊は叔、孤竹君の子なり、父叔齊を後嗣と爲さんと欲す、父卒して叔は伯に讓る、伯は父の命なりとして逃る、叔も亦逃る、國人其の中子を立つ、是に於て伯叔相將ゐて西伯昌の國に往く、海隅は遠方を意味するのみ、西伯昌は今日の陝西省地方より起りしなれば寧ろ山にて海にはあらず、天人革命、天人が命を革むと云ふは國が改變したと云ふことなり、紂が天命を承けて王たりしものが、武王と稱する人の爲めに殷の國名が周と革まりたりとなり、臣たりし周が、君たりし殷を伐つは背義なりと諫めたる者は大なる天下に夷齊の二人のみ、而かも其の諫は用ひられざりしを以て、絶景窮居、二人は周の粟を食ふは恥なりとして遂に西山の絶景に窮居す、西山卽ち首陽山に於て采薇以て之を食ひ以て高歌す、其の歌に曰く、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏、忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、彼の西山に登り、其の薇を采る、暴を以て暴に易へ、其の非を知らず、神農虞夏、忽焉として沒す、我安くに適歸せん、于嗟命の衰へたる、歌の意、神農氏も虞氏も夏后氏も、皆禮義の上に於て、禪讓して位を傳ふるもの、今日に至るまで其の君を弑する者なし、然るに其の禪讓の事、今日は忽焉として沒し、君臣爭奪の世に逢ふ、何ぞ生を貪るを用ひん、是の時に逢ふは、我が命の衰へたるなりと悲むなり、貞風淩俗、二子の貞風は千年萬年に羣俗を淩駕す、懦夫は俗語の「意氣地ノ無イ男」此の二子の貞風を聞かば意氣地の無い男でも猶ほ感憤するに至るとなり、懦は柔弱の義、（史記列傳第一）

【大意】伯の夷と叔の齊とが國主と爲ることを互に受けず、是に於て其の行動を共にし、海隅に走る、是の時に當り、殷と周とが戰うて、殷が亡び、周が興るの革命を見る、夷齊の二人は君臣の道を說いて諫めしも用ひられざるを以て絶景の窮居に處す、此の地に於て薇を采つて食ひ高歌し、世の衰へたるを悲しみ、黃虞の世を慨想し、遂に餓死して周の粟を食はず、其の貞烈の風、羣俗を淩ぎ、千秋萬古懦夫をも感ぜしむるの概あり、

箕子

去鄉之感。猶有遲遲。　　鄉を去るの感、猶ほ遲遲たるあり、

矧伊代謝。觸物皆非。　　矧んや伊代謝し、觸物皆非なるをや、

哀哀箕子。云胡能夷。　　哀哀たる箕子、云胡ぞ能く夷げん、

狡童之歌。悽矣其悲。　　狡童の歌、悽たり其れ悲し、

【注解】箕子は殷の太師（太傅、大保と三公と曰ふ、而して太師は首位に居る）なり、紂王が無道なるを痛諫して反つて囚はる、佯狂して奴と爲る、周武、殷を滅ぼす、箕子、周の臣たるを欲せず、五千人を率ゐて、之を朝鮮に避く、以て朝鮮の君主と爲る、鄉土を去るに臨み、何ぞ感慨に勝へざらん、遲遲として行き進まざる所以、單に羇游ならば、遠地も辭せず、國家の代謝に當つての遷移、日に觸るるの物、一一非ならざるは無し、而かも時運を云胡（如何と同じ）、箕子の力之を平夷すべきにあらず、後、周に朝し、殷の故墟を過ぎ、宮室毀壞し、禾黍を生ずるを感じ、之を傷む、哭せんと欲するは不可なり、泣かんと欲すれば婦人に近し、乃ち麥秀詩を作り以て之を歌ふ、曰く、麥秀漸漸兮、禾黍油油、彼狡童兮、不與我好兮、（麥秀漸漸、禾黍油油、彼の狡童、我と好からず、）此の狡童歌、千秋の下餘恨ありとなり、（史記箕子世家）

【大意】殷の箕子は、殷が周の爲め亡ぼされ、周臣と爲らざれば、鄉土を去らざる可からず、去るに

臨んで感慨深ければ、足は遲遲として前まず、尋常の旅行でも鄕土を離るるは遲遲たるに、矧して伊國家の代謝に會うて、見聞に觸れる物皆非ならざるは無きをや、嗚乎、哀哀たる箕子よ、卿の力にして如何ぞ能く爽かにせん、箕子が作れる狡童歌を讀む、其の調や悽、其の音や悲し、

管鮑

知ㇾ人未ㇾ易。相知實難。　人を知る未だ易からず、相知實に難し、

澹美ニ初交ニ。利乖ニ歲寒ニ。　澹初交を美とするも、利歲寒に乖く、

管生稱心。鮑叔必安。　管生稱心、鮑叔必ず安んず、

奇情雙亮。令ㇾ名俱完。　奇情雙び亮か、令名俱に完し、

【注解】管仲と鮑叔牙、管仲常に言ふ、我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なり、太史公曰く、天下、管仲の賢を多とせず、而して鮑叔の人を知るを多とす、相知實難は前句と意は同じ、字異るのみ、澹は俗語の「アッサリ」に當る、美初交、如何に初交の美なるものも、甲は富貴と爲り、乙は貧賤と爲る場合には段段疎遠となる、利乖歲寒、松竹の如く歲寒益す堅固なる交を見るは其の人少し、利害の觀念が增長すればなり、管生稱心、鮑叔必安、管仲曰く、吾始め困する時、嘗て鮑叔と賈す、(二人共同の商と爲る)財利を分つて多く自ら與ふ、鮑叔、我を以て貪れりと爲す、我が貧を知ればなり、吾嘗て鮑叔の爲め事を謀る、而して更に窮困す、鮑叔我を以て愚と爲す、時に利不利あるを知ればなり、吾嘗て三たび仕へ、三たび君に逐はる、鮑叔、我を以て不肖と爲す、我が時に遭はざるを知ればなり、吾嘗て三戰三走す、鮑叔、我を以て怯と爲す、我が老母あるを知ればなり、太史公曰く、鮑叔既に管仲を進め、身を以て之に下る、(管仲の下位と爲る)子孫世齊に祿し、封邑を有つ者、十餘世、常に名大夫と爲る、是れ即ち奇情雙亮、令名俱完なる所以なり、今淵明が管鮑を思ふ所以は、是の時に此の如きの良友無きを慨すればなり、

【大意】人が人を知る、實に容易にあらず、知己として許す人は又更に難し、凡そ尋常人は初交は甚だ澹美なるが如きも、利害に因つて歲寒には乖く者多し、管生と鮑叔とは、必ず稱心、必ず必安、二人の奇情、明亮にして暗き所無し、友としての令名俱に完全なり、

程杵

遺ㇾ生良難。士爲ニ知己ニ。　生を遺るる良に難し、士は知己の爲めにす、

望義如ㇾ歸。允伊二子。　望義歸るが如し、允に伊二子、

程生揮ㇾ劍。懼ニ茲餘恥ニ。　程生劍を揮ひ、茲餘恥を懼る、

令德令聞。百代見ㇾ紀。　令德令聞、百代紀を見る、

【注解】程嬰と公孫杵臼の二子なり、此の二子の交は管と鮑との如きものとす、『史記』の全文を出して示し、一一字句に就いて解せざるも意義明白なり、戰國の世に趙なる一國あり、其の君を趙朔と曰ふ、賓客の一人を公孫杵臼と曰ひ、朔の友人を程嬰と曰ふ、

屠岸賈なる者の爲めに趙朔の一族は殺さる、時に趙朔の夫人のみ公宮に走り匿れて死を免かる、身は趙朔の子を娠めるなり、杵、程に謂ひて曰く、胡ぞ死せざる、程曰く、朔の婦、遺腹あり、若し幸にして男ならば、吾、之を奉ぜん（育して趙の主と爲んとなり）、卽し女ならば、吾徐ろに死せんのみ、旣にして朔の婦免身し、男を生む、屠岸賈之を聞き、宮中に索む、夫人、兒を絝中に置き、祝して曰く、（祝は禱祈なり）趙宗滅びんか、若號かん、卽し滅びずんば若聲するなかれ、索むるに及んで、兒竟に聲なし、已に脫かる、程、杵に謂ひて曰く、今一たび索めたれども得ざりき、後必ず且に之を索めん、奈何せん、杵曰く、孤を立つると死すると孰れか難き、程曰く、死するは易く、孤を立つるは難きのみ、杵曰く、趙氏の先君、子を遇すること厚かりき、子は彊めて其の難き者を爲せ、吾は其の易き者を爲さん、請ふ先づ死せん、乃ち二人謀り、他人の嬰兒を取りて之を負ひ、衣するに文葆（美麗なる襁ムツキなり）を以てし、山中に匿る、程出でて謬りて諸將軍に謂ひて曰く、嬰は不肖にして、趙の孤を立つること能はず、誰か能く我に千金を與へん、吾、趙氏の孤の處を告げん、諸將皆喜びて之を許す、師を發して程に隨ひ、杵を攻む、杵謬りて曰く、小人なるかな程嬰、昔下宮の難に死すること能はず、我と謀りて趙氏の孤兒を匿せり、今又我を賣る、縱ひ立つること能はずとも、之を賣るに忍びんや、兒を抱きて呼びて曰く、天よ天よ、趙氏の孤兒何の罪かある、請ふ之を活かせよ、獨り杵臼を殺さば可ならん、諸將許さず、遂に杵臼と孤兒を殺す、諸將は眞の趙氏の孤兒を殺すと思へり、旣にして程は山中に居ること十五年、晉の景公疾む、之をトするに大業の後の遂げざる者、祟を爲すと、是に於てか、彼の屠岸賈の一族を滅ぼし、趙の孤兒を立て、之を趙武と曰ふ、程、一日、趙武に謂ひて曰く、昔下宮の難に皆能く死せり、我死する能はざるにあらず、趙氏の後を立てんことを思へり、今、趙武成人して、故の位に復せり、我將に下（地下に入つてなり）趙宣孟と公孫杵臼とに報ぜんと欲すと、趙武泣いて死を止まらんことを請ふ、程曰く、不可なり、彼（杵を指して云ふ）は我を以て能く事を成すと爲す、故に我に先だちて死せり、今我報ぜずんば、是れ我が事を以て成らずと爲さんと、遂に自殺す、趙武、之に服すること三年、之が爲めに、邑に祭り、春秋に之を祠り、世世絕ゆること勿からしむ、此の程と杵との信義に於けるの厚きに感じ、淵明が世復此の人無きを思ひ、嘆息する所以なり、（史記趙世家第十三）

【大意】生を遺るる良とに難し、士は知己卽ち疑はざる友の爲めにす、程と杵との如きは疑はざるの友、乃ち朢義歸るが如きなり、杵は國の爲めに死せり、程は國の爲め生を十五年間保てり、而かも死せざるべからざる秋に達す、是に於て劍を揮つて自殺す、生きて居るに於ては餘恥を懼るるなり、二子の令德令聞、百代の下綱紀を正しくするに足る、

七十二弟子

恂恂舞雩。莫ㇾ曰ㇾ匪ㇾ賢。
倶映㆓日月㆒。共飡㆓至言㆒。
慟由㆓才難㆒。感爲㆓情牽㆒。
囘也早夭。賜獨長年。

七十二弟子

恂恂たる舞雩、賢に匪ずと曰ふ莫し、
倶に日月に映じ、共に至言を飡す、
慟は才の難きに由り、感は情の牽くが爲めなり、
囘や早夭し、賜獨り長年なり、

【注解】恂恂は信なり、溫恭なり、『論語』鄉黨篇に、孔子鄉黨に於て、恂恂如たりと、舞雩は地名、天を祭り雨を禱るの處、要するに此の四字は孔子が丁寧の敎と云ふことなり、此の孔子の敎を承けたる者、莫曰匪賢、大底は賢者なり、不賢者は孔子の敎を聞かざる者なり、倶映日月、孔子を日月の如き高明なる人に喩ふれば、弟子等が其の光に映ずるなり、（一義）多くの弟子が孔子の敎を奉じて、皆氣象高明、日月の如くなりと、（二義）共飡至言、至言は要言なり、至善の言なり、弟子皆孔子が至言を喫せざる者無し、慟由才難、顏淵死す、孔子、之を哭し、之を慟す、顏淵が如き才は世に得ること難ければなり、感爲情牽、感するは情が牽けばなり、情が牽かざれば感ぜざるなり、儒の道は人情を以て第一とす、孔子の顏淵を哭慟する、尤も人情の第一なるものとす、囘也早夭、孔

子曰く、顏回（顏淵なり）なる者あり、學を好む、不幸短命にして死す、回は年二十九にして髮盡く白し、賜獨長年、端木賜を單に賜と稱す、字は子貢、孔子の爲めに常に其の好辯を絀めらる、孔子、賜に問ふ、汝と回と孰れか愈る、對へて曰く、賜や何ぞ敢て回を望まん、回や一を聞いて以て十を知る、賜や一を聞いて以て二を知る、淵明は翹な七十二弟子と說くるも、其の意は同一人を頌するなり、『史記』には七十有七人、皆異能の士とあり、（史記仲尼弟子列傳第七）

【大意】恂恂たる舞雩の敎を奉ずる七十二人の弟子、皆賢者にあらざるは莫し、聖人孔子は其の人日月の如し、而して賢者は此の日月に能く映ずる人なり、映ずる人なるが故に孔子が至言を共に飡するに至る、此の多くの弟子中に於て孔子が特に慟哭せしは、顏淵が才ありて早く死せしが爲めなり、感慟や是れ至情の牽くが爲め、虛僞の情にあらざるなり、回の早夭は不思議なり、賜の長年も亦不思議なり、

屈賈

進レ德修レ業。將二以及一レ時。
如二彼稷契一。孰不レ願レ之。
嗟乎二賢。逢二世多疑一。
候レ詹寫レ志。感レ鵩獻レ辭。

屈賈

德を進め業を修め、將に以て時に及ばんとす、
彼の稷契の如き、孰か之を願はざらん、
嗟乎二賢、世の多疑に逢ふ、
詹に候し志を寫し、鵩に感じ辭を獻ず、

【注解】屈は楚の屈原、賈は漢の賈誼なり、二子共に志を當世に遂げずして逝く、太史公も淵明も悲しむ所以なり、進德修業、屈は博聞彊志、治亂に明か、賈は年少、頗る諸子百家の書に通ず、君をして進德修業の人ならしめんと欲したるなり、將以及時、屈は平生の力を懷王の時に及ぼさんとし、賈は孝文帝の時に及んで功を施さんと欲す、如彼稷契、孰不願之、稷も契も古の明臣なり、古の稷契が舜を輔佐せしが如く、屈は懷王をして、賈は孝文をして明君たらしめんと願ひたる者なり、而かも二賢共に事、志と違ひ、屈は子蘭や靳尙の如き鼠輩の讒言を蒙むり、賈は絳灌や馮敬之の如き怯夫に迫害せられ、屈は乃ち懷沙賦を作りて身を汨羅に投じて死し、賈も亦梁の懷王の太傅と爲るも、其の無狀（薄遇なり）なるを傷み、年三十三を以て憤死す、逢世多疑とは、蓋し此の事を言ふなり、候詹は候瞻に作る本あり、字義としては詹も瞻も同じ、省見の意あればなり、『楚辭』に乃往見二太卜鄭詹尹一、乃ち往いて太卜鄭詹尹を見るとあり、詹尹とは古代占筮の官なり、是に於て知る、瞻にあらず詹なるを、寫志、卽ち屈原が楚辭を叙することを言ふ、感鵩は賈誼が作る所の賦なり、鵩は「ミミヅク」なり、漢族皆是を不祥の鳥と曰ふ、此の不祥の鳥に託して以て時の非なるを諷したるが「鵩賦」一篇四百五十字是れなり、又賈誼は長沙傅と爲つて弔屈原賦を作り、以て同樣の運命を嘆く、太史公が屈原賈誼を合傳する意も亦見るべし、（史記列傳卷二十四）

【大意】屈子と賈生とは皆君をして德を進め業を修めしめんと欲したる人なり、而して己も其の力を展べて時に及ぼさんと欲したるなり、古の稷契が舜に於けるが如く、屈子は懷王を輔佐し、賈生は孝文を輔佐せんと欲したるなり、然るに嗟于此の二賢は世俗の多疑に遭逢して、遂に志を達するに至らずして終る、屈子は詹に候して志を寫すの不遇を致し、賈生は鵩賦を作りて其の運命を卜するの悲を致す、

韓非

豐狐隱穴。以文自殘。
君子失時。白首抱關。
巧行居災。忮辯召患。
哀矣韓生。竟死說難。

韓非

豐狐穴に隱れ、文を以て自ら殘す、
君子時を失し、白首關を抱く、
巧行災に居り、忮辯患を召く、
哀む韓生、竟に說難に死す、

【注解】韓非は韓の公子なり、初め黃老の學を修め、後ち荀卿に學び、更に申不害、商鞅の說を聞き、遂に一家の論を立つるに至る、豐狐は大狐、文は狐の皮を言ふ、皮文の爲め殘害せらるゝ不幸あり、君子失時、白首抱關、抱關は門番の者を曰ふ、此の二句は韓非を指すにあらず、時に遇はざるの人を括めて言ふ、時を得ざるの君子は不幸、白髮霜鬢に至るまで門番なぞの卑職に居る、巧行居災、忮辯召患、此の二語は韓非の當面を言ふ、韓非は世を憤慨して二柄、八姦、孤憤、說難、內儲說、外儲說、制分に至る五十三篇、十餘萬言を作る、而かも或る弊を救ふの藥とは爲るべし、萬世の教訓とはならず、所謂字字巧行にて、言言忮辯に幾し、遂に自から言ふ所の說難の爲めに死す、太史公曰く、韓子の說難を爲り、自ら脫るゝ能はざりしを悲しむ、又曰く、韓子は繩墨を引いて事情に切に是非を明かにす、其れ極めて慘礉（慘忍刻薄の意）にして恩少し（愛情が少し）、淵明が意亦太史公と同じく之を悲しむ、

【大意】豐狐穴に隱る、人は豐狐の穴を欲するにあらず、其の皮文を欲すればなり、狐は自殘するにあらずして何ぞ、君子も時を失すれば、白首に至るまで門衞を爲す、韓非は時弊を救はんと欲して十餘萬言の巧行を爲したるも、行行皆災の因と爲る、忮藝は生を扶けるが本なり、然るに忮藝の爲め患を召く、哀しい哉、韓生は自分で作りし說難の爲め死す、

魯二儒

易代隨時。迷變則愚。
介介若人。特爲貞夫。
德不百年。汙我詩書。
逝然不顧。被褐幽居。

魯二儒

代を易へ時に隨ふ、變に迷へば則ち愚、
介介若のごとき人、特に貞夫と爲す、
德百年ならず、我が詩書を汙す、
逝然顧みず、褐を被て幽居す、

【注解】魯二儒は、溫謙山曰く、按ずるに二儒は孟子と荀卿となり、韓退之が進學解に見る、解に曰く、昔は孟軻辯を好み、孔道以て明けし、轍天下を環りて、卒に行に老いたり、荀卿正しきを守つて、大論以て興る、讒を楚に逃れて、蘭陵に廢死せり、是の二儒は辭を吐けば經と爲り、足を舉ぐれば法と爲る、絕類離倫なり、優に聖域に入る、其の世に遇せらるゝこと何如ぞや、要するに是の二儒は時代の流俗に隨はず、變に處して迷はざる、所謂介介たる貞夫たるなり、介介は耿耿と意義同じ、貞夫は貞正の丈夫なり、此の如く解して此に至れば、二儒を賞讚したるが如きに似たれども、德不百年より以下結句に至るまでは、詳謗せるが如きの調子を爲す、是れは二儒外の儒、卽ち後世の儒を許する語なるか、或は是の二儒を直ちに指して來るものなるや、意義良とに明白ならず、此の詩全體二儒を詳謗するものと解して、未免爲迂儒、雖然介則可賞也、（未だ迂儒たるを免れず、然りと雖も介は則ち賞すべきなり）と、批評を下したる人あり、要するに陶集の誤字多きことは他本類例の無きものと古來より論の有ることなれば、是の皆の如きも猶然と解釋を下すの不可なるを信ず、疑を存して以て後賢の攷を待つ、

【大意】孟子と荀子の二賢は、時代の非なるを知れば、時代と調和せず、反つて之を救濟せんとす、小人は盡變に迷ふも、此の二賢は變に處して迷はず、介介として獨立特行の人、之を貞夫と爲す、德不百年以下の意は注解の如し、

張長公

遠哉長公。蕭然何事。
世路多端。皆爲我異。
斂轡朅來。獨養其志。
寢跡窮年。誰知斯意。

張長公

遠い哉長公、蕭然何事ぞ、
世路多端なり、皆我が異を爲す、
轡を斂めて朅に來り、獨り其の志を養ふ、
跡を寢め年を窮む、誰か斯意を知らん、

【注解】張長公の誰たるや判然せず、陶澍は漢の張釋之が傳に見ると、今漢書を案ずるに釋之としては一毫も是の詩意に當ること無し、釋之が子、名は摯、字は長公、官、大夫に至る、免ぜられて、以て容るるを當世に取る能はず、故に終身仕へずとの數文字あるのみ、淵明が之を詠ずる所以は、終身不仕と云ふ所に共鳴する爲めならんか、斂轡は大夫の官を罷め去るなり、朅來は古今東西議論の多き成語なるが、盍しと解し、何ぞと解し、去ると解し、聿にと解し、向にと解するの五種を出です、而して此の中、聿を以て的當に近きものと斷ず、聿は惟なり、曰になりと訓して來字の語助であるなり『洪武正韻』の說を可とす、楊升菴の說（盍しを取るの說）と、嶺中和尙の說（向にと解する說）は不可とす、乃ち斂轡來の三字を助くる中間の語のみ、獨養以下の句に對しては、牀書に依つて深く知る能はず、

【大意】悠遠なる長公、蕭然として榮達を欲せざるは何事ぞや、謂ふに世路は多端なり、皆我と異を爲す、轡を斂めて故鄉に朅に歸り來り、獨り其の高尙の志を養ふ、跡を人と絕つ窮年、誰人も此の意を知る無し、

【餘論】以上夷齊以下九章、時代の變遷と、自家の境遇と匹似したるを以て、之を感發す、夷齊、箕子、管鮑、程杵、屈賈の五章特に痛切のものとす、七十二弟子、韓非、魯二儒、張長公の四章は附隨するのみ、

陶淵明集卷六 終

陶淵明集　卷七

扇上畫贊

荷蓧丈人　長沮桀溺　於陵仲子　張長公
丙曼容　鄭次都　薛孟嘗　周陽珪

三五道邈。淳風日盡。
九流參差。互相推隕。
形逐物遷。心無常準。
是以達人。有時而隱。
四體不勤。五穀不分。
超超丈人。日夕在耘。
遼遼沮溺。耦畊自欣。
入鳥不駭。雜獸斯羣。

扇上畫贊

荷蓧丈人　長沮桀溺　於陵仲子　張長公
丙曼容　鄭次都　薛孟嘗　周陽珪

三五道邈たり、淳風日に盡く、
九流參差、互に相推隕す、
形物を逐うて遷り、心常準無し、
是を以て達人、時あつて隱る、
四體勤めず、五穀分たず、
超超たる丈人、日夕耘に在り、
遼遼たる沮溺、耦畊自ら欣ぶ、
入鳥駭かず、雜獸斯に羣る、

至矣於陵。養氣浩然。
至りぬ於陵、氣を養うて浩然、

蔑彼結駟。甘此灌園。
彼の結駟を蔑し、此の灌園を甘んず、

張生一仕。曾以事還。
張生一たび仕へ、曾ち事を以て還る、

顧我不能。高謝人間。
我が不能を顧み、高く人間を謝す、

岩岩丙公。望崖輒歸。
岩岩たる丙公、崖を望んで輒ち歸る、

匪驕匪吝。前路威夷。
驕にあらず吝にあらず、前路威夷、

鄭叟不合。垂釣川湄。
鄭叟合はず、釣を川湄に垂る、

交酌林下。清言究微。
交も林下に酌み、清言微を究む、

孟嘗游學。天網時疏。
孟嘗游學し、天網時に疏なり、

眷言哲友。振褐偕徂。
言を哲友に眷し、褐を振うて偕に徂く、

美哉周子。稱疾閒居。
美なる哉周子、疾と稱して閒居す、

寄心清尚。悠然自娛。
心を清尚に寄せ、悠然自ら娛む、

翳翳衡門。洋洋泌流。
翳翳たる衡門、洋洋たる泌流、

曰琴曰書。顧眄有儔。
曰く琴曰く書、顧眄儔あり、

飲河既足。自外皆休。
河に飲み既に足る、自外皆休す、

緬懷千載。託契孤游。
懷を千載に緬にし、契に託して孤游す、

【注解】扇上畫贊、字の如く扇面に荷蓧以下九人の高士を畫けるに贊を作りしなり、三五は三皇と五帝、其の上世の道は悠遠なり、淳風、良淳の美風、日を逐うて盡く、九流は儒家、陰陽家、法家、名家、墨家、雜家、縱横家、農家、小説家（劉歆新論に出づ）なり、參差は統一の反對、各家が自由の説を主張する、推隕は墮落なり、形逐物遷、心無常準、各家が時代の風潮を逐うて遷り、各の信ずる所の常心なし、常心なきは常準即ち常法なければなり、達人は理に達する人、荷蓧以下九人の如きは皆達人なり、時代を逐うて遷變する徒輩と伍するを嫌ふ、是を以て身を隱遁する、四體は左右の手と足となり、不勤 諸生は時に空論放談、少しも勞働せず、五穀は種種異説あり、今『月令』の黍、稷、麻、麥、豆を取る、空論の徒は五穀の何に因つて生じ來るやを分別せざるなり、然るに人世に超超たる丈人即ち長老は日夕に唯耘耕に從事するなり、『論語』（微子第十八）に子路從而後、遇丈人以杖荷蓧、子路問曰、子見夫子乎、丈人曰、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子、植其杖而芸、（子路從つて（孔子に隨行する）後る、丈人の杖を以て蓧を荷ふに遇ふ、子路問うて曰く、子、夫子を見たるか、丈人曰く、四體勤めず、五穀分たず、孰を夫子と爲すと、其の杖を植てて而して芸る）朱子注して曰く、五穀不分とは猶ほ菽麥を辨ぜずと言ふがごとし、其の農業を事とせず、師（孔子）に從つて遠游するを責むるなり、兪曲園云ふ、二つの不の字は讀まざるが可、四體勤め、五穀分つとは、丈人自分の事、自分は一生懸命に働らき、且五穀を區別して、其の時と處とを得るやうにするので忙がし、子の先生の事なぞに關はつてる暇は無しと云ふ、余は朱子說の如く不勤不分を以て丈人が子路を罵る言と解す、然らずんば文勢が薄弱と爲るのみならず、丈人が氣力も亦藏る、勿論孔子や子路を不動不分と罵る反對に、己は勤分であることは言ふまでも無し、是の故に『論語』の不字を讀まざる兪曲園の説は信ずる能はざるなり、湛湛は『楚

辭」に出づ、悠遠なる義、晉代より孔子時代を云ふ、沮溺も丈人と同じく『論語』に出でて勞農者の大將、卷一勸農詩に於て既に注せり、入鳥不駭、雜獸斯羣、孔子曰く、鳥獸は與に羣を同じうすべからずと、乃ち山林に隱るれば、自然と鳥獸と同羣なり、孔子は濁世に處して、以て濁世を救ふの希望なり、然るに丈人や沮溺は濁世に處して救濟することをせず、個人を潔くして山林に逃る、爭ふ心無きを以て鳥も駭かず、獸も敢て異類と爲さざるなり、淵明が平生の志は孔子の道に在りと雖も、人間が孔子の如く大ならず、故に其の力濁世を如何ともする無し、是に於てか、孔子の本志に背く所の山林隱遁者を讃稱するに至る、已むを得ざるの情ならん、至矣は申し分無しと、於陵を贊する語なり、陳仲子は於陵に居る、楚王其の賢を聞いて、使を遣り之を聘し、以て宰相と爲さんと欲す、仲子が妻の曰く、夫子、琴を左にし書を右にし、樂其の中に在り、駟を結び騎を連ぬるも、甘しとする所は一肉に過ぎず、而して楚國の憂を懷うて可ならんや、是に於て使者に謝し、遂に相與に逃れて人の爲め灌園す、養氣浩然の語を以て於陵を贊するは甚だ大に過ぐるの感あるも、宰相たるの職を蔑視して、他人の花園に水を灌ぎ以て生を遂る如きは、共鳴の士より見れば、養氣浩然と言ふも亦不可なけん、張生は長公なり、一仕は長公が一度大夫の官と爲りしを云ふ、以事還、同僚と合はざりしか、或は別に感ずる所あるに由りてか判然せざるが、辭職して還る、顧我不能『漢書』に以不能取容當世（容を當世に取る能はざるを以て）とあれば、俗吏と共に處する能はざるが爲めなり、不才と同義の不能を言ふにあらず、岧岧は亭亭と同義、高き貌、丙公は『漢書』（七十二）兩龔傳に附して邴漢は、官、京兆尹に至る、後、太中大夫と爲る、王莽政を秉るに及んで骸骨を乞ふ（辭職するなり）と、其の漢が兄の子曼容亦志を養うて自ら修む、官と爲るも肯て六百石に過ぎず、輒ち自ら免じ去る、淵明は是の後者を指す者の如し、望崖輒歸、丙は瑯邪の人、乃ち故鄕の瑯邪の崖を望んで歸る、匪驕匪吝、前路威夷、我が爲めに氣を驕るにもあらず、又國の爲め力を吝むにもあらず、但前路の威夷なるを思へばなり、鄭叟は『後漢書』（十九）郅惲傳に於て其の名見ゆ、姓は鄭、名は敬、字は次都、尊稱して叟と曰ふ、郅と信友なり、平帝の時、功曹と爲る、後去つて獨り弋陽山中に隱る、（弋陽は汝南郡卽ち敬が故鄕）數月後、郅惲、之を山中に訪ふ、敬の漁釣し自ら娯むを見る、敬に謂ひて曰く、天の俊士を生み、以て人の爲にす、鳥獸は與に羣を同じうすべからず、子我に從つて伊呂と爲らんか、將た巢許と爲らんか、而して堯舜を父老にするや、敬が曰く、吾足りぬ、初め生れしより、重華（舜帝なり）を南野（蒼梧なり）に歩れ、謂ふ來つて松子（仙人赤松子なり）に歸せんと、今幸に驅を全うし類を樹うるを得、（樹類とは胤嗣あるを謂ふ）還り墳墓を奉じ、盡く學道を聞ふ、政に從はずと雖も、之を施す政あり、是れ亦政と爲すなり、吾年耄せり、安んぞ子に從ふを得ん、子勉めて性命を正しうし、神を勞し以て生を害する勿れ、惲是に於て告別して去る、『注』に曰く、同郡鄭敬困つて妻を折つて坐と爲し、荷を以て肉を薦め、瓠瓢酒を盈たし、言談日を彌る、蓬廬蓽門、琴書自ら娯む、是れ淵明の稱讃する所、孟嘗は、何孟春曰く、後漢の汝南の薛包、字は孟嘗、建光中（安帝の年號）公車特に徵す、至れば侍中に拜す、包、疾と稱して起たず、死を以て自ら乞ふ、詔あり告歸を賜ふ、加禮毛義の如し、天網時疎、天網が疎なればこそ、孟嘗は仕へざりしなり、哲友は孝を以て道を同じうする善き友なり、振褐偕徂、褐は賤者の服、世の榮利を眼中に置かず、但孝の一道のみに向つて徂くなり、美哉周子、陶澍曰く、周陽珪が事未だ詳かならず、何注、周黨を以て之に當てんと欲す、恐らくは非、今案ずるに、周陽珪は兩漢書共に傳を見ず、『後漢書』（九十二）に周燮の傳あり、之に附して周黨あり、此の人仕へて郎と爲る、自ら免じて歸り、屢ば徵せども起たずとあり、何孟春は周黨を以て今の詩に當てる、蓋し詩意と符合すればなり、要するに隱を貴ぶ人なるを知れば可なり、是に至りて人物は詠じ終る、以下は總じて其れに對する狀態を言ふ、翳翳は暗き貌、衡門は貧者の家、洋洋泌流、家を繞り、門を擁して水の流るる形容、曰琴曰書、顧眄有儔、今の我は琴書を以て娯む、古を顧眄すれば此等の人は皆我が同儔であるなり、飲河旣足、『莊子』に、偃鼠、河に飲む、滿腹に過ぎずと、河水は洋洋とあれども、我が飲んで甘しとする所は一掬に過ぎず、腹が一杯になれば、他は亦何ぞ顧みん、（地中を行くの鼠を偃鼠と云ふ）自外皆休、一掬の水より外は何事も求めないとなり、緬懷千載、託契孤遊、千載の上に以上九人の如き志を我と同じくする道契あり、此等の人を緬かに懷へば今日に於て友は求めず、乃ち孤遊の境界も娯多しとなり、

【大意】　荷蓧丈人以下九人の畫贊とす、三皇と五帝時代は悠邈なり、淳風日に盡き、而して種種なる思想家輩出し、今九流が互に議論を上下して我勝れたりと稱す、各人が物を逐うて遷り、其の心に常準無し、是を以て達人卽ち賢人は往往隱れて去る、隱れ去つて行く處は何ぞ、乃ち畊耘を以てする、

四體不勤、五穀不分は、尋常庸儒の事のみ、達人は四體勤め、五穀を能く分つなり、其の人は超超たる丈人、日夕鋤を執るの人なり、遼遼たる沮溺も農畊自欣の人なり、是等の人は爭ふ心が無きゆゑ鳥獸も驚かず、於陵の陳仲子も亦遁れて浩然の氣を養ふ一人なり、彼の結駟即ち四馬に騎る榮達を蔑視して、反つて他人の園庭に水を灌ぎ以て生活するを甘んず、張生も一たびは仕へしも、事を以て還り、我を不能と稱して、人間と來往を謝す、丙公も一度は官に就きしも、故鄕の崖を望んで手を揮つて歸る、是れ驕にもあらず吝にもあらず、結句前路威夷なればなり、鄭叟も官僚と氣合せず、歸鄕して唯釣を川湄に垂る、而して清友と酒を斟み、清言微を究む、孟嘗は游學し、官途に上りしも、天網疎なり、之を逃すとは、哲友を眷言すればこそ、褐卽ち賤服を著けて孝道を偕に徂く、周子も亦美なる一人なり、疾と稱して出仕せず、閒居して高尙の志を養ひ、以て自ら娛む、樹は門を掩うて翳翳たり、水は洋洋として流る、家に在る人、琴書を似て友とす、古を顧眄して此の如き良友あり、一掬の水以て渴を醫すべし、自外は求むる所なし、幸に千載の上、此の良友あり、此れと契を託して孤游すべし、

尙長禽慶贊　　尙長禽慶贊

尙子昔薄宦。妻孥共早晚。　尙子昔薄宦、妻孥共に早晚す、

貧賤與富貴。讀易悟益損。　貧賤と富貴と、易を讀んで益損を悟る、

禽生善周游。周游日已遠。　禽生善く周游し、周游日已に遠し、

去矣尋名山。上反豈知反。　去りぬ名山を尋ぬ、反に上りて豈反を知らん、

【注解】尙長と禽慶と二人の贊、此の一首は諸本に闕く、陶澍本に依つて錄す、注は陶澍本を和譯して記す、何注に、尙長は『高士傳』『後漢書』に見る、尙長字は子平、河内朝歌の人、隱居して仕へず、性、中和を尙び、易を讀み、損益の卦に至り歎じて曰く、吾已に富の貧に如かず、貴の賤に如かざるを知る、但未だ死の生に何如を知らざるのみ、男女嫁娶旣に畢る、敕して家事を斷ち、相關すること勿からしむ、遂に意を肆にし、同好北海の禽慶と俱に五嶽名山に遊び、終る所を知らず、

【大意】尙子と禽生と二人を讚す、尙子は昔卑官たりしも辭して妻子と共に早晚する、而して曰く、貧賤は富貴に勝る、損は益に勝る、故に世中に營營せんより、山水に悠悠たるに如かずと、禽生と共に名山を尋ね、反に上るも反の苦を知らず、世中の反路は却つて苦なり、

五孝傳贊　　五孝傳贊

天子孝傳贊　　天子孝傳贊

虞舜　夏禹　殷高宗　周文王　　虞舜　夏禹　殷高宗　周文王

虞舜父頑母嚚、事之於畎畝之間、以孝烝烝。是以堯聞而授之。富有天下、貴爲天子。以爲不順於父母、若窮而無歸。惟順親可以得意。苟違朝夕、若嬰兒之思慕。故稱舜五十而慕。書曰戛擊鳴球、搏拊琴瑟、以詠祖考來格。言思其來而訓之。愛敬盡於事親。是以德敎加於百姓、刑于四海。夏禹有天下、以奉宗廟。然躬自菲薄、以厚其孝。孔子曰禹吾無間然矣。菲飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。禹之德於是稱。聞聖人之德、無以加於孝敬。孝敬之道、美莫大焉。殷高宗諒陰三年不言。百官總己而聽於冢宰三年而後言。天下咸歡、德敎大行。殷道以興。詩曰一人有慶、兆民賴之。其此之謂乎。周文王之爲世子也、朝於王季日三。雞鳴至於寢門、問於內豎。內豎曰安、文王乃喜。不安則色憂、行不能正履。日中暮亦如之。食上必視寒溫之節。食下必問所膳、而後退。文王孝道光大。其化自近至遠、刑于寡妻、以御于家邦。故得萬國之懽心、以事其先王矣。

贊曰

至哉后德、聖敬自天。陶漁致養、菲薄享先。親瘠色憂、諒陰寢言。一人有慶、千載賴旃。

虞舜、父頑母嚚、之に畎畝の間に事へて、孝を以て烝烝、是を以て堯聞いて之に授く、富天下を有ち、貴きこと天子たり、以爲らく父母に順はざれば、窮して歸ること無きが若し、惟親に順ひ以て意を得べし、苟も朝夕に違はば、嬰兒の思慕するが若し、故に稱す舜五十にして慕ふと、書に曰く、鳴球を戛擊し、琴瑟を搏拊して以て詠ずれば、祖考來格す、其の來つて之に訓ふるを思ふを言ふ、愛敬親に事ふるに盡くす、是を以て德敎百姓に加はり、四海に刑す、夏禹、天下を有ち、以て宗廟に奉ず、然れども躬自ら菲薄にし、以て其の孝を厚うす、孔子曰く、禹は吾間然する無し、飮食を菲くして孝を鬼神に致し、衣服を惡にして美を黻冕に致す、禹の德是に於て稱す、聞く聖人の德、以て孝敬に加ふる無し、孝敬の道、美焉より大なるは莫し、殷の高宗、諒陰三年言はず、百官己に總べ、而して冢宰に聽く、三年にして後言ふ、天下咸歡ぶ、德敎大に行はれ、殷道以て興る、詩に曰く、一人慶あり、兆民之に賴る、其れ此の謂か、周文王の世子たるや、王季に朝すること日に三たび、雞鳴寢門に至り、內豎に問ふ、內豎曰く安し、

文王乃ち喜ぶ、不安なれば則ち色憂ふ、行くに正履する能はず、日中暮亦之の如し、食上必ず寒温の節を視、食下必ず膳にする所を問ひ、而して後退く、文王孝道光大、其の化近きより遠きに至る、寡妻に刑し、以て家邦に御す、故に萬國の懽心を得、以て其の先王に事ふ、贊に曰く、至れる哉后德、聖敬天よりす、陶漁養を致し、菲薄先を享す、親瘠色憂へ、諒陰言を寢む、一人慶あり、千載旃に賴る、

【注解】頑は頑黠（ニブシ）嚚は嚚愚（オロカ）なり、烝烝は物盛興作之貌と注す、孝道に熱心なり、授之、天下を以て堯より授かる、以爲以下の十二字は、若し父母の氣に適はざるときは、窮途にして歸家せざるが如きの憂を爲す、之に反し、父母の氣に適うたりと思ふときは、我も亦得意と爲る、舜は五十の年、父母を慰むる爲め、鳴球や琴瑟を弄して、父母の懽顏を見て以て自ら樂しむ、生前のみならず、父母の死後も其の來格（格は至なり）して我を饗へんことを思ふ、祖考は死んだ父なり（生前にも用ふる場合もあり）此の如きの行は父母より起りて遂に百姓四海に普及すとなり、次いで夏の禹王の如きも然り、自身の衣食住は皆菲薄（疏末なり）にして、父母に奉ずるは極めて厚し、吾無閒然、孔子（論語泰伯第八）も禹の行は、吾に於ても疵の指點すべき所なしと歎稱せり、黻冕は古代の禮服、刺繡の文あるもの、自分の衣服は麤惡の物を以てするも、禮の具は好美にするとなり、次いで殷の高宗（名は武丁、小乙の子）は其の考の爲め喪に服すること三年、謹愼して口を開かざるなり、諒陰は天子の喪服を云ふ、其の間傅說と稱する賢人を冢宰、卽ち大臣として政治を省せしめ、三年喪服畢つて初めて自ら政務を視る、次いで文王が世子たりし時代、其考の膝下を候すること一日三度、其の狀を內豎卽ち侍する者に問ふ、安と聞けば喜び、不安と聞けば憂ふ、若し不安と聞けば我が行步も正履する能はざるに至る、日中暮卽ち朝も晝も晩も暮も憂も同じとなり、食も寒時には溫を薦め、溫時には寒を進め、食膳に上る肉菜も極めて注意をする、其の父に對する孝道を以て天下に臨む、家邦萬國、遠近親疎、皆以て其の化に服するに至る、是れ淵明が贊する所以、

【大意】舜と禹と高宗と文王との四天子に就いて其の孝を贊す、至哉の八字は總て贊し、陶漁の四字は舜を贊し、菲薄の四字は禹を贊し、親瘠の四字は文王、諒陰の四字は高宗、一人の八字は總て贊せしなり、注解にて大意を說明す、茲に贊せず、

諸侯孝傳贊

周公旦　魯孝公　河間惠王

周公旦。武王之弟。成王幼少。周公攝政。制禮作樂。郊祀后稷以配天。宗祀文王於明堂。以配上帝。是以四海之內。各以其職來祭。詩曰於穆清廟。肅雍顯相。言諸侯樂其位而敬其事也。仲尼曰孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天。則周公其人也。貴而不驕。位高彌謙。自承文武之休烈。孝道通于神明。光被四海。武王封之於魯。備其禮樂。以奉宗廟焉。魯孝公之爲公子。周宣王問公子能道訓諸侯者立之。樊穆仲稱其孝曰。肅恭明神。而敬事者老。賦事行刑。必問於遺訓。咨於故實。不干所問。不犯所

耆。王曰然則能訓理其民矣。乃命之於夷宮。是爲孝公。夫宗廟致敬。不忘親也。有國不亦宜乎。漢河間惠王。獻王之曾孫也。西京藩臣。多驕放之失。其名德者。唯獻王。而惠王繼之。漢書稱其能修獻王之行。母薨。服喪盡禮。哀帝下詔書褒揚。以爲宗室儀表。增封萬戶。禮古之人皆然。至於末俗衰薄。固已賢矣。貴而率禮又難。其見褒賞。不亦宜乎。

贊曰

貴驕殊途。不期而會。周公勞謙。乃成光大。二侯承魯。遵儉去泰。河間率禮。漢宗是賴。

周公旦は武王が弟、成王幼少、周公政を攝し、禮を制し樂を作り、后稷を郊祀し以て天に配し、文王を明堂に宗祀し、以て上帝に配す、是を以て四海の內、各の其の職を以て來祭す、詩に曰く於穆たり淸廟、肅雍顯相、諸侯其の位を樂しみて其の事を敬するを言ふなり、仲尼曰く、孝は父を嚴するより大なるは莫く、父を嚴するは天に配するより大なるは莫し、則ち周公其の人なり、貴くして驕らず、位高く彌謙、自ら文武の休烈を承け、孝道神明に通じ、四海に光被す、武王之を魯に封じ、其の禮樂を備へ、以て宗廟に奉す、魯の孝公が公子たる、周の宣王、公子の能く諸侯を道訓する者を問ひ之を立つ、樊穆仲其の孝を稱して曰く、肅恭明神、而して耆老に敬事し、事を賦し刑を行ふに、必ず遺訓を問ひ、故實を咨ひ、問ふ所を干さず、咨ふ所を犯さず、王曰く、然らば則ち能く其の民を訓理せん、乃ち之に夷宮に命ず、是を孝公と爲す、夫れ宗廟敬を致すは親を忘れざるなり、國を有つ亦宜ならずや、漢の河間惠王は獻王が曾孫なり、西京藩臣、驕放の失多し、其の名德なる者、唯獻王にして、惠王之に繼ぐ、漢書其の能く獻王の行を修むるを稱す、母薨す、喪に服し禮を盡くす、哀帝、詔書を下して褒揚し、以て宗室の儀表と爲し、封萬戶を增す、禮古の人皆然り、末俗衰薄に至り、固より已に賢なり、貴くして禮に率ふは又難し、其の褒賞せらるる、亦宜ならずや、贊に曰く、貴と驕と途を殊にし、期せずして會ふ、周公勞謙、乃ち光大を成す、二侯魯を承け、儉に遵ひ泰を去る、河間禮に率ひ、漢宗是れ賴る、

【注解】 成王は武王の子、年幼なるを以て周公政を攝し、七年の間、制禮作樂、大に天下に功あり、后稷は周の祖先、郊祀は上帝を祭るの禮（漢武帝郊祀歌あり）宗祀は宗室卽ち一家の先を祭るの禮、明堂の義に就いて古今沿革あり、今天子政を布くの宮の一義を取る、乃ち文王を宗祀して以て上帝と列位に置く、其職、諸侯が各の其の職を以て中央政府の明堂に來祭する、詩曰とは『毛詩』周頌淸廟の什、周公が成王を相けて文王の廟を祭るときの樂歌なり、顯相は顯明なる相、卽ち周公を稱して曰ふ、嚴父は其の父を尊ぶを謂ふ、父を尊ぶの至極は、天に配することなり、仲尼は『孝經』に於て說けり、貴而以下八字は周公を贊して盡きぬ、周公は貴

に謙遜の人にて、驕傲の人にあらず、文武は文王と武王、道予肺明、光被四海の八字は、『孝經』（應感章第十七）の語、周公が魯國に封ぜらるるや、禮樂を正しうし、宗廟を奉ず、魯孝公、名は稱、獻公の子、周公より十三世の魯公なり、宣王は周の十一代の王、魯の武公に三弟あり、長は括、次は戲、次は稱、周の宣王は樊仲山父（樊仲なり）の諫を容れずして、戲を魯公と爲す、括が子に伯御あり、魯人と共に戲を攻めて之を弑し、伯御自ら立つ、十一年に、宣王、伯御を殺し、是に於て稱を立つ、是を孝公と爲す、孝公の人と爲り、所謂歷世の遺訓に由つて內外の政治を執り、私せざる所を宣王が感ぜしものならん、仲山父も之を讃せしものならん、問は問訊なり、咨は咨詠なり、不干不犯、孝公が能く信を守るを贊する語なり、夷宮は宣王の祖父成王の廟、不亦宜乎は淵明が歎辭なり、獻王は孝景皇帝が子、學を修め古を好む、實事是を求む、古文先秦の舊書を善寫し、山東の諸儒と論議す、人と爲り端正溫仁、饌寡を惠めり、惠王は其の曾孫に當る、獻王の子不害、不害の子堪、堪の子授、授の子慶、慶の子元、是を河間惠王と爲す、『漢書』（景十三王傳第二十三）曰く、良に獻王の行を修む、母太后薨ず、服喪禮の如くす、哀帝詔を下し褒揚して曰く、河間王良とに太后に喪することが三年、宗室の儀表爲り、其の封萬戶に益す、二十七年に薨ず、子尙嗣ぐ、王莽の時絕ゆ、淵明は漢書の字面を其の儘用ひしもの多し、

【大意】 周公旦と魯の孝公と河間の惠王との三侯を贊せしなり、貴と驕とは途を殊にす、然るに貴を以て驕と爲す諸侯無きにあらず、淵明其の然るべからざるを敍す、貴にして驕ならざる人には天下の豪傑期せずして會合する、周公の如きは勞して而かも謙、乃ち其の威德を光大にする所以、周公と孝公とは共に魯に封ぜられしなれば、二侯承魯と曰ふ、節儉に遵つて泰安を去る、國人の服する所以、河間の惠王は母太后の爲め三年の喪を爲す、此の率禮にして漢の宗室皆是れに賴ると謂ふ可し、

卿大夫孝傳贊

卿大夫孝傳贊

孔子　孟莊子　潁考叔

孔子　孟莊子　潁考叔

孔子魯人也。入則事父兄。出則事公卿。喪事不敢不勉。故稱曰孝乎惟孝。友于兄弟。是亦爲政也。君賜腥必熟而薦之。雖蔬食而齊。祭如在。鄕人儺。朝服立於阼階。孝之至也。至德要道。莫大於孝。是以曾參受而書之。游夏之徒。常咨稟焉。許止不嘗藥。書以殺父。宰我暫言減喪。責以不仁。言合訓典。行合世範。德義可尊。作事可法。遺文不朽。揚名千載。孟莊子魯人也。孔子稱其孝。其他可能也。其不改父之政。與父之臣。是難能也。夫孝子之事親也。事亡如事存。故當不義則爭之。存所不爭。則亡亦不敢改。三年無改父之道。猶謂之孝。況終身乎。潁考叔鄭人也。莊公以叔段之故。與母誓曰。不及黃泉。無相見也。既而悔之。考叔爲封人。聞之有獻於公。公賜之食。而舍肉。公問之。對曰。小人有母。未嘗君之羹。請以遺之。公曰。汝有母遺。緊我獨無。考叔曰。何謂也。公語之故。且告之悔。考

叔曰、若掘地及泉、隧而相見、其誰曰不然、公從之、遂爲母子如初、君子曰、穎考叔純孝也、愛其母而施及莊公、詩云、孝子不匱、永錫爾類、其是之謂乎、

贊曰

仁惟本悌、聖亦基孝、恂恂尼父、固天攸造、二子承親、式禮遵誥、永錫純懿、無改遺操、

孔子は魯の人なり、入つては則ち父兄に事へ、出でては則ち公卿に事へ、喪事敢て勉めずんばあらず、故に稱して曰く、孝か惟れ孝、兄弟に友、是れ亦政を爲すなり、君腥きを賜ふや、必ず熟して之を薦む、蔬食と雖も而かも齊し、祭に在すが如し、鄉人儺、朝服阼階に立つ、孝の至りなり、至德要道、孝より大なるは莫し、是を以て曾參受けて之を書す、游夏の徒、常に咨稟す、許止藥を嘗めず、書するに父を殺すを以てす、宰我暫く喪を減ずと言ふ、責むるに不仁を以てす、言訓典に合し、行世範に合す、德義尊む可く、作事法る可し、遺文朽ちず、名を千載に揭ぐ、孟莊子は魯の人なり、孔子其の孝を稱す、其の他能くすべきなり、其の父の政と父の臣とを改めず、是れ能くし難きなり、夫れ孝子の親に事ふるや、亡に事ふる存に事ふる如し、故に不義に當りては則ち之を爭ふ、存爭はざる所は、則ち亡も亦敢て改めず、三年、父の道を改むる無き、猶ほ之を孝と謂ふ、況や身を終るをや、穎考叔は鄭の人なり、莊公叔段の故を以て、母と誓つて曰く、黃泉に及ばずんば相見ること無きなり、旣にして之を悔ゆ、考叔封人と爲る、之を聞き公に獻ずることあり、公之に食を賜ふ、而して肉を舍く、公之を問ふ、對へて曰く、小人、母あり、未だ君の羹を嘗めず、請ふ以て之に遺らん、公曰く、汝母あり遺る、緊我獨り無し、考叔曰く、何の謂ぞや、公、之に故を語る、且之に悔を告ぐ、考叔曰く、若し地を掘り泉に及び、隧して相見ば、其れ誰か然らずと曰はん、公之に從ふ、遂に母子たる初の如し、君子曰く穎考叔純孝なり、其の母を愛して、施莊公に及ぶ、詩に云ふ、孝子匱しからず、永く爾に類を錫ふ、其れ是の謂ひか、贊に曰く、

仁惟れ悌に本き、聖も亦孝に基く、恂恂たる尼父、固より天の造す攸、二子親に承け、禮に式り誥に遵ふ、永く純懿を錫ひ、遺操を改むる無し、

【注解】孔子は家庭の人と爲りては父兄卽ち長上に事へ、官游の人と爲りては公卿が命を聽く、喪事は喪紀なり、祭事なり、孔子は親喪の道に於て勉勵せし人なり、（論語子罕第九）孝乎惟孝、友于兄弟、『論語』（爲政第二）に或孔子に謂ひて曰く、子奚ぞ政を爲さざる、子曰く、書に孝を云ふや、惟孝兄弟に友に、政あるに施す、是も亦政を爲すと、腥は生肉、生肉は直ちに食ふ能はず、是な

以て熟して祖先に供す、蔬食、肉以外のものも割を正しうして以て獻す、鄕人儺、朝服立於阼階は論語（鄕黨第十）に出づ、儺は俗に言ふ所の疫掃なり、戲に近きものなれども、朝服して以て東階に立つて禮を厚うする、至德要道、莫大於孝は『孝經』の文なり、曾參が孔子に侍坐して敎を受く、大なるものは是の孝道である、乃ち孝經二十二章是れなり、子游子夏の徒も、遂に孝道を存褒するに至る、宰我暫言減喪『論語』（陽貨第十七）に、宰我問ふ、三年の喪、期已に久し、君子三年禮を爲さずんば禮必ず壞れん、三年樂を爲さずんば樂必ず崩れん、舊穀既に沒し、新穀既に升る、燧を鑽り火を改む、期已む可し、子曰く、夫の稻を食ひ、夫の錦を衣る、女に於て安きか、曰く、安し、女安くば則ち之を爲せ、夫れ君子の喪に居る、旨きを食うて甘からず、樂を聞いて樂からず、居處安からず、故に爲さざるなり、今女安くば則ち之を爲せ、宰我出づ、子曰く、予の不仁なるや、子生れて三年、然るのち父母の懷を免る、夫れ三年の喪は、天下の通喪なり、予や三年の愛其の父母に有るか、宰我は三年の長きを說く、孔子は長しと言ふ者は不仁なりと斷ず、淵明は乃ち孔子を以て調典とし、孔子を以て世範とし、孔子の德義は可尊、孔子の作事は可法、孔子の遺文は不朽なりと嘆じ、之に從ふ者は千載に名を揚ぐとなり、孟莊子は『論語』（子張第十九）に出づ、曾子曰く、吾之を夫子に聞けり、孟莊子の孝や、其の他は能くすべし、其の父之臣と父之政とを改めず、是れ難能なり、事亡如事存、以下皆『論語』の意、潁考叔が事は、『史記』鄭の世家（十二）に出づ、莊公元年、弟段を京に封ず、太叔と號す、祭仲曰く、京は國よりも大なり、庶を封ずる所以にあらず、莊公曰く、武姜、之を欲す、我敢て奪はざるなり、段、京に至り、甲兵を繕治し、其の母武姜と鄭を襲はんことを謀る、二十二年、段果して鄭を襲ふ、武姜、內應を爲す、莊公、兵を發して段を伐つ、段走る、京を伐つ、京人、段に畔く、段出でて鄢に走る、鄢潰ゆ、段出でて共に奔る、是に於て莊公、其の母武姜を城潁に遷し、誓つて曰く、黃泉に至らずんて、相見る無し、居ること歲餘、已にして悔いて母を思ふ、潁谷の考叔、公に獻するあり、公、食を賜ふ、考叔曰く、臣、母あり、請ふ君の食を臣が母に賜はん、莊公曰く、我甚だ母を思ふ、盟に負くを惡む、奈何せん、考叔曰く、地を穿ち黃泉に至り、則ち相見よ、是に於て遂に之に從ひ、母に見ゆ、（以上史記の全文）是れなり、然るに淵明が記する所は『左傳』に依るを以て多少文句の相違あり、蓋し大同小異、深く論ずる所なし、考叔純孝の歎ずる所と嘆ず、毛詩孝子不匱、永錫爾類、行孝の至り、能く施いて旁人に及ぶを謂ふなり、贊曾解し易し、注を要せず、但

此の詩に就いて、孔子と孟莊子と潁考叔を同架とするは不倫なりと論ずる者あり、而して考叔は封人にて卿大夫にあらず、且つ純孝を以て見るは誤ると、今案ずるに孔子の大なるは、二子の比すべきにあらず、日月と星と比較するが如きは戲に近きも、星を以て日の下に置く、亦何の不可かあらん、淵明何ぞ其の大小の相違を知らざらんや、而かも此の如きは要するに孝を以て主とし、人の大小を以て主としたるにはあらず、竝論と見る者は誤る、孔子の下に二子を置く者と心得べし、封人を卿大夫として贊するは偶ま其の失ならん、

【大意】魯の孔子と魯の孟莊子と鄭の潁考叔との三人を贊せしなり、仁は人を愛して私無き者を謂ふ、其の仁の本は悌なり、悌は善く兄長に事ふるを謂ふ、聖人孔子も亦孝に基くなり、恂恂たる尼父即ち孔子は、孝に於ける固より天の造せる所、學んで以て始めて知る人にはあらず、孟莊子と潁考叔の二子は親より承け、禮と誥とに式遵して誤らず、永く純懿を賜うて、遺操を改むること無し、

士孝傳贊

士孝傳贊

高柴　樂正子春　孔奮　黃香

高柴　樂正子春　孔奮　黃香

高柴衞人也。喪親泣血三年。未嘗見齒。所謂哭不偯。言不文也。爲武城宰而化行。民有不服其親者。改之行喪如禮。君子之德風也。以身先之。而民不遺其親。樂正子春魯人也。下堂傷足。既瘳。數月不出。猶有憂色。

曰、吾聞之曾子、父母全而生之、己全而歸之、可謂孝矣、故君子一擧足、一出言、不敢忘父母、不敢毀傷、孝之始也、夫能敬愼若斯、而災患及者、未之有也、孔奮扶風人也、少以孝行、著名州里、供養至謹、在官唯母極甘美、妻息菜食、歷位以淸、夫人情莫不欲厚其親、然亦有分焉、奢則難繼、能致儉以全養者鮮矣、黃香江夏人也、九歲失母、思慕骨立、事父竭力以致養、冬無被袴、而盡滋味、暑則扇床枕、寒則以身溫席、漢和帝嘉之、特加異賜、歷位恭勤、寵祿榮親、可謂夙興夜寐、無忝爾所生者也、

贊曰

顯允羣士、行殊名鈞、咸能夙夜、以義榮親、牽彼城邑、用化厥民、忠以悟主、其孝乃純、

高柴は衞人なり、親を喪ひ泣血三年、未だ嘗て齒を見はさず、所謂哭して偯かず、言うて文らざるなり、武城の宰と爲り化行はる、民其の親に服せざる者あれば、之を改めしめ、喪を行ふ禮の如くす、君子の德風なり、身を以て之に先んず、而して民其の親を遺れず、樂正子春は魯の人なり、堂を下りて足を傷つく、既に瘳ゆ、數月出でず、猶は憂色あり、曰く、吾之を曾子に聞け り、父母全うして之を生む、己全うして之を歸す、孝と謂ふ可し、故に君子一たび足を擧げ、一たび言を出す、敢て父母を忘れず、敢て毀傷せざるは孝の始なり、夫れ能く敬愼斯の若く、而して災患及ぶもの未だ之有らざるなり、孔奮は扶風の人、少うして孝行を以て、名を州里に著す、供養至謹、官に在りて唯母甘美を極む、妻息菜食、位を歷て以て淸し、夫れ人情其の親に厚うせんと欲せざるは莫し、然れども亦分あり、奢るときは繼ぎがたし、能く儉を致し以て養を全うする者は鮮し、黃香は江夏の人なり、九歲母を失ひ、思慕骨立、父に事へ力を竭くし養を致す、冬被袴無し、而して滋味を盡くす、暑には則ち床枕を扇ぎ、寒には則ち身を以て席を溫む、漢の和帝、之を嘉し、特に異賜を加ふ、位を歷て恭勤、寵祿親を榮す、夙に興き夜に寐ね、爾が所生を忝しむる無きものと謂ふ可きなり、贊に曰く、顯允羣士、行殊るも名は鈞し、咸能く夙夜、義を以て親を榮す、彼の城邑を牽ゐ、用て厥の民を化す、忠以て主を悟らしむ、其の孝乃ち純、

【注解】高柴は衞人、或は謂ふ齊の人、字は子羔『孔子家語』に云ふ、其の足影を履まず、啓蟄殺さず、方長折らず、親の喪を執り、泣血三年、未だ嘗て齒を見さず、難を避けて行き、徑せず竇せず『論語』(先進篇第十一)に柴也愚とあり、子路、子羔をして費の宰と爲らしむ、孔子曰く、夫の人の子を賊ふ、子路曰く、民人有り、社稷有り、何ぞ必ずしも書を讀んで然る後學と爲ん、武城即ち費邑の宰と爲りて實踐躬行せしを淵明は贊するなり、其の人直に過ぎ、臨機の處置なぞせざりしを以て愚と日はるる所以、樂正子

孝、堂を下り足を傷け、而して瘳えて後も猶ほ憂色あるは何ぞ、身體髮膚、之を父母に受け、敢て毀傷せざるが孝の始なり、然るに一度毀傷す、毀傷したりと雖も瘳えたり、瘳えたりと雖も、一度毀傷す、是に於て孝道に於て缺闕す、其の人孝を忘れざればなり、淵明が子春を贊して、曾子を贊せざるを責むる者あり、按ずるに曾子の孝に於ける天下に彰彰、淵明が特に贊を作らざるも其の名湮滅すべからず、乃ち子春の未だ名の顯はれざるを、我以て顯はさんとの意に外ならず、何ぞ深く怪むに足らんや、孔奮、字は君魚、扶風茂陵の人、曾祖は覇、漢の元帝の時、侍中と爲る、奮、春秋を劉歆に受け、其の奥を極む、王莽の亂、老母と幼弟を携して、兵を河西に避け、後姑臧を守り、爵關內侯を賜ふ、母に事へて孝謹、儉約を爲すと雖も、奉養極めて珍膳を求め、躬ら妻子を率ゐて、同じく菜茹に甘んず、後賊と闘ひ、妻子は賊の爲め殺さる、世祖、奮が功を褒し、武都太守に拜す、弟の奇『春秋左氏刪』を作る、一門節義忠孝の士なり、(後漢書二十一)致儉にして全養、是れ淵明の贊する所以、黃香、字は文彊、江夏安陸の人、九歲、母を失ひ、思慕憔悴、殆んど喪を免れず、鄕人其の至孝を稱す、年十二、太守劉護之を召し、門下孝子に署し、甚だ愛敬せらる、家貧、內に僕妾無し、躬ら勞苦を執り、孝養頗る致す、而して經典に博通し、道術に究精す、京師號して天下無雙、江夏黃童と曰ふ、後、尙書郎・左丞・尙書令・東郡太守・魏郡太守の官を經て歿す、魏郡、水害に遭うて民饑う、香己が祿を出して以て貧者を贍ふ、民服せざるは無しと云ふ、淵明が力を盡くして贊する所以、(後漢書七十文苑傳)

【大意】高柴と樂正子春と孔奮と黃香との四士を贊す、贊に羣士とあるも、此の四士を指す、四士の孝道に於ける、名は顯著にして、其の行は殊異なるも、其の名は平鈞きなり、四士とも咸能く夙夜に怠らず、四士とも義を以て親の榮を爲す、高柴の如きは、彼の城邑卽ち武城の宰と爲り、其の城中の民をして盡く風化せしむ、黃香の如きは、和帝に事ふるに忠を以てし、而して家道に於ける孝は乃ち純、民服せざる無き所以なり、

庶人孝傳贊

江革　廉範　汝郁　殷陶

庶人孝傳贊
江革　廉範　汝郁　殷陶

江革齊人也。漢章帝時。避賊負母而逃。賊賢之不害。而告其生路。竭力傭賃。以致甘暖。和顏悅色。以盡歡心。欲親之安。自挽車以行。鄕人稱之。號曰江巨孝。位至五官中郎將。天子嘉焉。寵遇甚厚。告歸。詔書褒美。就家禮其終身。以顯異行。廉範京兆人也。少孤。十五入蜀迎父喪。遇石船覆。範執骸而沒。船人救之。僅免於死。遂以喪歸。及仕郡。拯太守於危難。送故盡節。章帝時爲郡守。百姓歌詠之。夫孝者人之本。敎之所由生也。是以範之臨危也勇。宰民也惠。能以義顯也。汝郁陳郡人也。五歲母病不食。郁亦不食。母憐之强食。郁能察色知病。輒復不食。族人號曰異童。年十五。著於鄕里。父母終。思慕致毀。推財與兄弟。隱於草澤。君子以爲難。況童齓孝於自然。可謂天性也。殷陶汝南人也。年十二以孝稱。遭父憂。率情合禮。有長蛇帶其門。擧家奔走。陶以喪柩在焉。獨居廬不動。親

戚扶持。曉論莫能移之。啼號益盛。由是顯名。屢辭辟命。夫智者不惑。勇者不懼。陶孝於其親。而智勇竝彰乎弱齡。斯又難矣。

贊曰

事親盡歡。其難在色。彼養以祿。我養以力。義在愛敬。榮不假飾。嗟爾衆庶。鑒茲前式。

江革は齊の人なり、漢の章帝の時、賊を避け母を負うて逃る、賊之を賢とし害せず、而して其の生路を告ぐ、力を竭くして傭賃し、以て甘暖を致す、顏を和げ色を悅ばしめ、以て歡心を盡くし、親の安きを欲し、自ら車を挽き以て行く、鄕人之を稱し、號して江巨孝と曰ふ、位五官中郞將に至る、天子焉を嘉し、寵遇甚だ厚し、歸を告ぐ、詔書褒美し、家に就き其の終身を禮し、以て異行を顯す、廉範は京兆の人なり、少うして孤、十五蜀に入り父の喪を迎へ、石に過うて船覆る、範櫬を執りて沒す、船人之を救ひ、僅かに死を免る、遂に喪を以て歸る、郡に仕ふるに及び、太守を危難に拯ひ、故を送り節を盡くす、章帝の時郡守と爲る、百姓之を歌詠す、夫れ孝は人の本、敎の由つて生ずる所なり、是を以て範の危きに臨むや勇、民を宰するや惠、能く義を以て顯るるなり、汝郁は陳郡の人なり、五歲母病んで食はず、郁も亦食はず、母之を憐み强ひて食はしむ、郁能く色を察し病を知り、輒ち復食はず、族人號して異童と曰ふ、年十五、鄕里に著る、父母終へ、思慕毀を致し、財を推し兄弟に與へ、草澤に隱る、君子以て難しと爲す、況んや童齓自然に孝なる、天性と謂ふ可きなり、殷陶は汝南の人なり、年十二、孝を以て稱せらる、父の憂に遭ふ、情を率ゐて禮に合ふ、長蛇あり其の門に帶す、擧家奔走す、陶喪柩の在るを以て、獨り廬に居り動かず、親戚扶持曉諭するも、能く之を移す莫し、啼號益す盛ん、是に由つて名を顯す、屢ば辟命を辭す、夫れ智者は惑はず、勇者は懼れず、陶其の親に孝、而して智勇竝に弱齡に彰る、斯れ又難し、贊に曰く、親に事へ歡を盡くす、其の難きこと色に在り、彼は養ふに祿を以てし、我は養ふに力を以てす、義愛敬に在り、榮假飾せず、嗟爾衆庶、茲前式に鑒みよ、

【注解】 江革、字は次翁、齊國臨淄の人なり、少うして父を失ひ、漢の章帝（後漢の第三主）の時、天下の亂に遭ひ、母を負うて逃る、後、賢良方正に擧げられ、司空長史、五官中郞將の官を經て卒す、詔して穀千斛を賜ふ、（後漢書列傳第二十九）廉範は廉范を以て正とす、字は叔度、京兆杜陵の人、趙の廉頗將軍の後なり、隴西の太守鄧融、范を用ひて功曹と爲す、會融、罪あり、獄に繋がる、范、姓名を變じて其の衛侍と爲り、左右勞心す、融、其の貌の范に類するを怪み、問うて曰く、卿は我が故の功曹ならずや、范訶して曰く、君困厄瞀亂するか、融が病んで獄死するに至るまで、其の名を告げざりしなり、拯太守於危難、臨危也勇は、此等の事と、薛漢が屍を斂めて顯宗の怒りに觸れ而かも驚かざることを云ふ、後、武威武都二郡の太守と爲り、百姓の爲め歌詠せらる、史家が贊する所、淵明が贊する所、蓋し一致せり、（後漢書第二十一）汝郁、字は叔異、陳國の人、賈逵、和帝に薦むるに東萊の司馬均、

陳國の汝郁の二人を以てす、人品知るべきなり、五歳母病云云の文字、皆『東觀記』に由る、漢書を案ずるに、性仁孝、親歿するに及んで、遂に山澤に隱處す、後、果遷して魯相と爲る、德を以て敎化し、百姓之を稱す、流人歸する者、八九千戶とあり、（後漢書列傳第二十六賈逵傳に附す）殷陶は汝南征羌の人なり、同郷范滂（淸節慷慨の士）が事を擧ぐるに連坐して囚はれ、後釋されて歸る、『漢書』に依つて案ずるに毫も淵明が言ふ所に似ず、『陶樹本』に曰く、『廣五行記』を讀む、殷仲文が孝行を記す、是の記事と同じ、然りと雖も仲文は靖節と近時の人、靖節豈肯て之を取らんや、『廣五行記』却つて靖節が是の記事を取つて以て仲文に附したるやも知るべからず、殷陶が事『後漢書列傳』五十七にあり、天子孝、諸侯孝、卿大夫孝、士孝、庶人孝、以上是を五孝と爲す、天子と諸侯は論なし、卿大夫の中に封人あり、封人は典守封疆の官なれば卿大夫にあらざることは明白なり、淵明は而かも之を同一とし、士と庶人との區別も明白ならず、全く官に就かざる者なれば庶人として可ならんも、中郎將と爲り、郡守と爲る、純然たる庶人と見るを得ず、彼に於ては日本の舊世界の如く、士族と平民との區別あるべからず、官に在りては士、野に在りては庶人たり、蓋し『孝經』に於て天子章、諸侯章、卿大夫、士、庶人と各の孝道の異なる點より之を分つ、例へば『孝經』の士章に、夙興夜寐、毋忝爾所生とあり、是れ何ぞ必ずしも士が孝のみならん、天子も諸侯も庶人も皆、夙興夜寐ならざるべからず、庶人章に、用天之道、因地之利など、何ぞ必ずしも庶人のみならん、天子も諸侯も皆然らざるを得ず、要するに天子も諸侯も孝道に於ては大なる異あるにあらず、各の其の職とする所を以て異とするのみ、文章に就きては淵明は『論語』の語を其の儘用ふるもの多し、讀む者は其の意して讀むべきなり、

【大意】江革と廉範と汝郁と殷陶と四庶人の贊とす、四人共に親に事へて歡を盡くす、人には喜怒哀樂の四情ありて是れが一一色に顯る、而して孝子は歡の色のみ顯して、怒や哀の色を爲さず、一人は親を養ふに祿を以てすれば、一人は勞力を以て養ふ、義は愛と敬とに在り、榮達を求めて假飾と爲すを嫌ふ、噫爾等一般の民衆は茲前式に鑒みて孝道の忽諸に付すべからざるを知れ、

陶淵明集卷七終

與子儼等疏

子儼等に與ふる疏

告儼俟份佚佟。天地賦命。生必有死。自古賢聖。誰能獨免。子夏有言。曰
死生有命。富貴在天。四友之人。親受音旨。發斯談者。將非窮達不可妄
求。壽夭永無外請故耶。吾年過五十。少而窮苦。每以家敝。東西游走。性
剛才拙。與物多忤。自量爲己。必貽俗患。僶俛辭世。使汝等幼而飢寒。余
嘗感孺仲賢妻之言。敗絮自擁。何慙兒子。此既一事矣。但恨鄰靡二仲。
室無萊婦。抱茲苦心。良獨內愧。少學琴書。偶愛閒靜。開卷有得。便欣然
忘食。見樹木交陰。時鳥變聲。亦復懽然有喜。常言五六月中。北窗下臥。
遇涼風暫至。自謂是義皇上人。意淺識罕。謂斯言可保。日月遂往。機巧
好疎。緬求在昔。眇然如何。病患以來。漸就衰損。親舊不遺。每以藥石見

敎。自恐大分將有限也。汝輩稚小家貧。每役柴水之勞。何時可免。念之在心。若何可言。然汝等雖不同生。當思四海皆兄弟之義。鮑叔管仲。分財無猜。歸生伍擧。班荆道舊。遂能以敗爲成。因喪立功。他人尙爾。況同父之人哉。潁川韓元長。漢末名士。身處卿佐。八十而終。兄弟同居。至于沒齒。濟北氾稚春。晉時操行人也。七世同財。家人無怨色。詩曰高山仰止。景行行止。雖不能爾。至心尙之。汝其愼哉。吾復何言。

儼俟份佚佟に告ぐ、天地命を賦す、生必ず死有り、古より賢聖、誰か能く獨り免れん、子夏言へる有り、曰く死生命有り、富貴天に在り、四友の人、親しく音旨を受く、斯の談を發する者、將た窮達妄に求む可からず、壽夭永く外請無き故にあらずや、吾が年五十を過ぎ、少うして窮苦、每に家敝を以て、東西游走す、性剛才拙、物と忤ふ多し、自ら量り己が爲めに、必ず俗患を貽さんと、僶俛世を辭し、汝等幼うして飢寒せしむ、余嘗て孺仲が賢妻の言に感ず、敗絮自ら擁し、何ぞ兒子に慙ぢん、此れ既に一事なり、但恨む鄰に二仲靡く、室に萊婦無し、玆苦心を抱き、良に獨り內に愧づ、少うして琴書を學び、偶ま閒靜を愛す、卷を開き得ることあれば、便ち欣然食を忘る、樹木陰を交へ、時鳥聲を變ずるを見、亦復懽然喜び有り、常に言ふ五六月中、北窻の下に臥し、涼風暫く至るに遇ふ、自ら謂ふ是れ羲皇上の人と、意淺く識罕、斯の言保つ可しと謂ふ、日月遂に往き、機巧好疎、緬に在昔を求めば、眇然如何、病患以來、漸く衰損に就く、親舊遺れず、每に藥石を以て救はる、自ら恐る大分將に限り有らんとするなるを、汝輩稚小家貧、每に柴水の勞に役す、何れの時か免す可き、之を念うて心に在り、若何か言ふ可き、然れども汝等同生せずと雖も、當に四海皆兄弟の義を思ふべし、鮑叔管仲、財を分ちて猜無し、歸生伍擧、荆を班し舊を道ひ、遂に能く敗を以て成と爲し、喪に因つて功を立つ、他人尙爾り、況んや同父の人をや、潁川の韓元長、漢末の名士、身卿佐に處り、八十にして終ふ、兄弟同居、齒を沒するに至る、濟北の氾稚春、晉時操行の人なり、七世財を同じうし、家人怨色無し、詩に曰く高山は仰止、景行は行止、爾る能はずと雖も、至心に之を尙べ、汝其れ愼めや、吾復何をか言はん、

【注解】疏は書疏と成語して、記して意を通ぜしむるなり、天地賦命以下の數文字は處處に散在して用ふる語、何の典に出づと定め難し、子夏の語は『論語』（顏淵篇第十二）に出づ、四友は何孟春曰く『孔叢子』に回と賜と師と由（孔子の門人四人）となりと、受音旨は孔子より親しく音旨を受くるなり、斯談とは死生や富貴の談を發する者を謂ふ、人には窮あり、達あり、壽あり、夭あり、皆一定ならず、疑を是の間に容るるが故に此の談を爲すとなり、吾年過五十、趙泉山曰く五十は三十に改むべし、陶澍曰く東西游走を以て言を爲すなり、何ぞ必ずしも三十と改めん、乃ち五十にて可し、與物多忤、忤逆なり、他人と調和せざるなり、貽俗患、忤は一人の賢者は聽すとも、多くの俗は聽さず、是を以て調和せざる時は、已一人の爲めのみならず、陶一家の患を貽すとなり、僶俛は勉强なり、已徒らに俗に背きて勉强し、一朝辭世（世事を辭すと、死するとの二義あり）する時は、汝等が何も知らずして飢寒に墮つ

るを思はざるを得ず、余は淵明自身、孺仲は儒仲の誤なり『後漢書』(逸民傳第七十三)に王覇字は儒仲、太原廣武の人、少うして清節あり、王莽位を簒ふに及んで、冠帶を棄て絶交す、建武中、尚書の官と爲る、名を稱して臣と稱せず、有司其の故を問ふ、曰く、天子も臣とせざる所有り、諸侯も友とせざる所有り、後、病を以て歸り、茅屋蓬戸、連りに徵せども至らず『列女傳』(第二)に王覇同郡令狐子伯と友たり、後、子伯、楚の相と爲る、而して其の子、郡の功曹と爲る、子伯、子を遣り、書を覇に奉ず、客去つて久臥起きず、妻怪しんで其の故を問ふ、曰く向に令狐子を見る、容服甚だ光る、擧措適ふ有り、而して我が兒蓬髮歷齒、未だ禮を知らず、則ち客を見て而して慚づる色あり、父子恩深し、覺えず自失するのみ、妻の曰く、君少うして清節を修め、榮祿を顧みず、今子伯が貴きは、君が清きに孰與ぞや、君躬ら勤苦、子安んぞ耕して以て養はざるを得ん、安んぞ黃頭歷齒ならざるを得ん、奈何ぞ宿志を忘れて、兒女子に慚づるや、覇屈し起つて笑うて曰く、是有る哉と、遂に共に終身隱遯す、淵明、以て賢妻と賞する所以、鄭は鄭家、二仲は『高士傳』に、求仲と羊仲、皆車を治め業と爲す、廉を推き名を逃る、蔣元卿が兗州を去つて、杜陵に還るや、荊棘門を塞ぎ、舍中に三徑あり、出でず、唯二人之に從つて遊ぶ、時人之を二仲と謂ふ、淵明は今友の無きを恨むなり、室無萊婦『列女傳』に楚の老萊子、世を逃れて蒙山の陽に畊す、楚王が聘使、三たび老萊の門に至る、起たず、王自ら至る、老萊方に畚を織る、王曰く、願くは先生之に臨め、老萊曰く、僕山野の人、以て政を守るに足らず、王復た曰く、願くは終に先生の志を變ぜよ、老萊子曰く諾、王去る、間有り、其の妻畚を戴き薪を挾んで來る、老萊子に謂ひて曰く、是れ何ぞ車跡の衆きや、老萊子曰く、楚王、吾をして楚國の政を守らしめんと欲す、妻が曰く、子之を許せるか、曰く然り、妻が曰く、妾之を聞く、食酒肉を以てす可きもの、隨ふに鞭捶を以てす可し、授くるに官祿を以てす可きもの、隨ふに鈇鉞を以てす可し、今、先生、人の酒肉を食ひ、人の官祿を受く、此れ皆人の制する所なり、亂世に居り、人の制する所と爲る、能く患を免れんや、老萊子遂に其の妻を隨へ、江南に至りて止まる、淵明は良友無く、良妻無きを慨くなり、貧苦を嘆くの愚妻を有する人は、淵明と此の感を同じうすべし、内外共に志を同じうする者無し、而かも生活の必要あり、苦心する所以、唯性讀書を好む、而して其の深義に於て得る所有れば、欣然忘食に至る、『論語』(雍也第六)に發憤忘食、樂以忘憂とあり、樹木以下、春晩より仲夏に至るの時の秋を言ふ、一年中の好時節を愛すとなり、羲皇は伏羲を言ふ、上人の四字にて太古の人と言ふ意味なり、今日塵濁の世の人とは自ら閒へざるなり、斯言は斯道と同じ、斯道は如何して保つ可きと自ら期するなり、而かも日月の過往するは匆匆たり、吾が處世は益す疎拙なり、機巧好疎は意淺識罕の文字と照應す、緬求在昔は吾が往時を追懷するなり、眇然、眇は微少なり、微躬如何ともする無し、病患に遭うては、幸に親戚や故舊が藥石の救あるを嘆きて以て感慨を示す、大分は清潭案するに天分の誤ならんかと、藥石の救あるも或は恐る天分の訖に有限なるを、然らば生死界を異にするも亦未だ知るべからずとなり、何時可免、一家の爲め稚小なる汝輩をして柴水の勞を免ずる時は何れの日にあるかを知らざるなり、可憐に思ふの念は曾て忘れず、其の心は若何とも言語に出す可らず、然りと雖も汝等が四海皆兄弟の語、卽ち『論語』(顏淵十二)に孔子が說ける所の義を知らば、父たる我が背世すとも何ぞ悔むに足らんとの意なり、鮑叔と管仲の事は一卷に於て辨ぜり、分財無猜、管仲が鮑叔の金を自由に用ひて、鮑叔は微塵も猜疑の念無きなり、友も此の如くなれば、兄弟も及ぶ所にあらず、歸生と伍擧の關係は未だ詳知するを得ず、伍擧は春秋楚の大夫、參が子、椒に邑す、亦椒擧と曰ふ、伍子胥の祖父に當る、況同父之人、同父母と爲さず同父と曰ふ、是に於て四人の子或は異母なるも有らんとの說あり、潁川の韓元長は『後漢書』(列傳五十)の韓韶が傳に附してあり、韓融、字は元長、韶が子、少うして能く理を辯じ、而して章句の學を爲さず、聲名甚だ盛ん、五府並び辟す、獻帝の初め太僕に至る、年七十卒とあり、兄弟同居、至于沒齒の八字は元長の事にあらず、濟北氾稚春が事なり、七世同財、家人無怨色、一家共和して、城府を設けず、晉時既に是の人ありしなり、詩曰(小雅桑扈之什)高山仰止、景行行止、字の如く高山は仰ぎ見ざれば能はず、景行は大道の事なり、人は道にあらずんば行く能はず、先賢が此の如く實踐躬行したること、汝等も能く之を仰ぐべし、亦其の行履を踏むべし、雖不能爾、先賢の行履一から十まで倣ふ能はざる場合は、至心尙之、至誠の心を以て此等の行を尊尙せよ、諄諄として訓諭、人の親と爲り、人の子と爲る者、宜しく三復すべきなり、讀んで以て感嘆する者、豈唯東坡先生のみならんや、

【大意】 四兒に與へて訓誡したる疏なり、凡そ人は生ある以上必ず死あり、賢聖も庶人も皆同じ、而して死生も富貴も皆天命なり、昔商と賜と師と由との四人は、此の天命の數を孔子より親しく受けた

り、後世斯の死生有命の談を發する者、窮と達と壽と夭とに就いて皆疑を抱くは何ぞ、吾が年は五十を過ぐ、其の少時を省みれば窮苦の生活を送り來れり、陶家が疲敝すれば、東西に游走して活を爲す、性は剛、才は拙、他の物と忤ふこと多く、自分で自分を知る、必ず一家の患を貽さんと、俗に背きて唯僶俛して世を辭する時は、汝等が幼稚の身を饑寒に墮すの患あり、余嘗て儒仲が賢妻が言ふ所の語に感せり、敗絮自ら擁するも、貴きは淸きに如かす、淸くして貧、何ぞ兒子に慙づる所がある、此の一事旣に感す、其の餘に於てをや、但恨むらくは鄰家に二仲の如き高士無く、室中に萊家の如き賢婦無きを、賢婦にあらざるより貧を厭うて彼れ此れ饒舌る、故に我は如何せんと苦心を抱き、而かも内心獨り愧づ、自分の性格としては少時より琴書を學んで、躁を好まず靜を好む、而して讀書して心に得る所あれば欣然として食を忘る、樹木交陰、卽ち春晚夏初、時鳥聲を變ずるを見れば、懽然として喜び、一年の中、五月六月は炎暑の期なり、此の炎暑の時、北窗の下に閒臥し、涼風の窗に入るを受く、此の氣分は實に羲皇以上の人なりと自ら謂ふ、而かも意は淺く識は罕なり、如何にして斯の高尙の言を保つべきかと謂ふ、日月は堂堂と往き、機巧好疎、事志と違ふ、緬に在昔の氣分を求むるに眇眇然として如何ともする無し、而かも病患以來、氣力は衰損したるも、幸に親舊の我を遣てざるありて、藥石を以て惠まれ、死せざるを得たり、而して自ら恐る天分の將に限あるを、汝等は稚小、家貧の故に柴水の勞に役せらる、其の勞を罷めるは如何なる時なるかを知らず、之を念うて心に在るも、口に何と言うて可なるやを知らず、但汝等は骨肉の兄弟なり、相爭ふこと無かれ、昔鮑叔と管仲は、互に財を分ちて猜疑の念は絕えて無し、歸生も伍擧も、荊を班し舊を道ふ、遂に能く敗を以て成と爲し、喪に因つて功を立つ、他人ですら爾り、況んや汝等の如く同一人の父に於てをや、潁川の韓元長の如きは、多年兄弟同居して、死するまで變らず、濟北の氾稚春の如きは七世の間、兄弟財を同じうして家人に怨色無し、詩に高山仰ぎ、景行行く、汝等は此の詩意を守れ、守る能はざるも至心に之を尙べ、汝等が謹愼して此の語を奉せは、吾復何の言ふ所かあらん、

祭程氏妹文

程氏妹を祭る文

維晉義熙三年五月甲辰。程氏妹服制再周。淵明以少牢之奠。俛而酹之。嗚呼哀哉。寒往暑來。日月寢疎。梁塵委積。庭艸荒蕪。寥寥空室。哀哀遺孤。肴觴虛奠。人逝焉如。誰無兄弟。人亦同生。嗟我與爾。特百常情。慈妣早世。時尚孺嬰。我年二六。爾纔九齡。爰從靡識。撫髻相成。咨爾令妹。有德有操。靖恭鮮言。聞善則樂。能正能和。惟友惟孝。行止中閨。可象可傚。我聞爲善。慶自己蹈。彼蒼何偏。而不斯報。昔在江陵。重罹天罰。兄弟

索居。乖隔楚越。伊我與爾。百哀是切。黯黯高雲。蕭蕭冬月。白雲掩晨。長風悲節。感惟崩號。興言泣血。尋念平昔。觸事未遠。書疏猶存。遺孤滿眼。如何一往。終天不返。寂寂高堂。何時復踐。藐藐孤女。曷依曷恃。煢煢遊魂。誰主誰祀。奈何程妹。於此永已。死如有知。相見蒿里。嗚呼哀哉。

維れ晉の義熙三年五月甲辰、程氏妹服制再周、淵明少牢の奠を以て、俛して之に酹す、嗚呼哀しい哉、寒往き暑來り、日月寖疎、梁塵委積し、庭艸荒蕪、寥寥空室、哀哀遺孤、肴觴虛しく奠す、人逝いて焉くに如く、誰か兄弟無からん、人亦同生、嗟我爾と、特に常情を百にす、慈妣早世、時尚孺嬰、我が年二六、爾纔に九齡、爰に識る靡き從り、髫を撫し相成る、咨爾令妹、德有り操有り、靖恭 言鮮し、善を聞いて則ち樂しみ、能く正し能く和す、惟友に惟孝に、中閨に行止し、象る可し倣ふ可し、我聞く善を爲すは、慶己より踏む、彼の蒼何ぞ偏なる、而して斯れ報いず、昔江陵に在り、重ねて天罰に罹る、兄弟索居し、乖隔楚越、伊我爾と、百哀是れ切なり、黯黯高雲、蕭蕭冬月、白雲晨を掩ひ、長風節を悲しむ、感じて惟崩號し、言を興して泣血す、尋いで平昔を念ふ、觸事未だ遠からず、書疏猶ほ存し、遺孤眼に滿つ、如何ぞ一たび往いて、終天返らざる、寂寂高堂、何れの時か復踐まん、藐藐たる孤女、曷くに依り曷くに恃まん、煢煢たる遊魂、誰か主誰か祀らん、奈何ぞ程妹、此に於て永く已まん、死して如し知る有らば、蒿里に相見ん、嗚呼哀い哉、

【注解】 程氏妹は淵明が妹にて、程氏へ嫁したるなり、再周は二七日なり、七曜を用つて日を計るの法、七日を以て一周と爲す、或は一周は一年にて再周は二年ならん、寒往暑來の文字にて二年を以て可とせん、少牢は祭祀の羞享、羊を謂つて少牢と曰ふ、大夫の禮なり、酹は醊の字を可とす、寖疎は日月を等閑に過ぐる寛義ならん、委積は梁間に塵埃が充滿するなり、酒掃する男氣無ければなり、而して庭艸は荒蕪し、寥寥は「サビシ」、空室、人死して室空し、哀哀は母を慕うて泣く遺孤あり、虛奠は肴や觴を靈前に供しても眼前に其の人來りて食ふを見ず、虛と稱する所以、妹の靈や逝いて其れ焉に如くや、日月以下七句、皆七虞の韻とす、誰無以下八字は、他人の噂なり、我と爾とは兄妹として常人の情より特に百倍も深く感ずる、其の原因の一つは、慈妣卽ち庶母が早世して、我は二六卽ち十二歲、爾は九歲の時と爲す、其の弱齡無意識の時より、髫卽ち小兒の垂髮を撫しつつ、相共に成人するに至る、常情に百倍する所以、誰無以下の十句、皆八庚の韻とす、咨は歎辭なり、德操靖恭の四字は、令妹の婦人としての讚歎を極む、鮮言は無駄口を聞かぬことなり、正和友孝、此の四字も婦人としての讚歎を極む、中閨は閨中なり、婦としての閨中に行止を誤らぬなり、可象可倣、令妹の婦德は一般の婦人も之を師とし倣ふべしとなり、而して積善の家には餘慶ありと聞く、其の慶の來るは已卽ち其の人が實行せずんばあらず、而して令妹は實行したる人、然らば餘慶として天壽の永かる可き筈なり、然るに彼蒼（皇天の異名）は何故に偏頗なるや、是の人なして短命ならしむるぞ、不斷報、壽命を永からしめざるは彼の蒼が是の人に報ずる所無きなり、咨爾以下十二句は、去聲二十號の韻なり、昔在江陵、重罹天罰、李公煥曰く、晉の安帝隆安五年秋七月、赴假江陵に還る、是の冬、母孟氏卒す、淵明年三十七歲なり、重ねてといふは何ぞ、年十二の時、程氏妹の生母にして淵明が庶母を失ひ、今日自らの生母孟氏を失へば乃ち重ねてと云ふなり、兄弟索居、兄と弟と東西に離散して居る、乖隔楚越、楚國は今日の湖南湖北一帶の地、越國は今日の江蘇浙江及び山東の一帶、兄弟此の如く互に乖隔して居る、我と爾とは、一家に於ける、一身に於ける諸事を處理せざるべからず、百哀是切なる所以なり、黯黯は雲の暗き貌、蕭蕭は月の寒き貌、而して白雲の晨も、而して長風の節も、快意無く、唯感慨を增すのみ、崩號は泣血して身體度を失

するを言ふ、昔在以下十二句は、入聲九屑の韻、奪は重なり、「ツイテ」と訓む、念は追念、平昔は昨日なり、過去なり、觸事、目に觸れ、心に觸れる事、巳に永遠なりと思へざるなり、哀も樂も强く感ぜし事は十年も二十年も經て、猶ほ昨日の如き感を爲すが人の常情なり、況んや妹の書蹤が手許に猶存するに於てをや、況んや遺見が茲に居るに於てをや、一往は妹氏の魂一たび往き、修天即ち永遠に返らざるを悲しむ、巳に人は亡し、高堂は存するも寂寂たり、何時復踐、妹氏は其の高堂を踐む期の無きことは當然、淵明も復た踐むこと無しとなり、尋念以下八句は、上聲十六銑の韻、藐藐は大小反對の二義を含む字『毛詩』に藐藐昊天とあるは大なる貌、今の藐藐は眇眇と同じく微小なるを言ふ、曷依曷恃、死し去つては其の依恃する所無きを言ふ、煢煢は憂思なりと注すれども、卑損依る所無きを憂ふる意なり『左傳』に煢煢余在疚とあり、誰主誰祀、後有りと雖も稚子なり、主として祀る者誰たると悲しむ、蒿里は古の挽歌、人死して魂魄蒿里に歸るを言ふ、今墓地の意味に見よ、其の地は泰山の南に在り、庶人に用ふる語、王侯には薤露歌を奏す、藐藐以下の八句は、上聲四紙の韻を以て結を取る、義熙三年は淵明年四十三、然らば程氏妹は三十六を以て歿したる者の如し、文凄愴、一讀千秋の下覺えず亦涙を垂る、

【大意】程氏に嫁したる妹の二周年を祭る文なり、少牢の供具を以て之が靈を祭る、妹が逝いてより寒往き暑來り、此の間の日月は寢疎に付し、室中は塵を積み、庭中は艸が盈ち、空室は寥寥たり、遺孤は哀哀たり、肴觴は虛しく奠す、人は逝いて踰くに如くや、誰でも兄弟あり、人生は皆同生なり、而かも我と爾とは特に常情を百倍す、慈妣は早く世を辭す、其の時我は十二、爾は九歲、未だ是非の別を識る無きより、爾が髫を撫しつつ成長せり、爾は婦としての德もあり操もあり、靖恭にして言鮮し、善事を聞けば樂しみ、自分を守るには正和なり、他に對しては友孝なり、閨中に行止して聊かも紊れず、良に他婦の模範と爲る、我は聞けり善を爲す者は、其の餘慶は其の人自身が先づ之を受くと、然るに彼の蒼天は何ぞ偏頗なる、我が妹に慶報なきや、昔江陵に在りし時、妹の生母と淵明が生母孟氏とを喪ふ、重ねて天罰に罹るとは是を謂ふ、爾來兄弟索居し、楚と越と互に乖隔せり、伊我と爾と百哀是れ切なる所以、高雲は黯黯たり、冬月は蕭蕭たり、白雲の掩ふ晨も、長風の吹く節も、感慨の餘崩號せざるを得ず、既にして爾は昇天する、我は泣血するのみ、尋ねて平昔の事を追念すれば、觸事總て皆遠からず、書疏は猶ほ我が手に存し、遺孤は猶ほ我が眼前に滿つ、爾は如何ぞ一たび往いて、永遠に返らざる、高堂乃ち今茲に爾を祭る所は寂寂たり、爾は復た此の堂を踐むの期無し、爾は今藐藐たる孤女なり、其れ何の處に依恃する、爾は煢煢たる遊魂なり、誰か主として之を祀らん、奈何ぞ程妹、此に於て永く巳むや、死如し知ることあらば、我と爾と蒿里に相見えん、

祭從弟敬遠文

從弟敬遠を祭る文

歲在辛亥。月惟仲秋。旬有九日。從弟敬遠。卜辰云窆。永寧后土。感平生之游處。悲一往之不返。情惻惻以摧心。淚愍愍而盈眼。乃以園果時醪。祖其將行。嗚乎哀哉。於鑠吾弟。有操有槩。孝發幼齡。友自天愛。少思寡欲。靡執靡介。後己先人。臨財思惠。心遺得失。情不依世。其色能溫。其言

則厲。樂勝朋高。好是文藝。遙遙帝鄉。爰感奇心。絕粒委務。考槃山陰。淙淙懸溜。曖曖荒林。晨採上藥。夕閑素琴。曰仁者壽。竊獨信之。如何斯言。徒能見欺。年甫過立。奄與世辭。長歸蒿里。邈無還期。惟我與爾。匪但親友。父則同生。母則從母。相及齠齔。竝罹偏咎。斯情實深。斯愛實厚。念彼昔日。同房之懽。冬無縕褐。夏渴瓢簞。相將以道。相開以顏。豈不多乏。忽忘饑寒。余嘗學仕。纏緜人事。流浪無成。懼負素志。斂策歸來。爾知我意。常願攜手。寘彼衆議。每憶有秋。我將其刈。與汝偕行。舫舟同濟。三宿水濱。樂飲川界。靜月澄高。溫風始逝。撫杯而言。物久人脆。奈何吾弟。先我離世。事不可尋。思亦何極。日徂月流。寒暑代息。死生異方。存亡有域。候晨永歸。指塗載陟。呱呱遺稚。未能正言。哀哀嫠人。禮儀孔閑。庭樹如故。齋宇廓然。孰云敬遠。何時復還。余惟人斯。味茲近情。蓍龜有吉。制我祖行。望旐翩翩。執筆涕盈。神其有知。昭余中誠。嗚乎哀哉。

歲辛亥に在り、月惟仲秋、旬有九日、從弟敬遠、辰を云窆に卜し、永寧后土、平生の游處に感じ、一たび往いて返らざるを悲しむ、情惻惻以て心を摧き、涙愍愍として眼に盈つ、乃ち園果時醪を以て、其の將に行かんとするを祖す、嗚乎哀しい哉、於鑠たる吾が弟、操有り槩有り、孝幼齡に發し、友天愛よりす、少思寡欲、執靡く介靡し、己を後にし人を先にす、財に臨んで惠を思ひ、心得失を遺る、情世に依らず、其の色能く溫か、其の言則ち厲し、勝を樂しみ高きを朋とし、是の文藝を好む、遙遙帝鄉、爰に奇心を感ず、粒を絕ち務を委し、山陰に考槃す、淙淙たる懸溜、曖曖たる荒林、晨に上藥を採り、夕に素琴を閑ふ、曰ふ仁者は壽と、竊に獨り之を信ず、如何ぞ斯言、徒らに能く欺かる、年甫めて立を過ぎ、奄ち世と辭し、長く蒿里に歸り、邈として還期無し、惟ふに我と爾と、但親友にあらず、父は則ち同生、母は則ち從母、齠齔に相及んで、竝に偏咎に罹る、斯情實に深し、斯愛實に厚し、彼の昔日、同房の懽を念ふ、冬縕褐無く、夏瓢簞渴す、相將ゐるに道を以てし、相開くに顏を以てす、豈多乏ならざらん、忽ち饑寒を忘る、余嘗て學仕し、人事に纏緜せり、流浪成ること無し、素志に負くを懼る、策を斂めて歸來す、爾我が意を知り、常に手を攜へんことを願ひ、彼の衆議を寘く、有秋を憶ふ毎に、我將に其れ刈らんとす、汝と偕に行き、舫舟同じく濟り、水濱に三宿し、川界に樂しみ飲む、靜月澄高、溫風始めて逝き、杯を撫して言ふ、物久しく人脆し、奈何ぞ吾が弟、我に先だつて世を離るる、事尋ぬ可からず、思も亦何ぞ極まらん、日徂き月流れ、寒暑代息し、死生方を異にし、存亡域有

り、晨を候うて永歸し、塗を指して載陟す、呱呱たる遺稚、未だ正しく言いふ能はず、哀哀たる嫠人、禮儀孔だ閑へり、庭樹故の如く、齋宇廓然、孰か云ふ敬遠、何れの時か復還ると、余惟ふに人斯、茲の近情に昧し、蓍龜吉有り、我が祖行を制す、旐を望めば翩翩たり、筆を執れば涕盤つ、神其れ知る有らば、余が中誠を昭せよ、嗚乎哀しい哉、

【注解】從弟は「イトコ」なり、歲在辛亥は義熙七年、淵明年四十七なり、云窆は雲窆なり、窆は棺を下す、又長く埋むの義あり、永寧后土、今日祭祀を此の墓所に於て營むとの意、永寧の地名たるや、游處の文字にて知る、平生の游處、即ち一往して返らざる游處と爲る、感惟深からざるを得ず、惻惻は傷痛なり、悠悠は憂なり、醪は淳酒なり、將行、從弟が魂魄の行かんとするを祖祭するなり、於は歎辭、鑠は盛なり『毛詩』周頌に於鑠王師とあり、生前の人品を讚して曰ふ、操は堅操、縈は氣縈、而して孝心は幼齡の時より發す、友自天愛、友愛の情は天性なり、少思寡欲、世の名利に於ける思欲は極めて寡少なり、靜執靜介、世の名利榮達に於て執著も無く、介意も無し、人の事は先にし、己の事は後にす、財貨は惠與し、得失利害の心は一切忘る、情不依世、自己の情より發して事を爲す者なり、何ぞ世の俗情に依附せんや、顏色は溫和、言語は聰明なり、而して靜景を樂しみ、高山を朋友とし、文藝を愛好す、遙遙帝鄕は意義の解釋種種に見ることを得るも、余は帝鄕は東晉の都即ち建康と定むるなり、是の悠かに遠き都に從弟が假寓して居りしならん、愛感奇心、感ずる者は淵明なり、感ぜらるる者は從弟なり、奇心の語は多く見ざる文字なるが、從弟の奇異なる心情と解するなり、他の常人と異なりてあるとの意、絕粒は米を食はざるなり、委務、役務に身を委ぬるなり、考槃は『毛詩』に出で、賢者が澗谷に隱處するを美むる詞なり、山陰は縣の山陰にあらずして、山中の意ならん、顯字なれば用ひしなり、淙淙は水流の形容、懸溜は小さな瀑布と見て可、翳翳は樹が茂りて昏昧の形容、上藥は藥の名詞にあらず、上等の藥餌を曰ふ、閑は閑習「ナラフ」なり、素琴を彈じて樂むなり、仁者壽は『論語』(雍也第六)の語、孔子の言なれば淵明は之を信じたるなり、見欺、孔子に欺かれたりとは亂暴の語に似たれども、仁者にして壽ならざる從弟を悲しむ餘り、是の言を發せしなり、遐立、三十を少し越せしなり、奄は忽なり、匪但親友、單なる親友ではないとの意、其れ以上の者であるなり、父則同生、父は同一の父なり、母則從母、母の姉妹を從母即ち母かたのをばと曰ふ、齠齔は人生れて八歲にして齒が替はる、之を齠齔と曰ふ、又曰ふ、齠は髫にて小兒の髮を指すなりと、竝罹偏咎、淵明三十七にして母孟氏卒す、一人缺けたり是れ偏咎なり、偏は和語の「カタツボ」なり、咎は災なり、恃む所の人が逝去したるが故に、相互に情愛が深厚と爲る、今日から彼昔日の事を念へば、同房に起臥して其の從兄弟としての懽を分つ、冬日に暖衣無きも苦にあらず、夏日に箪中酒無きも憂へず、互に相將ゐるに學問の事を以てし、又相互に懽顏を以て接す、豈不多乏、貧乏ではあるが、融和するを以て飢寒を忘れて樂しむ、以上幼より少に至る間を曰ふ、學仕、淵明年長じて後なり、纏綿は俗語の「カラミツク」なり、衣食に奔走、東西流浪すれば素志成ること無し、素志に負くは我が懼るる所、斂策は杖を收めてなり、彭澤令を罷めて歸來するを曰ふ、其の歸來する意は爾が知るのみ、衆議即ち衆人は我が歸來は何の爲めなりやを知らず、故に彼等の批評は打ち合てて實くなり、而して田園の生活と成り、秋の收穫には、我と汝と偕に行く、舫舟は二隻の舟を竝べて行くなり、水中に三宿して、以て酒を飲む、靜月澄高、秋夜の景、溫風始逝、春日の景、撫杯而言、秋夜にも、春日にも、互に相酌んで以て言笑す、而かも物久人脆なり、物は久しけれど人命は脆なり、事不以下の數文字、讀んで字の如し、存する者は此土、亡する者は彼土、區域、別に有り、候晨永歸の八字は祭し畢りて淵明が家に歸る樣を言ふならん、呱呱は遺稚の啼聲、嫠人は寡婦、從弟の未亡人は、禮儀に於て孔閑即ち教育の有る人なり、是の故に先夫君が遺愛の庭樹は依然故の如くなり、先夫君の住したる齋宇も亦廓然たり、知らざる者は或は言はん、敬遠が何れの時か復還るならんと、余は淵明自らを云ふ、惟は念ふなり、人は他人、斯は語助、昧茲近情、他人は我が從弟を亡うて情の凄切であることに昧きなり、蓍龜、蓍は和訓「メドキ」なり、『史記』の說に蓍滿千歲にして一本百莖、下に神龜あり之を守ると、又說あり、蓍は艸の名、高さ二三尺、葉細長にして分裂、花白く或は淡紅、略菊花に似たり、莖多き者一株五十餘、古へ其の莖を取つて以て占筮の用と爲す、有吉、占ふ者は我が淒切の情を知らぬ故に凶の卦を示さず、吉の卦を示す、凶なれば我は祖行し、吉なれば我は祖行せずと、乃ち淵明が祖行を制止せんとするなり、旐は音「テウ」訓「ハタ」なり、『周禮』に龜蛇爲旐とありて弔旗と爲す、是の文額を換ふること十、從弟に對する眞情、眞とに切なるものあり、淒淒慘慘、一擧一涙、一字一珠なりと謂ふべし、

【大意】從弟敬遠が辰を雲窆に卜して、永寧后土に祭を爲す、平生の游處に感ずるは、一往して返らざる墓地と爲ればなり、情は惻惻として以て心を摧く、淚は愍愍として兩眼に盈つ、園果時醪を供へて、其の魂魄の行かんとするを祖る、嗚乎鑠なる吾弟や、生前は丈夫としての操あり槩あり、孝道は幼齡の時より發し、友情の愛も亦天性よりす、世利に於ては少思寡欲、執著心も無く介意も願し、己が事は後にし人の事は先にし、財に臨んでは惠與せんことを思ひ、心に得失を遣る、情は世の俗情に依附せず、顏色は常に溫和、言語は則ち厲明、勝景を樂しみ高山を朋とし、是の文藝を好み、帝鄉は遙遙たるも、吾は爰に爾が奇心に感ず、絕食してまでも務に身を委ぬ、而して考槃する所は山の陰なり、淙淙たる小瀑布あり、而して曖曖たる荒林に於て、晨朝には藥艸を採收し、夕暮には素琴を閑習す、孔子は曰ふ仁者は壽と、竊かに獨之を信せしに、今に至り其の裏切られたるを知る、欺かれたるを知る、敬遠の如き仁者が年甫めて三十を過ぎし位で奄ち世を辭し、長く蒿里に歸り、邈として還期無きに於てをや、抑も我と爾は、但の親友にはあらず、爾の父と我が父と兄弟なり、母は則ち從母なり、而して我と爾が八九歲に及ぶ時、竝に偏咎卽ち母孟氏を失ふに至る、斯情や實に深く、斯愛や實に厚し、今日にして昔日の事を追念すれば、同房に起臥して懽を共にす、冬日に緜衣無きも、夏日に旨酒無きも、何等苦痛を訴へず、相將ゐるに道を談ずるを以てし、相開くに懽顏を以てし、貧乏ならずと言はざるが、饑寒の如きは忘れて樂しむ、余嘗て學問を以て官人と爲り、人事に纏緜し、東西流浪するを以て素志は成る無し、其の素志は改むべからざるを以て、策を斂めて歸來せり、爾は能く我が意を知り、常に手を攜へて同游を願へり、彼の俗人の衆議の如きは舍てて實くなり、而して有秋卽ち豐年には我と爾と偕に行いて稻を刈る、而して舟游も亦同じ、爾と水濱に三宿して酒を飮みしことあり、其の時や靜月澄高なり、春日溫風始めて逝く時も然り、秋も春も共に杯を撫して言笑す、物は久しく存するが人命は脆し、奈何ぞ吾弟の我より先に世を離れんとは想像せざりし、此の如きの事は尋ぬべからず、思ひも亦何ぞ極まらん、日徂き月流れ、寒暑代息し、我と爾と死生其の方途を異にし、我は存して人域に在り、爾は亡びて墓域に入る、我は祭し終り、晨を俟して家に歸る、還家の塗を载陟す、爾の遺稚は猶呱呱として啼く、未だ正しく言ふ能はず、哀哀たる嫠人、爾の未亡人は、禮儀に於て孔だ閑へる人なり、是の故に爾の遺愛なる庭樹は依然として故の如く、齋宇も依然として廓然たり、孰か云ふ敬遠、何れの時か復還ると、余は惟念ふ、他人は茲の近情に晤く、著龜吉あり、我が祖行を制せり、而かも我が爾を弔する旐は翩翩たり、而して此の祭文を記し筆を執り涕は掌に盈つ、神靈にして知るあらば、余が中情の誠を昭鑒せよ、

自祭文

自祭文

歲惟丁卯。律中無射。天寒夜長。風氣蕭索。陶子將辭逆旅之館。永歸於

本宅。故人悽其相悲、同祖行於今夕。羞以嘉蔬、薦以清酌。候顏已冥、聆音愈漠。嗚呼哀哉。茫茫大塊、悠悠高旻。是生萬物、余得爲人。自余爲人、逢運之貧。簞瓢屢罄、絺綌冬陳。含懽谷汲、行歌負薪。翳翳柴門、事我宵晨。春秋代謝、有務中園。載耘載耔、迺育迺繁。欣以素牘、和以七絃。冬曝其日、夏濯其泉。勤靡餘勞、心有常閒。樂天委分、以至百年。惟此百年、夫人愛之。懼彼無成、愒日惜時。存爲世珍、沒亦見思。嗟我獨邁、曾是異茲。寵非己榮、涅豈吾緇。捽兀窮廬、酣飲賦詩。識運知命、疇能罔眷。余今斯化、可以無恨。壽涉百齡、身慕肥遁。從老得終、奚所復戀。寒暑逾邁、亡既異存。外姻晨來、良友宵奔。葬之中野、以安其魂。窅窅我行、蕭蕭墓門。奢恥宋臣、儉笑王孫。廓兮已滅、慨焉已遐。不封不樹、日月遂過。匪貴前譽、孰重後歌。人生實難、死如之何。嗚呼哀哉。

歳惟丁卯、律無射に中る、天寒く夜長く、風氣蕭索、陶子將に逆旅の館を辭し、永く本宅に歸せんとす、故人悽其相悲しみ、同じく今夕に祖行す、羞するに嘉蔬を以てし、薦するに清酌を以てす、顏を候へば已に冥く、音を聆けば愈よ漠たり、嗚呼哀しい哉、茫茫たる大塊、悠悠たる高旻、是れ萬物を生じ、余人と爲るを得、余人と爲りし自り、運の貧しきに逢ひ、簞瓢屢ば罄き、絺綌冬陳し、含懽谷汲、行歌薪を負ひ、翳翳たる柴門、我が宵晨を事とす、春秋代謝、中園に務有り、載ち耘し載ち耔し、廼ち育し廼ち繁す、欣するに素牘を以てし、和するに七絃を以てす、冬其の日に曝し、夏其の泉に濯ふ、勤餘勞靡く、心常閒有り、天を樂しみ分に委せ、以て百年に至る、惟此の百年、夫れ人之を愛す、彼の成ること無きを懼れ、日を愒り時を惜む、存は世の珍と爲り、沒も亦思はる、嗟我獨り邁く、曾て是れ茲に異る、寵已に榮にあらず、涅豈吾緇せんや、窮廬に捽兀し、酣飲詩を賦す、運を識り命を知る、疇も能く眷る罔し、余今斯に化す、以て恨無かるべし、壽百齡に涉る、身肥遁を慕ふ、老より終を得、奚ぞ復慕ふ所ぞ、寒暑逾よ邁き、亡既に存に異る、外姻晨に來り、良友宵奔り、之を中野に葬り、以て其の魂を安んず、窅窅として我行く、蕭蕭たる墓門、奢宋臣を恥ぢ、儉王孫を笑ふ、廓として已に滅し、慨焉已に遐か、封せす樹せす、日月遂に過ぐ、前譽を貴ぶにあらず、孰か後歌を重んせん、人生寔に難し、死之を如何せんや、嗚呼哀い哉、

【注解】丁卯は晉亡び宋の文帝の元嘉四年に當る、淵明、年六十三、自祭文は病中に作りしものならん、幾許も無く卒するに至る、律中無射、十二月を十二律に分てば九月の律を無射と曰ふ、射は終なり、萬物、陽に隨つて終り、當に復陰に隨つて起り、終已

有ること無きを言ふなり、風氣蕭索、正に是れ晩秋、天地の氣、蕭瑟索索たり、鴻雁于征、草木黄落、陶澍本には索の下、此の八字あり、有るも無きも可なり、逆旅、五十年、六十年、皆逆旅なり、本宅、五十年前、六十年前の本宅に歸る、故人は其の逝くを悲しみ、之を祖行卽ち會葬する、候顏、死者の面は已に冥く、死者の音は已に無し、大塊は『莊子』に出づ、無と解し、元氣と解し、或は天と解し一定せざるが、天地を統べて言ふ意味なり、今は地に重きを置く、高旻の天に對すればなり、其の天地間には生は一ならず、萬物皆有り、而して余は人と爲りて生る、人と爲りて生るるは喜ぶ意あるも、不幸、運は貧者と爲りて、富者と爲らず、酒の斷ゆるは勿論、夏日に着用する絺綌を冬日に用ひ、又含懽谷汲、樵夫と同様、谷水を汲んで以て憚ばざるを得ず、行歌負薪、朱買臣の如く學力ありと雖も、俸祿を受けず、故に生活するには樵夫と同じく薪を負はざる可からず、翳翳は隱隱と同義、柴門の寂寞たる状、宵も晨も唯我れ我が事を事とするのみ、時節に依つて、我が力の用處を異にす、春日の暖に乘じては耘し、或は耔し、耘耔の功沒すべからず、田苗も園木も悉く育繁を見る、素牘卽ち書籍を出して以て親戚友人を招く、而して調和の樂を取るには七絃琴を彈ず、而して冬日には背を陽に曝し、夏日には衣を其泉に濯ひ、而かも勞働の利益を考ふるにあらざるを以て、意の動くに任せて勤むるのみ、是の故に心有常閑、身は勞するも心は閑、君子の勞なればなり、小人は之に反す、百年は一生の代名詞なり、五十年でも、六十年でも、一生なれば之を百年と曰ふ、百年卽ち一生を人人之を愛惜する、是の故に愒日惜時たらざるを得ず、愒は貪るなり貪ふなり、榮達の成る無きを懼る、一日も長かれと望むは普通凡人の情なり、乃ち其の人存すれば世の爲めに珍とせられ、沒しても亦思はるるの光榮あり、惟此以下此に至る六句は他人の事を言ふ、獨邁卽ち他人と志を異にする我は、他人が寵榮と思ふことも、我に於ては寵榮と思はず、他人が涅と思ふことも我に於ては緇とせざるなり、『淮南子』に今涅を以て紫に染む、涅より黒しと、卽ち染具の名、緇は元より黒なり、復染むるを要せざるなり、捽兀は兀突を捽むなり、何等の功も無き愚なる事を爲して居るを言ふ、我の窮廬を守るは兀突を捽んで居る類、唯是れ酣飲賦詩、世の寵榮を寵榮とする人より見れば嘲笑せらるるは當然なり、而かも自身は運命を識知するの者、他人の眷顧など求むるにあらざるなり、此の如くにして化卽ち死す、恨の有るべき筈なし、壽涉百齡、此の百齡は百年と異る、眞の百歲を言ふ、操令ひ百歲まで生き、身慕肥遁『易』に肥遯无レ不レ利とあり、高蹈を言ふ、百歲に至るも志操は決して變ぜざるが故に、六十にて死すも、百歲まで生きて居るも我は同一なりとの意、要するに老よりは終に至るが生物の常なり、是を以て其の壽の長きは慕ふ所にあらずとなり、乃ち茲に六十三を以て亡するに至る、外姻も良友も、葬儀の事に奔走して、遂に我を中野に埋葬し畢る、其の後は死者の魂窅窅として行くのみ、墓門は嗟蕭蕭たり、奢恥宋臣、宋の臣桓魋なる者、自から石槨を爲る、三年にして成らずと、三年も力を墓門に勞するの奢は我の恥づる所、儉笑王孫、漢の楊王孫なる者、死に臨み其の子に遺命し、裸體として埋葬せしむ、布嚢の類は悉く持ち歸らしむ、宋臣の奢は奢に過ぎ、王孫の儉は儉に過ぐ、我はソンナ極端の葬は嫌ひなり、不封不樹、死んだ後は墳を爲るも、樹を種うるも後人の自由なり、我は關せざるなり、土を聚めて墳を爲るを封と曰ひ、樹を種ゑて以て其の處を標するを樹と曰ふ、『禮記』に見ゆ、我は已に前譽所謂生前の名譽も一向に貴しとせず、後世に歌詠せらるるも何ぞ重しとせん、

【大意】宋の元嘉四年九月に、此の自祭文を作る、晩秋、天は寒く夜は長し、風氣蕭索たり、陶子正に人間を辭し、本源に歸らんとす、故人は凄其として悲しみ、今夕永遠の別れを送る、嘉蔬と清酌を薦め、故人が淵明の顏を候ふに已に冥し、音を聆くに已に漠たり、大塊は茫茫、高旻は悠悠、此の天地の中間に萬物皆發生せり、而して余は人に生るるを得たり、蓋し人と爲りてより以來、天運の貧に逢ひ、好む所の酒は屢ば罄き、單衣を以て冬を陳り、谷の水を汲んで含懽し、行歌して薪を負ふ、翳翳たる柴門、我は我が事を宵晨し、春には春畊の勞あり、秋には秋穫の務あり、唯喜ぶは耘耔するに於ては育繁するの報あり、欣ぶに素牘を以て友人を招き、七絃琴を彈じて以て調和す、冬は背を天日に曝し、夏は體を流泉に濯ふ、勤勞は決して餘勞靡し、是に於てか心に常閑あり、天命を樂しみ身分に委せ、以て百年に至らんと期す、惟ふに此の百年、人人皆之を愛惜し、榮達の成就せざるを懼る、故に

日を惕り時を惜む、存在すれば世俗に珍とせられ、死歿すれば亦思念せらる、嗟我は獨邁なり、曾て是れ夫の人とは異る、他人が寵榮に思ふことも我は寵榮にあらず、他人が涅しと思ふことも我は緇きにあらず、獨何の甕も無き兀たる窮廬を捽みて、酣飲して詩を賦して樂しむ、天運を識り天命を知る、他人の眷顧の如きは何ぞ願はん、而して余、今斯に死化す、以て恨無きなり、壽が百歲に渉り、身肥遁を慕ひ、老より終を得、奚ぞ復戀ふ所かあらん、六十で死し、百歲で死す、同一なり、寒暑逾よ邁き、亡は存に異る、淵明が死を聞くや、外姻も晨來り、良友も宵奔り、遂に之を中野に葬むり、以て其の魂を安んず、我が魂は窅窅として行き、行く先きは蕭蕭たる墓門なり、墓門を造るに三年を要したる宋臣の奢は我の恥とする所、又王孫の如き赤裸にして葬むる儉も我が笑ふ所、廓兮として已に滅し、慨焉として已に遐か、其の封ある、其の樹ある、後人の自由なり、日月の過ぐるに就いて、他爲すあらん、已に生前の譽なぞも貴きものとせず、況んや死後の哀歌なぞ重しとせんや、人生は寔に難し、死之を如何せんや、嗚乎哀しい哉、

【餘論】此の文韻を改むる六、仄韻を用ふる僅かに二、他は皆平韻とす、達觀したる中に、自から淒愴の氣味あり、千秋の下、人をして讀むに勝へざらしむ、蘇東坡評して曰く、淵明自祭文、妙語を纊息の餘に出す、豈死生に涉るの流ならんや、以上淵明の詩文を講了す、最後に梁の昭明太子が撰する所の陶淵明傳を譯して以て附す、

陶淵明、字は元亮、或は云ふ、潛、字は淵明、潯陽柴桑（今日の江西省九江縣）の人なり、曾祖侃、晉の大司馬、淵明少うして高趣あり、博學善く文を屬る、穎脫不羣、眞に任せて自得す、嘗て五柳先生傳を著はし以て自況す、曰く、先生は何許の人なるかを知らざるなり、亦、姓字を詳かにせず、宅邊五柳樹あり、因つて以て號と爲す、閑靜言少なし、榮利を慕はず、讀書を好むも、甚解を求めず、會意ある毎に、欣然食を忘る、性酒を嗜む、而かも家貧、恆に得る能はず、親舊其の此の如きを知り、或は酒を置き之を招く、造り飲み輒ち盡くす、期必醉に在り、既に醉うて退く、曾て情を去留に恡ます、環堵蕭然、風日を蔽はず、短褐穿ち結び、簞瓢屢ば空し、晏如たり、嘗て文章を著はし自から娛み、頗る己が志を示し、懷を得失に忘る、此を以て自から終ふ、時人之を實錄と謂ふ、親老い家貧し、起つて州祭酒と爲る、吏職に堪へず、少日自から解歸す、州主簿に召す、就かず、躬耕自から資く、遂に羸疾を抱く、江州の刺史檀道濟、往いて之を候す、偃臥瘠餒日有り、道濟謂つて曰く、賢者、世に處す、天下道無くんば則ち隱れ、道有らば則ち仕ふ、今、子、文明の世に生れ、奈何ぞ自から苦しむ此の如き、對へて曰く、潛や何ぞ敢て賢を望まん、志 及ばざるなり、道濟饋るに粱肉を以てす、麾して之を去らしむ、後、鎭軍建威參軍と爲る、親朋に謂つて曰く、聊か絃歌以て三徑の資と爲さんと欲す、可なるや、執事の者之を聞き、以て彭澤令と爲す、家累を以て自から隨へず、一力を送り其の子に給し、書して曰く、汝旦夕の費、自給難しと爲す、今此の力を遣り、汝が薪水

の勢を助く、此も亦人の子なり、善く之を遇す可し、公田は悉く吏をして秫を種ゑしむ、吾常に酒に醉ふを得ば足りぬ、妻子固く粳を種ゑんと請ふ、乃ち二頃五十畝秫を種ゑ、五十畝粳を種ゑしむ、歳終、郡、督郵を遣り縣に至らしむ、吏請うて曰く、應に束帶して之に見ゆべし、淵明歎じて曰く、我豈能く五斗米の爲めに腰を折りて郷里の小兒に向はんや、即日、綬を解き職を去る、歸去來を賦す、著作郎に徴すも就かず、江州刺史王弘、之を識らんと欲するも致す能はざるなり、淵明嘗て廬山に往く、弘、淵明が故人龐通之に命じ、酒具を齎し、半道、栗里の間に於て之を邀ふ、淵明、脚疾あり、一門生と二兒をして籃輿を舁はしむ、既に至る、欣然便ち共に飲酌し、俄頃に弘至る、亦迕ふこと無きなり、是より先き、顏延之、劉柳後軍の功曹と爲つて、潯陽に在り、淵明と情款なり、後、始安郡と爲つて、潯陽を經過す、日に淵明と飲す、往く毎に必ず酣飲、醉を致す、弘、又、延之を要へんと欲す、坐して日を彌るも得ず、延之去るに臨み、二萬錢を留め、淵明に與ふ、淵明悉く酒家に遣送す、稍就いて酒を取る、嘗て九月九日、宅邊菊叢中に出て、坐久しうす、滿手、菊を把る、忽ち弘、酒を送りて至るに值ふ、即便ち就いて酌み、醉うて歸る、淵明、音律を解せず、而かも無絃琴一張を蓄へ、酒適する毎に、輒ち撫弄して以て其の意を寄す、貴賤造る者、酒有れば輒ち設く、淵明若し先づ醉へば、便ち客に語る、我醉うて眠らんと欲す、卿去る可し、其の眞率此の如し、郡將常に之を候す、其の醸熟に値へば、頭上の葛巾を取り酒を漉す、漉し畢りて、還つて復之を著す、時に周續之、廬山に入つて釋慧遠に事ふ、彭城の劉遺民、亦迹を廬山に遯る、淵明又徴命に應せず、之を潯陽の三隱と謂ふ、後、刺史檀韶、苦に續之に請ひ、州に出でしむ、學士祖企、謝景夷と三人共に城北に在り禮を講じ、加ふるに讎校を以てす、住する所の公廨、馬隊に近し、是の故に淵明其の詩を示して云ふ、周生孔業を述べ、祖謝響然として臻る、馬隊講肆にあらず、校書亦已に勤む、其の妻翟氏亦能く勤苦に安んじ、其れと志を同じうす、自から曾祖、晉の世の宰輔たるを以て、復身を後代に屈するを恥づ、宋の高祖王業漸く隆なるより、復肯て仕へず、元嘉四年、將に復徴命せんとす、會卒す、時に年六十三、世に靖節先生と號す、

陶淵明集卷八大尾

自祭文

309
65

終